

茨城県教育財団文化財調査報告書 XIV

龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 6

成沢遺跡

屋代A遺跡

茨城県教育財団調査課

年月日	57.6.1.
理番号	82-67
記載関	

昭和 57 年 3 月

財團法人 茨城県教育財団

序

龍ヶ崎市の北部台地における龍ヶ崎ニュータウンの建設が、住宅・整備公団により進められており、その地域内にいくつかの埋蔵文化財の存在することが確認されております。

財團法人茨城県教育財団は、これらの埋蔵文化財を記録保存するため、住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、発掘調査を実施いたしました。

昭和54・55年度は屋代A遺跡、55年度は成沢遺跡の調査を行い、龍ヶ崎市の原始・古代の解明の上に貴重な成果を上げることができました。

昭和56年度には、これらを整理し、調査結果の報告書を刊行するはこびとなりました。本書が教育・文化の向上の一環として広く活用されますことを希望いたします。

調査・整理を進めるにあたり、御指導・御協力を賜わった茨城県教育委員会、住宅・都市整備公団、龍ヶ崎市教育委員会、地元関係者各位に深甚なる謝意を表します。

昭和57年3月

財團法人 茨城県教育財団

理事長 大金新一

例　　言

- 1 本書は、茨城県教育財團が、住宅・都市整備公団との委託契約に基づいて、昭和54・55年度に調査を実施した屋代A遺跡、55年度に調査を実施した成沢遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 屋代A遺跡・成沢遺跡の調査にかかる当教育財團の組織は次のとおりである。

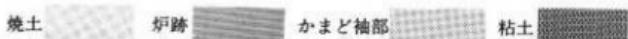
理 事 長	竹 内 藤 男 (茨城県知事 昭和52年4月～昭和56年11月) 大 金 新 一 (昭和56年12月～)
副 理 事 長	古 橋 靖 (茨城県教育長 昭和54年6月～)
常 務 理 事	川野辺 四 郎 (昭和52年4月～)
事 務 局 長	大 内 秀 夫 (昭和52年4月～55年3月) 小 林 義 久 (昭和55年4月～)
調 査 隊 長	川 侯 吉之助 (昭和52年4月～55年3月) 大 塚 博 (昭和55年4月～56年3月) 寺 内 寛 (昭和56年4月～、昭和54年度調査第2班班長)
企画管理班	坪 秀 雄 (昭和54年4月～班長) 鈴 木 三 郎 (昭和52年4月～) 海 野 孝 志 (昭和53年4月～56年3月) 綿 引 良 人 (昭和56年4月～)
調査第2班	青 木 義 夫 (昭和55年度班長、昭和56年度整理班長・整理・執筆) 佐 野 正 (昭和55年度成沢遺跡調査) 中 沢 時 宗 (昭和55年度成沢遺跡調査) 鈴 木 邦 夫 (昭和54・55年度屋代A遺跡調査) 久 野 俊 度 (昭和55年度屋代A遺跡調査・昭和56年度整理・執筆)
補 助 員	豊 田 重 徳 ・ 鯉 游 和 彦 (昭和54年度屋代A遺跡調査)

- 3 昭和55年度には、成沢遺跡・屋代A遺跡・白藏寺遺跡の調査を行ったが、白藏寺遺跡は遺構等が確認されなかったため報告を割愛した。
- 4 本書での遺構は下記のとおり記号をもって表示する。

S I - 住居跡 S K - 土壙 S D - 溝状遺構 S B - 掘立柱建築遺構 S A - 土塁
 S X - 円形周溝墓 S E - 井戸状遺構
- 5 土層及び土器の色調については「新版標準上色帖」(農林省農林水産技術会議事務局監修、

財団法人日本色彩研究所色票監修)を使用し、記号をもって遺構の最初に表示した。

- 6 本書は、炉跡などを次のように表示した。



須恵器の断面は黒色で表示した。

- 7 出土遺物等の整理は、成沢遺跡を青木義夫、屋代A遺跡を久野俊度が実施し、岩石類の鑑定は、茨城県立教育研修センター蜂巣紀夫氏の御指導を得た。
- 8 発掘調査・出土遺物の整理等に際して御指導・御協力を賜わった茨城県歴史館、関係諸機関、各位に対し感謝の意を表したい。

目 次

序

例 言

目 次

第1章	調査の経緯	3
第2章	遺跡の立地と環境	4
第1節	地理的環境	4
第2節	歴史的環境	5
第3章	成沢遺跡	6
第1節	調査経過	6
第2節	遺構と遺物	9
1層序		9
2住居跡		10
3土壤		38
4円形周溝墓		42
5溝・その他		47
第3節	まとめ	53
第4章	星代A遺跡	61
第1節	調査経過	61
第2節	遺構と遺物	69
1層序		69
2住居跡		71
3土壤		231
4土塁		266
5掘立柱建築遺構		270
6溝		272
7井戸状遺構		284
8土製品・石製品		286
9鉄製品・銅製品		288
第3節	まとめ	300



第1圖 龍ヶ崎遺跡分布図

第1表 龍ヶ輪遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	時期	年代	備考	R27	ワツタ遺跡	集落	跡	遺跡	文	昭和54年度調査	
R.1	長峰城跡	城跡	盛	中世	以降	R.28	仲根台跡	群	群	跡	文	昭和54年度調査	
R.2	長峰古墳群	古墳	群	古	墳	R.28B	仲根台B遺跡	群	跡	遺跡	文・古	昭和56年度調査	
R.3	十三塚群	塚	群	中世	以降	R.29	通地B遺跡	集	落	跡	文	昭和54年度調査	
R.4	尾呼台遺跡	集落	城館跡	編文・古	墳	R.30	白藏寺遺跡	集	落	跡	文	昭和55年度調査	
R.5	外八代遺跡	集落跡	城館跡	弥生～中世	以降	R.31	澤倉古墳	古	古	跡	文	昭和56年度調査	
R.6A	屋代A遺跡	聚落跡	城館跡	弥生～中世	以降	R.32	福荷峰古墳	古	古	跡	文	昭和56年度調査	
R.6B	屋代B遺跡	聚落跡	城館跡	編文～中世	以降	1	金塚道	集	落	跡	先・繩文・古墳	昭和54年度調査	
R.7	桶河原古坟群	古墳	群	古	墳	2	林遺跡	集	落	跡	古	昭和57年度調査	
R.8	南三島遺跡	集落	跡	編文・古	墳	3	若柴遺跡	城	落	跡	文	昭和56年度調査	
R.9	ダム遺跡	冢	冢	中世	以降	4	稻窓遺跡	集落跡	城館跡	古	古	中世	
R.10	町田塚群(新石器)	塚	群	中世	以降	5	稻荷古墳	古	古	跡	古	昭和56年度調査	
R.11	かがみ塚	塚	聚	中世	以降	6	木山前遺跡	集	落	跡	文	昭和56年度調査	
R.12	高井城下城跡	城館跡	守衛跡	中世	以降	7	仲根古墳	遺跡	古	跡	文・古	昭和56年度調査	
R.13	前浦水道跡	集落跡	深瀬跡・山瀬跡	縄文・古墳	中世	以降	8	奈戸岡古墳群	古	古	跡	古	昭和56年度調査
R.14	塚下遺跡	塚	群	他	中世	以降	9	堂の下貝塚	貝塚	群	跡	古	昭和56年度調査
R.15	町田遺跡	集落	跡	編	文	10	駒馬城跡	城	館	跡	古	昭和57年度調査	
R.16	行都内遺跡	集落跡	貝塚	編	文	11	愛宕山古墳	古	古	跡	古	昭和57年度調査	
R.17	大羽谷津遺跡	集落	古	古	墳	12	糸戸岡祭祀遺跡	祭祀	古	跡	古	昭和54年度調査	
R.18	廻り地A遺跡	集落	古	編文・古	墳	13	西花輪貝塚群	貝塚	群	跡	文	昭和54年度調査	
R.19	平白遺跡	集落	跡	編文・古	墳	14	貝原塚	城	航	跡	文	昭和56年度調査	
R.20	城沢遺跡	集落	跡	編	古	15	向井原遺跡	集	落	跡	古	昭和55年度調査	
R.21	松妻遺跡	集落跡	塚	古	古	16	西平遺跡	集	落	跡	文	昭和53年度調査	
R.22	廣申塚遺跡	塚	落	跡	編文・古	17	馬込稻荷遺跡	集	落	跡	文	昭和54年度調査	
R.23	沖耕遺跡	集落	跡	先・繩文・古	墳	18	要害山遺跡	城	航	跡	文	昭和53年度調査	
R.24	赤松遺跡	集落	跡	編文・古墳	近世	19	牛田遺跡	集	落	跡	古	昭和53年度調査	
R.25	打越A遺跡	集落	跡	編	文	20	登城山船跡	城	館	跡	古	昭和55年度調査	
R.26	打越C遺跡	集落	跡	編	文	21	向須賀遺跡	包	鐵	地	繩文・赤生	昭和54年度調査	

第1章 調査の経緯

住宅・都市整備公団は、龍ヶ崎市街地の北部台地に龍ヶ崎ニュータウンの建設を進めている。この計画は首都圏の膨大な住宅用地の需要に対し、住宅地の大量供給と健全な市街地の形成を図り、さらに地域内に就業の場も計画し、居住者の地元定着を意図している。つまり、龍ヶ崎ニュータウンの建設は、龍ヶ崎市の調和のある発展と首都圏の膨大な人口に住宅地を供給しようとする計画である。

この龍ヶ崎ニュータウン建設計画は、昭和46年1月に「龍ヶ崎牛久都市計画事業」として市街地開発事業に関する都市計画が決定され、事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業」と称し、当初日本住宅公団が計画した。しかし昭和51年4月に、宅地開発公団茨城開発局が設立され、引き続き事業を実施することになった。なお宅地開発公団は、昭和56年10月1日付をもって日本住宅公団と統合し、新たに「住宅・都市整備公団」として発足した。これに伴い從来の契約によって生じた権利・義務はそのまま新公団に承継されることになった。

事業面積は671.5haで、その現況は、北竜台においては山林原野が約70%を占め、畑及び水田等の耕地は約24%である。龍ヶ岡において山林原野は約50%で、畑・水田等の耕地は40%以上を占めている。

茨城県教育委員会は、地元龍ヶ崎市教育委員会と昭和45年に行った開発地域内の埋蔵文化財分布調査に基づき、22遺跡について、文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため協議を重ねた。その後、昭和51年7月に、再度分布調査を実施し、新たに7遺跡が追加された。その結果、北竜台15遺跡、龍ヶ岡14遺跡について関係機関で再協議を行い、29遺跡のうち26遺跡については現状保存が困難なので、記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は、昭和52年4月、「北竜台及び龍ヶ岡土地区画整理事業の施行に係わる埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を当時の宅地開発公団と締結し、その後龍ヶ崎ニュータウン内の埋蔵文化財発掘調査を継続して進めてきた。

昭和55年度の龍ヶ崎ニュータウン内の発掘調査は、龍ヶ岡地区では54年度より継続の星代A遺跡と、新たな白藏寺遺跡、北竜台地区では54年度より継続の廻り地A遺跡と、新たな成沢遺跡の4遺跡について調査を実施した。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

成沢遺跡は、茨城県龍ヶ崎市駒馬町4,527番地ほかに所在する。

龍ヶ崎市は茨城県の南端部に位置し、常磐線佐貫駅より関東鉄道龍ヶ崎線が伸び、その終点龍ヶ崎駅から、東方へ中心市街地が広がっている。市街地は、標高5.6m前後の鬼怒川、小貝川系の低地に位置し、この低地は幅10kmにも及ぶ沖積地で、県内の穀倉地帯をなしている。

その南西方には、北相馬台地の先端部にあたる奥山台地が横たわっている。奥山台地の東方は利根川による平坦な沖積地が開け、千葉県木下附近の台地と対峙する。北方には、筑波台地から東にのびる稻敷台地が存在する。この稻敷台地は、常磐線附近から東にのび浮島に至り、北は霞ヶ浦、南は利根川下流域に限られる。この台地は、東部が高くなっているが、標高は25~33m前後の比較的平坦な台地である。

成沢遺跡は、この稻敷台地の南端部、駒馬町の西側、幅400~500mの駒馬台地のほぼ中央部に位置し、標高10~19mほどの南から北へ緩やかに傾斜する舌状台地上に所在する。成沢遺跡の所在する駒馬台地の南は利根川低地が開け、北には、二支谷の合流する比較的広い支谷が開けている。この北側の支谷に面して集落が形成され、遺跡と水田との比高は、0.5~4mである。

調査対象区域は17,242m²で、現状はほぼ全域が畠地として利用され、遺跡北側には東西に農道が通っている。

星代A遺跡は、同市八代町2,441番地ほかに所在する。

星代A遺跡は、稻敷台地の南端部、八代町北側の台地上に位置する。この台地は、別所・羽原から南東に張り出した台地で、南は利根川の沖積低地が開け、北側は、八代町の東より北西に深くのびる比較的大きな支谷に面している。東側にはこの支谷よりのびる亜支谷が入り込んでいるが台地は東に続いて、53年度調査した外八代遺跡は、同一台地上500mほど東に所在する。台地は幅400~500mほどで、標高は24.5~25mほどの平坦な台地で、水田との比高は、およそ17mである。

調査対象区域は10,579m²で、現況は大半が畠地で西側に一部雑木林、竹林が入り、遺跡の中央部には東西に農道が通っている。

第2節 歴史的環境

稻敷台地には、椎塚貝塚・福田貝塚・広畑貝塚など、貝塚が多く、殿内遺跡や尾島祭祀跡などが弥生時代の遺跡として知られ、浮島の原古墳群・木原古墳群などが古墳時代の遺跡として著名であり、茨城県内において遺跡の分布が著しい地域として有名である。

その台地の南端に位置する龍ヶ崎ニュータウン地域内にも、多くの遺跡が確認され、龍ヶ崎地区には、発掘調査された外八代遺跡・前清水遺跡など14遺跡、北竜台地区には、同じく発掘調査された松葉遺跡・沖餅遺跡・赤松遺跡など15遺跡が所在する。

龍ヶ崎市八代については、常陸国風土記の信多郡の条に「其の里の西に飯名の社あり」と記され、同市八代の稻塚が遺称地と記されている。利根川図志に「稻敷郷 龍ヶ崎の東なる八代村をいふなり。今に其地に稻塚と云るあり」とある。また茨城県遺跡地図に同市八代町に稻塚古墳の名前が記され、八代付近は、古代より知られていた。

さて屋代A遺跡の周辺を見ると外八代遺跡は、同一台地上東側に所在し、弥生時代から奈良・平安時代の集落跡及び中世の城館跡が確認された。前清水遺跡は北方に位置し、中世の地下式塙を含む土壤や溝跡である。屋代B遺跡は屋代A遺跡の西側に隣接し、今も土塁が残存している。稻敷郡郷土史に「大字八代の中央桂昌寺の傍に在る小丘にして其面積約三千坪なり。現今概ね耕圃となりたれど建武中興八代信經此に居り、高氏に屬し、興國二年高師冬信經を先導として信太庄を攻め龜谷・駒馬の諸城を陥れ」とあり、駒馬城や高井城が南朝に立ち、屋代城は北朝に加担した常陸国南部の南北朝の争乱を記している。また同市には長峰城・若柴城・龍ヶ崎城など城館跡も多い。

成沢遺跡の周辺を見ると、沖餅遺跡は北北西に所在し古墳時代前期の集落跡及び先土器時代の遺物や縄文時代中期の遺跡として調査されている。また、赤松遺跡は縄文時代中期のフラスコ状土壤を伴う集落跡であり、廻り地A遺跡は地点貝塚を伴う縄文時代後期の大集落跡が確認された。松葉遺跡は北西に位置し、古墳時代前期の集落跡であり、大羽谷津遺跡は北方にあり、古墳時代の集落跡であり、龍ヶ崎第一高等学校内遺跡は南東に位置し、古墳時代前期の集落跡として、茨城県史料に記載されている。前述した駒馬城は、同一台地の南東約1.2kmに所在する。上記のように、稻敷台地南端部・龍ヶ崎市北部台地には、原始・古代・中世の遺跡が多く点在し、各時代にわたって生活が営まれていたことがうかがえる。

第3章 成沢遺跡

第1節 調査経過

成沢遺跡の調査対象面積は12,578m²で、調査は昭和55年4月1日から開始した。

発掘調査に際しての調査区設定の基準杭は、昭和54年度に調査した大羽谷津遺跡(R17)のC3杭を西に320m、南に840m平行移動した点(B3)を起点として、40m四方の大調査区を設定し、さらに大調査区を4m四方の小調査区に分割した。すなわち、40m四方の大調査区内に4m四方の調査区が、100個設定されたわけである。

大調査区の名称は、北から南へ「A」・「B」・「C」……とし、西から東へ「1」・「2」・「3」……とする。小調査区は北から南へ「a」・「b」・「c」……「i」・「j」とし、西から東へ「1」・「2」・「3」……「9」・「0」の数字で表した。以上のように小調査区を分割し、小調査区の名称は「A1a1」・「B2b2」のように表記する。成沢遺跡の調査区分割は大調査区12地区、調査方法等については、茨城県教育財團の調査要項に基づいて調査した。以下発掘調査の経過について記していく。

4月20日～5月20日 調査区域の確認、作業員募集、伐開、測量、器材置場の設置、テント設営、小調査区設定杭打ち、発掘調査前の遺跡全景写真撮影などの発掘準備の作業を進める。

5月21日～6月26日 5月21日に地鎮祭を行い、同日より第1次調査を開始する。第1次調査は、遺構を確認するための調査で、第I層(表土)及び第II層(黒褐色土)の発掘作業を行った。この調査の進展に伴い、大調査区B3・B4・C3区の南側低地に住居跡・土塙、大調査区D3・E3区の東側斜面に南北にはしる溝、大調査区C2・D2区西斜面に円形周溝状遺構が確認された。大調査区E1・E2・E3区より南には、遺構のないことがほぼ明らかになった。

6月27日～8月12日 調査区南側低地の大調査区B2・B3・C3区等を中心に、154か所の小調査区の拡張作業と並行して、遺構内精査を行う。その結果、住居跡は第1号～第9号までと、土塙は第1号～第10号までの調査を実施し、住居跡はいずれも古墳時代前期の遺構であることが判明した。

8月18日～10月7日 大調査区C2・D2・D3・E3区の緩斜面を中心に129か所の小調査区の拡張、遺構内精査を行う。その結果、住居跡について第10号～第13号まで、土塙第11号～第13号まで、そのほか溝1条と円形周溝墓1基の調査を実施した。住居跡はいずれも古墳時代前期の遺構であり、周溝墓もほぼ同時期に比定される遺構であることが判明した。10月より補足調査を実施し、10月7日、成沢遺跡の発掘調査を完了した。

図2 国分寺遺跡全体図



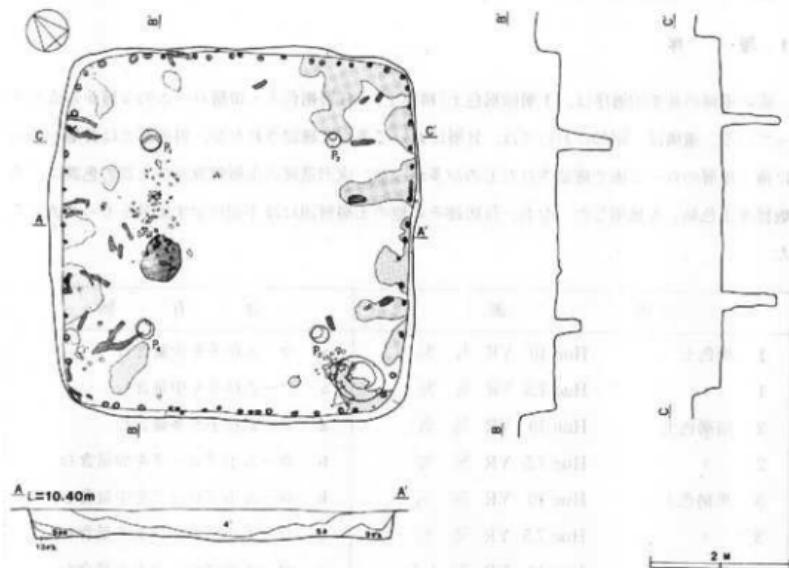
第2節 遺構と遺物

1. 層序

成沢遺跡の基本的層序は、I層暗褐色土(耕作土)・II層褐色土・III層ロームの3層から成り立っている。遺構は、裾部においては、II層において多くは確認されたが、斜面部ではII層が非常に薄くIII層のローム面で確認されたもののが多かった。成沢遺跡の土層解説及び土器の色調は、「新版標準土色帖」を使用した。なお、住居跡その他の土層解説には下記に示す記号をもって表記した。

色 調				含 有 物
1 褐色土	Hue 10	YR	% %	a ローム粒子を少量含む
1' "	Hue 7.5	YR	% %	a' ローム粒子を中量含む
2 暗褐色土	Hue 10	YR	% %	a'' ローム粒子を多量含む
2' "	Hue 7.5	YR	% %	b ローム小ブロックを少量含む
3 黒褐色土	Hue 10	YR	% %	b' ローム小ブロックを中量含む
3' "	Hue 7.5	YR	% %	b'' ローム小ブロックを多量含む
4 黒色土	Hue 10	YR	% 1.7	c ローム中ブロックを少量含む
4' "	Hue 7.5	YR	% 1.7	c' ローム中ブロックを中量含む
5 極暗褐色土	Hue 7.5	YR	%	c'' ローム中ブロックを多量含む
6 黄褐色土	Hue 10	YR	%	d ローム大ブロックを少量含む
7 にぶい褐色土	Hue 7.5	YR	%	d' ローム中ブロックを中量含む
8 赤褐色土	Hue 5	YR	% %	d'' ローム中ブロックを多量含む
9 暗赤褐色土	Hue 5	YR	% % % %	e ローム粒子・焼土粒子微量含む
10 赤色土	Hue 10	YR	% % % %	e' ローム粒子・焼土粒子少量含む
11 暗赤褐色土	Hue 10	YR	% %	e'' ローム粒子・焼土粒子中量含む
12 赤褐色土	Hue 2.5	YR	%	f 赤褐色土粒子を少量含む
13 極暗赤褐色土	Hue 5	YR	% %	f' 赤褐色粒子を中量含む
14 明赤褐色土	Hue 5	YR	% %	f'' 赤褐色粒子を多量含む
15 にぶい赤褐色土	Hue 5	YR	%	g 黒色土を少量含む
16 黄褐色土	Hue 2.5	Y	%	h 灰を含む
17 にぶい黄色土	Hue 2.5	Y	%	i 摾乱
18 灰褐色土	Hue 7.5	YR	%	j 暗褐色土を含む
				k 炭化物・炭化粒子を含む

2. 住居跡



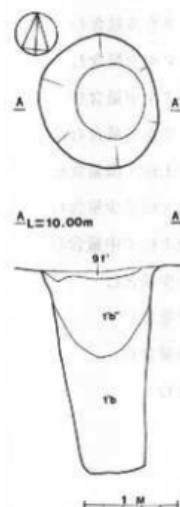
第3図 第1号住居跡実測図

第1号住居跡（第3図）

本住居跡は、調査区B3 f6を中心確認され、第4号住居跡の東側12mほどに位置している。主軸方向はN-43°Eで、平面形は長軸 5.3m・短軸 5.27mの隅丸方形を呈している。壁周辺には焼土が多く検出され、南東壁・北西壁から中央部に向かうように焼土が広がり木炭も同様な出土状況を示している。遺構は第3層に検出され、ほとんどの壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は32-50cmほどである。床はロームであり、ほぼ平坦で全体に硬くしまっている。

炉跡は中央部寄り西側に位置し、長径65cm・短径54cmの不整形の平面形を呈し、床面を10cmほど掘りこんでいる。炉床は硬く焼け、覆土には焼土が充満している。炉跡周辺には土器片が多く散布していた。

ピットは4個ほど検出され、各々対角線上に位置し、すべて主柱穴と考えられる。直徑はそれほど大きなものでなく、深さは39-89cmほどである。



第4図第1号住居跡貯藏穴

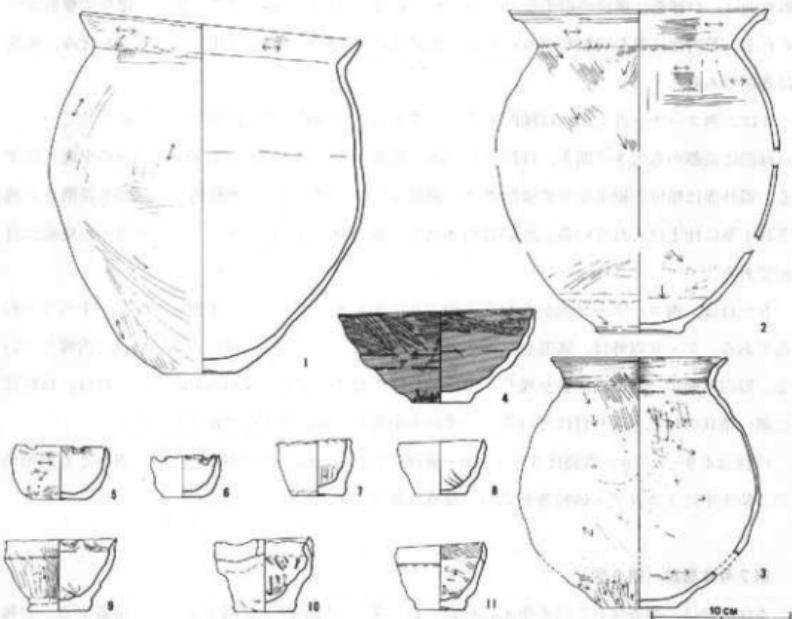
壁下には壁柱穴が検出され、間隔は不統一であるが周回し、壁柱穴は

番号	長軸cm	短軸cm	深さcm	備考	番号	長軸cm	短軸cm	深さcm	備考
P ₁	31	29	80	主柱穴	P ₃	29	25	89	主柱穴
P ₂	22	20	84	"	P ₄	31	25	38	"

直径6~9cm・深さ4cm程度のものが多い。

貯蔵穴（第4図）は南コーナー部にあり、長径71cm・短径65cmの円形の平面形を呈し、住居跡の床面から底面までの深さは110cmほどあり、底面は平坦で壁はほぼ垂直な立ちあがりを示し、断面は円筒形状を呈する。

覆土は自然堆積の状態を示し、第1層は黒色土が中央部に堆積し、第2層より下層にいくほど焼土粒子・炭化粒子を多く含み、南東・北西の壁周辺は特に焼土の堆積が多く見られる。



第5図 第1号住居跡出土遺物

出土遺物（第5図）

本跡からの出土遺物は、壺形土器・壺形土器・塊形土器・手捏ね土器で、すべて土器である。

1は、南コーナー部の貯蔵穴の付近から、置かれたままの状態で焼土のなかから出土した壺形土器である。口縁部は直線的に外反し、口径は20cmで器高は26.1cmである。最大径は胴部中位にあり、底径は5.3cmの平底を呈する完形品である。器外面は、口縁部に横位の刷毛なでがみられ胴部には斜位の刷毛目整形後横位の刷毛目整形がみられる。また、底部は箒削りがなされている。

器内面には刷毛目整形がみられるが剥落がはげしい。色調はにぶい赤褐色で、胎土中にはスコリア・砂粒等を含み、焼成は普通である。

2は、やや薄手の壺形土器である。口縁部は直線的に外反し、口径は18.6cmで、器高は推定18cmである。最大径は胴部上位にあり、底径は5.4cmで平底を呈する。器外面は、口縁部・胴部とも刷毛目整形後窓なでを施している。器内面は横位の刷毛整形後窓なで整形を施す。色調はにぶい赤褐色で、胎土中にスコリア・砂粒等を含み、焼成は良好である。

3は、薄手の壺形土器である。口縁部は直線的に外反し、口径は12.6cm・器高は推定18cmほどである。胴部は球状を呈して最大径は胴部中位にあり、底径は5.4cmの平底でやや窪んでいる。器外面は、口縁部に横位の刷毛なでがみられ、胴部には斜位の刷毛なで、底部に窓なで整形がみられる。器内面は窓なで整形がみられる。色調はにぶい橙色で、胎土中にスコリアを含み、焼成は普通である。

4は、西コーナー近くから口縁部を上にして出土した壺形土器で、内外とも赤彩されている。口縁部は底部から大きく開き、口径は18.3cmで器高は6.6cmである。底径は4.2cmの平底を呈する。器外面は横位の刷毛なでの後窓磨き、胴部は斜位の刷毛なでの後窓磨き、底部も窓磨きが施され丁寧に仕上げられている。色調は暗赤色で、胎土中に白雲母・スコリア等を含み、焼成は良好である。

5~11は、西コーナー付近からPL1のようにまとめて出土した手捏ね土器で、すべて完形品である。7・9以外は、底部から開いて立ちあがる。3・5・10は口辺部で僅かに内彎している。器内外面の一部に指圧痕が残り、部分的に刷毛なでの整形が認められる。10・11は、口縁部に細い帯状の粘土を張り付けている。いずれも胴部の一部に刷毛なでがみられる。

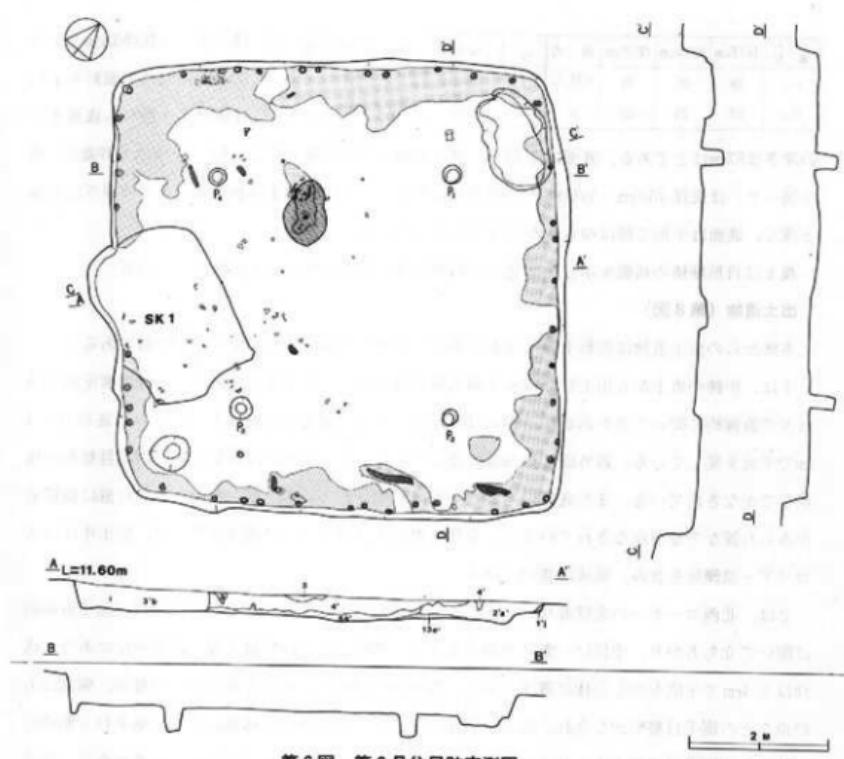
口径は4.9~7.7cm・器高は3~5.5cm・底径は2.8~4.2cmほどである。色調は内外とも黒褐色で、胎土中にスコリア・砂粒等を含み、焼成は普通である。

第2号住居跡（第6図）

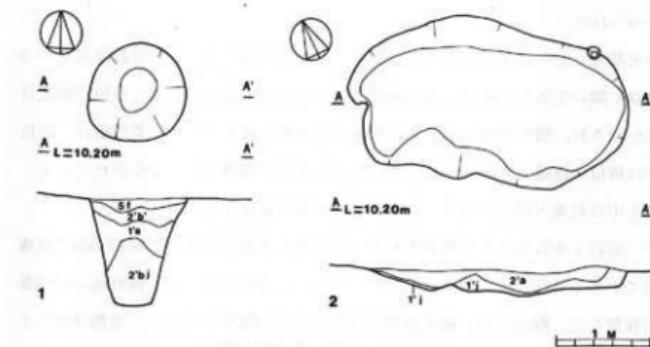
本住居跡は、調査区B3isを中心に確認され、第3号住居跡の東側4mほどに位置する。主軸方向はN~36°Wで、平面形は長軸6.5m・短軸6.4mの隅丸方形を呈している。壁周辺部には焼土が多く、一周するような形で検出されている。第1号土壙が住居跡の南西側部に複合し、壁の一部が擾乱をうけている。

遺構は表土下第3層に検出され、ほとんどの壁はやや開いて立ちあがり、壁高は30~50cmほどである。床はロームではば平坦で、特に炉跡の周囲や中央より北側の部分は硬くしまっている。

炉跡は、中央より西側に位置し、長径95cm・短径60cmの不整橢円形の平面形を呈し、床面を12cmほど皿状に掘りこんでいる。炉床はそれほど硬くはないが、暗赤褐色土が堆積していた。



第6図 第2号住居跡実測図



第7図 第2号住居跡貯蔵穴

ビットは4個ほど検出され、各々対角線上に位置し、すべて主柱穴と考えられる。直径はそれほど大きなものではなく、深さは31~47cmである。壁下には壁柱穴がみられ、ほぼ周回している。

貯蔵穴（第7図）は南コーナー部と北コーナー部の2か所に検出された。第1号貯蔵穴（第7

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P1	28	26	31	土柱穴	P3	31	30	47	土柱穴
P2	23	21	38	"	P4	26	24	37	"

図-1) は長径52cm・短径50cmの円形の平面形を呈し、住居跡の床面から底面までの深さは57cmほどである。底面は平坦で、壁は直線的にやや開いて立ちあがる。第2号貯藏穴(第7図-2)は長径150cm・短径85cmの橢円形状を呈し、住居跡の床面から底面までの深さは14cmと浅く、底面は平坦で壁はゆるやかに立ちあがっている。

覆土は自然堆積の状態を呈し、黒色土・暗褐色土・極暗褐色土が主に堆積している。

出土遺物(第8図)

本跡からの出土遺物は壺形土器・培形土器と台付壺形土器の一部ですべて土師器である。

1は、炉跡の直上から出土した壺形土器で現存部は約2分の1ほどである。口径は推定15.4cmほどで直線的に開いて立ちあがり、器高は26.3cmである。最大径は胴部上位にあり、底径は6.1cmで平底を呈している。器外面は口縁部に篦なでがみられ、胴部には斜位などの刷毛目整形の後篦なでがなされている。また底部にも篦なで整形がなされている。器内面は、くびれ部に輪積痕がみられ篦なで整形がなされているが、全体に摩耗がはげしい。色調は灰褐色で、胎土中にはスコリア・微礫等を含み、焼成は普通である。

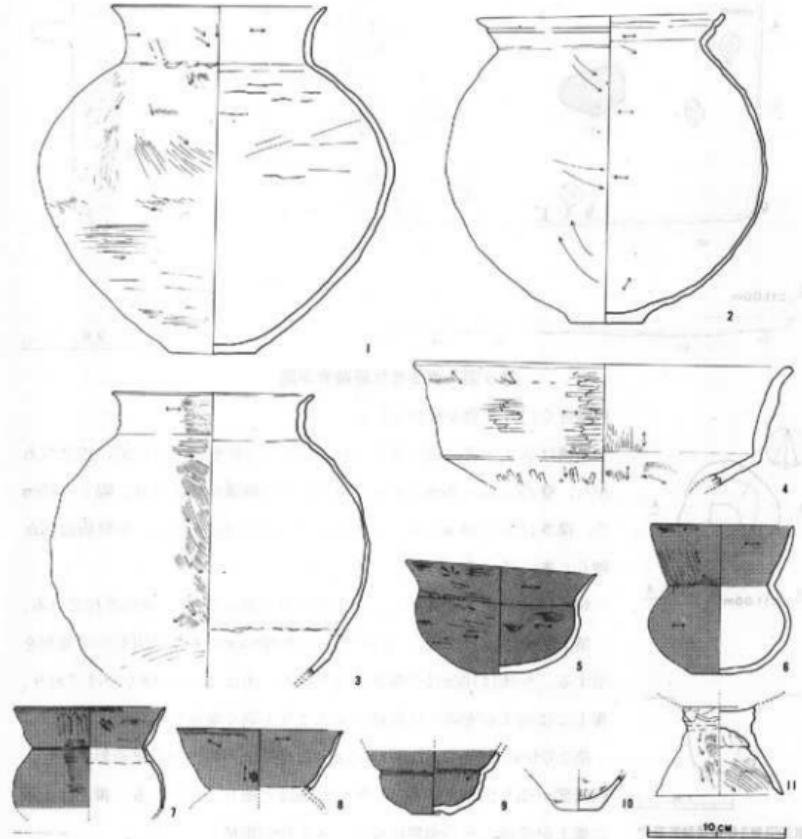
2は、北西コーナーの北壁寄りに出土したほぼ完形の壺形土器である。口径は17.2cmで直線的に開いて立ちあがり、中位に一条の凹線を有する。器高は22.5cmで最大径は胴部中位にあり、底径は5.1cmで平底を呈し全体に薄手である。器外面は口縁部に横位などの刷毛目整形、胴部にも斜位などの刷毛目整形がなされ、底部は窓削りである。器内面は口縁部に横位の刷毛目・胴部に斜位などの刷毛目整形がみられる。色調は赤褐色で、胎土中にはスコリア・砂粒等を含み、焼成は良好で一部黒斑がみられる。

4は、南東壁の中央部近くから出土した大型広口壺形土器の口縁部である。口縁部は口径25.8cmで直線的に外方に強く開いて立ちあがり、口辺部近くでやや外反する。器外面は横位の刷毛目整形後縦位の篦磨きがなされ、屈折部分の上・下に柳目状の痕跡を残している。器内面は、屈折部より口辺部寄りでは横位の篦磨きがみられ、下部には縦位などの篦磨き整形がなされている。色調は黒褐色で、胎土中に石英・砂粒を含み、焼成は普通で器厚は厚手である。

5は、南西コーナー部近くから出土した赤彩された完形の壺形土器である。口径13.6cmで直線的に外上し、口辺部で小さく外反する。器高は8.3cm・底径4cmで平底を呈する。器外面は口縁部に横位の刷毛目整形後篦なで、胴部には、刷毛目整形後横位などの篦なでを施し、底部は篦なで整形がなされている。色調は橙色で、胎土にスコリアを含み、焼成は普通で全体に摩耗がはげしい。

6は、北東側の床面より出土した培形土器である。口縁部はゆるやかに内凹しながら立ちあがり、

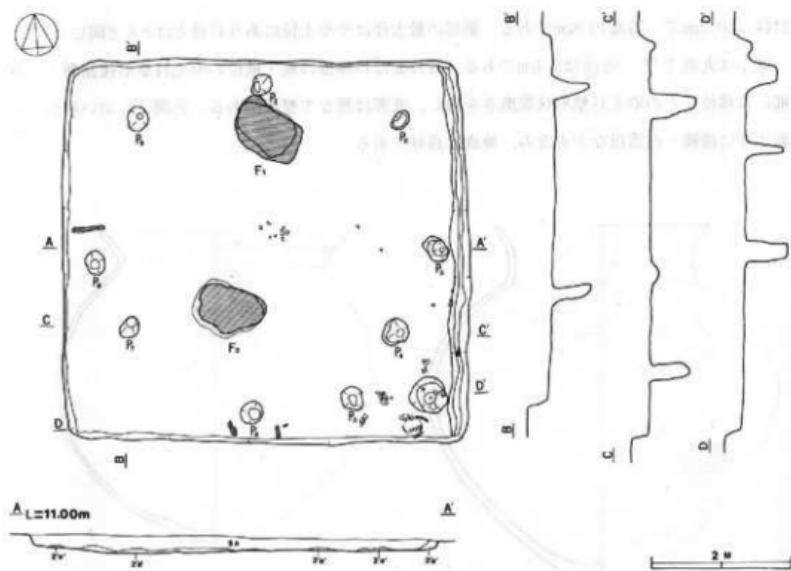
口径は10.2cmで、器高10.8cmである。胴部の最大径はやや上位にあり口徑とほとんど同じである。底部は丸底を呈し底径は5.4cmである。器外面は口縁部は縦・横位の刷毛目整形後範磨き、胴部には横位などの刷毛目整形後範磨きを施し、底部は籠なで整形である。色調はにぶい赤色で、胎土中に微纖・白雲母などを含み、焼成は良好である。



第8図 第2号住居跡出土遺物

第3号住居跡（第9図）

本住居跡は、調査区B3 j 6を中心確認され、第5号住居跡の東側8mほどに位置する。主軸方向はN-8°-Eで長軸5.6m・短軸5.4mの隅丸方形を呈している。焼土の検出は少ないが、南壁と



第9図 第3号住居跡実測図

西壁近くに炭化物が検出される。

遺構は表土下第3層に検出され、ほとんどの壁は外側に開いて立ちあがり、壁高は15~38cmである。東壁下に壁側溝が検出され、幅5~15cmで、深さは5~10cmであった。床はロームではほぼ平坦で、炉跡周辺部が硬くしまっている。

炉跡は中央部北壁寄りと、中央より南に寄って2か所検出されている。

第1号炉跡（F1）は、長径110cm・短径65cmの不整橢円形の平面形を呈する。炉床は10cmほど皿状に掘り込み、床はF2より硬くやけており、覆土には焼土が充満し住居跡の床面よりも高く堆積している。

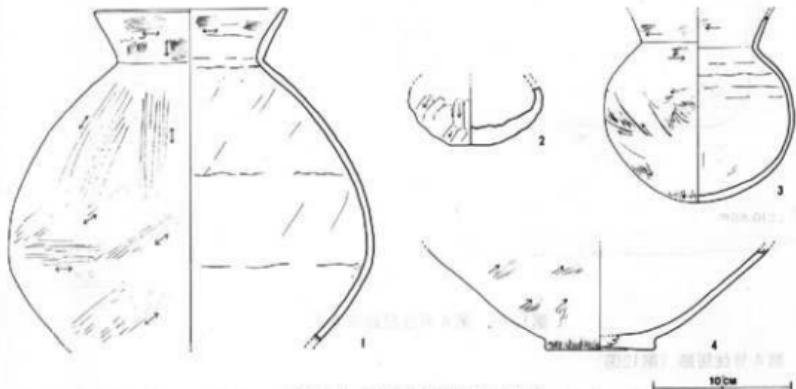
第2号炉跡（F2）は、長径97cm・短径65cmの橢円形の平面形を呈し、西側部が張り出している。炉床は15cmほど掘りこんでいる。覆土は上層に焼土が充満しその両側に焼土・炭化物が堆積している。

ピットは9個検出され、P2・P4・P7・P9が主柱穴と考えられる。P1・P3・P5・P6・P8も表のようにかなり深いものであり、住居跡に伴うものと考えられる。

貯蔵穴（第10図）は南コーナー部に検出され、長径55cm・短径53cmの円形状を呈し、住居跡床面からの深さは45cmであり、底面は平坦で壁はやや開いて立ちあがる。

ピット 番	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット 番	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P ₁	34	27	55		P ₆	34	31	57	
P ₂	30	20	19	主柱穴	P ₇	31	24	54	主柱穴
P ₃	40	26	64		P ₈	36	27	56	
P ₄	40	36	64	主柱穴	P ₉	35	29	55	主柱穴
P ₅	36	29	50						

覆土は自然堆積の状態を
しめしているが、第1層の
極暗褐色土がほとんどで、
第2層に暗褐色土が僅かに
堆積している。



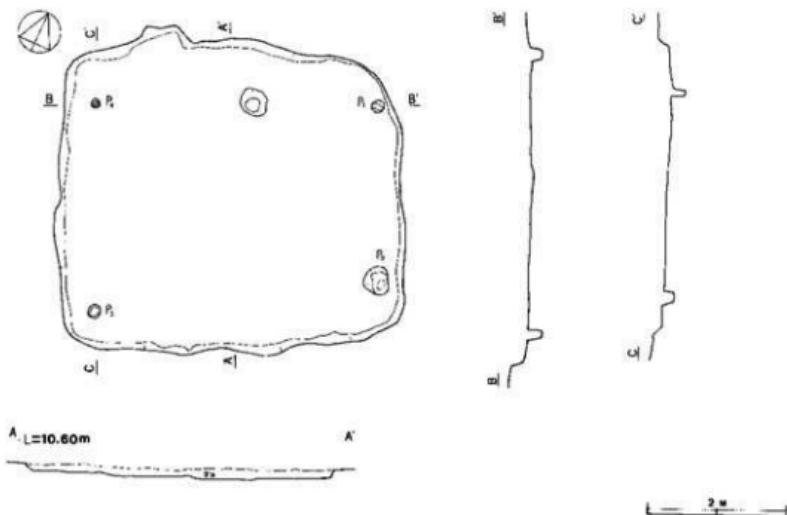
第11図 第3号住居跡出土遺物

出土遺物（第11図）

本跡からの出土遺物は、壺形土器・壺形土器などいずれも土師器である。

1は、南東コーナー部の貯藏穴の付近から出土した壺形土器である。口径は13.4cmで直線的に外反して立ちあがり、胴部や下位に最大径を有する。器外面は、口縁部に横位および斜位の刷毛目整形後範なでがみられ、胴部には縦位の刷毛目整形後に範なでが施されている。器内面は口縁部に刷毛目整形後範なでがみられ、胴部には刷毛目整形後縦・横・斜位の範なでを施している。色調は赤橙色で、胎土中には微塵などを含み、焼成は良好で胴部中央部に煤の付着がみられる。

3は、南東コーナー部の貯藏穴付近から出土した壺形土器である。口径は推定10cmほどで、直線的に開きながら立ちあがり、器高は推定14cmほどである。底部は丸底状を呈し中央に小さくぼみを呈した上げ底状である。器外面は口縁部に横位の刷毛目整形後範磨きがなされ、胴部は斜位の刷毛目整形後範磨きが施されている。底部には範なでがなされている。器内面は、口縁部に横位の刷毛目整形後範磨きがみられ、胴部には範なでがみられる。作りは丁寧で器厚は薄手であり、色調は橙色をなし、胎土中にスコリア・砂粒などを含み、焼成は良好である。



第12図 第4号住居跡実測図

第4号住居跡（第12図）

本住居跡は、緩やかに南から北に傾斜する調査区最北部の台地の裾部でやや平坦になる B3 d2 を中心に確認され、第1号住居跡の西約12mほどに位置している。半軸方向は N-65° E で、長軸4.9m・短軸4.5mの隅丸長方形状の平面形を呈している。他の住居跡に比べ、壁は不整形を呈している。

遺構検出面から床面までの深さは、10~17cmほどで、北西側の壁は良好な状態を呈しやや開いて立ちあがるが、他の壁は低く緩やかな立ちあがりを示している。床はロームであり全体に硬くなっているが、凹凸がみられる。

焼跡の遺構は中央より北壁寄りにあり、長径42cm・短径37cmの梢円形状の平面形を呈し、床面を6cmほど皿状に掘りこんでいるが、焼土は認められない。

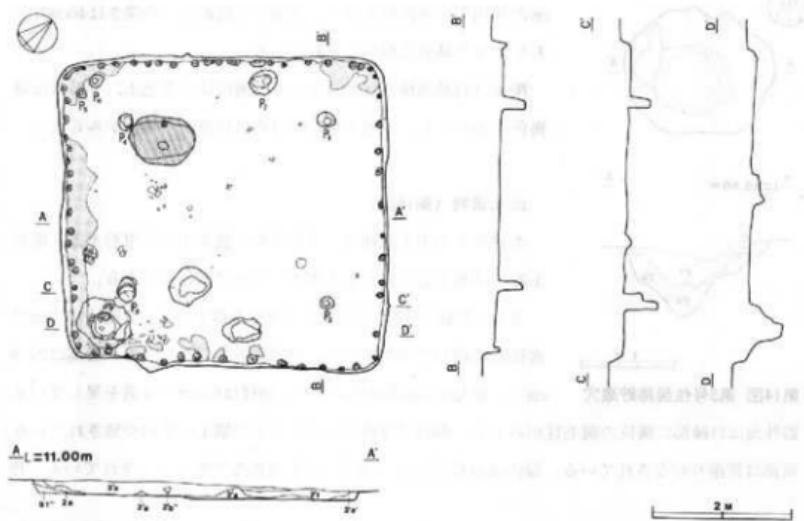
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P ₁	19	18	26	主柱穴	P ₃	20	18	15	主柱穴
P ₂	40	34	17	"	P ₄	14	13	20	"

ピットは4個ほど検出され、各々対角線上に位置し、すべて主柱穴と考えられる。

直径は一定せずP₁は14cmと細く、P₂は40cmと太く他の住居跡に比べ不均一である。

覆土には、耕作土と同様なしまりのない暗褐色土が堆積しており、埋め戻されたものと思われる。本跡からの出土遺物としては、(第46図-2)の床状土壙が高いレベルの覆土中より出土する。以上のような調査結果と土地の人の話を総合すると、本跡は、昭和43年に鈴木久・岡田猛氏が

調査され、成沢遺跡として報告されている住居跡であろうと思われる。



第13図 第5号住居跡実測図

第5号住居跡（第13図）

本住居跡はB3h3を中心確認され、第3号住居跡の西側約8mに位置している。主軸方向はN-45°Eで、長軸4.7m・短軸4.5mの隅丸方形の平面形を呈している。壁近くに焼土が検出され、特に南西壁に多く中央部に向かうような状態で広がって検出された。

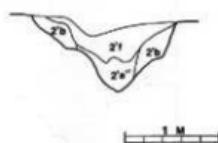
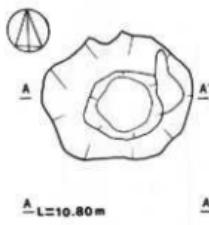
造構は表土下第3層に検出され、壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は15-25cmである。床はロームで、北西壁側がやや高く、その部分と中央部付近が硬くしまっている。またP₂とP₃の間に不定形の攪乱が2か所みられる。

炉跡は南西コーナー部よりに位置し、長径95cm・短径70cmの楕円形状の平面形を呈し、床面を18cmほど皿状に掘りこんでいる。炉床は硬く焼け、覆土には硬質ローム混入の焼土が堆積してい

る。

ビットは7個検出され、P₁・P₂・P₃・P₄は主柱穴と考えられ、各々対角線上に位置している。直径はそ

れほど大きなものなく、深さは29-55cmほどである。壁下には壁柱穴が検出され、壁下を周回している。



第14図 第5号住居跡貯藏穴
器外面は口縁部に横位の刷毛目がみられ、胴部には横位や縱位などの刷毛目整形が施されている。底部は窪削りがなされている。器内面は横位などの刷毛目整形後窪なで整形がなされている。色

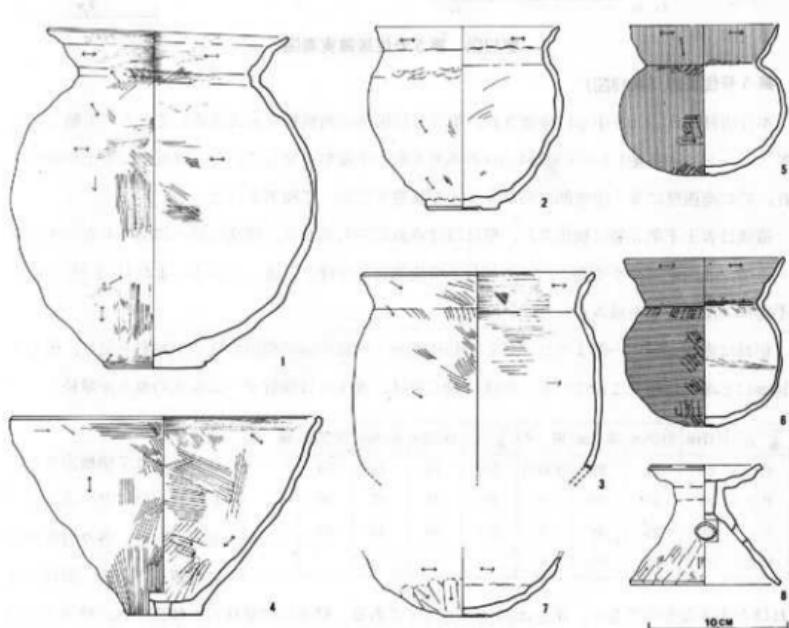
貯藏穴（第14図）は南東コーナー部にあり、長径80cm・短径65cmの橢円形の平面形を呈し、床面から底面までの深さは40cmほどあり、すり鉢状に掘りこまれている。

覆土は自然堆積の状態を示し、上層には黒褐色土、下層には暗褐色土がみられ、南壁・東壁の付近には焼土の堆積がみられる。

出土遺物（第15図）

本跡からの出土遺物は、壺形土器・甕形土器・壠形土器・瓢形土器・壺形土器・器台形土器で、すべて土師器である。

1は、貯藏穴付近から出土した壺形土器である。口径は17.2cmで直線的に開いて立ちあがり、口辺部近くで外反する。器高は24.6cmで、最大径は胴部中位にあり、底径は6.8cmで平底を呈している。底部は窪削りがなされている。器内面は横位などの刷毛目整形後窪なで整形がなされている。色

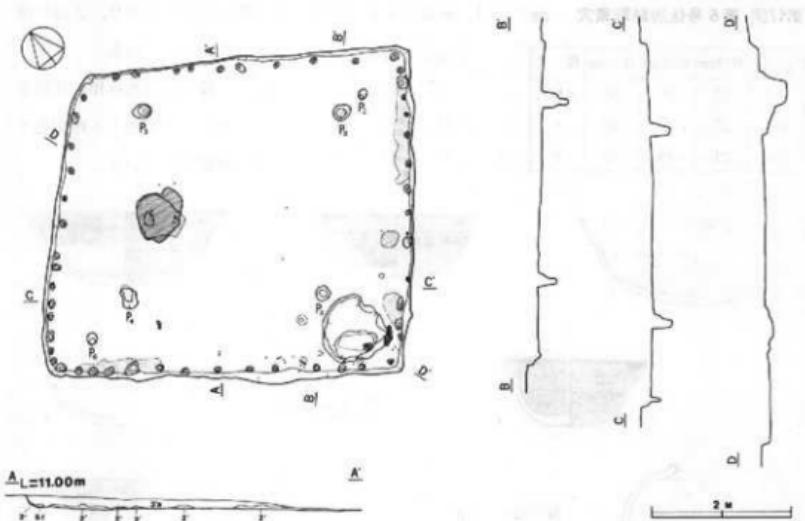


第15図 第5号住居跡出土遺物

調は赤褐色で、胎土に微蹕を含み、焼成は良好で胴部に煤が付着している。

4は、貯藏穴付近の焼土の下から出土した楕形土器である。器高14cmで底部から直線的に開いて立ちあがり、口径は22cmで最大径とし、底部は5.6cmでそのほぼ中央に孔を有する。器外面は口縁部に横位などの刷毛目がみられ、胴部には斜位や縱位のあらい刷毛目がみられる。器内面は横位や縱位の刷毛目整形がなされ、底部付近は刷毛目の上に篦などが施されている。色調は赤色で、焼成は良好である。

5と6は、貯藏穴付近から出土した器外面と口縁部の内面を赤彩した壺形土器である。6は口径11.3cm・器高12.1cm・底径2.3cmである。5は口径10.6cm・器高10.8cmである。5は胴部中位に最大径を有し、胴部は球形を呈している。6は口縁部と胴部中位がほぼ同じで最大径とする。底部はいずれも丸底で、その中央が窪んでいる。両器とも器内外面に丁寧な篦磨き整形がなされている。胎土は5・6ともスコリアを含み、5は微蹕も含む。色調はいずれも赤彩されて赤色を呈し、焼成は良好である。5は全体に薄手で、6は煤が付着している。



第16図 第6号住居跡実測図

第6号住居跡（第16図）

本住居跡は、調査区C3b₀を中心に確認され、第2号住居跡の南4mほどに位置する。主軸方向はN-45°-Wで、北側コーナー部は他のコーナーに比べて窪んでいるため正んだ隅丸長方形の平面形を呈する。長軸5.2m・短軸4.6mである。東壁と南壁の一部に焼土の堆積がみられる。

遺構は、表土下第3層に確認され、ほとんどの壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は5~15cmほ

どである。床はロームでありほぼ平坦で全体によくしまっている。

炉跡は、中央部より北西側によって位置し、長径75cm・短径65cmの不整橢円形の平面形を呈し、床面を6cmほど皿状に掘り込んでいる。炉床はそう硬いものでなく、覆土には極暗赤褐色土が堆積し、炉跡の周囲の床面は硬くしまっていた。ピットは6個ほど検出され、P₁～P₄が主柱穴と考えられる。直径はそれほど大きなものでなく、深さは29～40cmである。

A A' L=11.00m

壁下には壁柱穴が検出され、間隔は不統一であるが周回し、南西コーナー部は間隔が密である。壁柱穴は径15～17cm・深さは10～15cmほどのものが多い。

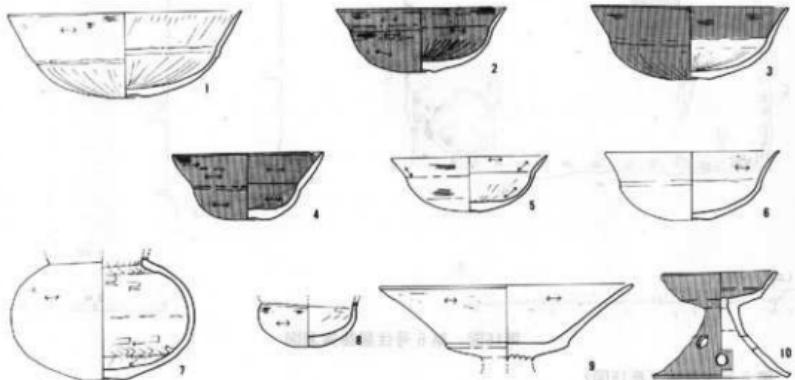
貯蔵穴（第17図）は南コーナー部にあり、長径95cm・短径90cmの円形状の平面形を呈し、住居跡の床面から底面までの深さは37

cmであり、底面は平坦で壁は斜めに開いて立ちあがり、2段に掘

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P ₁	27	20	33	主柱穴	P ₄	36	20	30	主柱穴
P ₂	27	22	40	#	P ₅	14	12	43	
P ₃	21	19	29	#	P ₆	16	15	52	

り込まれている。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土が堆積している。



第18図 第6号住居跡出土遺物

出土遺物（第18図）

本跡からの出土遺物は、壺形土器・壺形土器・高壺形土器・器台形土器すべて土師器である。

1～6は壺形土器である。

1は、南西壁近くから出土した坏形土器である。口縁部は底部から大きく開き、口径は16.8cmを測る。器高は6.2cmほどで、底径は2.6cmで上げ底を呈する。器外面は口縁部に横位の刷毛目整形後籠なで整形、体部には縦位の刷毛目整形後籠なでがなされ、底部には籠なで整形がみられる。器内面は口縁部に縦位の刷毛目整形、体部・底部には中心に向かって細かな刷毛目整形がなされている。色調は橙色で、胎土中にスコリア・砂粒を含み、焼成は良好で器厚は薄手である。

2は、南西壁の貯蔵穴近くから出土した内外とも赤彩された坏形土器である。口縁部は外反きみに開き、最大径は口辺部にあり口径は12cmである。頸部はくびれ内側に棱を有し、器高は5.3cmである。底部は上げ底で底径は2.7cmである。器外面は口縁部に窪磨き、体部には斜位の刷毛目整形後籠磨きがなされている。器内面は口縁部に横位の刷毛目整形後籠磨き、体部には中心に向かって刷毛目整形後籠磨きを施している。色調は赤色で、胎土はスコリアを含み焼成は良好である。

4は、南コーナー部の貯蔵穴付近から出土した内外とも赤彩された坏形土器である。口縁部は直線的に開き、口径11cmで最大径は口辺部にある。頸部は僅かに内側して内外に棱を有する。器高は4.8cmで、底部は上げ底で底径2.6cmを測る。器外面は、口縁部に横位などの刷毛目整形後籠磨き、体部に横位などの刷毛目整形後籠磨きがみられる。色調は赤色で、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。

9は、南コーナー部の貯蔵穴付近から出土した高环形土器で、环部は口径18.4cm・深さ4.5cmを測る。环部は直線的に開いて立ちあがる。頸部にはハメコミ痕を有す。口縁部には横位などの刷毛目整形後籠なでを施す。色調はにじむ橙色で、胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。

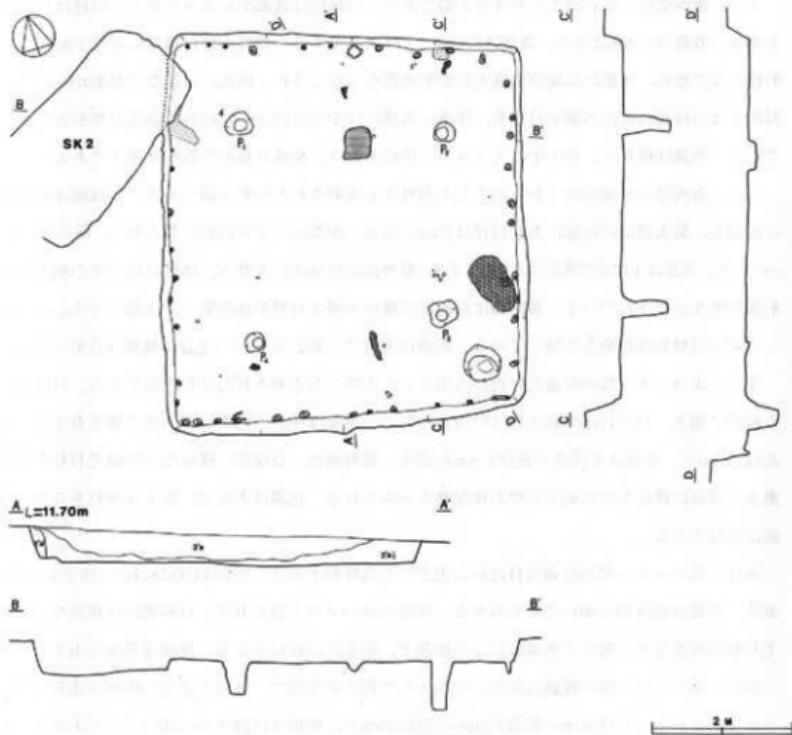
10は、南コーナー部の貯蔵穴付近から出土した器台形土器で、外部と受部の内側を赤彩したあとが認められる。口径8cm・器高7.7cm・底径9.9cmで、环部は内側ぎみに開いて立ちあがり、器受部中央に1cmほどの孔が穿たれ、脚部の裾部は大きく開いている。脚部には中位に直径1.2cmほどの孔が3個穿たれ、裾部に1孔が穿たれている。器外面は、横位などの刷毛目整形後籠なでがなされ、脚部には横位や斜位などの刷毛目整形後籠なで、籠磨き整形がみられる。色調はにじむ橙色で、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。

第7号住居跡（第19図）

本住居跡は、調査区C3c5を中心に確認され、第8号住居跡の西側4mほどに位置する。主軸方向はN-15°Eで、長軸5.6m・短軸5.2mの隅丸方形の平面形を呈する。北・西壁付近に焼土が点在し木炭片も検出される。西壁の一部が第2号土壙によって切られている。

ピット 番	長径cm	短径cm	深さcm	備 考	ピット 番	長径cm	短径cm	深さcm	備 考
P1	40	35	46	七柱穴	P2	38	32	66	主柱穴
P2	30	27	68	"	P1	29	26	64	"

遺構は表土下第3層に検出され、壁はやや開いて立ちあがり、壁高は28~50cmほ



第19図 第7号住居跡実測図

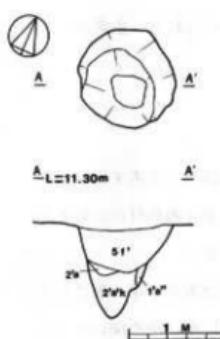
どで、西・南側が深く、北・東側が浅い。床はロームであり、ほぼ平坦で北側部と貯蔵穴付近が硬くしまっている。

炉跡は中央部より北側に位置し、長軸45cm・短軸40cmの方形状の平面形を呈し、床面を8cmほど掘り込んでいる。覆土には焼土が充満していた。(図19左) 貯蔵穴付近

ピットは4個検出され、各々対角線上に位置し、すべて主柱穴と考えられる。

直径はそれほど大きなものでなく深さは46~68cmである。

壁下には壁柱穴が検出され、間隔は不統一であるが周回し、直径は7~14cm、



第20図 第7号住居跡貯蔵穴 第21図 第7号住居跡出土遺物

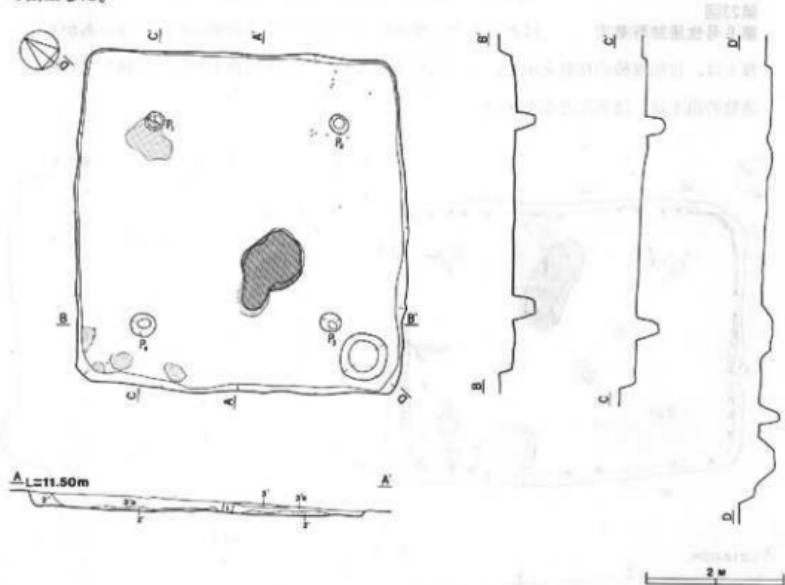
深さは約11cmである。

貯藏穴（第20図）は南東コーナー部にあり、長径53cm・短径50cmの円形状を呈し、住居跡の床面から底面までの深さは50cmである。壁はやや開いて立ちあがる。

覆土は自然堆積の状態を示し、ローム粒子を少量含む黒褐色土が主である。

出土遺物（第21図）は、高環の脚部が出土している。脚部は円筒状で受部の接合痕が残り、接合部のやや下から開きぎみに下降し、下部に最大径を有す。色調は淡橙色で、胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

東壁の南よりの付近からやや青味がかった白色の粘土が、長径90cm・短径50cm・高さ30cmの塊で出土した。



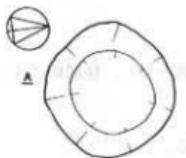
第22図 第8号住居跡実測図

第8号住居跡（第22図）

本住居跡は調査区C 3 d₂を中心に確認され、第7号住居跡の東側約4mほどに位置する。主軸方向はN-53° Eで、長軸4.9m・短軸4.8mの隅丸方形の平面形を呈している。西コーナー部付近に焼土が点在する。

遺構は表土下第3層に検出され、壁はやや外側に開いて立ちあがり、壁高は7~23cmで、南・西壁部が深く、北・東壁部が浅い。床はロームであり、ほぼ平坦で全体的に硬くしまっている。

炉跡は、中央部よりやや南側に位置し、長径120cm・短径85cmほどの不正橢円形の平面形を呈



$\Delta L = 11.50\text{m}$

A

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P ₁	28	27	27	主柱穴	P ₃	30	27	28	主柱穴
P ₂	30	25	27	"	P ₄	36	35	33	"

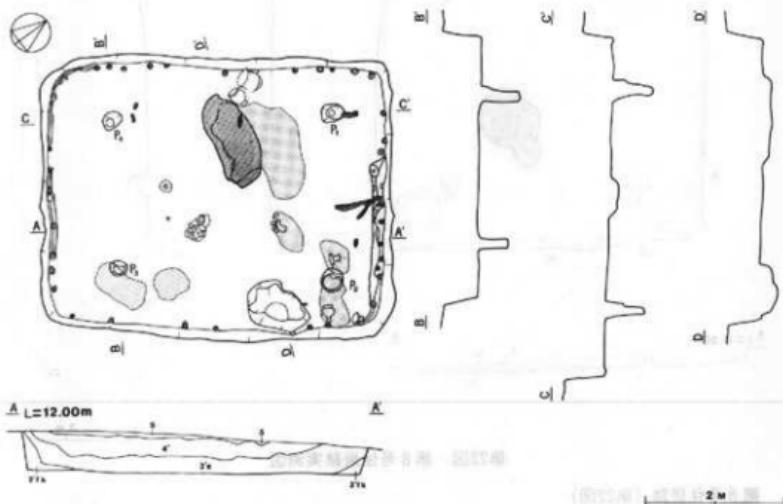
し、住居跡の床面を15cmほど皿状に掘り込んでいる。炉床は硬く焼け、覆土には明赤褐色の焼土が堆積している。

ピットは4個ほど検出され、各々対角線上に位置し、すべて主柱穴と考えられる。直径は25~36cm・深さ27~33cmである。

貯蔵穴（第23図）は南コーナー部にあり、長径70cm・短径68cmの円形の平面形を呈し、住居跡の床面から底面までの深さは25cmほどであり、底面はほぼ平坦で壁は外側に開いて立ちあがる。

第23図
第8号住居跡貯蔵穴

覆土は、自然堆積の状態を示し、ローム粒子を多量に含む黒褐色土が主に堆積している。遺物の出土は、ほとんどなかった。



第24図 第9号住居跡実測図

第9号住居跡（第24図）

本住居跡は、調査区C3e5を中心に確認され、第7号住居跡の南側4mほどに位置する。主軸方向はN-40°Eで長軸5m・短軸4.1mの隅丸長方形の平面形を呈している。北コーナー部から広く焼土が点在している。遺物の出土は少なかった。壁は立派な土塁構造で、壁高は45~58cmである。床

はロームであり、ほぼ平坦で全体によくしまっており、床面に黒色土が多く付着している。壁溝が南壁下と北壁下の一部に掘られており、溝幅は南壁側5~7cm・北壁側11~13cmで深さは約3~5cmである。

炉跡は、中央部より西側寄りに位置し長径125cm・短径58cmの長楕円形の平面形を呈し、床面は12cmほど皿状に掘り込んでいる。覆土には、焼上ブロックを多量に含む微暗赤褐色土と暗赤褐色土が堆積している。炉床は非常に硬く焼けている。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P ₁	33	25	57	主柱穴	P ₃	25	22	42	主柱穴
P ₂	35	31	22	"	P ₄	30	23	56	"

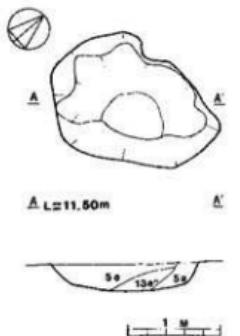
ピットは4個検出され、各々対角線上に位置し、すべて主柱穴と考えられる。

直径はおよそ22~31cmで、深さは22~57cmである。東コーナー部に新しい落ち込みが検出された。

壁下には、壁柱穴が検出され、間隔は一定でないが周回している。壁柱穴は径5cmで、深さは約3~5cmである。

貯蔵穴（第25図）は東コーナー部やや南に寄って位置し、長径77cm・短径58cmで北壁部が窪んで不整楕円形を呈する。床面はほぼ平坦で、2段に掘り込んでいる。壁は南側がゆるやかで、北側は垂直ぎみに立ちあがる。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒色土及びローム粒子（微量）、焼土（微量）を含む黒褐色土が主である。



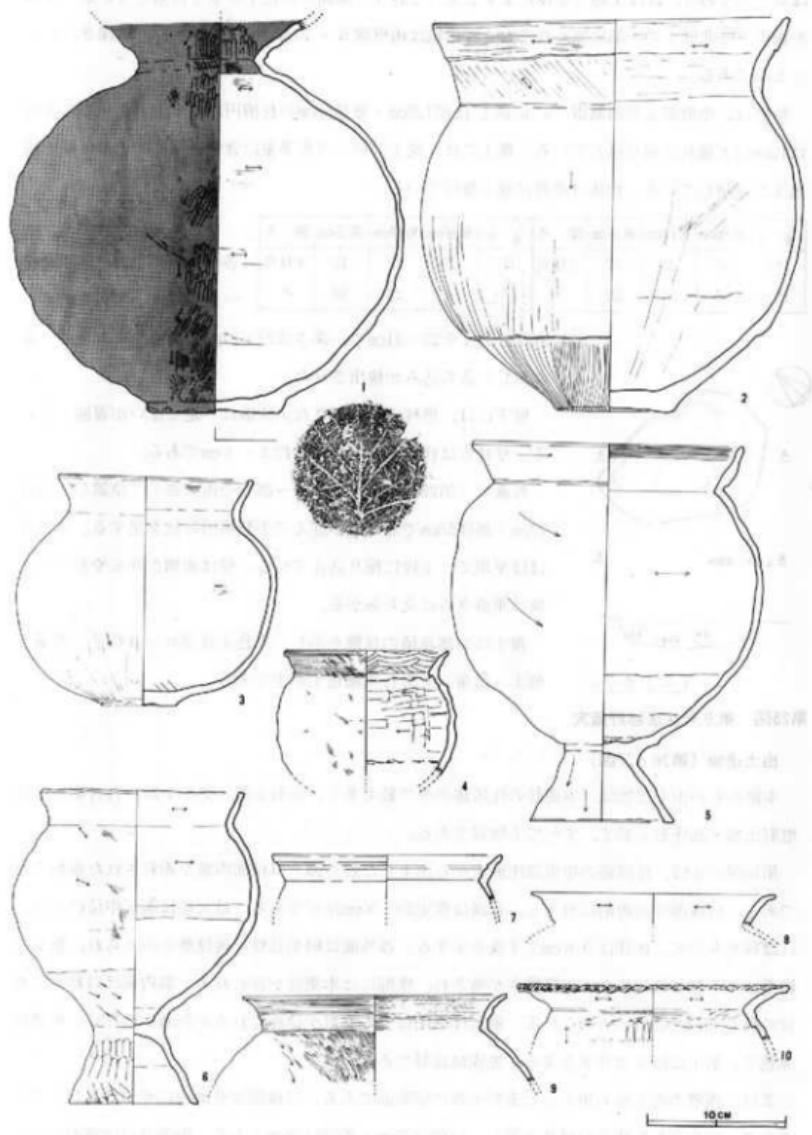
第25図 第9号住居跡貯蔵穴

出土遺物（第26・27図）

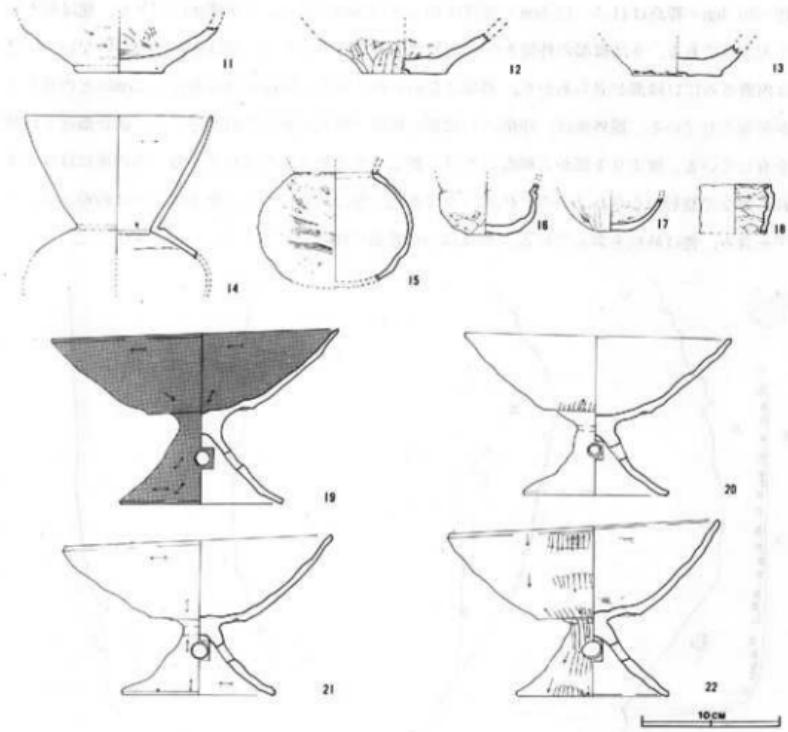
本跡からの出土遺物は、本遺跡の住居跡の中で最も多く、壺形土器・壺形土器・台付壺形土器・壺形土器・高環形土器で、すべて土師器である。

第26図の1は、住居跡の中央部床面上から出土した器外縁と口縁部内側が赤彩された壺形土器である。口縁部は直線的に外上し、器高は推定29~30cmほどである。最大径は胴部中位にあり、ほぼ球形を呈す。底径は9.6cmで平底を呈する。器外縁は刷毛目整形後籠磨きがみられ、胴部は刷毛による整形後概位などの籠磨きが施され、底部には木葉痕がみられる。器内面は口縁部に椎位の刷毛目整形後籠磨きがみられる。胴部は刷毛による整形が認められるが剥落が激しい。色調は赤色で、胎土にはスコリアを含み、焼成は良好である。

2は、西壁の近くから出土した壺形土器の完形品である。口縁部は直線的にやや外反して立ちあがり、段を有して複合口縁状を呈し、口径は25cm・器高は28cmである。胴部はほぼ球形を呈し、最大径は胴部中位にある。胴部下位に段を有し、段より底部にかけ器厚が厚みを増す。底部は平



第26図 第9号住居跡出土遺物



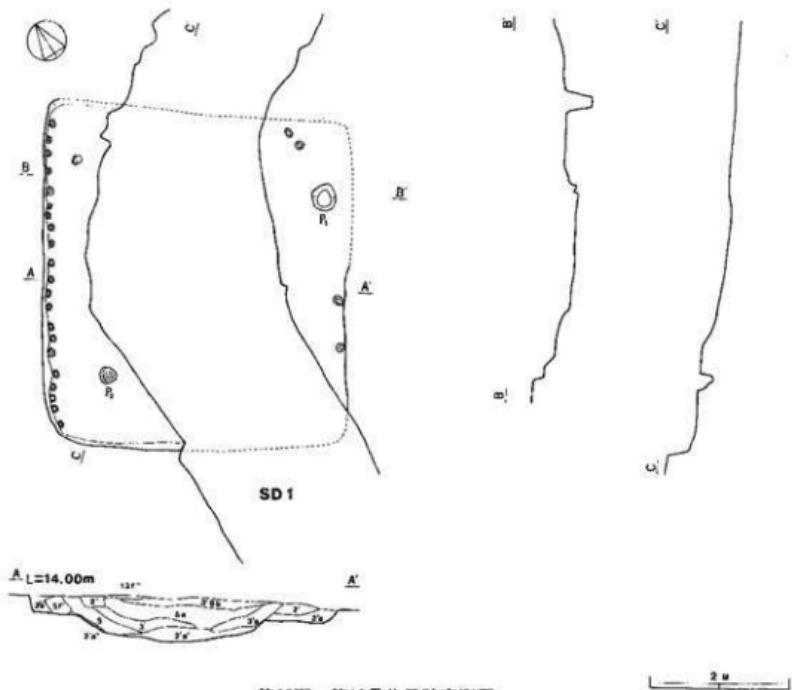
第27図 第9号住居跡出土遺物

底でやや深み、底径は8cmである。器外面は口辺部に横位の刷毛目を施し、その下に斜位や横位などの刷毛目整形がみられる。胴部には縦位など刷毛目整形後窓なでがなされ、底部は窓なでである。器内面は口縁部に横位の刷毛目の後窓なでが施され、胴部も斜位などの刷毛目整形後窓なで整形を施している。色調は浅黄橙色で、胎土にスコリア・砂粒を含み、焼成は良好である。

5は、西壁の近くで、2の土器と並んで出土した台付壺形土器の完形品である。口縁部は直線的に外上し、口径は19cmで、器高は27cmである。胴部は球形状を呈し最大径は胴部やや中位にあって22.5cmである。台部は外上して開き、底径は10cmである。器外面は、口縁部に横位の刷毛目整形、胴部に斜位などの刷毛目整形を施し、台部には窓なで整形がみられる。器内部は口縁部に横位などの刷毛による整形がなされ、胴部は刷毛目整形後窓なででている。色調は明赤褐色で、胎土にはスコリア・石英を含み、焼成は良好である。

第27図の19~22は、東コーナー部の床から出土したいずれも完形の高壺形土器である。口径は

19~20.4cm・器高は11.5~12.5cm・底径は10.2~11.5cmであり、9が僅かに大きく、他は殆ど同じ大きさである。9は脚部の外傾と坏部内外が赤彩されているが、他は赤彩されていない。坏部は内彎ぎみに口縁部が立ちあがり、脚部はなめらかに開き、脚部中位に直徑1.2cmほどの孔を3か所穿たれている。器外面は、坏部の口辺部に横位の細かい刷毛目痕がみられ、接合部近くに稜を有している。稜より下部から脚部にかけて箇などでや箇磨きがなされている。器内面には、いずれも箇などで整形がなされている。色調は9は赤色で他は橙色である。胎土は、9は砂粒・スコリアを含み、他は砂粒を含んでいる。焼成は10が普通で他は良好である。



第28図 第10号住居跡実測図

第10号住居跡（第28図）

本住居跡は南から北にゆるやかに傾斜する斜面で、調査区D3c3を中心に確認される。本跡は、道跡の中央部東はずれを南から北にはしる第1号溝が、東にゆるやかにカーブする位置にある。主軸方向はN-35°Eで長軸約4.6m・短軸4.4mの隅丸方形状の平面形を呈していたと考えられる。本跡は1号溝により切られて西側の一部と東側のごく一部を残すのみである。

遺跡は表土下第2層に検出され、壁は垂直ぎみに立ちあがり壁高は南西コーナーが35cmと最も

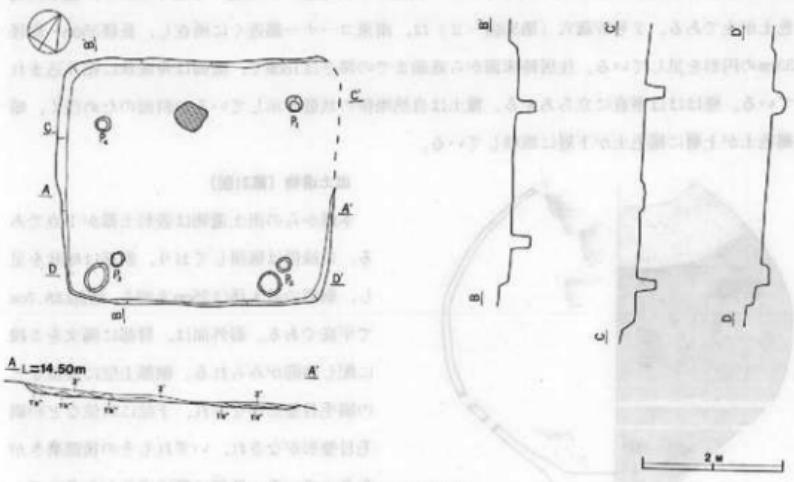
深く、北西壁15cm・南東壁14cmであった。床はロームではば平坦で硬くしまっている。北西部床面に焼土と木炭片が少量検出され、東部床面からもごく少量の焼土が検出されたが掘り込みはなく、炉とは考えられなかった。

ピットは2個検出され、P₁は長径25cm・短径23cm・深さ21cmで、P₂は長径40cm・短径35cm・深さ40cmであり、いずれも主柱穴と思われる。西壁下と東壁下の一部に壁柱穴が検出され、特に西壁のそれは直径10~13cm・深さ7~10cmほどのものが多く、いずれも垂直に掘り込まれている。

覆土はセクションの東側・西側の残存部分をみると、自然堆積の状態を示し、暗褐色土が東側に堆積している。

本跡を切って1号溝がつくられたため、本跡の大部分が攪乱されており、斜面のためか壁がかなり流れている。

遺物は、ほとんど出土しなかった。



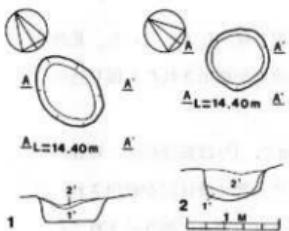
第29図 第11号住居跡実測図

第11号住居跡（第29図）

本住居跡は調査区D3fsを中心に確認され、第1号溝の東側4mほどに位置する。主軸方向はN-60°Eで長軸3.9m・短軸3.5mの隅丸方形状の平面形を呈している。

遺構は表土下第2層に検出され、壁はやや開きぎみに立ちあがり、壁高は1~23cmで西壁が最も深く東壁は浅い。床はロームではば平坦で全体によくしまっているが、北東側は耕作による攪乱を受けている。

炉跡は中央部より北壁側に寄っており、P₁とP₂のはば中央に位置している。長径47cm・短径



第30図 第11号住居跡貯蔵穴

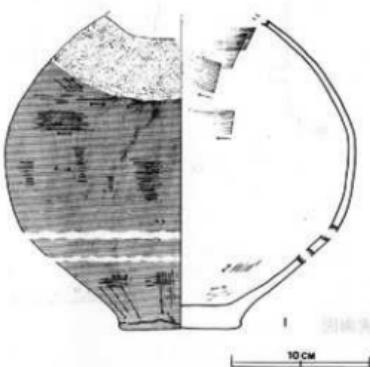
40cmのはば方形状の平面形を呈し、住居跡の床面を6cmほど皿状に掘り込んでいる。覆土は床面より10cmほど盛り上がり、暗赤褐色土が堆積し、その下層に焼土が多量に混入した暗褐色土が堆積している。

ピットは4個検出され、各々対角線上に位置しすべて主柱穴と考えられる。直径はそれほど大きなものでなく、深さは27~31cmである。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P1	25	22	29	主柱穴	P3	22	18	27	主柱穴
P2	22	20	31	"	P4	21	20	27	"

貯蔵穴(第30図)は、南壁の両コーナー部に1か所ずつ2個検出される。1号

貯蔵穴(第30図-1)は南コーナー部に長径43cm・短径31cmで楕円形の平面形を呈している。住居跡床面から底面までの深さは15cmであり、底面は平坦で壁はやや開いて立ちあがり、覆土は褐色土が主である。2号貯蔵穴(第30図-2)は、南東コーナー部近くに所在し、長径35cm・短径33cmの円形を呈している。住居跡床面から底面までの深さは18cmで、底面は舟底状に掘り込まれている。壁はほぼ垂直に立ちあがる。覆土は自然堆積の状態を示しているが斜面のため浅く、暗褐色土が上層に褐色土が下層に堆積している。



第31図 第11号住居跡出土遺物

出土遺物(第31図)

本跡からの出土遺物は壺形土器が1点である。口縁部は破損しており、胴部は球状を呈し、胴部の最大径は25cmを測る。底部は8.7cmで平底である。器外面は、肩部に縄文を2段に配し結節がみられる。胴部上位に横線などの刷毛目整形がなされ、下位に斜面などの刷毛目整形がなされ、いずれもその後窓磨きがなされている。底部は窓けすぎがなされて、縄文より下位は赤彩されている。

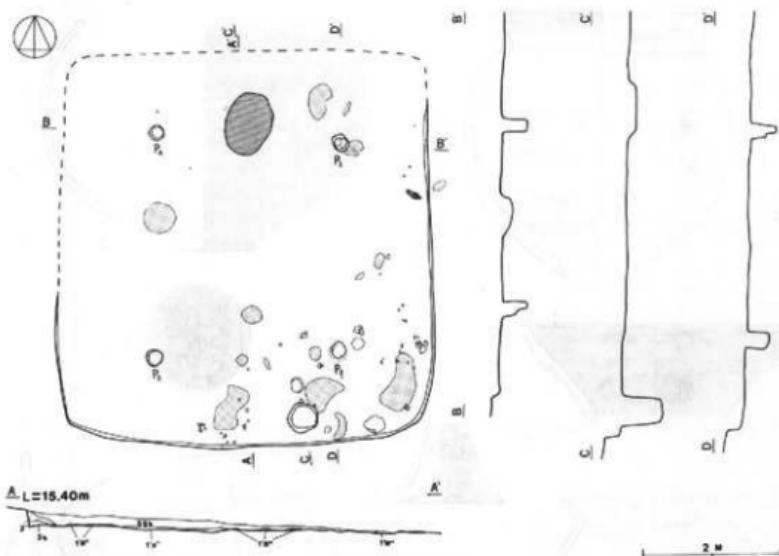
色調は赤色で、胎土にはスコリア・砂粒を含み、焼成は良好である。

第12号住居跡(第32図)

本住居跡は、調査区D1f0を中心に確認され成沢遺跡の住居跡では最も西側に位置し、本跡の西側3~4mから斜面となっている。本跡の北東8mほどに円形周溝墓の周溝が所在する。主軸

方向は真北で、長軸5.7m・短軸5.4mほどの隅丸方形の平面形を呈している。南壁付近を中心に焼土が点在し、東側部には木炭片が検出される。

遺構は表土下第2層に検出され、南東壁は比較的明瞭であるが、北・西壁の一部は確認できな



第32図 第12号住居跡実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
P ₁	27	21	39	主柱穴	P ₂	26	24	53	主柱穴
P ₂	27	26	39	"	P ₃	23	23	36	"

かった。壁高は確認された部分で3~22cmであり、床は中央より南側部はハード

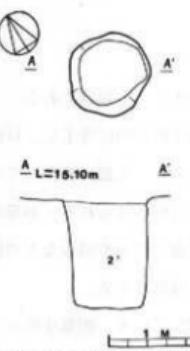
ロームでよくしまっているが、北側の一部は耕作のため擾乱を受けている。

(固井溝) 燃剤土出

炉跡は中央部より北側に位置し、長径93cm・短径67cmの楕円形の平面形を呈し床面を15cmほど皿状に掘り込んでいる。覆土は焼土の混入した暗褐色土が表面を覆い、その下層に暗赤褐色土が充満していた。

ピットは4個検出され各々対角線上に位置し、すべて主柱穴と考えられる。

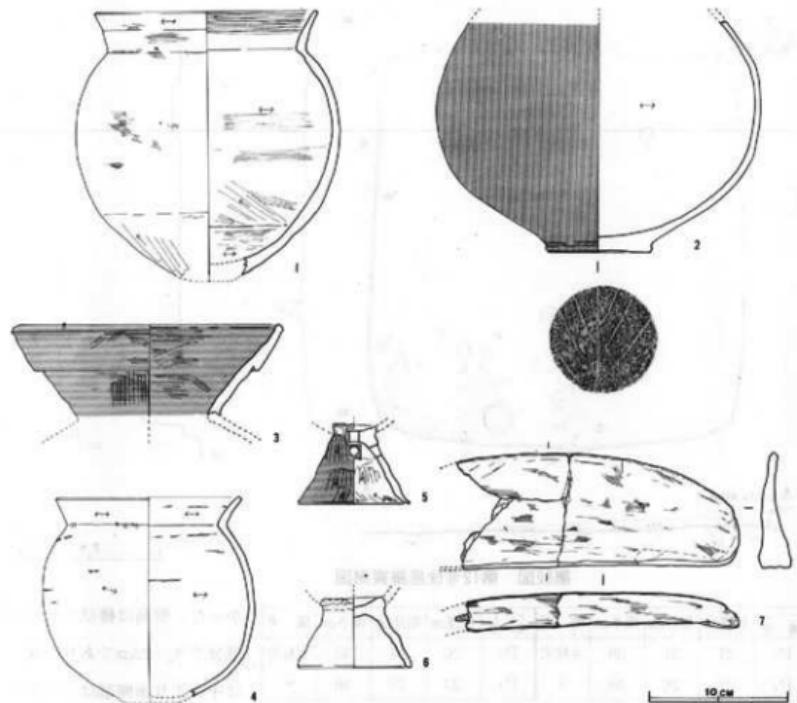
貯蔵穴(第33図)は、南壁のやや東側に寄った所にあり、長径45cm・短径43cmの円形の平面形を呈する。住居跡床面から底面ま



第33図 第12号住居跡貯蔵穴

での深さは60cmで、底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ちあがっている。

覆土は自然堆積の状態がみられるが、斜面のため土が流され、南側から北側にくるにしたがい堆積が浅くなる。極暗褐色土が主で、その下に褐色土が僅かに堆積している。



第34図 第12号住居跡出土遺物

出土遺物（第34図）

本跡からの出土遺物は變形土器・壺形土器・高壺形土器・土製品で、すべて土師器である。

1は、貯藏穴の西側付近の床面から出土した變形土器である。口縁部は直線的に外上し、口径は推定約15.6cm・器高は推定約18.9cmほどである。最大径は胴部中位にある。底部は破損している。器外面は口縁部に横位の刷毛目整形を施し、頸部にやや斜位の刷毛目痕がみられる。胴部には横位の刷毛目整形後範などを作成する。器内面は口縁部に刷毛目整形、胴部に横位や斜位などの刷毛目整形がみられる。色調はにぶい橙色で、胎土に微纖維を含み、焼成は良好である。

2は、器外面底部まで赤彩された壺形土器で、口縁部及び肩部が破損している。胴部中位が大きく張り、胴部の最大径は23.5cmを測る。底部は平底で底径7.3cmである。器外面は胴部に横位や

斜位などの刷毛目整形後窓なでがなされている。底部に木葉痕がみられる。器内面は剥落がひどい。色調は赤色で、胎土に微礫を含み、焼成は良好で器厚は薄手である。

3は、壺形土器の口縁部で内外とも赤彩されている。口縁部は直線的に外上し、口縁は幅広い複合口縁をなし口径は18.6cmである。器外面は口辺部に横位の刷毛目整形後窓なでをなし、複合部より下位は縱位の刷毛目整形後窓の窓なでがみられる。器内面は横位の刷毛目整形後窓なでを施す。色調は赤色で胎土には砂粒を含み焼成は良好で、器厚は厚手である。

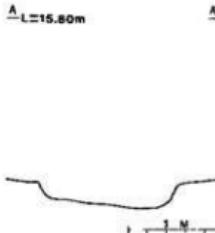
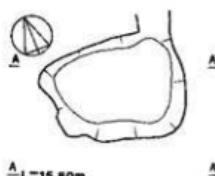
5は、器台形土器の脚部で器外面が赤彩されている。坏部の中心部に脚部へ貫通する孔がみられる。脚部は受部からラッパ状に開き、脚部上位に直径0.7cmほどの孔が3個穿たれている。器外面は刷毛目整形後窓がなされている。色調は赤色で胎土に砂粒・スコリアを含み、焼成は良好である。

7は、南東コーナー部の東壁側床面より出土した土製品である。最大幅8.2cm・厚さ0.5-2.3cm・出土した部分の長さは20.4cmである。背部は2.2cmほどの厚さで、刃状の側は薄く尖ったような形状を呈する。器外面は指圧によると思われる凹凸がみられ、横位や斜位などの刷毛整形がなされている。色調は橙色で胎土にスコリア・微礫を含み焼成は良好である。一部破損している。

第13号住居跡（第35図）

本住居跡は成沢遺跡で検出されたなかで最も南で、最も高い位置に所在し、調査区D2i6を中心に確認され、円形削溝室の南側約10mに位置する。主軸方向はN 20° Eで長軸6.7m・短軸4.5mの隅丸長方形を呈し、北壁の一部に擾乱を受けている。

遺構は表上下第2層に検出され、壁は2段に掘り込まれている。上段部の壁高は北壁7-21cm・東壁23-25cm・西壁27-31cmである。上段部の壁の幅は北側で27-28cm・東側で23-30cm・西側で33cmであり、南壁は確認できなかった。下段部の壁高は北側で15cm・西側で16cm・東側で16cmほどであった。床はロームであり平坦で全体によくしまり、北にやや傾斜を示している。



炉跡は北西部床面から焼土が微量検出されたが掘り込みは確認されなかった。南側床面の落ち込みは焼土が検出されず、本跡から炉跡は確認できなかった。

ピットは7個検出され、6個は柱穴と考えられる。P₁・P₃・P₅は主柱穴で、P₂・P₄・P₆は棟持柱の柱穴と考えられる。直徑はそれほど大きなものでなく24-31cmほどで、深さは11-20cmである。

第36図 第13号住居跡貯蔵穴

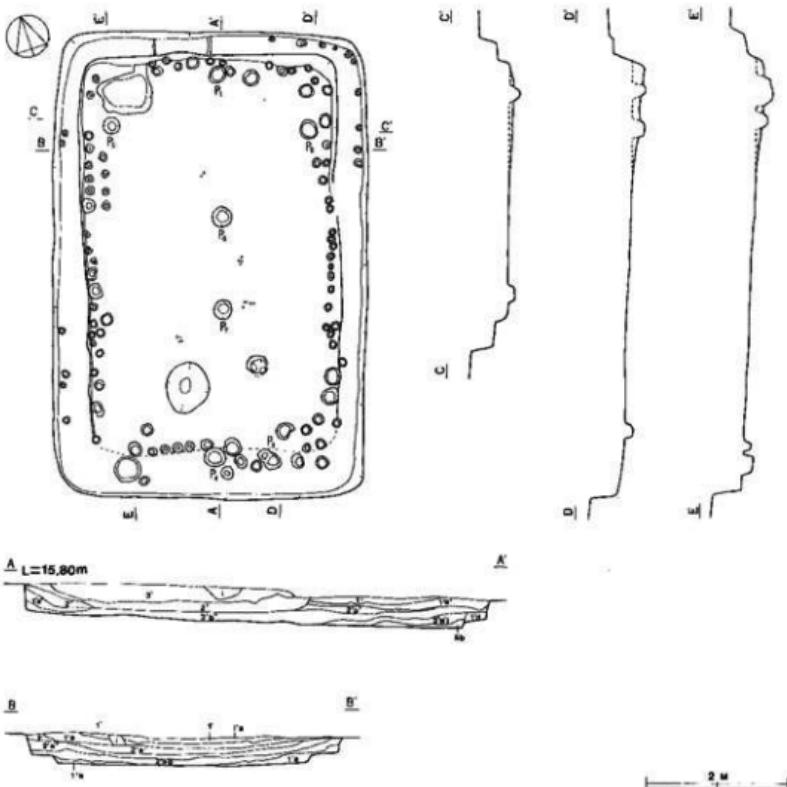
壁柱穴は、上段部の壁下に16本検出された。下段部の壁下には、

ピット 番 号	長径cm	短径cm	深さcm	備 考	ピット 番 号	長径cm	短径cm	深さcm	備 考
P ₁	25	23	14	棟持柱	P ₅	24	24	16	主柱穴
P ₂	27	25	15	主柱穴	P ₆	28	28	20	棟持柱
P ₃	26	21	11	"	P ₇	28	24	23	"
P ₄	31	26	15	棟持柱					

直径・間隔とも、不統一であるが、壁下を周回している。直径は7~8cm・深さは10~15cmのものである。

貯蔵穴（第36図）は、北西コーナー部にあり、長径80cm・短径55cmほどの不整形形状を呈している。北東コーナー部が壁つくように上場が張り出している。住居跡床面から底面までの深さは15cmほどであり、底面は平坦で壁はやや開きぎみに立ちあがる。

覆土は自然堆積の状態を示しているが、上層は耕作のため擾乱をうけている。覆土は上層より黒褐色土・暗褐色土・褐色土の順で堆積し、暗褐色土は硬くしまっている。



第35図 第13号住居跡実測図

本跡からの出土遺物は、6点ほど出土したが、いずれも土師器の小破片で、覆土中からのものである。

本跡は、遺構の性格を把握できるような遺物の出土もなく、炉跡も検出されない。主柱穴のあり方・壁・平面形なども、当遺跡の他の住居跡とは異っている。第13号住居跡とはしているが、他の住居跡とはその使用の仕方が異っていたものと考えられる。

3. 土 壤

第2表 土壌(SK)一覧表

土壌No.	地区	主軸方向	平面形状	規 模			備 考
				底 面	長 m	短 m	
1	B3i ₉	N-55°-W	長 方 形	平 坦	2.55	1.75	60 S12号と複合。
2	C3e ₅	N-55°-W	長 方 形	平 坦	3.24	1.66	50 S17号の底面と複合。S17号の西側をさる。上部断片3片。
3	C3d ₂	N-56°-W	長 方 形	平 坦	2.64	1.79	45 SK3とSK4は複合。 SK4がSK3をさる。
4	C3d ₁	N-37°-E	長 方 形	平 坦	2.74	1.43	50 SK3と複合。
5	C3e ₃	N-35°-E	長 方 形	平 坦	2.00	1.46	17 底面はやや風化を呈する。 中央部がやや深い。
6	C3g ₃	N-65°-W	長 方 形	平 坦	2.07	0.85	23 中央部やや深い。 東側部。全体に凹凸あり。
7	C3i ₇	N-55°-W	長 方 形	平 坦	1.46	1.00	60
8	C3g ₆	N-57°-W	長 方 形	平 坦	2.30	1.32	50
9	C3f ₅	N-61°-W	長 方 形	平 坦	2.12	0.98	35 東側部が西側部に比べ深い。
10	C3e ₉	N-16°-W	楕円 形	平 坦	2.40	1.95	44 東側に約7cm程度の小ピット複合。
11	D3h ₃	真 北	円 形	平 坦	2.29	2.19	38
12	E3a ₁	N-27°-E	長 方 形	凹凸が多い	2.73	2.02	55 東側部二段に割り込まれる。 西側部にピット状遺跡複合。
13	E3a ₃	N-41°-E	長 方 形	平 坦	1.22	0.90	20 北側部コナーや張り出し。 南側壁が凹凸している。

本遺跡で確認した土壙は15基であるが、そのなかの2基は円形周溝墓の周溝内に検出されたので円形周溝墓のところで記載することにし、ここでは13基について述べることにする。

土壙の詳細については、第2表のとおりであるが、ここでは全体的なことを記して土壙のまとめとしたい。

土壙の分布は、南側から北側に緩やかに傾斜する遺跡の東側部に点在している。特にC3区において多数の土壙が検出された。

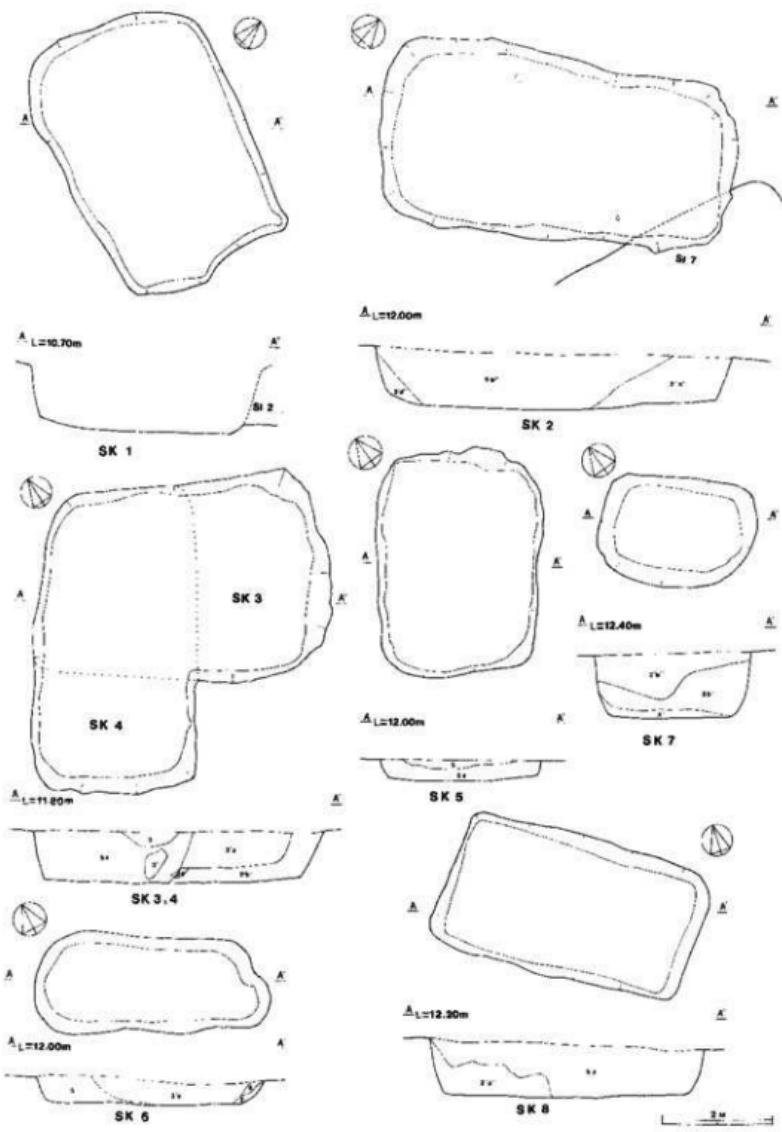
形状は、第1~9・12・13号の11基が長方形状を呈し、第10号土壙が楕円形状を呈し、第11号土壙が円形状を呈しており、長方形状を呈する土壙が極端に多い。底面は第12号土壙を除いては平坦である。

規模は、長軸3mをこえるものが1基、2~3mを測るもののが10基、1~2mのものが2基である。深さは、40cmをこえるもの8基、40cm以下のもの5基である。最大容量の土壙は、第12号で約3.03m³であり、最小のものは第13号で約0.22m³ほどである。平均で1.6m³ほどである。

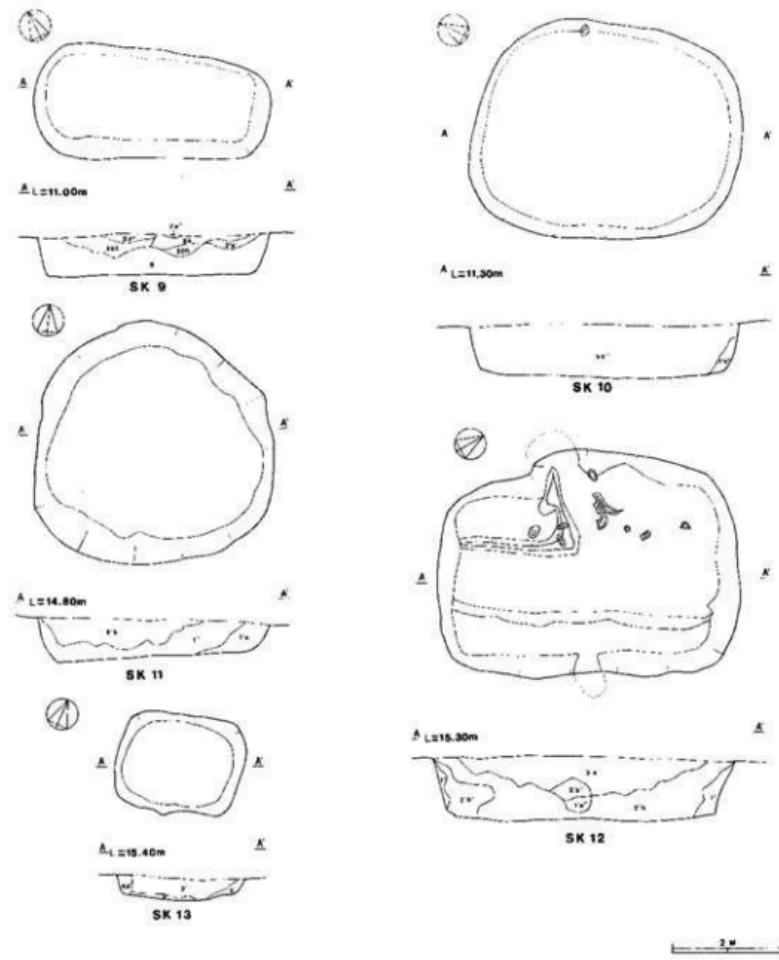
覆土は、ローム粒子が混入した暗褐色土・極暗褐色土・黒褐色土・褐色土などが堆積している。覆土の堆積状態は、自然堆積のものもみられるが、人為的とみられるものもある。

出土遺物は、第2号土壙の覆土内から土師器片が3片出土したのみで、他の土壙からの出土遺物はまったくない。

時期や使用目的については、第2号土壙と第7号住居跡が複合しており、住居跡の西壁を土壙が切っていることがセクションより判断されるので、土壙が住居跡より新しいのであろうと考えられる。第3号土壙と第4号土壙も切り合っており、セクションからみると、第4号土壙が第3号土壙より新しいものと思われる。全体として覆土などから判断してそれほど新しいものとは考えられないが、住居跡より古いものとは思われない。使用目的については、前述の如く遺物の出土もないでの不明である。

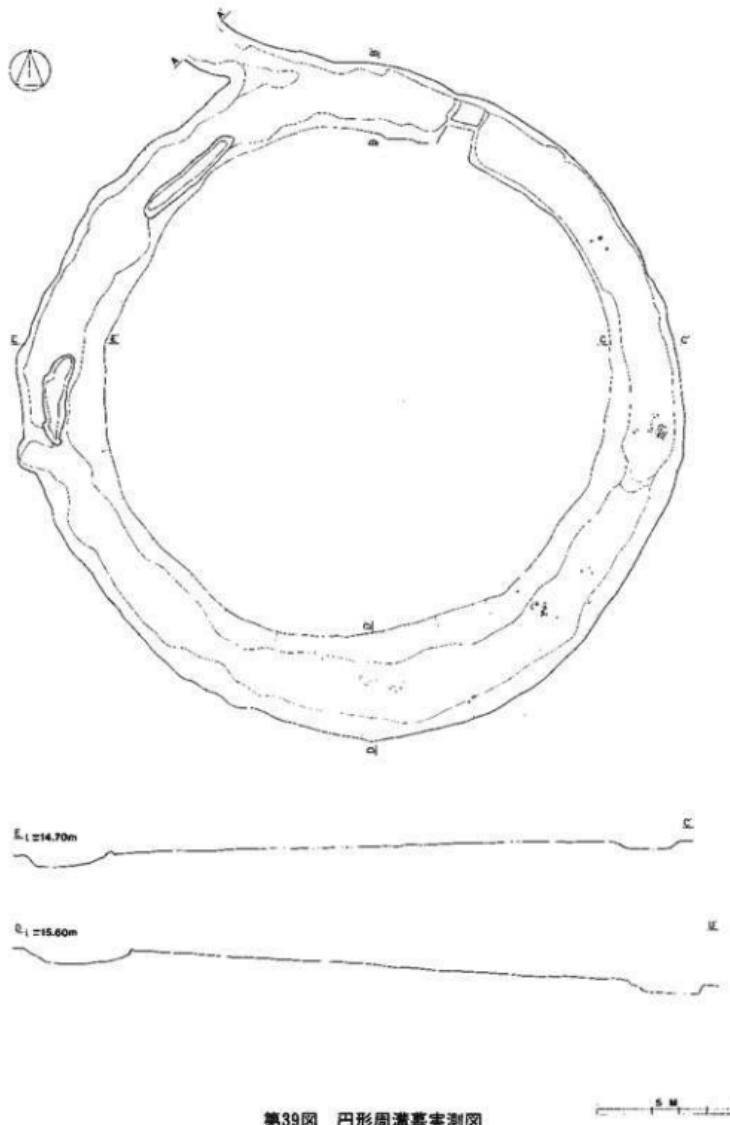


第37図 土壌実測図



第38図 土壌実測図

4. 円形周溝墓



第39図 円形周溝墓実測図

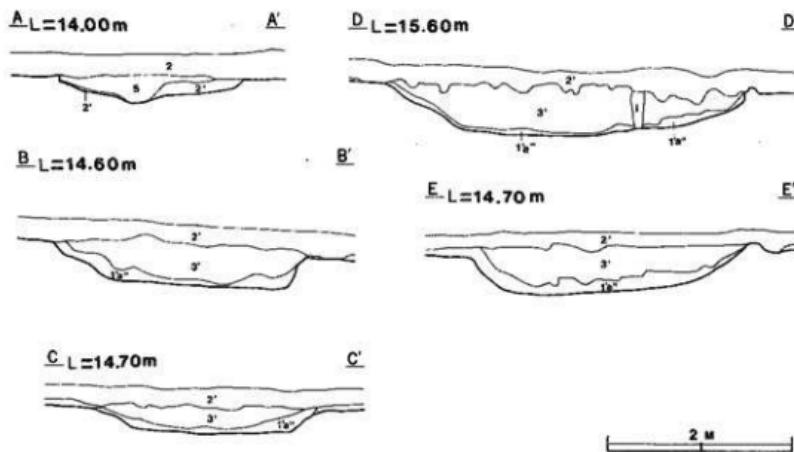
第1号円形周溝墓（第39図）

本円形周溝墓は、成沢遺跡の中央部やや北よりの西側で大調査区C2・D2に確認された。南側から北側に緩やかに傾斜する中段に位置し、現在は畑として耕作されており、地表面観察からは、遺構の存在はほとんどわからない状況であった。ただし、中心部には柳が植えてあり、この部分が僅かに高くなっている。この柳はかなりの樹齢で、その根あがり部が70~80cmほど測れる。したがってこの柳が植樹された当時は、中心部は70~80cmのマウンドがあったのではないかと想像される。その根元にはつい最近まで稻荷明神の小祠が祀られていた。

前述のように墳丘は認められなかつたが、規模は周溝部を含む東西径23.9m・南北径24.3mほどで、東西周溝内径18.2m・南北周溝内径18mを測る円形の平面形を呈している。

周溝は第2層面に確認され、ローム面から掘り込まれて周回している。周溝の幅は北側で2.5m、南側で3.8m、東側で2.9m、西側で3.2mを測る。全体的に2~3.9mほどの周溝幅を有し、南周溝部が広く、北周溝部が狭い状況を呈している。周溝の深さはローム面から、それぞれ、北45cm・南56cm・東29cm・西57cmほどで、壁は緩やかに開いて立ちあがるが、内側壁面よりも外側壁面が僅かに急傾斜を示している。溝の底部はほぼ平坦であるが、南から北に傾斜を示し、北側周底面は南側周底面より1mほど低い。

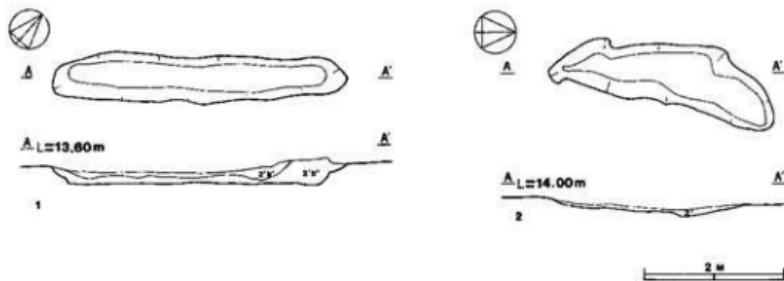
周溝の北側部に幅1.9m・深さ30cmの溝が西側斜面部へ掘られ、形状・覆土から考えて周溝の水流すための施設かと考えられる。本遺構は、溝底に西側からの堤部が張り出して入り口部が狭くなっている。陸橋状施設が周溝の北側に確認され、上幅は約60cmである。陸橋部はまったく



第40図 円形周溝墓周溝断面図

掘り残されたものではなく、内壁側から周溝の中程までは台状部と同じレベルで残し、中程より外壁部までは20cmほど掘りこんで一段低くつくられている。(PL 6 参照)

周溝内の覆土は、自然堆積の状態を示し大部分は黒褐色土でその下層にローム混入の褐色土が堆積している。



第41図 周溝内土壤 第1・2号

周溝内埋葬施設（第41図-1）

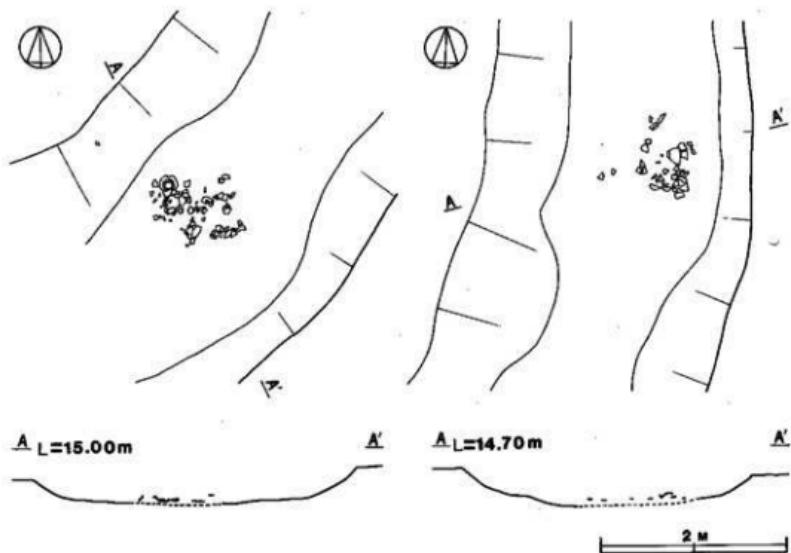
周溝内北西部の周溝内壁部から掘り込まれた長方形状の土壤で、主軸方向はN-41°Eである。規模は長径4.2m・短径0.9~0.54m・深さは0.7~0.5mを測る。壁は短径部はほぼ垂直に立ち上がり、長径部は途中までほぼ垂直に、その上部は大きく外傾している。底面は長径3.7m・短径0.4~0.3mでほぼ平坦である。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土で柔らかい。

土壤内からの遺物の発見はなく、その性格は決定しかねるが、形状からすれば周溝内埋葬施設ではないかと考えられる。

土壤2（第41図-2）

本土壤は、西側周溝内のほぼ中央部底面に掘り込まれ、主軸方向はN-15°Eほどで、規模は長径3.1m・短径0.7~1m・深さは周溝部底面より0.36~0.2mほどであり、平面形状は北側が広く南側が狭い不整長楕円形を呈する。底面は全体的に北側が低く、壁はほとんど緩やかに立ちあがり、覆土はロームブロックの混入した暗褐色土である。

土壤内から遺物の発見はなく、その性格や時期は不明であるが、現代に属するものではないと考えられる。



第42図 周溝内遺物出土状況図

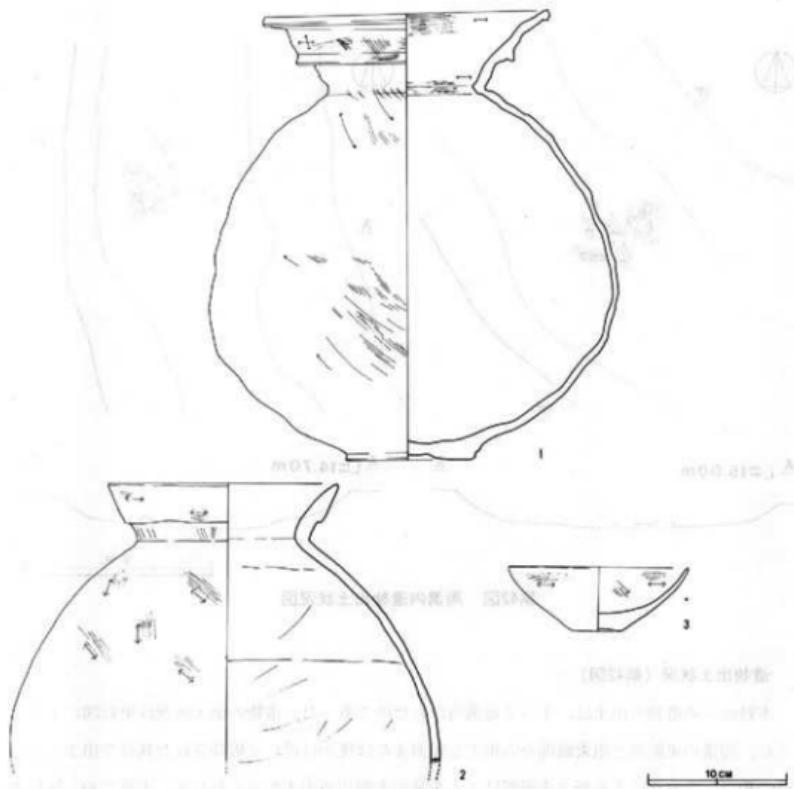
遺物出土状況（第42図）

本跡からの遺物の出土は、すべて周溝内からだけであった。遺物の出土状況は第42図に示すように、周溝の東側部と南東側部から出土し床面または僅かに浮いて破碎された状態で出土した。その他は、北東部に1か所と西南部にごく少量の土器片の出土がみられたが、土壙2から陸橋部にかけての西～北側には土器片の出土はみられなかった。台状部からの遺物の出土はなかった。

出土遺物（第43図）

本跡からの出土遺物は、壺形土器・环形土器で、いずれも土師器である。

1は、壺形土器で、D2e?の周溝底面ないしは僅かに浮いたところから、破碎された状態で一括して出土した。口縁部はやや開いて立ちあがり、中位に段を有して外反する。口辺部の外反は強く、口径20cmで、器高は32cmを測る。最大径は29cmほどで、胴部やや下位にある。底部の底径は9.2cmほどの平底であるが、中央部付近がやや窪んでいる。器外面は、口辺部は横位や傾位の刷毛目整形が施され、有段部より下位では縦位などの刷毛目整形がみられる。胴部は横位や斜位の刷毛目が見られ、底部は荒削り、窪なでがなされている。器内面は、口縁部に横位や斜位の刷毛目がみられ、胴部は剥落がはげしい。色調は明黄褐色で、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。



第43図 円形周溝墓出土遺物

が、器全体になめらかさが乏しい。

2は、壺形土器で、東周溝部の底面または僅かに浮いたところから、破片で一括して出土したものである。口縁部は開いて立ちあがり複合口縁で、口径は16cmを測る。胴部下半は欠損しているが、胴部中位に最大径があるものと思われる。器外面は口縁部に横位の刷毛目、頸部に縱位の刷毛目整形を施し、胴部には斜位・横位の刷毛目整形後範など整形がなされている。器内面は口縁部に横位の刷毛目整形、胴部に範など整形が見られる。色調は明赤褐色で、胎土には微礫を含み、焼成は普通であり、口縁部内側に煤が付着している。

3は、壺形土器で、D2e4区の南周溝部から出土した約15%の破片である。口径は推定12.8cm・器高4.6cm・底径3.5cmほどであり、口縁部は底部から大きく開いている。底部は平底でやや窪んで厚手

である。器外面は口辺部に横位などの刷毛目整形を施した後鏡磨きがなされ、胴部は横位・斜位などの刷毛目整形の後鏡磨きがなされている。底部は寛なでかに施されている。器内面は寛なでの後鏡磨き整形がなされる。色調はふい橙色で、胎土中に砂粒を含み、焼成は良好である。

5. 溝・その他

本溝跡（第44図）は、遺跡中央部南側より北側にかけて緩やかに傾斜している部分の東側のD3・E3区に弧を描くような形で検出される。溝の北側部の主軸方向は、N-50°Eで第10号住居跡を切って複合しN-5°Wにかわる。さらに、24mほど南でN-20°Wにかわり、さらに20m南に進むとN-90°Eにかわって調査区域外の傾斜面へと延びている。

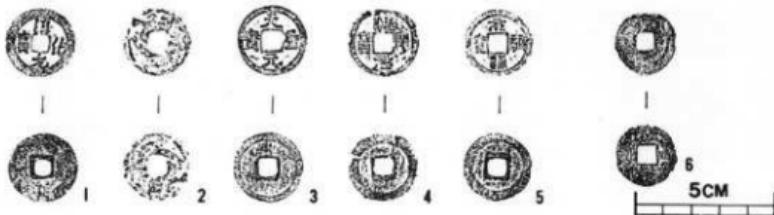
遺構は第3層に確認され、溝の上幅は2.2~2.5mで、遺構検出面から底部までの深さは0.8~0.9mである。底面はロームであり、0.9~1.2mの平坦な幅を有して硬くしまり、壁はゆるやかに開いて立ちあがる。

覆土はいずれも自然堆積の状態を示し、暗褐色土を基調とする土層がみられる。B・Cの部分には、上層に極暗褐色土が堆積している。D・Eの部分には極暗褐色土が西側から流れ込んだ状況を示している。A・Fの部分では上層と下層に極暗褐色土の堆積がみられる。

溝の検出された部分の地形は、南から北にかけて傾斜しているため溝底面のレベルが異なり、F-F'では14.2mで、C-C'では13.6m、A-A'では12.9mである。溝底部のレベルからみると、溝に南から北に向かって緩やかに傾斜し、F-F'からA-A'の高低差は13mほどである。

出土遺物（第45図）

溝跡内からの出土遺物は、5枚の古銭と石製模造品（第46図-11）である。



第45図 溝及グリット出土古銭（上段表 下段裏）

本遺跡から出土した古銭は6枚で、第45回の1～5は溝内より出土し、6はC3e1区より表土除去中に出土したものである。6は摩耗がひどく、文字は読みとれないが、縁背がみられる。

溝内出土の1～5のうち、1～4は溝のD3gs区の東側部からまとめて出土したものである。

1は溝底面より27cm浮いた状態で出土した「淳化元寶」である。2は溝底面より6cm上部から出土したが、文字の摩耗がはげしく判読できない。3は溝底面より18cmほど上部の溝中央部から出土した「天聖元寶」である。4は溝底面より6cmほど上部の最も既よりから出土した。文字は書かれているが、摩耗がひどく判読できない。5は前述の4枚の位置より、南に3mほどはなれて溝底部より28cmほど上部から出土した「天禧通寶」である。

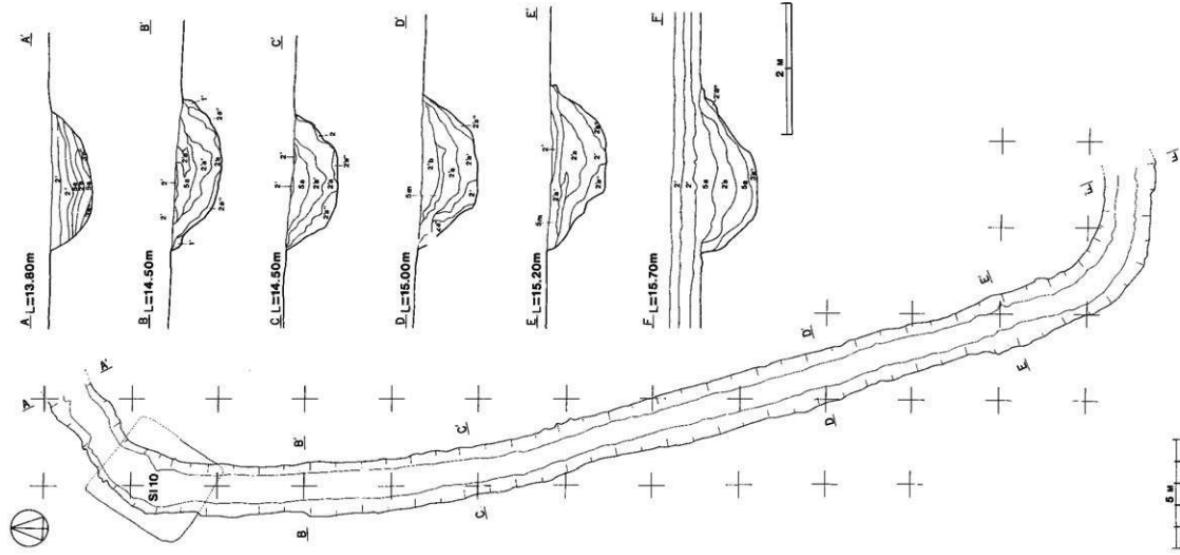


図44 滝・セクション測量図

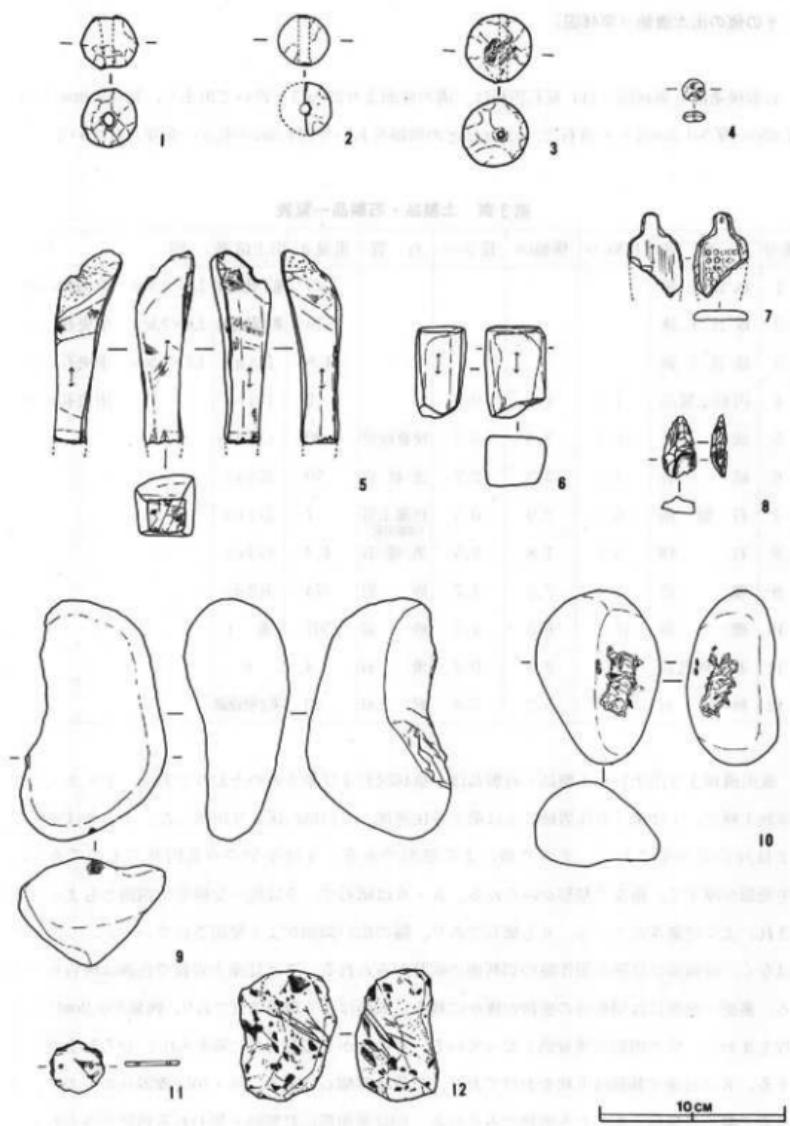
その他の出土遺物（第46図）

石製模造品（第46図-11）双孔円板は、溝の底面より37cmほど浮いて出土し、長径2.9cm・短径2.85cm・厚さ0.2cmほどの滑石で、1.5cmほどの間隔をおいて径1.5mmの孔が一対穿たれている。

第3表 土製品・石製品一覧表

番号	器種名	長軸cm	横軸cm	長さcm	石質	重量g	出土位置	備考
1	球状土錘					25	第1号住居跡	2.6×2.9cm 中央孔0.5cm
2	球状土錘					10	第2号住居跡	2.6×2.8cm 中央孔0.5cm
3	球状土錘					44.8	D3gs	3.6×3.5cm 中央孔0.5cm
4	円形土製品	1.2	1.1	0.5		2	D3es	中央孔0.1cm
5	砥石	10.4	3.3	3.2	硬質砂岩	90	C3es	
6	砥石	4.9	3.3	2.7	流紋岩	70	E3a1	
7	石製品	(6.5)	2.9	0.5	珪藻土岩 (流紋岩質)	7	D2es	
8	石鎌	3.4	1.8	8.5	黒曜石	4.3	G3c9	
9	礫器	8.1	7.3	4.7	砂岩	374	B3d7	
10	礫器	13.0	6.8	4.2	砂岩	507	溝1	
11	石製模造品	2.9	2.9	0.2	滑石	4	"	
12	軽石	6.9	5.2	3.8	軽石	20	第2号住居跡	

成沢遺跡より出土した土製品・石製品は、第46図および第3表のとおりである。1・2・3は球状土錘で、1は第1号住居跡、2は第2号住居跡、3はD3gs区より出土した。1・3は完形で、2は約半分の完存率である。すべて指による整形である。4は小型の有孔円状のものであり、中央部が厚手で、指なで整形がみられる。5・6は砥石で、5は均一な砂岩で四面ともよく使用され、よく研磨されている。6も砥石であり、幅の広い両面がよく使用されているが、5ほどではなく、両側面には砥石製作時の切断面の痕跡がみられる。7は珪藻土岩質で色調は灰白色である。裏面・側面には切断時の痕跡が僅かに残る。表面はよく研磨されており、両脇が0.2cmほどの枠をまわし、枠の内側が幾分低くなっている。そのなかを基盤目状に筋を入れて、おろし金状を呈する。8は石鎌で基部は丸味をおびており、材質は黒曜石である。9・10は礫器状のもので、9は表と裏に打撃痕と思われる痕跡がみられる。10は頂頭部に打撃痕と思われる痕跡がみられる。11は滑石製の双孔円板で、1.5cmほど間隔をおいて1.5mmほどの孔がみられる。12は軽石であるが用途は不明である。



第46図 土製品・石製品等実測図

第3節 まとめ

成沢遺跡において確認された遺構は、前述のように住居跡13軒・土壙13基・円形周溝墓1基・溝1条である。調査対象面積に比較すると遺構数は比較的少ないとることができる。遺物はほとんどが土師器であり、土器型式などから判断すると当遺跡は古墳時代前期に編年される单一集落の遺跡と考えられる。

調査の概要と各遺構・遺物等については前述してあるので、ここでは調査によって明らかになった事実と問題点について遺構ごとにまとめたい。

(1) 住居跡について

住居跡群は、南から北側に緩やかに傾斜している台地の中腹から裾部にかけて、東側の小支谷と北側の比較的広い谷津（支谷）を望むような形で散在している。このような遺跡の立地から、北および東側の沖積地と南側一帯の台地上の平坦地を、主な生活基盤として存在した集落跡と考えられる。

住居跡群の構成を平面的にみると、東側の谷津にそって、第7・8・9・10・11号住居跡の5軒、その西側に北側の谷津に面して、第1・2・3・4・5・6号住居跡の6軒、かなり住居跡群から離れて西縁辺部の斜面に第12号住居跡が存在し、この第12号住居跡は円形周溝墓の南西に位置している。また第13号住居跡状遺構が南の最も高い位置に所在しているが、第13号住居跡状遺構は前述した如く、形状・ピットの配置・炉も確認されないところから、他の住居跡と同じように考えることは無理と思われる。したがって平面的にみると大きく二群に分けることができ、第12号住居跡と第13号住居跡状遺構が特殊な位置にある。

主軸方向からみると、第1・2・4・5・7・8・9・10・13号住居跡状遺構が主軸を北東にとり、第3・6号住居跡は主軸を北西にとり、そのほか第12号住居跡は北に主軸をもっている。各住居跡を分布の関係でみると、東側の小支谷に面している住居跡は、すべて主軸を北東向きに

第4表 龍ヶ崎市内の五頭期住居跡の規模

遺跡名	住居跡数	最大規模 m ²	床面積 m ²	最小規模 m ²	床面積 m ²	平均 m ²
赤松	11軒	7.3×6.2	44.26	3.1×2.93	9.083	21.13
沖野	13#	7.4×6.75	49.95	3.1×2.7	8.37	19.52
大羽谷津	5#	6.4×5.3	33.92	3.5×2.7	9.45	19.53
成沢	13#	6.5×6.4	41.6	3.9×3.5	13.65	24.36

建築されている。北側の谷津に面している住居跡の2基が主軸を北西向きに構築されている。

第3・6・12号住居跡は他と違う向きをしている。

住居跡の規模からみると、最大のものは第2号住居跡で長径6.5m・短径6.4mの隅丸方形を呈し、最小のものは第11号住居跡の長径3.9m・短

径3.5mである。集落内にはそれほど規模差が認められず均一的集落であったことが第4表からうかがえる。

ところで、龍ヶ崎市内における古墳時代前期の住居跡の規模は、最も大きい住居跡は長軸7.4m・短軸6.76mで、沖餅遺跡にみられ、最小の住居跡は長軸3.1m・短軸2.7mでやはり沖餅遺跡にみられ平均床面積約21.44m²である。この結果から考えると成沢遺跡の住居跡は、それほど大規模のものはないが、他の五領期の住居跡に比べやや大型であったことが第4表よりわかる。

住居跡の構造をみると、柱穴は第3・5・6号住居跡と第13号住居跡状遺構以外はすべて4個である。炉跡は、第10号住居跡（溝によって大部分を切られる。）・第13号住居跡状遺構を除いて11基に確認されたが、そのうち中央部の北壁寄りに位置するもの7基、西壁よりに位置するもの第5・6・9号住居跡、南側に位置するもの第8号住居跡、第3号住居跡は北側と南側に2個を有している。壁柱穴は、第1・2・5・6・7・9・10号住居跡と第13号住居跡状遺構にみられ、縁溝は第3号住居跡に確認された。貯蔵穴の確認される位置は、南東・南西・南・東側で一定した場所は認められないが、南東隅が最も多かった。柱穴・炉跡・壁下の形状等から検討すると、第3・5・6号住居跡は他の住居跡と多少形状が異なる。

住居跡の深さは、各住居跡ともまちまちであるが、これは住居跡の多くが傾斜面に建てられたためと考えられ、比較的平坦な位置に構築された第10号住居跡の深さは45~58cm、第2号住居跡も32~50cmほどで、他の住居跡も類似する数値を有していたものと考えられる。

本遺跡において注目される点は、火災をうけた住居跡であり、13軒の住居跡中9軒が火災に遭遇したことが判明している。これらは何を意味するものか連続できないが、単一時期の集落で後続の遺構が検出されない理由の一つとも考えられる。

出土遺物は、第8・10号住居跡を除いた全住居跡より土師器が出土し、前述のように古墳時代前期の五領期に編年されるものである。遺物の出土量は第9号住居跡が最も多く、次いで第1・2・5・6号住居跡からも多数土師器の出土がみられる。主なものとしては、壺形土器・壺形土器・甕形土器などがあり、そのほか高环形土器・环形土器・器台形土器・手捏ね土器・台付甕形土器・甕形土器・甕形土器等があげられる。特殊な出土遺物としては、第12号住居跡から翼状形を呈する土製品が出土している。この翼状形土製品（仮称）の出土例はめずらしく、他の遺跡においても類例がみられない。この土製品は、生活用具なのか、あるいは信仰的な祭祀用具なのか不明であるが、現在のところ実用的なものでないと考えられる。今後、この類例が増加することを待ちたい。

出土遺物全体から注目されることは、第1に壺形土器・手捏ね土器・器台形土器の出土が多いことであり、第2に赤彩された壺形土器・壺形土器が多数出土していることである。このような赤彩は器台形土器や高环形土器・环形土器にもみられる。これらの土器は遺跡の性格を示唆する

ものであろうと考えられる。

(2) 円形周溝墓について

本跡は遺跡の傾斜面の中腹部に位置し、すでに地表面は平坦に削平されているが、築造された当時は、70~80cmの盛土を有していたと思われる。

上幅2.5~3.8mで「U」字状の周溝がほぼ正円形状に全周し、周溝に接続して北西部に水抜き状の遺構が構築されている。さらに北側には、出入口部のような陸橋状の施設が設置されている。

出土遺物は、東側周溝底面から壺形土器（第43図）が出土し、南東側周溝底面より壺形土器の胴部上半部（第43図）が出土している。さらに南西側周溝内より壺形土器（第43図）が底面または僅かに浮いた状態で出土し、いずれも故意に破砕された状況を示し、それぞれ一括して出土した。とくに南東側周溝から出土した壺形土器は、上半分が破砕されていたにもかかわらずほとんど出土している。しかし、下半分の破片は検出されていない。これらの土器は住居跡出土の古墳時代前期の土器とほぼ同時期のものであるといえる。

龍ヶ崎市内において、古墳時代前期の集落は、松葉遺跡・沖餅遺跡・龍ヶ崎第一高等学校内遺跡など調査されているが、同時期の円形周溝墓の調査例はない。県内においても円形周溝墓の調査は、須和間遺跡（鬼高Ⅰ期）・下志窓遺跡（和泉期）などにその例を見る程度である。円形周溝墓の検討については、今後同様な遺構の調査例が増加することを期待したい。

(3) 溝について

溝は遺跡の東側傾斜面部に弧を描くように「U」状に掘られている。時期を決定する資料の出土はみられないが、D3b4区で第10号住居跡を切ってつくられているので、住居跡より新しい時期のものであることは間違いないものと思われる。また溝内から、5枚の宋銭（第45図）が溝底面より6~28cmの覆土中から比較的まとまって出土した。この宋銭は990~1031年頃鋳造されたものであるが、溝を中世期のものと時期決定することは早計と思われる。

溝は、調査区内においては南側部が高く、北側部が低く、その高低差は1.3mほどある。しかし南側部、北側部とも調査区外の一段低い斜面へ続くので、南側部を若干追求してみたが、黒色土の深い部分に入ってしまい、どこへ続くのか判明しなかった。

溝の機能として、古道・区画溝なども考えられるが、これといって決定的な手がかりはないので、今後の検討課題としたい。

(4) 住居跡群と周溝墓との関連について

成沢遺跡の住居跡群と周溝墓について考えてみたい。成沢遺跡の住居跡と円形周溝墓の分布状況をみると、東側の小支谷と北側の比較的広い支谷に面して、傾斜面の中腹から裾部にかけて集落を形成している。西側斜面の中腹に円形周溝墓が所在し、その周囲は、北側・東側とともに住居跡は存在せず広々としている。第12号住居跡1軒が他の住居跡群から離れて、円形周溝墓より8m南西に位置する。円形周溝墓の南側、陸橋部の存在する側を正面とすると、裏側に第13号住居跡状遺構が位置している。

住居跡を平面形状、主軸方向からみると、第12号住居跡は長軸5.7m・短軸5.4mの隅丸方形の平面形を呈する。規模は約30.78m²で、13軒のなかで第3位である。炉・ピット・貯蔵穴など、他の住居跡と別に変わった点はみられない。第13号住居跡状遺構は、長軸6.7m・短軸4.5mの方形の平面形を呈し、長軸・短軸の差が2.2mもあるのは本遺跡においては特殊な平面形状である。

なお、ピットの並び方も住居跡の中央部に並び壁も二段に掘り込まれており、炉らしき遺構は検出できなかった。第13号住居跡状遺構は構造的に他の住居跡と違っており、いわゆる住居跡とは考えられない。主軸方向でみると、第12号住居跡が主軸方向真北に建てられており、第13号住居跡状遺構は、主軸方向N-20°Eで、本遺跡では第12号に次いで主軸方向がほぼ真北にちかく建てられている。

以上のことから考えて、第13号住居跡状遺構と第12号住居跡は、円形周溝墓との関係で他の住居跡と異っていたのではなかろうかと思われる。

次に出土遺物の面から考えてみたい。昭和52年以来当教育財団では、龍ヶ崎ニュータウン内において、古墳時代前期の遺跡を6遺跡ほど調査しているが、ほぼ単一の遺跡として調査された4遺跡の出土遺物を比較してみると第5表のとおりである。

第5表 龍ヶ崎市内における五領期遺跡出土遺物

遺跡名	住居跡数	甕	壺	高杯	器台	壺	环	壇	鉢	手摺ね	台付鏡	赤 彩	土 器	その他
松 業	11	23	7	4	7	5	1	2		4	4	土製品1	壺1 増1	
沖 然	13	7	7	8	2	1		6	3		4			
大羽谷津	5	16	3	5	2	2					壺1			
成 沢	12 (13)	11	17	6	3	16	6	1		8	4	壺8 壺4 鉢2 器台2 高杯1 土1	土製品1	

*成沢遺跡…住居跡13(内1基 鈴木久・岡田猛氏調査)

*土器の数は、赤彩した土器も含む総計である。

各遺跡の出土遺物を集計して注目すべきことは、成沢遺跡において壺形土器・手捏ね土器の出土が他の遺跡に比べて多いことと、赤彩された土器の多いことである。

これは一体何を意味するのであろうか。先学者がいわれているように、壺形土器・器台形土器・手捏ね土器・石製模造品・赤彩された土器が、古代の祭祀と結びつきが強いならば、成沢遺跡は、円形周溝墓を中心に祭祀的色彩を強くもった集落と考えることはできないだろうか。

第6表 成沢遺跡住居跡別出土遺物

遺物 住居跡	土 器								赤彩土器					
	壺	壺	高环	器台	壺	壺	台形	手捏ね	壺	壺	壺	高环	塊	
第1号	2	1						7						1
2号		4				1			5					
3号	1	1			2									
4号														
5号	1	2		1	1		1	2						
6号			1		2	3			1	1	2			
7号			1											
8号														
9号	5	5	3		4	2	1		1			1		
10号														
11号									1					
12号	2					1			2	1				

次に方形周溝墓と住居跡との関係をみてみると、住居跡別の出土遺物は左のとおりである。この結果から注目すべきことは、第5・6号住居跡から壺形土器と器台形土器がセットで出土していることである。第5・6号住居跡は、前述した如く、住居跡の内部なども他の住居跡と違っている。また、第12号住居跡は、斜面のため土が流され、南側部に22cmほどの壁を残して、北壁部はほとんど壁が認められない状態であったことや、異形状土製品を出土していることなどであろう。

以上のことから、大胆な推量が許されるならば次のようなことが言えるのではないだろうか。

・成沢遺跡は、古墳時代前期の五領期中頃に展開された単一的集落跡で、一世代あるいは二世代以上を越えない期間に営まれた集落であったこと。

・住居跡と円形周溝墓は、ほぼ同時期に展開されたと考えられること。

・住居跡群と円形周溝墓が結びつきをもって、祭祀的色彩をもっていること。

・第13号住居跡状遺溝が、円形周溝墓と何らか特別な関係があったのではないかということ。

また住居跡では第5・6・12号住居跡は注目すべき存在であること。

成沢遺跡においては、器台形土器と壺形土器・手捏ね土器と石製模造品のセット関係あるいは、それらを含めて住居跡と周溝墓との関係を明確な形でとらえることはできなかった。いずれにしても、県内においては五領期の円形周溝墓の調査例、その報告の例は少なく、ましてや住居跡と

セット関係の調査例は希であるので、以上のこととは大胆な想定の域を出ないので、今後、調査報告の増加により解明されていくことを期待する。

(5) 五領期の火災住居について

龍ヶ崎市内の五領期の集落の調査報告によると、龍ヶ崎第一高等学校内遺跡においては、1軒調査1軒火災、松葉遺跡においては11軒調査7軒火災、沖餅遺跡においては13軒調査8軒火災、大羽谷津遺跡においては5軒調査5軒火災、成沢遺跡は12軒調査9軒火災にあっている。

松葉遺跡の集落の廃絶の理由に、火災の遭遇等による他地域への移住が考えられると瓦吹堅氏が述べているように、龍ヶ崎市内の五領期の集落の移動には、火災の遭遇は大きな要因と考えられる。

龍ヶ崎市内の五領期の上記の集落は、火災に遭遇し、ほとんど後続の集落は続いていない。上記の集落が火災にあっているのは単なる偶然か、それとも人為的な要因によるものなのか、今後同時期の調査の進行により解明されることを期待する。

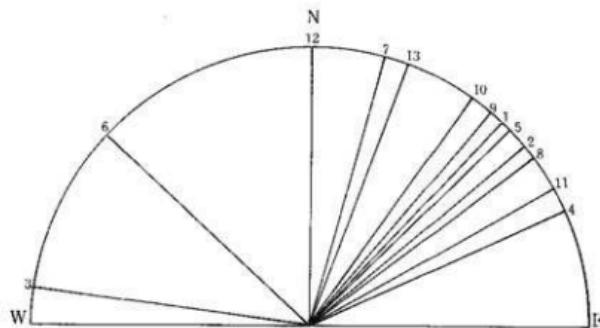
参考文献

- 茨城県史編さん委員会『茨城県史料考古資料編 古墳時代』 昭和49年
山岸 良二『方形周溝墓』 ニュー・サイエンス社 昭和56年
井 博行・市毛 煉・青木 健二・大門 直樹『茨城県立コロニーあすなろ地内古墳群発掘調査報告』
茨城県生活福祉部 昭和55年
杉原 荘介・大塚 初重編『土師式土器集成 本編2』 東京堂出版 昭和47年
市毛 煉『朱の考古学』 雄山閣 昭和50年
群馬県教育委員会『下郷 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』
昭和55年
茨城県教育財團『松葉遺跡 龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書1』 昭和53年
茨城県教育財團『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3 沖餅遺跡』 昭和54年
茨城県教育財團『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5』 昭和56年
茨城県教育財團『常盤自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書II』 昭和56年
小室 駿『常陸の古墳時代』 太陽商社 昭和54年
高橋 一夫『和泉・鬼高湖の諸問題』『原始古代研究2』

第7表 住居跡一覧表

番号	主軸方向	平面形	規模(m)	壁高(m)	壁柱穴	下	貯蔵穴	炉	ピット	火災	備考
1	N-43° E	隅丸方形	5.3×5.27	32~50	壁柱穴	1	1	4	○		
2	N-50° E	隅丸方形	6.5×6.4	30~55	壁柱穴	2	1	4	○		
3	N-82° W	隅丸方形	5.6×5.4	15~30	壁側溝	1	2	9	○		
4	N-65° E	隅丸長方形	4.9×4.5	12~17	不明			1	4	不明	以前に調査
5	N-45° E	隅丸方形	4.7×4.5	15~25	壁柱穴	1	1	7	○		
6	N-47° W	隅丸長方形	5.2×4.6	5~15	壁柱穴	1	1	6	○		
7	N-15° E	隅丸長方形	5.6×5.2	28~50	壁柱穴	1	1	4	○		
8	N-53° E	隅丸方形	4.9×4.8	7~23		1	1	4	○		
9	N-40° E	隅丸長方形	5.0×4.1	45~58	壁柱穴	1	1	4	○		
10	N-35° E	隅丸方形	4.8×4.4	15~35	壁柱穴	不明	不明	4	火災か 溝と複合		
11	N-60° E	隅丸長方形	3.9×3.5	0~23		2	1	4			
12	真北	隅丸長方形	5.7×5.4	5~22		1	1	4	○		
13	N-20° E	隅丸長方形	6.7×4.5	23~31	壁柱穴	1		7			

※ 火災の項は、火災に遭遇したもの〇印で記す。



第46図 住居跡主軸方向表

第4章 屋代A遺跡

第1節 調査経過

屋代A遺跡は調査対象面積が12,578m²で、発掘調査は昭和54年12月5日から開始した。

昭和54年11月 発掘調査に先立ち、11月中旬より発掘調査対象内の伐開作業、器材等の移転を実施した。地区設定は、塚下遺跡より南へ1,000m、東へ520m移動した宅地開発公団基準点No.435を任意点とした。なお調査区の分割は成沢遺跡と同じ方法である。

12月 東側の端のE12区より遺構確認調査を開始する。続いてE10・11区、D10~12区、F10~12区の各区の調査を実施する。各小調査区より、住居跡・溝・土壌などが検出され、下旬に遺構確認調査を終了する。

昭和55年1月 上旬より現地作業を再開し、土量の測量を始める。F12・E12・D12の各区を拡張し、並行して第1号住居跡から第5号住居跡までの精査を開始する。

2月 先月に引き続きF11・E11・D11の各区を拡張し、並行して住居跡の精査を行い、第1~4号は終了し、第6~9号、溝1号の精査を始め、中旬より住居跡第10~14号、土壌第1~5号の精査を開始する。下旬に住居跡第6号を終了する。

3月 重複している住居跡第2・3・5・7~9・15・16号の精査、土壌第6~16号、溝第2・3号の調査を完了して、現地の調査を終了した翌日から室内で図面整理等を行う。

4月 現地作業再開のための諸準備を始め、中旬より現地作業を再開し、F11~12、E11~12、D10~11の各区を拡張し、並行して住居跡第17~19号までの精査を行い、住居跡第18と20号が重複していることが確認される。

5月 農繁期のため、作業員が少なく、調査のペースが落ちる。第17~20号の精査が終了し、重複している第27・30号の精査もほぼ終了する。続いて住居跡第22~27号の精査を開始する。

6月 E7・8、D7・8、の各区の遺構確認調査をする。同時に平行で住居跡第29~39号の精査を開始する。下旬に、第29~36・38号までの精査が終了する。土壌にA・B・Cのトレンチを設定し、トレンチ発掘にベルトコンベアを使用し、作業能率をあげる。

7月 住居跡第39~41・43~46号の精査を終了させ、東区全域の精査が完了する。完掘全景を撮影する。西区のE7・E8、D8区の遺構確認調査を実施し、住居跡第47~49号の精査を開始する。土壌第37~62号の精査をする。

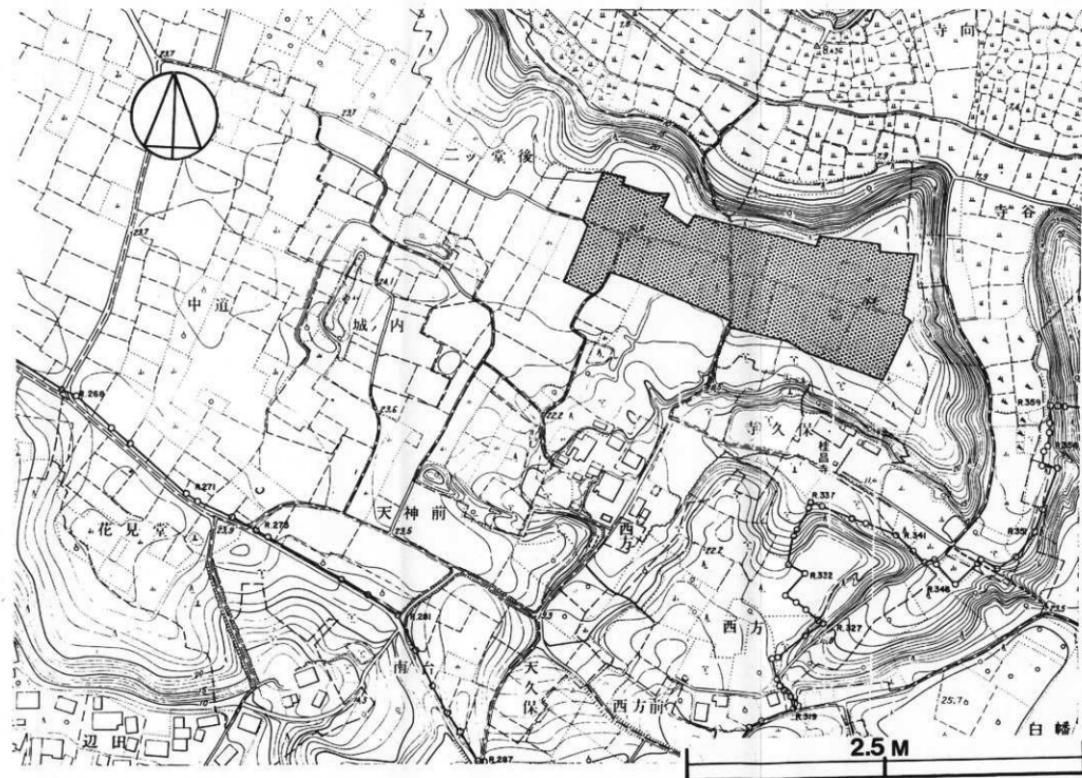
8月 例年と比べるとやや涼しい夏である。上旬に県立竜ヶ崎第二高等学校の鈴木久教諭以下地歴部生徒10名が、屋代A遺跡において、貴重な体験学習をする。住居跡第47・48号の精査が

終了する。土壌第63～85号、土畳にD～Lのトレンチを入れる。井戸状造構から粘土を検出する。

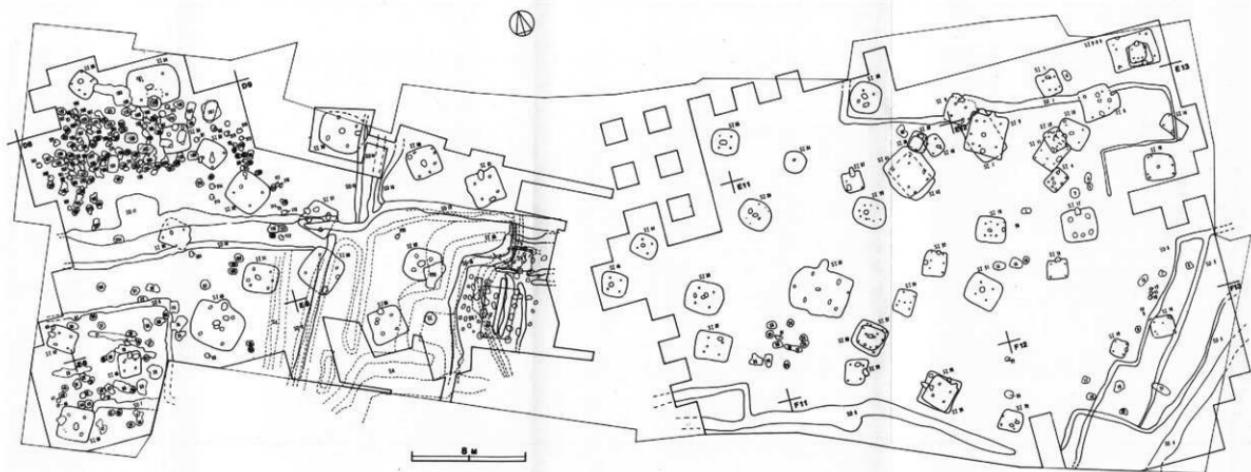
9月 住居跡第52～55号の精査をする。土壌 第86～102号の精査をし、地下式壙を初めてC 8区に検出する。下旬より住居跡第56・57号の精査をする。

10月 朝夕の影が長くなる。上旬に東区を宅地開発公団に引き渡す。土壌第103～224号の精査をし、下旬に住居跡第59号の精査をする。

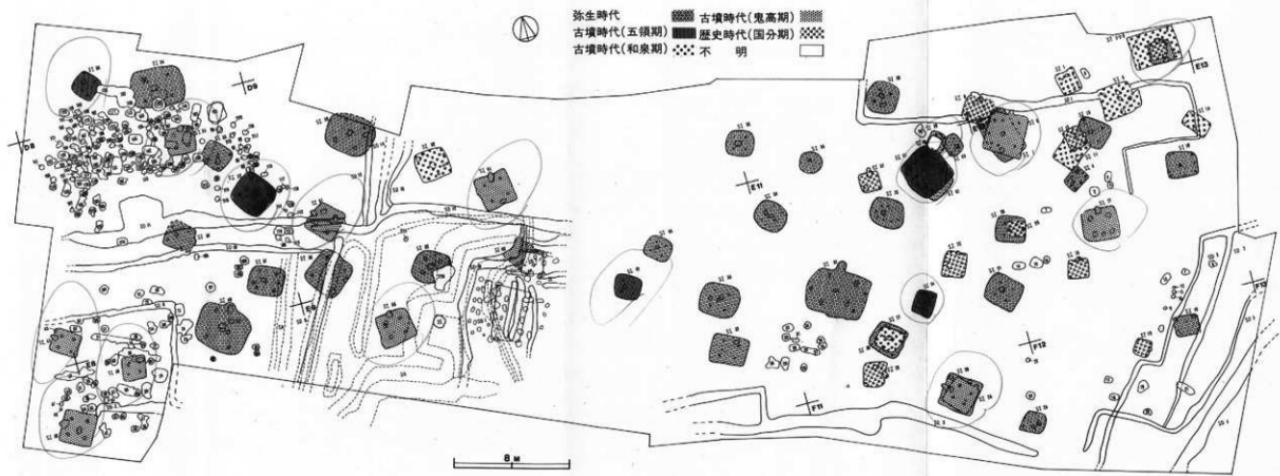
11月 日没が早くなる。住居跡第60～65号、掘立柱建築造構第1・2号、土壌第225・226号、溝第16号の精査を終了する。11月28日には、器材等を整埋し、西区全域の精査を終了し、完掘全景を撮影する。ここに屋代A遺跡の全調査が完了する。



第1図 現況図



第2図 造構配置図



第3図 時期別構成図

第2節 遺構と遺物

1. 層序

星代A遺跡は平坦な台地上に位置している。ローム層までは比較的単調な層序をしている。最近まで畠地として利用されていたため、表土層いわゆる耕作土の堆積が相対的に厚い。基本的層序は耕作土・暗褐色土・褐色土・ロームの4層から成り立っている。遺構は褐色土面で確認した。調査の中で検出された住居跡・土壤の覆土は下記のように分類して、図中に数字とアルファベットの小文字で表した。

色 調		含 有 物
1 暗褐色土	Hue 10 Y R 1/4 %	a ローム粒子を少量含む
1' "	Hue 7.5 Y R 1/4 %	a' ローム粒子を中量含む
2 暗褐色土	Hue 10 Y R 3/4 %	a'' ローム粒子を多量含む
2' "	Hue 7.5 Y R 3/4 %	b ローム小ブロックを少量含む
3 黒褐色土	Hue 10 Y R 3/4 %	b' ローム小ブロックを中量含む
3' "	Hue 7.5 Y R 3/4 %	b'' ローム小ブロックを多量含む
4 黒色土	Hue 10 Y R 2/4 1/2 %	c ローム中ブロックを少量含む
4' "	Hue 7.5 Y R 2/4 1/2 %	c' ローム中ブロックを中量含む
5 極暗褐色土	Hue 7.5 Y R 3/4 %	c'' ローム中ブロックを多量含む
6 黄褐色土	Hue 10 Y R %	d ローム大ブロックを少量含む
7 にぶい褐色土	Hue 7.5 Y R %	d' ローム大ブロックを中量含む
8 赤褐色土	Hue 5 Y R %	d'' ローム大ブロックを多量含む
	Hue 2.5 Y R %	e ローム粒子・焼土粒子を微量含む
9 暗赤褐色土	Hue 5 Y R % %	e' ローム粒子・焼土粒子を少量含む
10 赤色土	Hue 10 R % %	e'' ローム粒子・焼土粒子を中量含む
11 暗赤褐色土	Hue 10 R % %	f 赤褐色粒子を少量含む
12 暗暗赤褐色土	Hue 10 R % %	f' 赤褐色粒子を中量含む
13 極暗赤褐色土	Hue 5 Y R % %	f'' 赤褐色粒子を多量含む
14 明赤褐色土	Hue 5 Y R % %	g ローム
	Hue 2.5 Y R % %	h 灰
15 にぶい赤褐色土	Hue 5 Y R % %	i 粘土
16 黄褐色土	Hue 2.5 Y % %	j 砂

17	にぶい黄色土	Hue 2.5Y%	k	灰白色粘土
18	明褐色土	Hue 7.5Y R%	l	赤褐色ブロック
19	明黄褐色土	Hue 10 YR%	m	黒色土を少量含む

n 搾乱
o 暗褐色土を含む
p 砂質粘土を含む

カマドについて

窯はカタカナでカマドと表記し、平面実測図の実線は、カマド確認面で焼土や粘土の広がっている範囲を示している。一点鎖線は、カマドの覆土を除去して明らかに袖部の原形を残していると認められる場合を表示し、二点鎖線は、焼土の範囲が確認されて掘り込まれている場合を表し、丸・実線は灰の範囲を示した。部分名称は掘り方の状態に主体をおき、「焚口部」「燃焼部」「煙道部」と区別したが、これらの名称は便宜的なものであって各部を明確に区分し得るものではない。

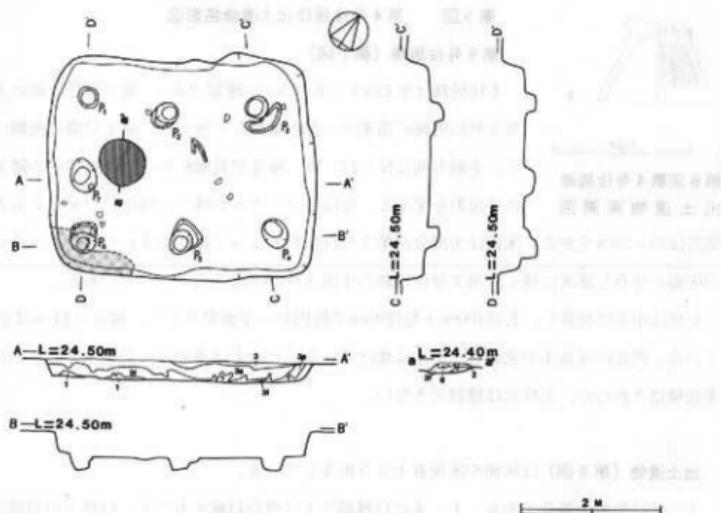
2. 住居跡

弥生時代

第4号住居跡（第4図）

本住居跡はE12d₄・E12d₅を中心に確認され、第11号住居跡に北西壁を掘り込まれている。主軸方向はN-54°Eで、長軸3.85m・短軸3.11mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがる。壁高は28~32cmを測り、北壁の一部が第11号住居跡と重複している。床面はロームではほぼ平坦である。炉付近はやや硬いが壁近辺は柔らかい。

炉跡は南西壁寄りに位置し、長径70cm・短径66cmのはば円形の平面形を呈し皿状に6cmほど掘り込まれている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはP₁~P₅が確認され、R~R'が主柱穴と考えられる。深さは16~22cmと比較的浅く、長径は24~48cmほどで、R・R'は壁に寄っている。覆土は自然堆積の状態を呈し、黒褐色土粒子・ローム粒子や炭化粒子を含む黒褐色土・褐色土の堆積がみられる。本住居跡は焼土や炭化物などの出土状況から火災にあったものと考えられる。



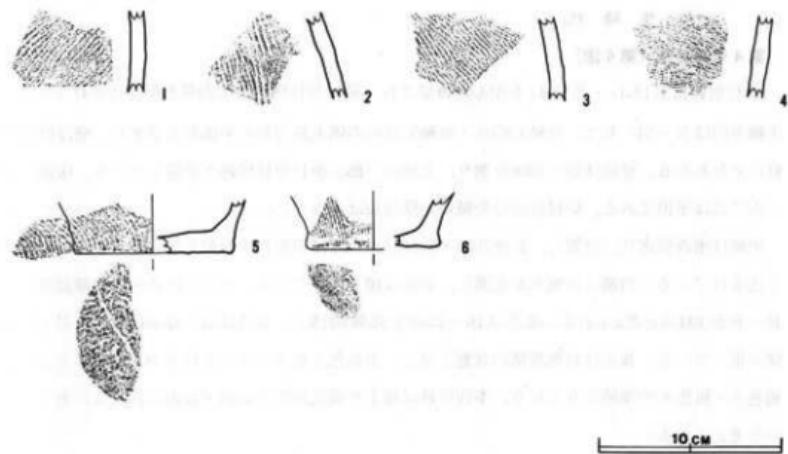
第4図 第4号住居跡実測図

出土遺物（第5図）は床面より少量出土している。

1~6は弥生土器片である。1~4は斐形土器の胸部で撚糸文が施文されている。5・6は底部に木葉痕がみられる。

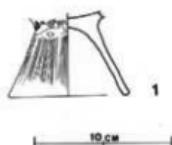
（第6図）1は覆土中より出土した土師器で、器台形土器の脚部片である。脚部径は8.5cmで、

「ハ」の字に開いている。外側は刷毛目整形が施され、裾部には横なで整形がみられる。



第5図 第4号住居跡出土遺物拓影図

第9号住居跡（第7図）



第6図 第4号住居跡
出土遺物実測図

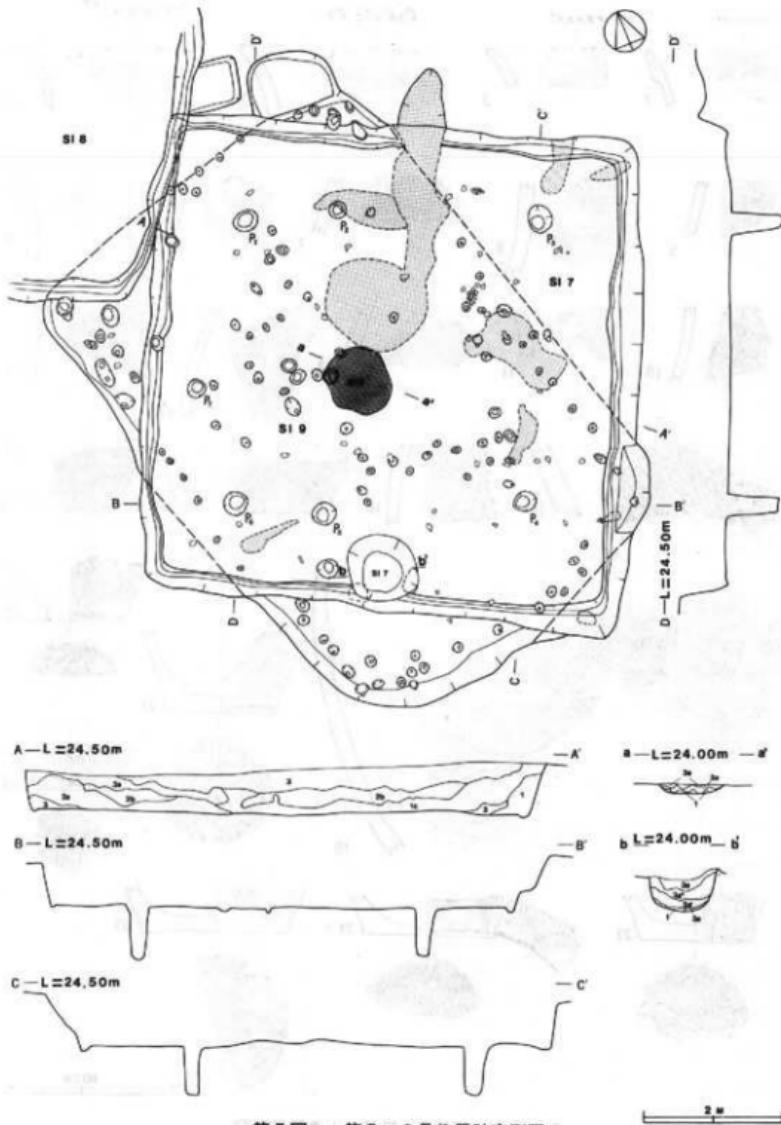
本住居跡は E12a2・E12b2 に確認され、第7号住居跡の大部分と第8号住居跡の南東の一部と重複して所在し、第1号溝の南側に位置する。主軸方向は N-17°-W、推定で長軸 8.3m・短軸 5.7m の隅丸長方形の平面形を呈する。壁は各コーナーが残り、傾斜しながら立ちあがる。壁高は 35~50cm を測る。床面は大部分が第7号住居跡によって掘り込まれているが、各コーナーの床面が残存し非常に硬く、第7号住居跡の床面より 20cmほど高いレベルである。

炉跡は中央に位置し、長径 100cm・短径 95cm の楕円形の平面形を呈し、皿状に 11cm ほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は焼けている。ピットは直径 10~15cm ほどのものが壁間に多数検出されたが、主柱穴は確認できない。

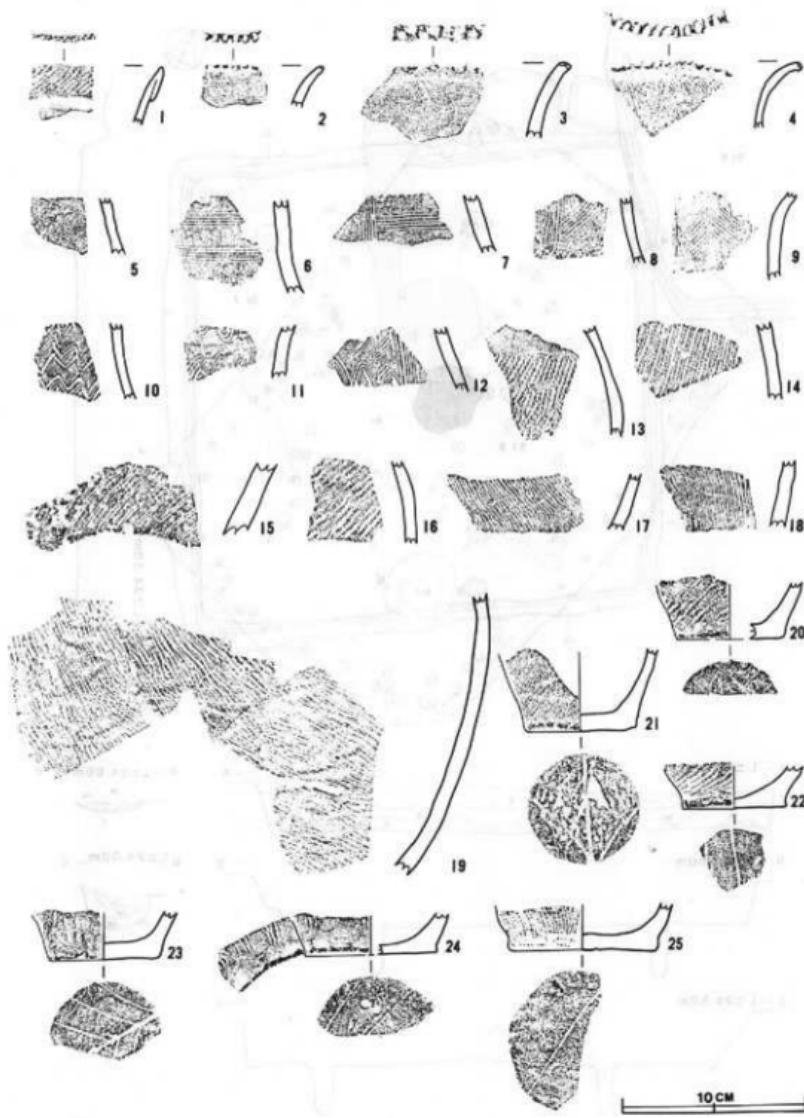
出土遺物（第8図）

は床面や床面直上より出土している。

1~25 は弦生土器片である。1~4 は口縁部で 1 は複合口縁を有する。口唇・口辺部に繩文を施す。2~4 は口唇部に繩文原体を押圧し、4 は口辺部に櫛描の波状文を配する。3 は口唇部に刻み目を施す。5~12 は頭部で、5 は範状工具により格子文を配する。6~12 は櫛描文である。6 は横線、7~9 は縦区画後区画内に、7 は横線、8~9 は山形文を配する。10~12 は波状文を配する。13~19 は胴部で 13 は繩文を施し、14~16 は付加条繩文が施されている。17~19 は撚糸文が施文される。20~25 は底部でいずれも木葉痕がみられ、21~23 は底径 6cm ほどである。



第7図 第7・9号住居跡実測図



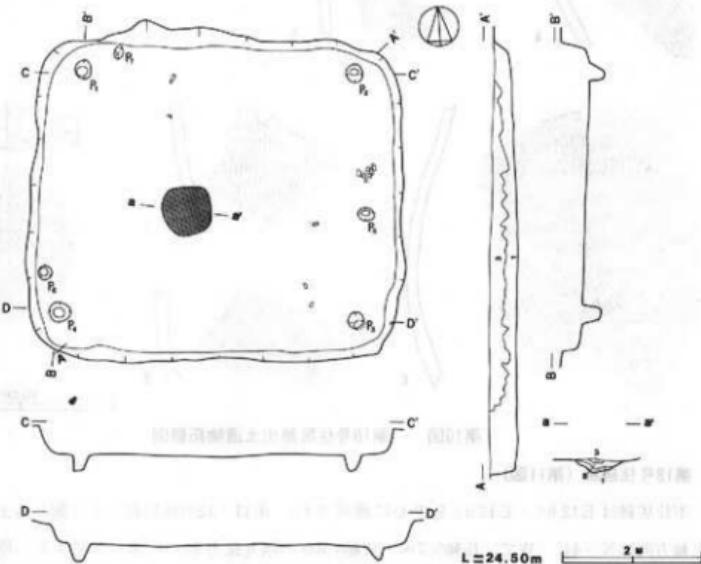
第8図 第9号住居跡出土遺物拓影図

その他に土製の円板（第205図5）が出土している。

第10号住居跡（第9図）

本住居跡はE12e9を中心に確認され、調査区東端に位置し、第14号住居跡の4m南西側に所在する。主軸方向はN-78.5°-Wで、長軸4.75m・短軸5.34mのはば隅丸長方形の平面形を呈する。壁は傾斜をしながら立ちあがるが、北壁の西寄りがゆるやかに傾斜している。壁高は30~40cmを測り南壁は低い。床面はロームで平坦であり、西側にわずかに傾斜を示す。炉跡周辺は非常に硬い。

炉跡はほぼ中央に位置し、長径68cm・短径65cmの円形の平面形を呈し、皿状に18cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットは7個検出されたが、主柱穴と考えられるのはP₁~P₇で、壁側に位置する。長径は25~30cmで、深さは23~28cmである。覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土と褐色土が主に堆積している。



第9図 第10号住居跡実測図

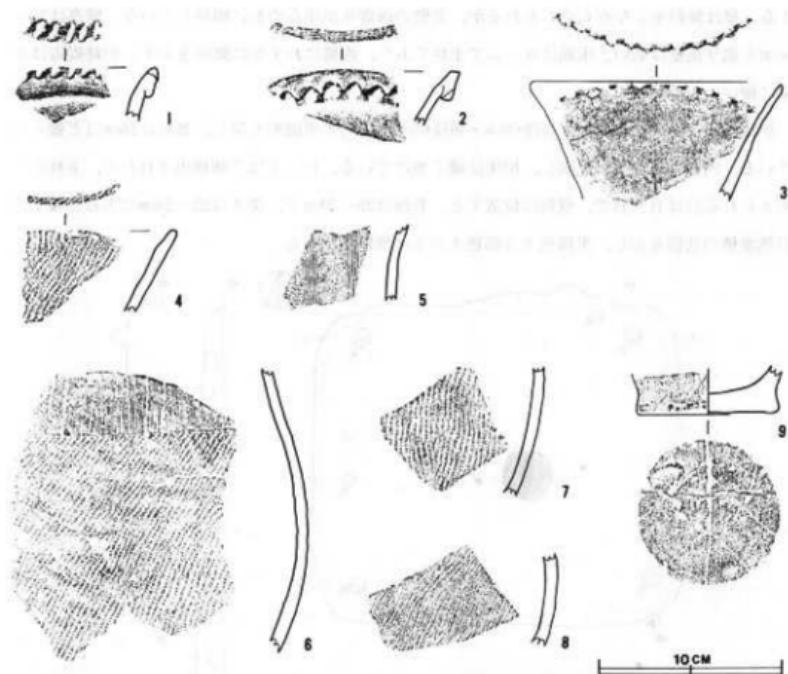
出土遺物（第10図）は床面や床面よりやや浮いた状態で出土している。

1~9は弥生土器片である。1~4は口縁部で、1~2は複合口縁である。1は口唇部に繩文原体を押圧し、2は口唇部に繩文を施し、口辺下端に刻み目を有する。3は口唇部に刻み目を施す。4は口唇部に繩文を施し、口縁部には付加条繩文を施す。5~6は頸部で、5は横描の波状

文と縦区画を配する。6は刷毛目整形を施した後、縄文原体の側面压痕文が施されている。煤が付着している。7・8は胸部で、7は縄文、8は撚糸文を施す。9は底部で木葉痕がみられ、一部に煤が付着し、明赤褐色を呈する。底径は8cmを測る。

(同上) 駒形窯跡群

その他の遺物としては紡錘車(第205図6)・磨石(第210図2)・石核(第216図54)が出土している。



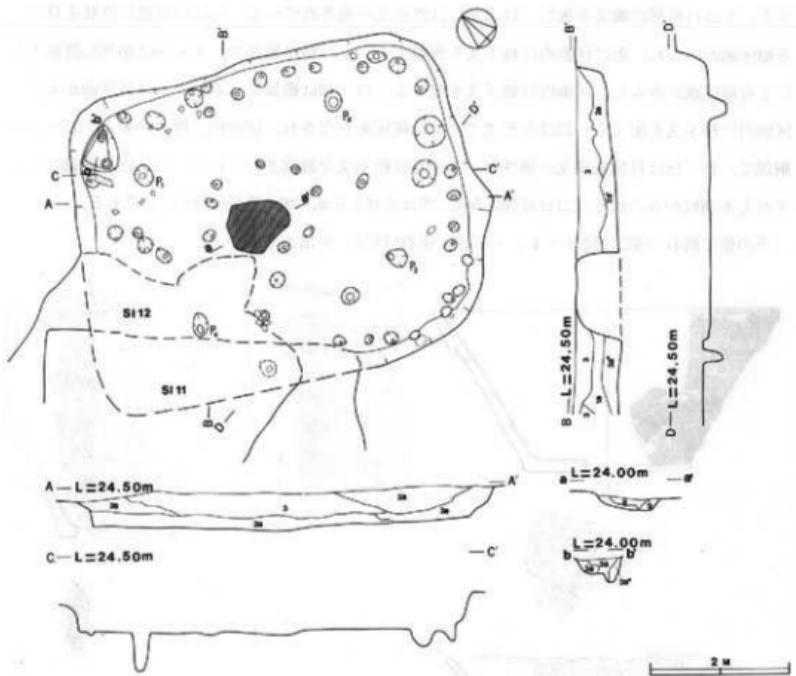
第10図 第10号住居跡出土遺物拓影図

第13号住居跡(第11図)

本住居跡はE12b5・E12d6を中心に確認され、第11・12号住居跡により掘り込まれている。主軸方向はN-44°-Wで、長軸5.7m・短軸4.8mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はややゆるやかに立ちあがるが、西コーナー付近の壁は第12号住居跡に掘り込まれている。床面はロームでありほぼ平坦で硬く、炉跡近辺は踏み固められ特に硬い。南西コーナー部は、第11・12号住居跡によって掘り込まれている。

炉跡はほぼ中央に位置し、長径90cm・短径75cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に15cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットは床面に多数検出されたが只

～Rが主柱穴と考えられ、長径30～35cm・深さ42～60cmを測る。壁近くにも小ピットがある。貯藏穴は北コーナーに位置し、長径65cm・短径40cmの卵形の平面形を呈し、深さは20～35cmを測る。壁は傾斜を示しながら立ちあがり、北東側にピットがある。覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土が主に堆積している。



第11図 第13号住居跡実測図

出土遺物（第12図）は床面や床面直上より出土している。

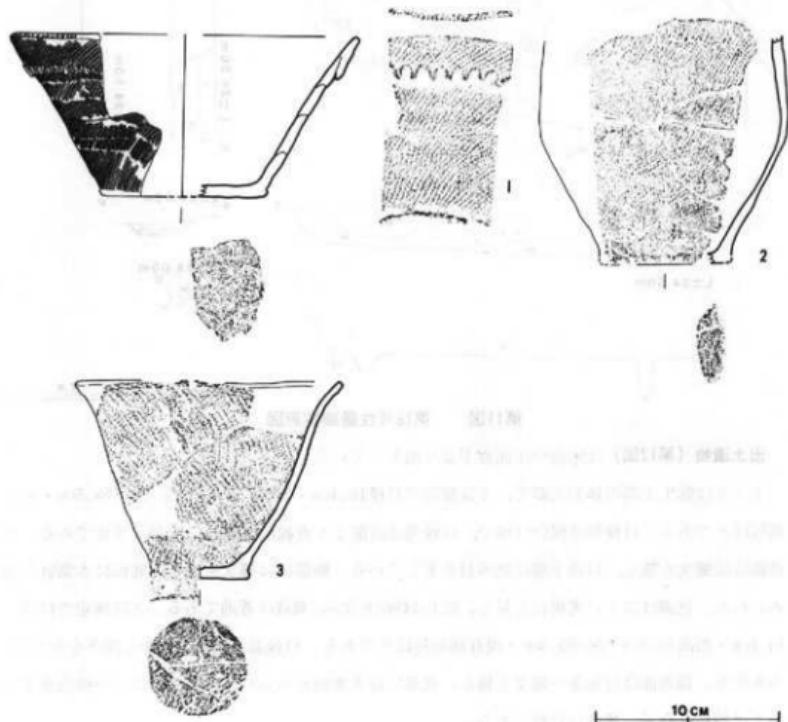
1・3は弥生土器の鉢形土器で、1は推定で口径18.4cm・器高8.8cm・推定で底径8.5cm・現存部約3/4ほどである。口縁部は複合口縁で、口縁部は底部より直線的に開き、底部は平底である。口唇部には繩文を施し、口辺下端に刻み目を有している。胴部には繩文を施し、底部に木葉痕が認められる。色調はにふい黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。3は推定で口径14.1cm・器高10.7cm・底径5.3cm・現存部約3/4ほどである。口縁部は底部より少し開きながら立ちあがり、器外面は付加条の繩文を施し、底部には木葉痕がみられる。色調はにふい橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。

2は弥生土器の壺形土器で、現高12cmの胴部および底部である。胴部には付加条繩文を施し、

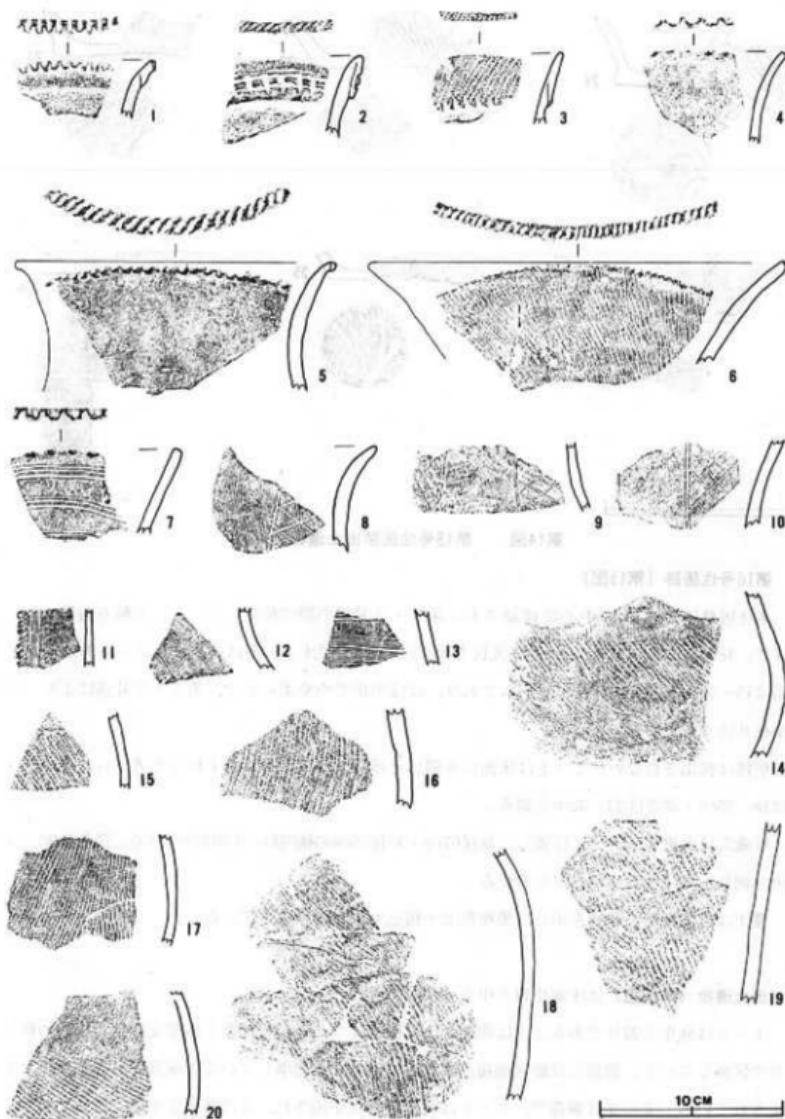
底部には木葉痕が認められる。

(第13・14図) 1~26は弥生土器片である。1~8は口縁部で、1~3は複合口縁である。1は口唇部に刻み目を有し、2は口唇部に繩文を施文する。3は口唇・口辺部に付加条繩文を施し、口辺下端に刻み目を有している。4~7は口唇部に刻み目を有し、5は口唇部に繩文原体を押圧する。6は口唇部に繩文を施し、口辺部には撫糸文が施されている。8は口辺部に竪状工具による縱区画がみられ、更に区画内に格子文を充填する。9~14は頸部で、9~10は頸部に竪状工具による縱区画がみられ、区画内に格子文を配する。11~13は櫛描文であり、11は縱区画がみられ区画内に格子文を配する。12は山形文で、13は縱区画がなされ、区画内に横線が走る。15~20は胴部で、15~16は付加条繩文が施され、その他は撫糸文が施文されている。21~26は底部で、いずれも木葉痕がみられる。21は底径5.5cm、25は底径4.5cm、26は底径9.5cmほどである。

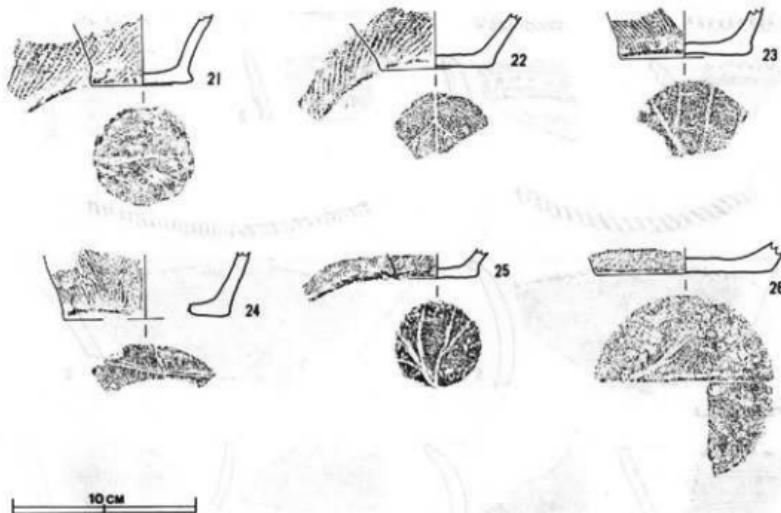
その他に磨石(第210図3・4)・石核(第216図53)が出土している。



第12図 第13号住居跡出土遺物実測図



第13図 第13号住居跡出土遺物拓影図



第14図 第13号住居跡出土遺物拓影図

第16号住居跡（第15図）

本住居跡はF12 b?を中心に確認され、第2・3号溝の間に位置している。主軸方向N-86°Wで、長軸4.28m・短軸3.7mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがり、壁高は15~30cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦でやや柔らかく、第2・3号溝により一部が掘り込まれている。

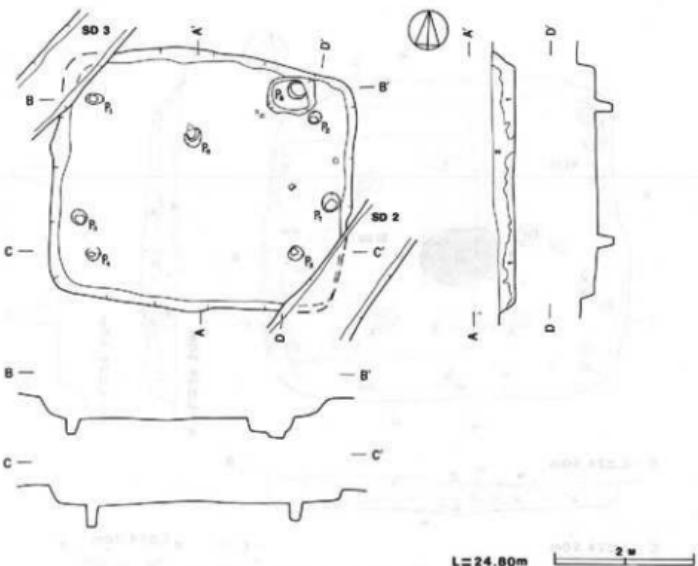
炉跡は検出されない。ピットは床面に8個ほど確認され、R~Pが主柱穴と考えられる。長径は18~25cm・深さは23~32cmを測る。

貯蔵穴は北東コーナーに位置し、長径67cm・短径55cmの楕円形の平面形を呈する。深さは20~30cmを測り、壁はゆるやかに立ちあがる。

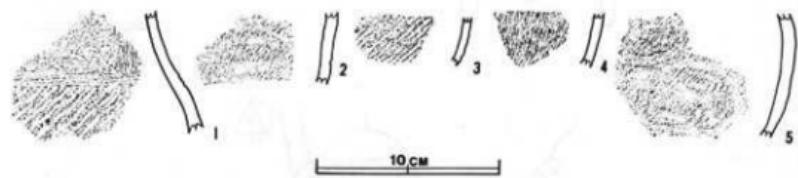
覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第16図）

は床面や覆土中より少量出土している。
1~5は弥生土器片である。1は頸部および胴部片で、頸部文様帯と胴部文様帯を横位の筋目文で区画している。頸部には縦区画後、区画内に波状文を充填している。胴部には付加条縄文が施されている。2~5は胴部で、3・4は付加条縄文が施され、5は燃糸文が施文されている。



第15図 第16号住居跡実測図



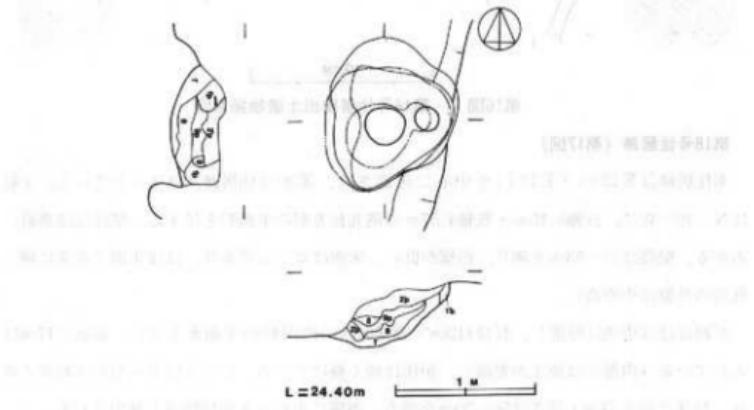
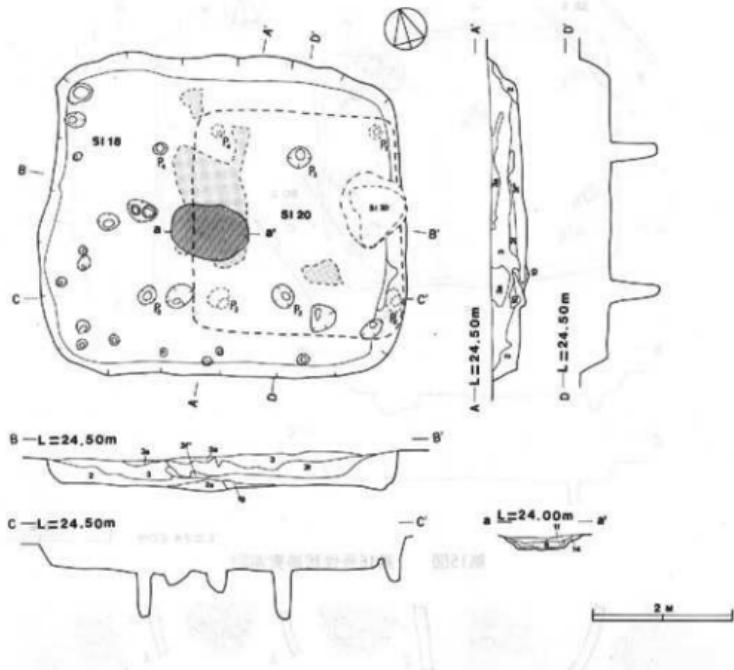
第16図 第16号住居跡出土遺物拓影図

第18号住居跡（第17図）

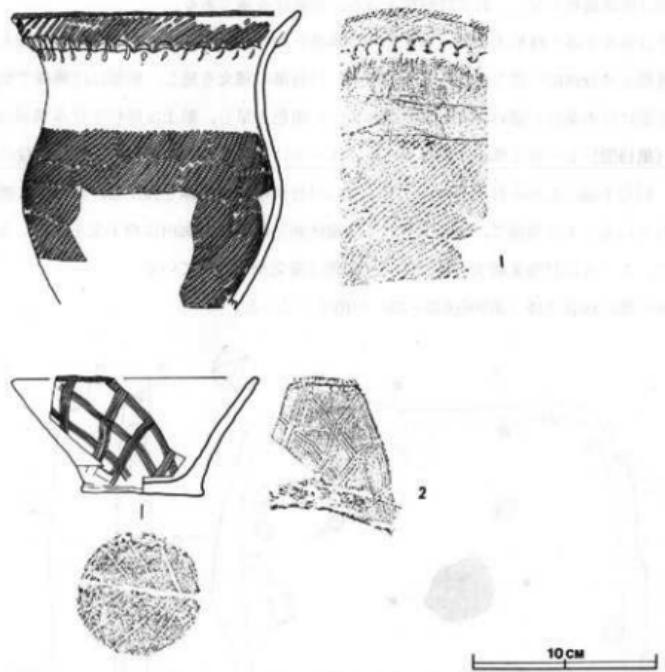
本住居跡は E12e1・E12f1を中心確認され、第20号住居跡に貼床されている。主軸方向は N-70°Wで、長軸5.15m・短軸4.57mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがる。壁高は33~53cmを測り、西壁が低い。床面はロームであり、ほぼ平坦で非常に硬く、支柱穴の外側はやや高い。

炉跡はほぼ中央に位置し、長径112cm・短径81cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に17cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはR~Rが支柱穴と考えられ、長径は20~33cm・深さは56~70cmを測る。西側に小ピットが15個ほど検出される。

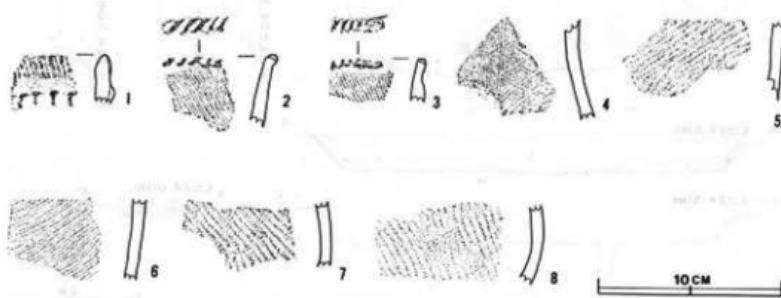
覆土は擾乱を受けており、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。



第17図 第18・20号住居跡、第20号住居跡カマド実測図



第18図 第18号住居跡出土遺物実測図



第19図 第18号住居跡出土遺物拓影図

出土遺物（第18図）は床面や覆土中より出土している。

〔図的解説〕 墓葬形態の構成

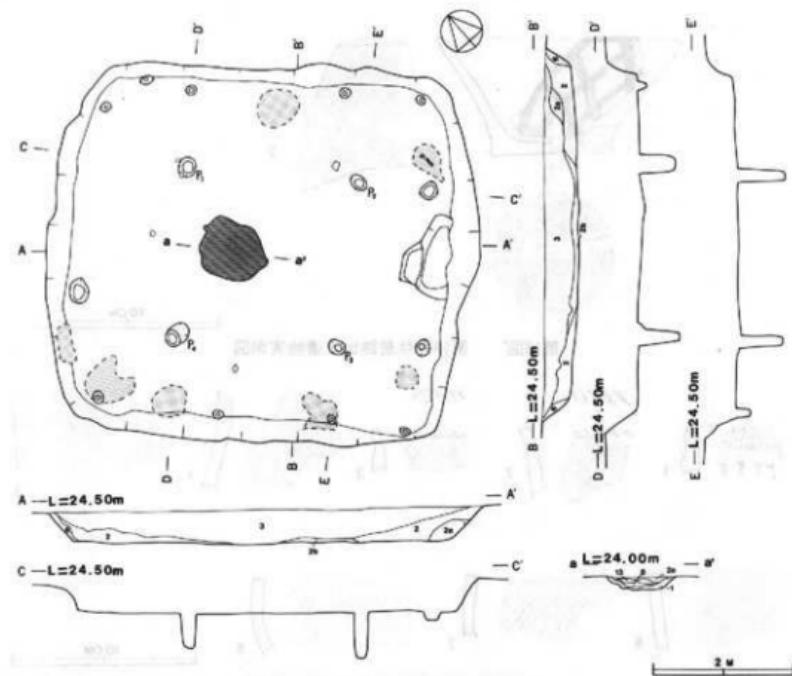
1は弥生土器の壺形土器で、口径15.3cm・現高16cm・現存部36ほどである。口縁部は複合口縁を有し、口縁部に最大径がある。胴部はゆるやかに屈曲する。底部は欠損している。口辺部には繩文を施し、口辺下端に刻み目を施している。頸部は無文を置く。胴部は繩文が施されている。

色調は灰黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

2は弥生土器の鉢形土器で、口径13cm・器高6.2cm・底径6.5cm・現存部約6cmほどである。口縁部は底部より直線的に開きながら立ちあがる。口唇部に繩文を施し、胴部には構造で格子状に配され底部には木葉痕が認められる。色調はにぶい褐色を呈し、胎土は砂粒を含み焼成は普通である。

(第19図) 1~8は弥生土器片である。1~3は口縁部で、1は口辺上端に斜位に刻み目を施し、口辺下端にも刻み目を有する。2・3は口唇部に繩文原体を押圧し、口縁部に撲糸文が施されている。4は頸部で、棒状工具により縦区画を施し、区画内に格子文を配す。5~8は胴部片で、5・6は付加条繩文が施され、その他は繩文が施されている。

その他に球状土錘(第206図32・33)が出土している。



第21号住居跡(第20図)

本住居跡はE11 hsを中心確認され、第22号住居跡の5m南東側に位置する。主軸方向はN-45°Wで、長軸6.2m・短軸5.3mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがり、壁高は40~50cmを測り、南壁がわずかに高い。床面はロームであり、ほぼ平坦で非常に硬くしま

っている。南東壁下中央は段状に低くなり、よく踏まれて固い。

炉跡はほぼ中央に位置し、長径100cm・短径80cmで楕円形の平面形を呈し、皿状に17cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはB~Eが主柱穴と考えられ、長径は25~35cm・深さは51~68cmを測る。また、小ピットが壁近くに12個検出される。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主に堆積している。焼土や木炭が床面に検出され、火災にあつたものと考えられる。

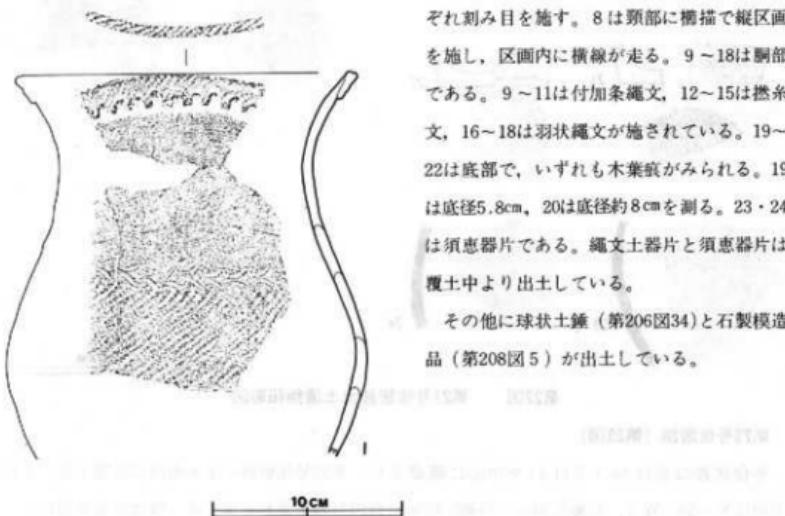
出土遺物（第21図）は床面や床面直上より少量出土している。

1は弥生土器の壺形土器で、推定で口径18cm・現高20cm・現存部分ほどで底部は欠損している。口縁部は頸部よりゆるやかに外反しながら立ちあがり、胴部もゆるやかに屈曲している。口縁部は複合口縁を有し、口唇・口辺部に繩文を施し、口辺下端に刻み目を有している。頸部は無文を置く。胴部にはS字状結節文が施されている。色調は黒褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。

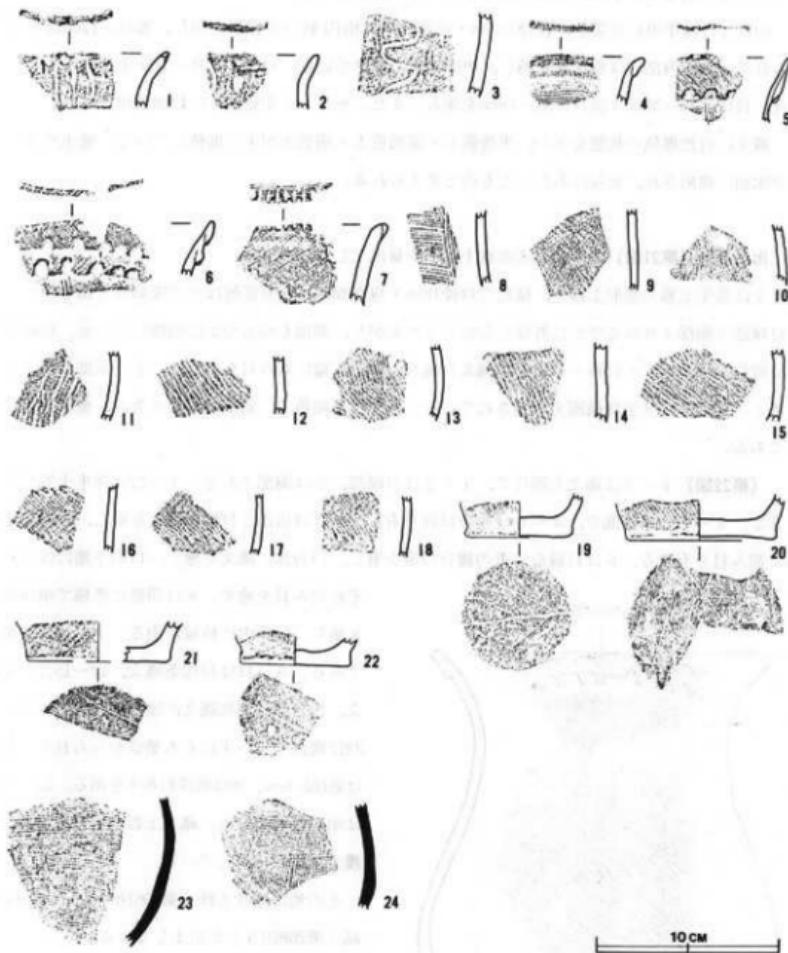
（第22図）1~3は繩文土器片で、1・2は口縁部、3は胴部である。4~22は弥生土器片である。4~7は口縁部で、4~6は複合口縁を有し、5は口辺部に付加条繩文を施し、口辺下端に刻み目を有する。6は口縁が二重の複合口縁を有し、口辺部に繩文を施し、口辺下端にはそれ

ぞれ刻み目を施す。8は頸部に横描で縱区画を施し、区画内に横線が走る。9~18は胴部である。9~11は付加条繩文、12~15は撚糸文、16~18は羽状繩文が施されている。19~22は底部で、いずれも木葉痕がみられる。19は底径約5.8cm、20は底径約8cmを測る。23~24は須恵器片である。繩文土器片と須恵器片は覆土中より出土している。

その他に球状土錘（第206図34）と石製模造品（第208図5）が出土している。



第21図 第21号住居跡出土遺物実測図



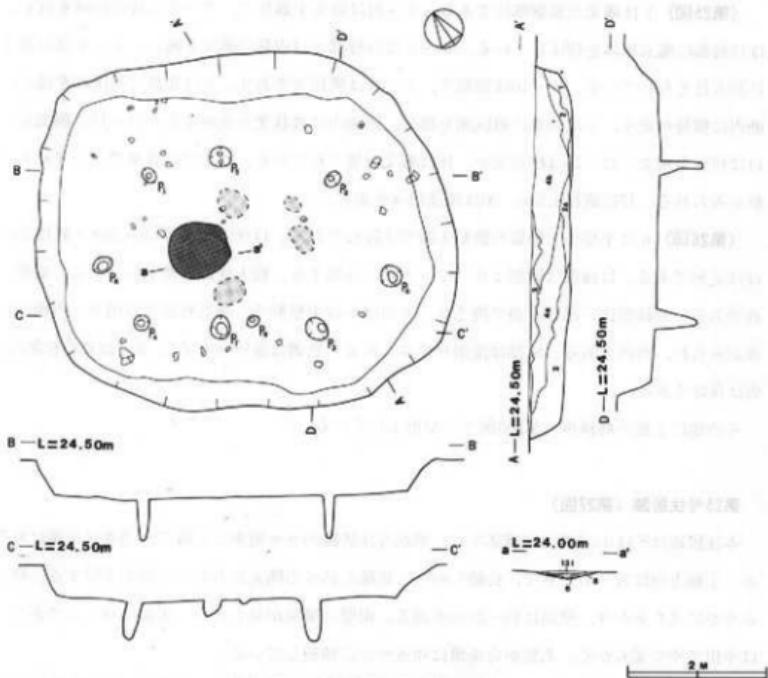
第22図 第21号住居跡出土遺物拓影図

第23号住居跡（第23図）

本住居跡はE11c6・E11d1を中心に確認され、第37号住居跡の1m南側に位置する。主軸方向はN-55°Wで、長軸5.94m・短軸5.07mの楕円形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがるが、南壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は50cm内外を測る。床面はロームであり、平坦で硬く、東側から西側にゆるやかに傾斜する。焼土が検出される。

炉跡は中央よりやや西側に位置し、長径85cm・短径81cmのほぼ円形の平面形を呈し、皿状に9cmほど掘られる。内部には焼土が充満し、炉床はかなり硬く焼けている。ピットはB～Eが主柱穴と考えられ、長径は23～35cmで、深さは60cmを測る。E～Fは主柱穴と何か密接な関係があるものと想像される。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・黒色土・暗褐色土が主に堆積している。



第23図 第23号住居跡実測図

出土遺物（第24図）は床面直上より出土している。

1・3は弥生土器の壺形土器である。1は頸部および胴部片で、現高21cmほどである。胴部より頸部にかけて急にすばまる。頸部文様帯と胴部文様帯を横位の横描文が区画している。頸部文様帯は横描文で縦区画を施し、3等分し、区内に横線を充填する。胴部には縄文が施されている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。3は口縁部で、口径16.6cm・現高5cmほどである。口縁部は頸部より外反している。口縁部は複合口縁を有し、口唇・口辺部に縄文を施している。

2・4・5は弥生土器の壺形土器である。2は口縁部で、推定口径23.2cm・現高11cmほどで、

口縁部は頸部よりやや外反する。口縁部は複合口縁を有し、口唇・口辺部に繩文を施し、口辺下端に刻み目を有する。頸部は無文を置く。胴部は撚糸文が施されている。4は底部および胴部片で、現高8cm・底径8cmほどであり、底部より直線的に聞く。胴部は無文であり、底部には木葉痕がみられる。5は底部および胴部片で、現高10cm・推定底径9.6cmほどである。胴部には撚糸文が施されている。底部には木葉痕が認められる。

(第25図) 1は繩文土器胴部片である。2~21は弥生土器片で、2~5は複合口縁を有し、2は口唇部に繩文原体を押圧している。3~5は口唇部と口辺部に繩文を施し、3・4は口辺下端に刻み目を有している。6~10は頸部で、7~9は櫛描文であり、7は頸部に縱区画を施し、区画内に横線が走り、9は頸部に縱区画を施し、区画内に波状文を充填する。11~16は胴部片で、11は付加条繩文、12~15は撚糸文が、16は繩文が施されている。17~21は底部で、いずれも木葉痕がみられる。17は底径8.5cm、20は底径13cmを測る。

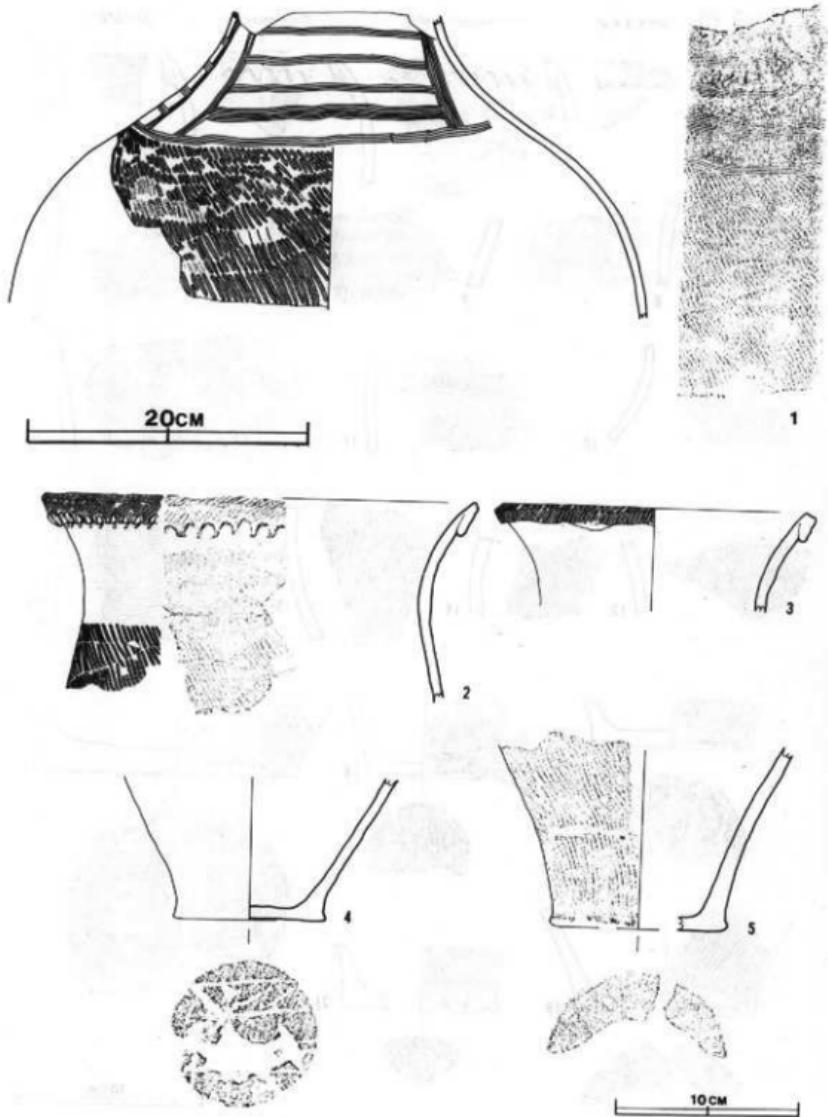
(第26図) 6は小型の土師器の表形土器で手捏ねである。口径5.3cm・器高6.2cm・底径3cm・ほぼ完形である。口縁部は頸部より「く」の字に外傾する。最大径は胴部上位にある。底部は平底である。口縁部は一部分が指で押され、そのほかは未整形で、胴部外面は鋸削り、内面は輪積痕がみられ、凹凸である。底部は鋸削りがみられる。色調は黄灰色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。

その他に土製の紡錘車(第205図7)が出土している。

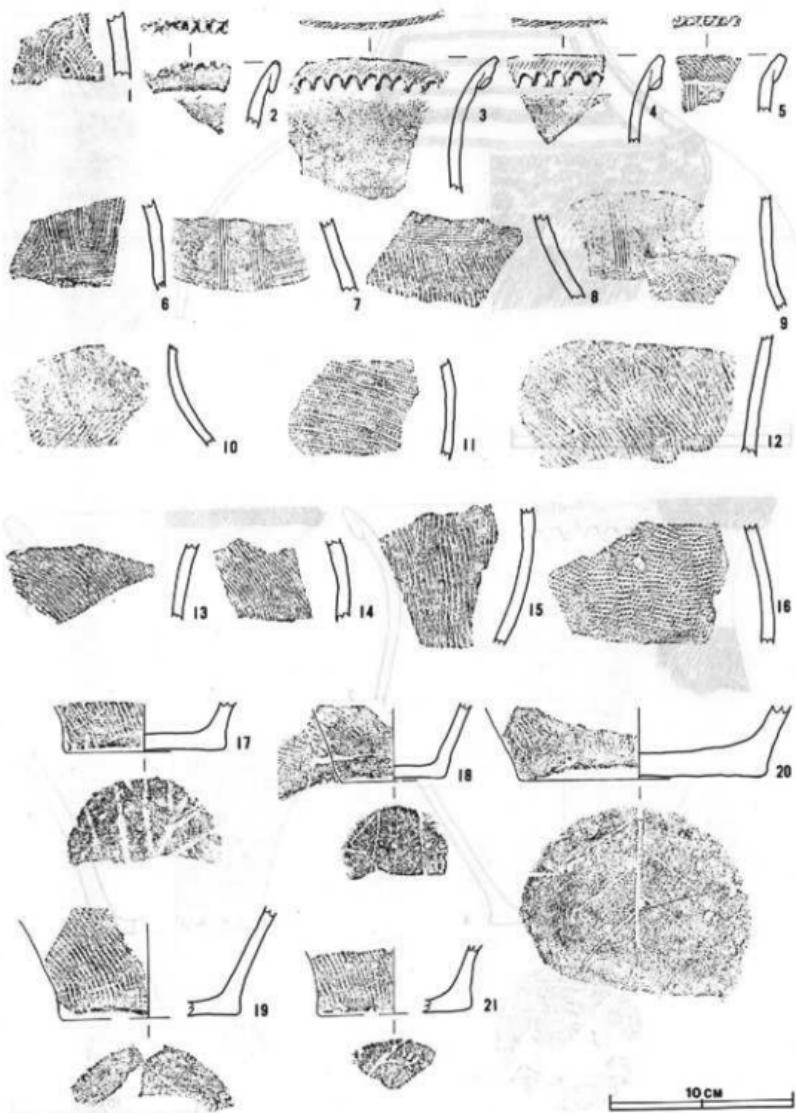
第25号住居跡(第27図)

本住居跡はF11d①を中心に確認され、第26号住居跡の9m南東に位置し、調査区南端に所在する。主軸方向はN-57°Wで、長軸3.89m・短軸3.45mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがり、壁高は10~27cmを測る。南壁に擾乱が見られる。床面はロームであり、ほぼ平出でやや柔らかく、北側から南側にゆるやかに傾斜している。

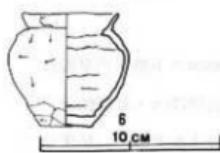
炉跡は2か所に検出され、炉跡1は中央より南東壁近くに位置し、長径71cm・短径51cmの楕円形を呈する。炉跡2は中央より南西壁近くに位置し、長径95cm・短径50cmの楕円形の平面形を呈し、いずれも皿状に10cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は焼けている。ピットは床面に14個ほど検出されたが、主柱穴は明確に把握できない。しかしB~Eが主柱穴と思われ、Eも関係があるものと考えられる。覆土は一部擾乱がみられるが、他は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・黑色土・褐色土が主に堆積している。



第24图 第23号住居跡出土遺物実測図



第25図 第23号住居跡出土遺物拓影図

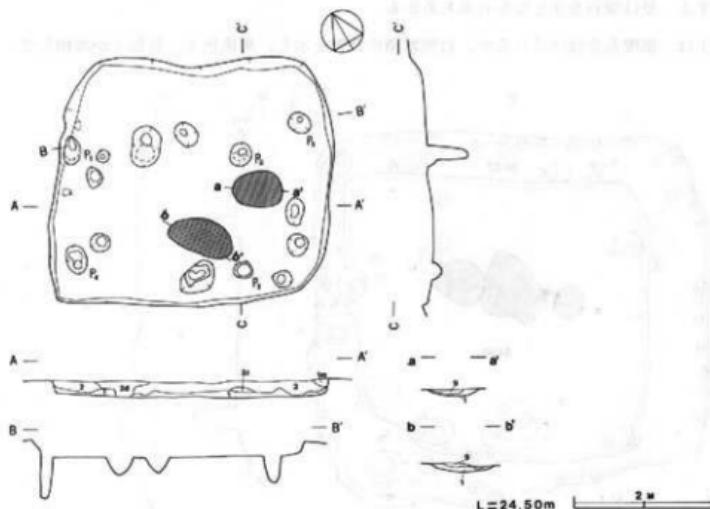


第26図 第23号住居跡出土遺物実測図

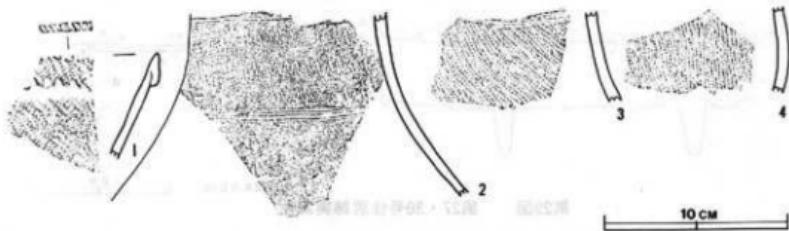
出土遺物（第28図）は床面や覆土下層中に少量出土している。

1～4は弥生土器片である。1は複合口縁で、口唇・口辺部に繩文を施す。2は頸部で、横描の横線が上下2条に走り、その間を3条の波状文が走る。3は頸部および胴部で、頸部に横描の横線が走り、胴部には付加条繩文が施されている。4は胴部で、付加条繩文が施されている。

その他に磨石（第210図5）が出土している。



第27図 第25号住居跡実測図



第28図 第25号住居跡出土遺物拓影図

第30号住居跡（第29図）

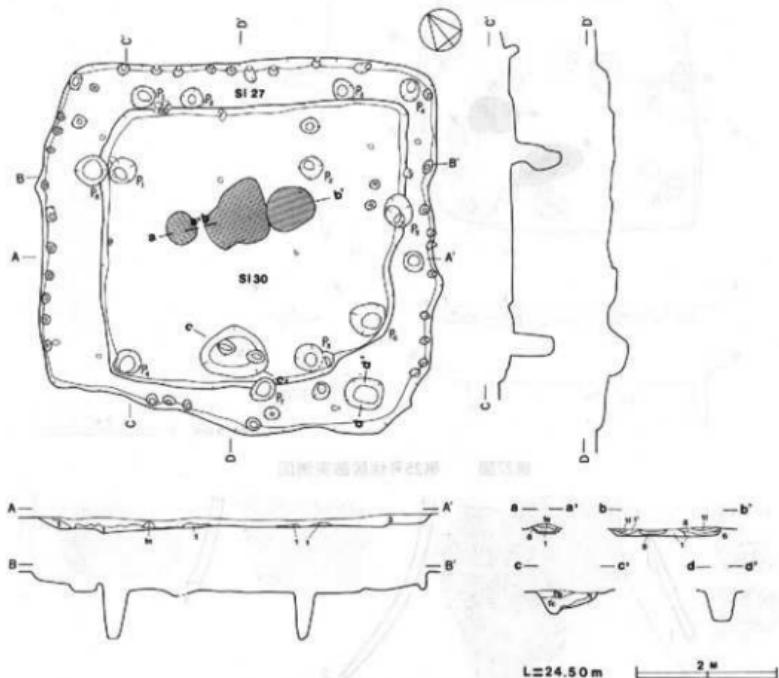
本住居跡はE11i4を中心確認され、第27号住居跡と完全に重複している。主軸方向はN-52.5°-Wで、長軸3.99m・短軸4.37mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁は丸味をおびながらゆ

るやかに立ちあがり、壁高は5~10cmを測り、北西壁が高い。床面はロームであり、ほぼ平坦で非常に硬く、南西側の床面が高い。

炉跡は2か所に検出され、1はほぼ中央に位置し、長径90cm・短径88cmの不整形の平面形を呈し、皿状に8cmほど掘られている。2は中央よりやや東側に位置し、長径70cm・短径60cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に8cmほど掘られている。いずれも内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはB~B'が主柱穴と考えられ、長径は33~40cm・深さは70cmを測る。

貯藏穴は南西壁近くの中央に位置し、長径95cm・短径75cmの楕円形の平面形を呈し、深さ35cmを有する。壁は傾斜を示しながら立ちあがる。

覆土は一部擾乱を受けているが、自然堆積の状態を示し、黒褐色土・褐色土が堆積している。



第29図 第27・30号住居跡実測図

出土遺物（第30図）は床面や覆土中より少量出土している。

1~8は弥生土器片である。1~2は頸部である。3~8は胴部で、3は付加条繩文が施されその他は撚糸文が施されている。



第30図 第30号住居跡出土遺物拓影図

第31号住居跡（第31図）

本住居跡はE11f3・E11f4を中心に確認され、第30号住居跡の4m北西側に位置する。主軸方向はN-60.5°-Wで、長軸10.43m・短軸8.27mの隅丸長方形の平面形を呈し、非常に大型で、本遺跡の中で一番大きい。壁はいずれもほぼ垂直気味に立ちあがり、東壁・西壁・北壁は壁高が60cmほどで、南壁は70cmを測る。北東壁の西より張り出し部が付設され、長径2m・短径1.6m・深さ1.6mほどである。床面はロームであり、ほぼ平坦で、全体的に硬くしまっているが、南北壁のほぼ中央部に周囲より9cmほど高い床面がある。床一面に長径10~25cm・深さ5~10cmほどの小ピットが多数検出される。

炉跡はほぼ中央と南コーナー付近2か所に検出され、1は長径63cm・短径42cmの楕円形の平面形を呈し、ほぼ皿状に12cmほど掘られ、2は長径49cm・短径40cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に7cmほど掘られている。いずれも焼土が充満している。ピットはB~Eが主柱穴と考えられ、長径80~115cmほどで、深さは60cm内外である。E・Fは主柱穴と密接な係わりがあると思われる。

覆土は自然堆積の状態を示し、微妙な違いのある黒褐色土や暗褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第32・33図）は床面や覆土中より出土している。

1~4は弥生土器の複形土器である。1は口径19.8cm・現高21.5cm・現存部5%で、底部は欠損している。口縁部は頸部より外反しながら立ちあがる。胴部はゆるやかに屈曲している。口縁部は複合口縁を有し、口唇部に繩文原体を押圧している。頸部は無文を置き、胴部は撚糸文が施されている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。2は推定で口径16cm・現高17.5cm・現存部5%で、底部が欠損している。口縁部は頸部よりやや外反しながら立ちあがり、胴部はゆるやかに屈曲する。口径と胴部径はほぼ同じである。口縁部は複合口縁を有し、口唇部に繩文原体を押圧する。頸部は無文を置き、胴部は撚糸文が施されている。頸部外面はなで痕が残る。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。3は口径13.5cm・現

高12cm・現存部%で、底部は欠損している。口縁部は頸部より外反しながら立ちあがり、口縁部に最大径がある。胴部は細い。口唇部は繩文原体を押圧する。頸部は無文を置く。胴部は撚糸文が施されている。色調はにじみ橙色を呈し、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良好である。4は推定で口径23cm・現高17cm・現存部%で、底部は欠損している。口縁部は複合口縁を有し、口縁部は頸部よりごくゆるやかに外反する。口唇・口縁部は繩文を施し、頸部は無文を置く。胴部は繩文が施されている。

5は弥生土器の壺形土器で、頸部および胴部片である。頸部は無文を置き、胴部には繩文が施されている。

6・7は覆土中より出土した土師器である。6は小型の壺形土器で、推定で口径6.7cm・現高5.5cm・現存部%で、底部は欠損している。口縁部は頸部より鋭く外傾する。口縁部は未調整で、胴部外面は範削り、内面は指圧後範なでをし、輪積痕がみられる。色調はにじみ橙色を呈し、胎土は砂礫を含み、焼成は普通である。7は壺形土器で、口径15cm・器高5.3cm・現存部%ほどである。口縁部はやや内彎し、底部は丸底である。口縁部内・外面は横なで、底部外面は範削り、内面はなで整形をする。色調は赤色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。赤彩されている。

(第34・35図) 1~33は弥生土器片である。1~8は口縁部で、1~5は複合口縁を有し、1は口唇部に繩文を施し、2・3は繩文原体を押圧している。4・5は口唇・口辺部に繩文を施し、4は口辺下端に刻み目を有する。6は繩文原体を押圧する。7・8は口唇部に刻み目を施す。9~18は頸部で、いずれにも櫛描文を配する。11は頸部に直線、9・10は頸部に縱区画を施し、区画内に横線が走り、12は区画内に波状文を描く。21~27は胴部片で、21・22は繩文、23~26は撚糸文、27は付加条繩文がそれぞれ施されている。28~33は底部で木葉痕がみられる。28は底径6cm、29は底径13cmほどである。

その他の遺物としては球状土錐(第207図43~46)・土製の紡錘車(第205図8)・土製の勾玉(第207図60)・磨石(第210図6~10)・石製品(第217図59)が出土している。

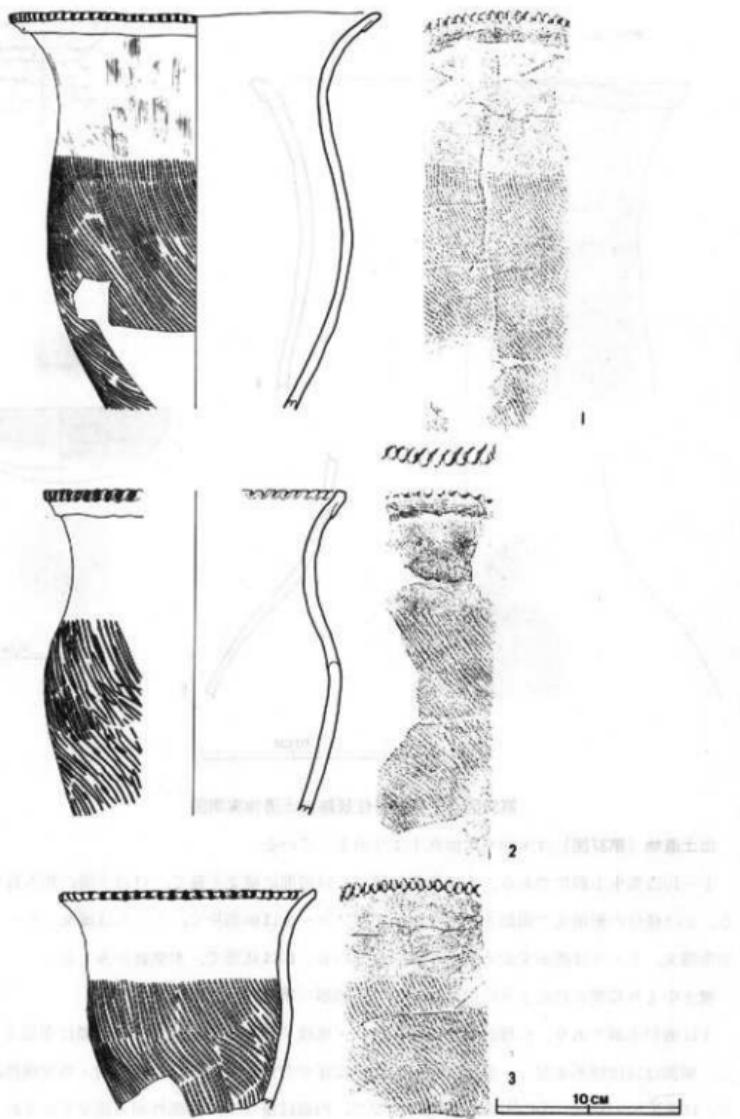
第32号住居跡(第36図)

本住居跡はE10 g8を中心確認され、第33号住居跡の3m南側に位置する。主軸方向はN-58.5°Wで、長軸6.23m・短軸4.97mの隅丸長方形の平面形を呈する。南東や北西壁はほぼ垂直に立ちあがり、北西壁は傾斜を示し、壁高は45~55cmほどである。南東壁がやや高い。床面はロームであり、ほぼ平坦であるが、南西側に直径10~20cm、深さ10~20cmのピットが散在する。

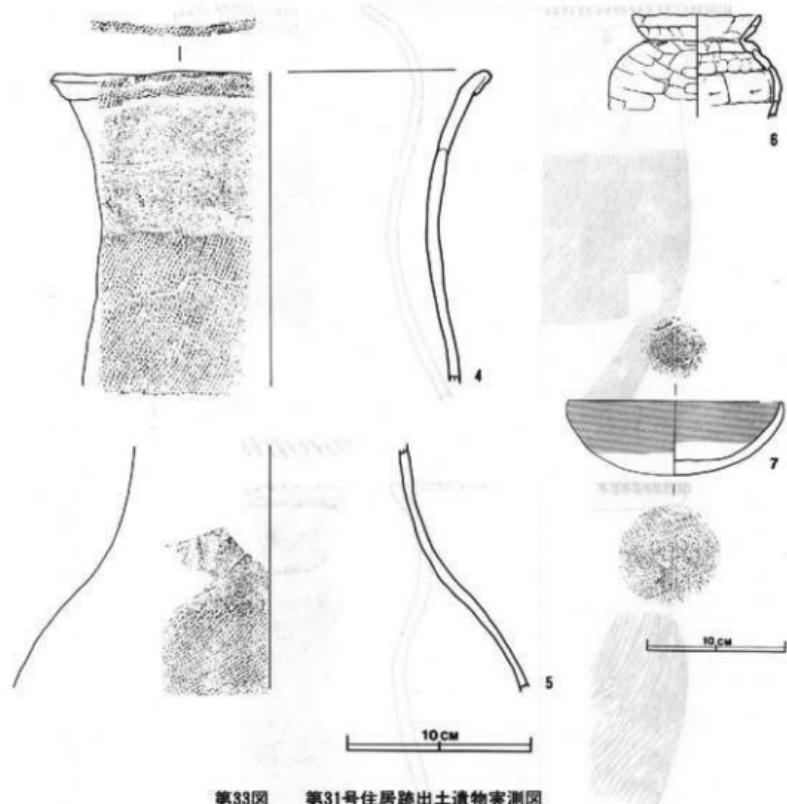
炉跡は検出されない。ピットはR~Rが主柱穴と考えられ、長径38~45cmで、深さは57cm前後である。Rは主柱穴と関係があり、Rは本遺構とは関係ないものと思われる。覆土は自然堆積の状態を示し、微妙な違いのある黒褐色土や暗褐色土が主に堆積している。



第31図 第31号住居跡実測図



第32図 第31号住居跡出土遺物実測図



第33図 第31号住居跡出土遺物実測図

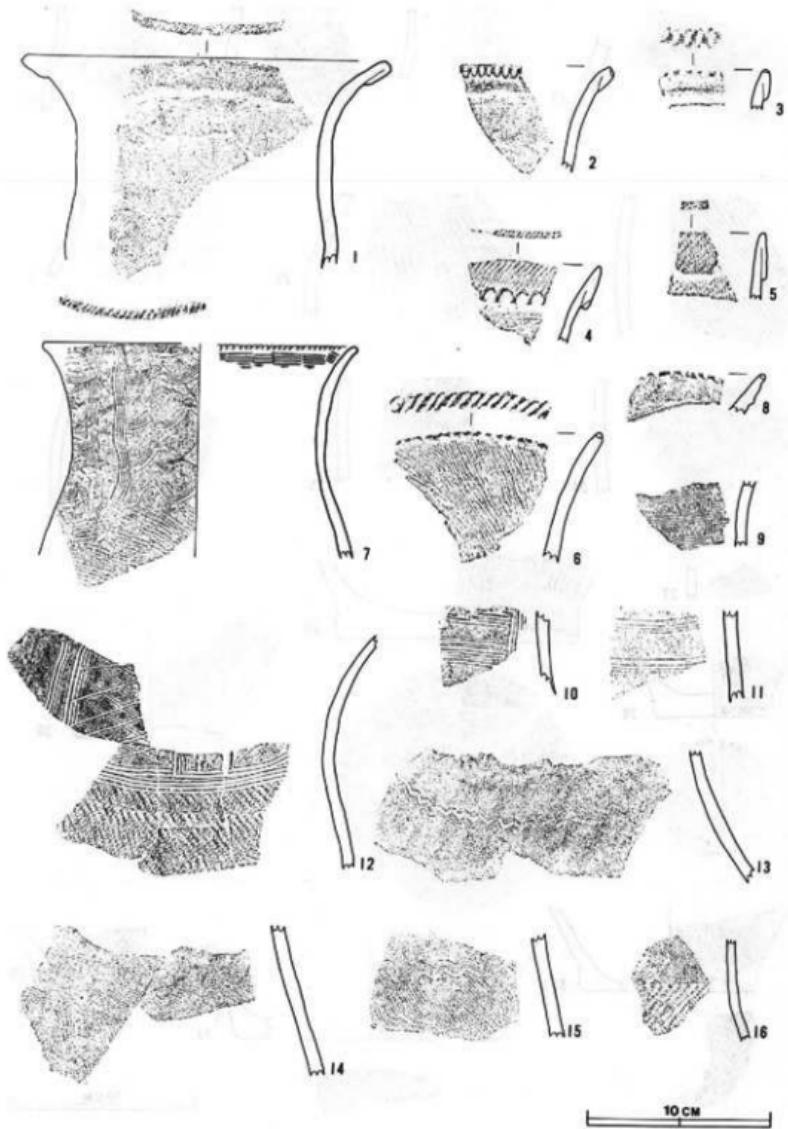
出土遺物（第37図）は床面や床面直上より出土している。

1～10は赤生土器片である。1は複合口縁で、口辺部に繩文を施し、口辺下端に刻み目を有する。2は横位の櫛描文で頸部と胴部を区画する。3～9は胴部片で、3～5は繩文、6・7は付加条繩文、8・9は燃条文がそれぞれ施されている。10は底部で、木葉痕がみえる。

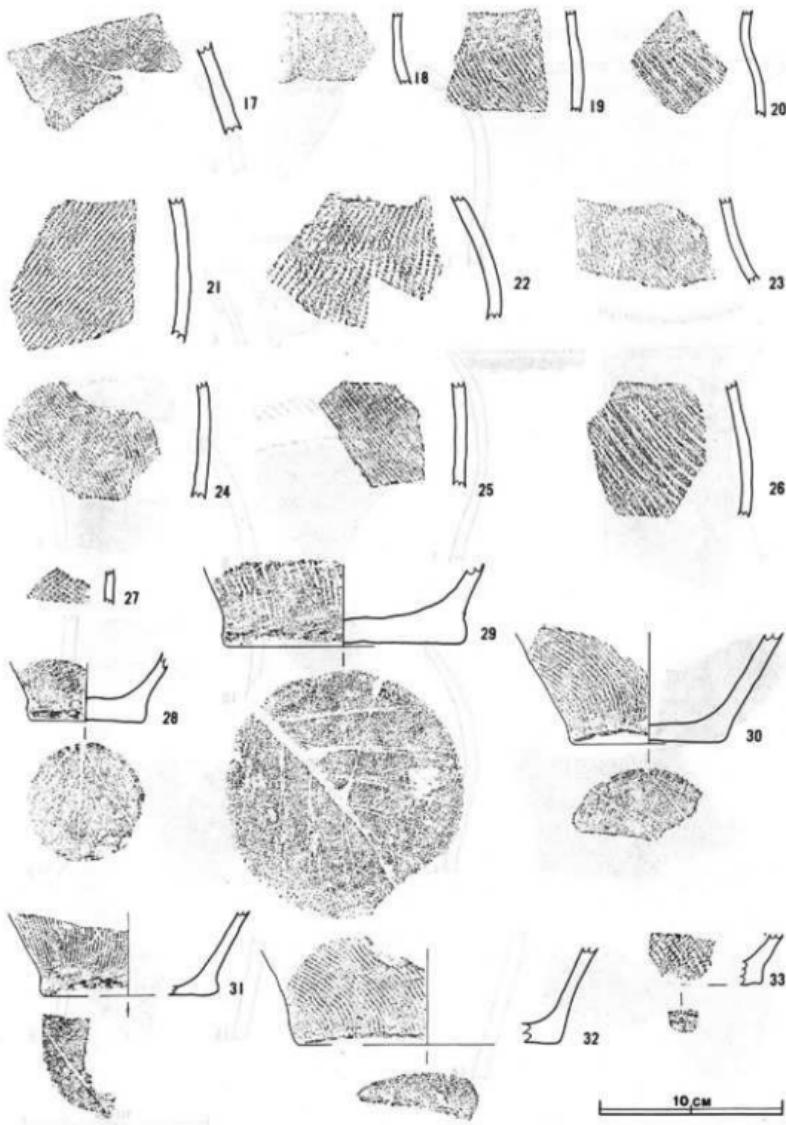
覆土中より投棄されたように逆位・横位で土師器（第38図）が出土している。

1は壺形土器であり、口径21cm・器高32.6cm・底径7cm・ほぼ完形で、口縁部は頭部より外反し、胴部はほぼ球形を呈し、底部は狭い。所々に煤が付着している。口縁部内・外面端部は横なので、口縁部下位外面から胴部外面は粗雑な箇なので、内面は箇なので、底部外面も箇なでがそれぞれ施されている。色調はにぶい橙色・赤色、胎土は砂粒・砂礫・スコリアを含み、焼成は普通である。

2～4は壺形土器である。2は口径20cm・推定器高23.5cm・底径7.4cm・現存部2/3で、口縁部



第34图 第31号住居跡出土遺物拓影圖



第35図 第31号住居跡出土遺物拓影図

は頭部より外反し、胴部はほぼ球形を呈する。底部には木葉痕が窺える。口縁部から胴部の外面は寛削り、口縁部内面端部は寛なで、下位は寛削り、胴部内面は寛なでがみられる。色調は胴部外面はにぶい赤褐色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成はやや不良である。3は口径12cm・現高12cm・現存部%で、口縁部は頭部より外反し、胴部は張らず、底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は寛削り、内面は寛なでがみられる。色調は黒色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。4は口径18cm・器高17.5cm・底径6.7cm・現存部%である。口縁部は頭部より外反し、胴部は球状を呈し、底部は平底である。口縁部外面は寛削り、口縁部外面端部や胴部内面はなでが施され、胴部外面は粗雑な寛なで、底部は寛なでがみられる。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は不良である。

5~7はか器台（仮称）であり、5は孔径3.1cm・器高12.5cm・底径13.3cm・完形である。口縁部は頭部より急角度で外傾しその後水平になり、脚部は「ハ」の字状に開く。器受部外面に煤が付着している。器受部外面下位は寛削り、内面は寛状工具による削り、脚部外面は寛なでが施されている。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。6も5と同様である。7は器形・色調・胎土・焼成とも5・6と似ており、中央孔径は2.9cm・現高9cm・現存部%で、器受部上面は寛なで、頭部外面は寛削りを施し、脚部内・外面は刷毛目がみられる。

8は环形土器であり、推定口径12.6cm・器高5cm・現存部%で口縁部は棱より一旦内傾し、外反しながら立ちあがる。口縁部は横なで、体部外面は寛削り、内面は寛なでがみられる。色調は内・外面とも赤色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。赤彩されている。

その他に球状土鉢（第207図47）が出上している。

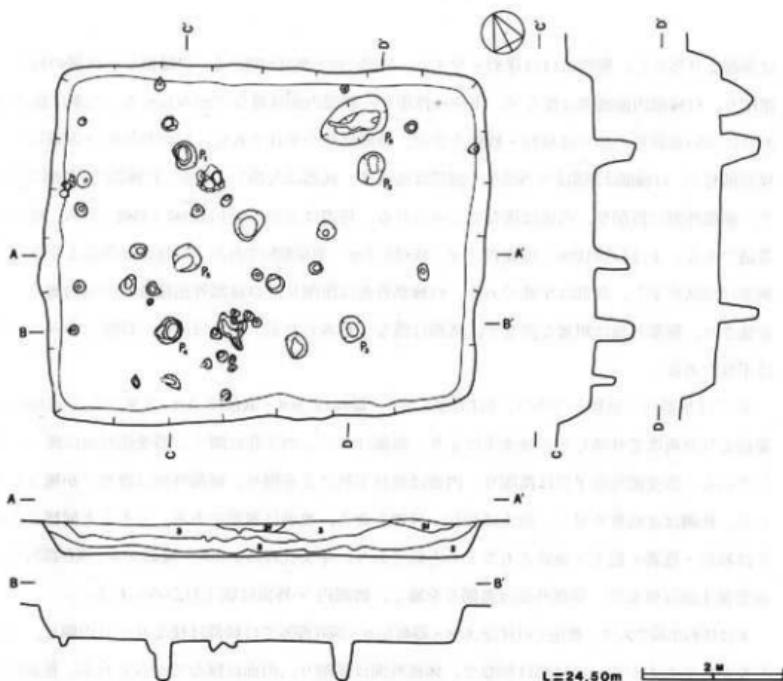
第33号住居跡（第39図）

本住居跡はE10e8を中心確認され、第31号住居跡の12m西側に位置する。主軸方向はN-57.5°Wで長幅6.74m・短軸5.93mの梢円形の平面形を呈する。壁はいずれもほぼ垂直ぎみに立ちあがり、壁高は40~60cmで南東壁がやや高い。床面はロームであり、平坦で全体的に硬い。

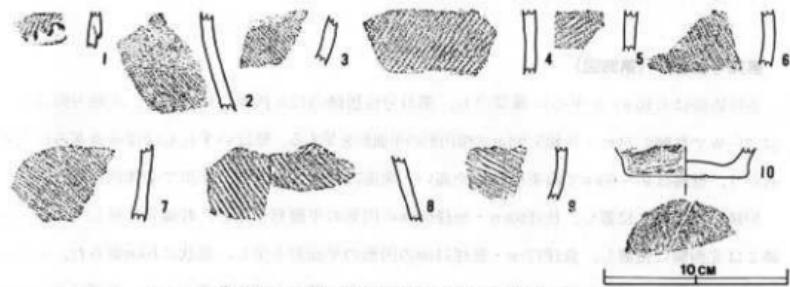
炉跡1は中央に位置し、長径69cm・短径68cmの円形の平面形を呈し、貯蔵穴に接している。炉跡2は北西側に位置し、長径77cm・短径71cmの円形の平面形を呈し、皿状に10cm掘られ、いずれも焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはB~Bが主柱穴と考えられ、長径は35~40cm・深さは60~70cmを測る。

貯蔵穴は中央に位置し、長径90cm・短径65cmの長円形の平面形を呈し、壁はやや開きながら立ちあがる。深さは25cmで浅いものと考えられる。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主に堆積している。



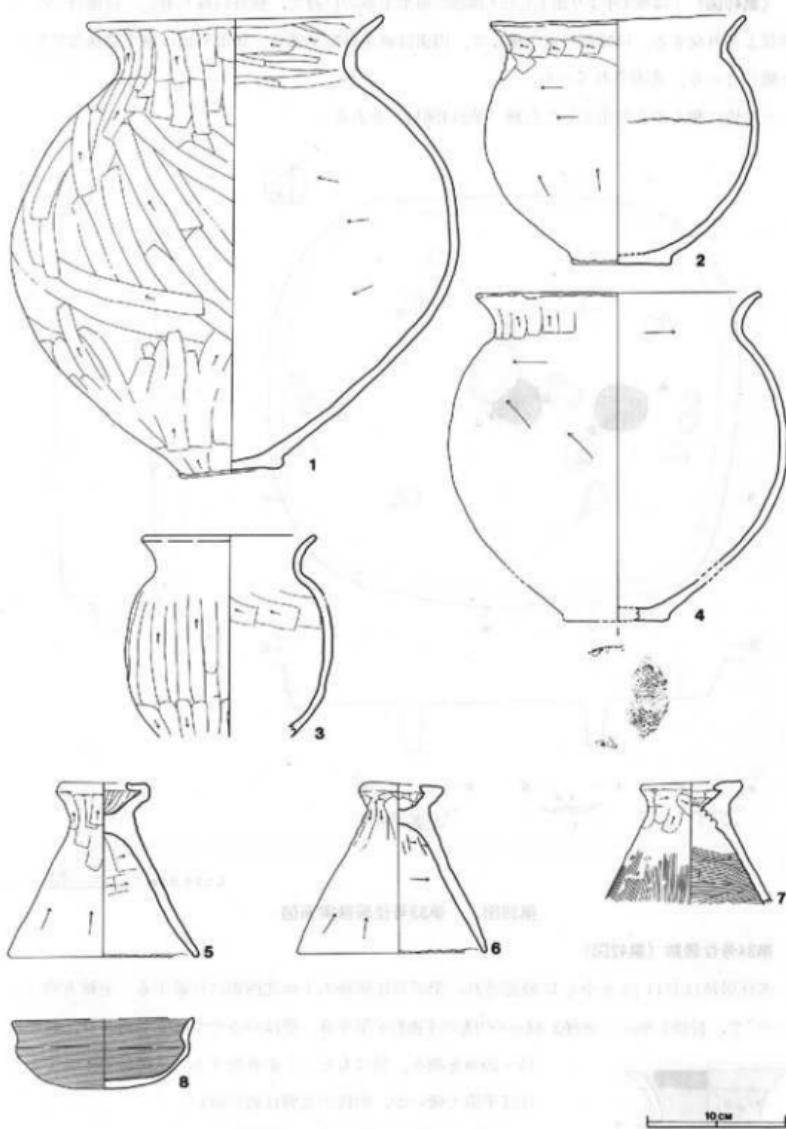
第36図 第32号住居跡実測図



第37図 第32号住居跡出土遺物拓影図

出土遺物（第41図）は床面や床面直上より出土している。

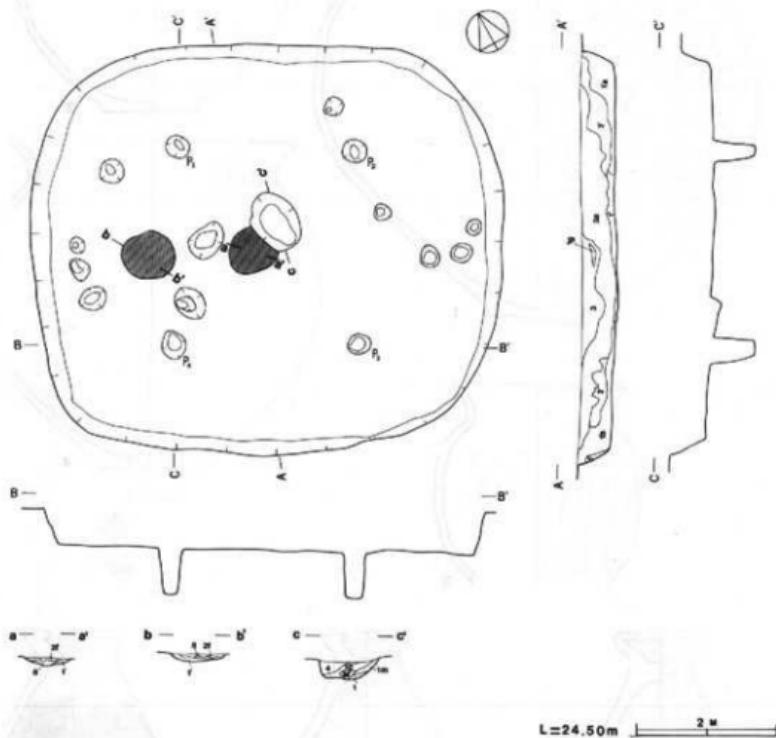
1～11は弦生土器片である。1は二重の複合口縁で、口辺部にそれぞれ付加条縄文と刻み目を施す。2は口唇部に縄文原体を押し、口縁に付加条縄文を施す。3～8は胴部片で、胴部には付加条縄文が施されている。9～11は底部でいすれも木葉痕がみられる。



第38図 第32号住居跡出土遺物実測図

(第40図) 1は覆土中より出土した土師器の壺形土器の口縁で、複合口縁を有し、口径11.7cmで、頸部より外反する。口縁部外面は横なで、内面は刷毛目痕が残る。頸部外面は刷毛目後なで整形を施している。赤彩されている。

その他に覆土中より出土した石錠（第214図44）がある。



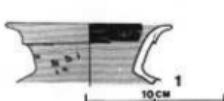
第39図 第33号住居跡実測図

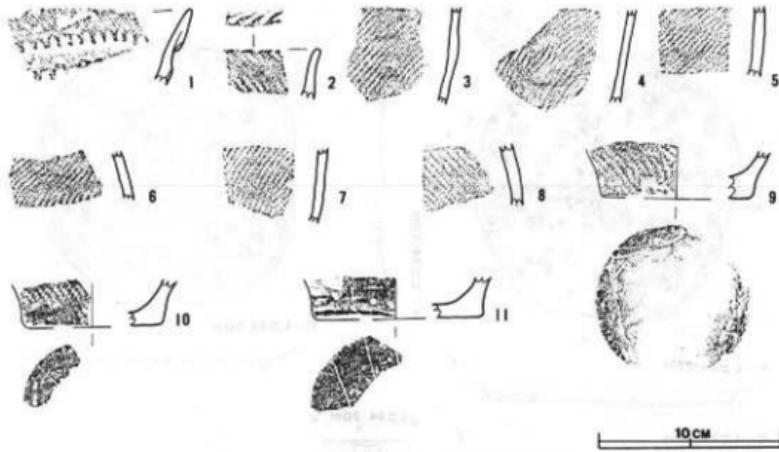
第34号住居跡（第42図）

本住居跡は D11 j3 を中心に確認され、第37号住居跡の7m北西側に位置する。主軸方向は N - 0°で、長径3.86m・短径3.84mの円形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがり、壁高は 15~20cm を測る。壁にもピットが存在する。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬いが、炉跡の東側は特に硬い。

炉跡は中央部よりやや北側に位置し、長径52cm・短径47cmのは円形の平面形を呈し、皿状に 9cmほど掘られている。内部には

第40図第33号住居跡出土遺物実測図





第41図 第33号住居跡出土遺物拓影図

焼土が充満している。ピットは多数検出され、主柱穴と思われるピットは明確ではないが、P～Rが想定される。長径は15～20cmで、深さは16～32cmを測る。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・微妙な違いのある暗褐色土が主に堆積している。

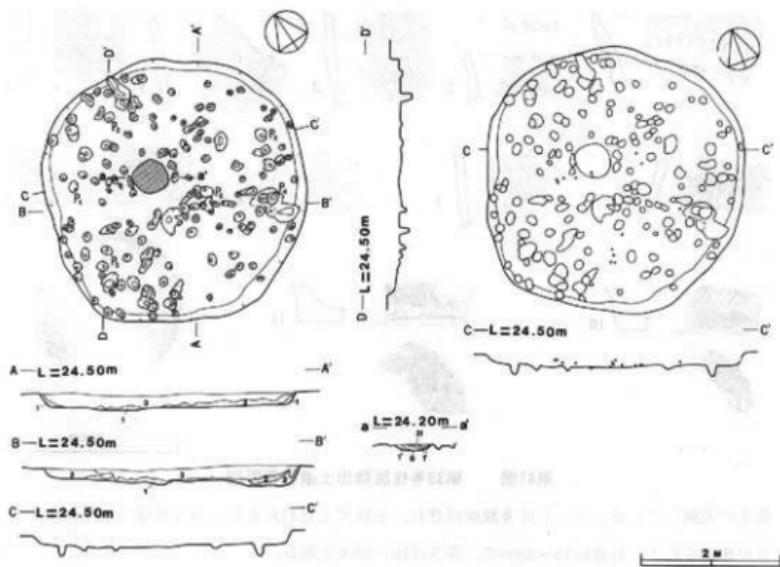
出土遺物（第43図）は床面や覆土中より出土している。

1～9は弥生土器片である。1は口縁部で、口唇部は縦文原体が押圧される。口辺部には籠状工具により縦位の刻み目を有し、その間に横位の刻み目が施されている。2は頸部で、頸部には横描文で縦区画を施し、区画内に横線が走る。3～9は胴部片で、3～6は付加条縦文が施され、その他は撚糸文が施されている。

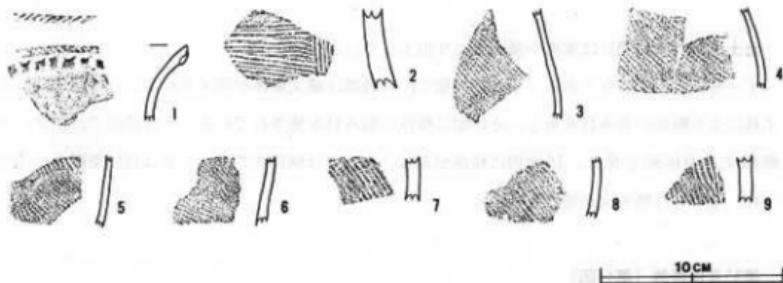
第35号住居跡（第44図）

本住居跡はE11 b1を中心確認され、第34号住居跡の7m南西側に位置する。主軸方向はN-42.5°-Wで、長軸5.64m・短軸5.35mの楕円形の平面形を呈する小型の住居跡である。壁はやや柔らかく、いずれの壁もゆるやかに傾斜を示しながら立ちあがり、壁高は20～33cmを測り、西壁と北東壁が高い。床面はロームで平坦であるが、中央部がやや低い。全体的に柔らかいが、中央部より東側は非常に硬い。

炉跡は中央部より北西側と中央部に位置し、炉跡1は長径85cm・短径64cmの楕円形の平面形を呈し、12cmほど掘られ、炉跡2は長径93cm・短径57cmの楕円形の平面形を呈し、16cmほど掘られている。いずれも内部には焼土が充満している。ピットは多数検出されたが、主柱穴を考



第42図 第34号住居跡実測図、出土遺物分布図



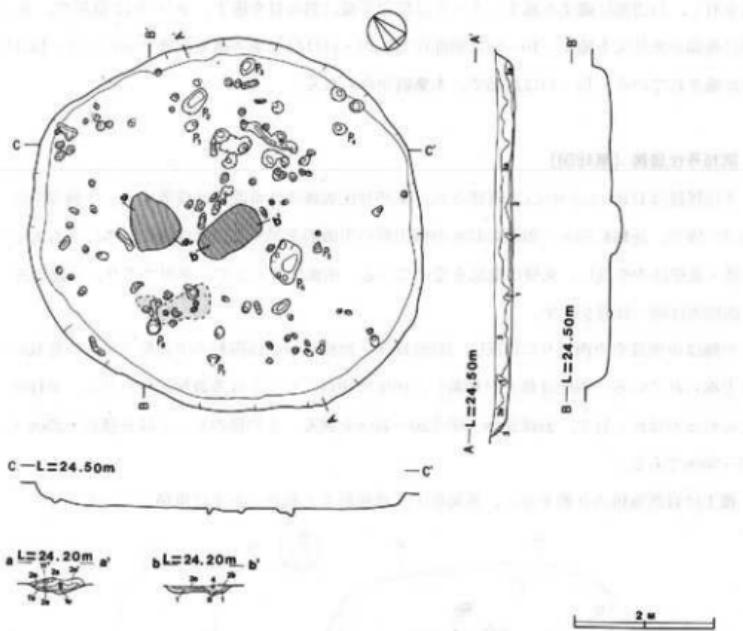
第43図 第34号住居跡出土遺物拓影図

えられるのは不明である。B～B₁は長径10～25cm・深さ12～33cmを測る。壁近くに長径5～10cmのピットが多数存在する。

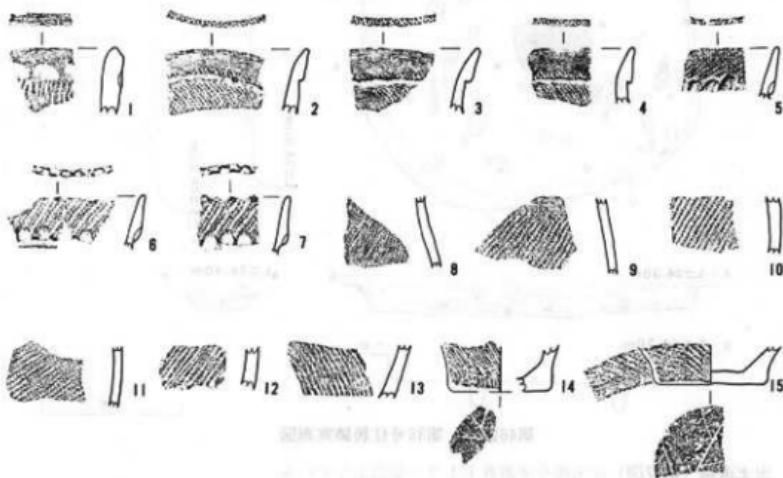
覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。

出土遺物（第45図）は床面や覆土中より出土している。

1は覆土中より出土した繩文土器の口縁部である。2～15は弥生土器片である。2～7は複合口縁で、2～4は口唇部に繩文を施し、5は口唇・口縁部に繩文を施す。6～7は口唇部に刻み



第44図 第35号住居跡実測図



第45図 第35号住居跡出土遺物拓影図

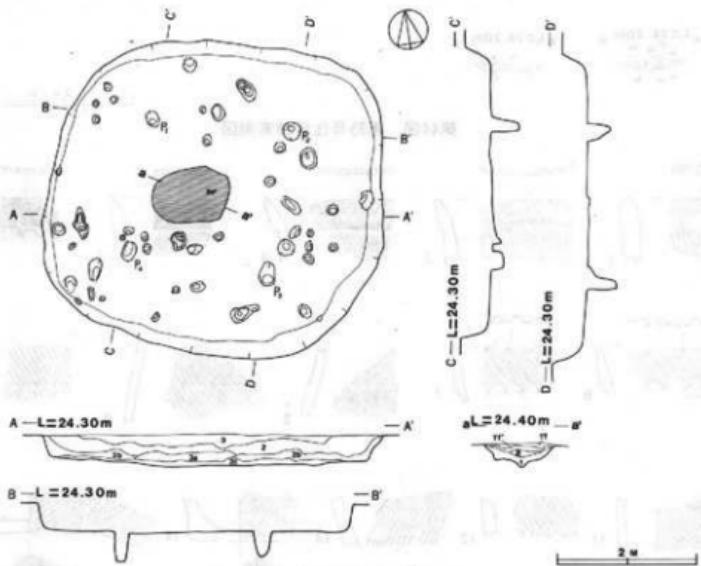
目を有し、口辺部に縄文を施す。5～7は口辺下端に刻み目を施す。8・9は頭部で、8は頭部に櫛描の波状文を施す。10～13は胴部片で、10・11は付加条の縄文が施文され、12・13は捺条文が施されている。14・15は底部で、木葉痕がみられる。

第36号住居跡（第46図）

本住居跡はD10 ioを中心確認され、第35号住居跡の9m北側に位置する。主軸方向はN-62.5°Wで、長軸4.75m・短軸4.47mの橢円形の平面形を呈する。壁は垂直ぎみに立ちあがり、南壁・東壁はやや高い。東壁は擾乱を受けている。床面はロームで、平坦であり、炉跡付近と中央部周辺は硬い状態を示す。

炉跡は中央部やや西寄りに位置し、長径112cm・短径77cmの橢円形の平面形を呈し、皿状に21cmほど掘られている。内部は焼土が充満し、炉床は硬い。ピットは多数検出されたが、主柱穴と考えられるのはH～Iで、長径25cm・深さ20～44cmを測る。その他のピットは長径12～25cm・深さ15～30cmである。

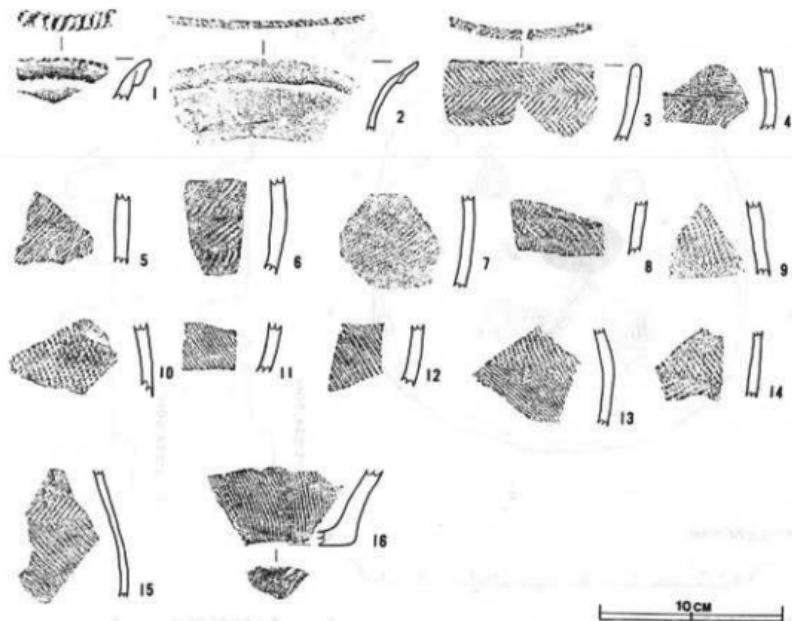
覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主に堆積している。



第46図 第36号住居跡実測図

出土遺物（第47図）は床面や床面上より少量出土している。

1～16は弥生土器片である。1・2は複合口縁で、1は口唇部に縄文原体を押圧する。2は口



第47図 第36号住居跡出土遺物拓影図

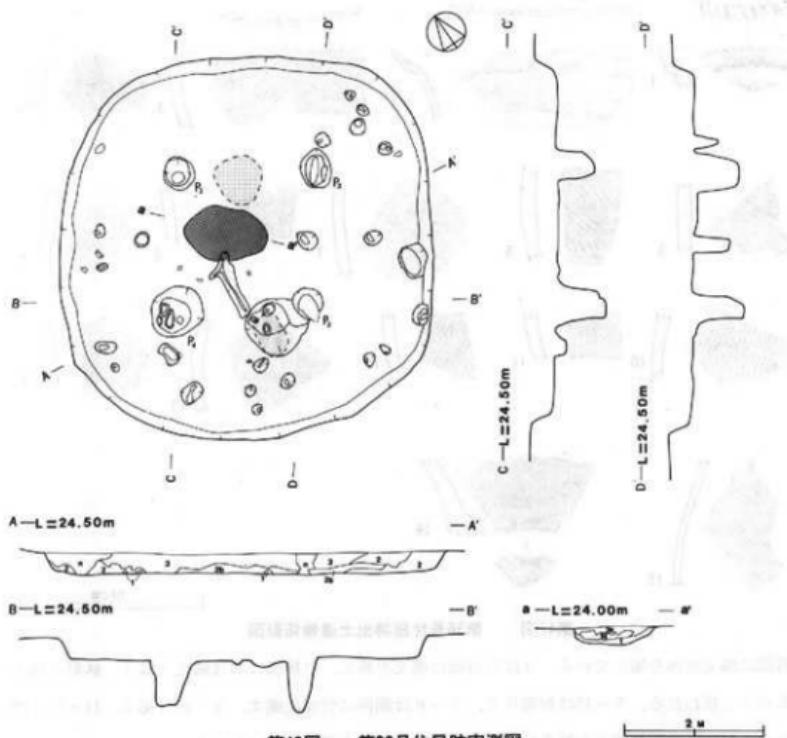
各部に縄文原体を施している。3は口唇部に縄文を施し、口縁部は羽状縄文を施す。鉢形土器であろうと思われる。5～15は胴部片で、5～8は胴部に付加条縄文、9・10は縄文、11・12は撚糸文、14・15は羽状縄文が施されている。16は底部で木葉痕が認められる。

その他に土製の纺錘車（第205図9）が出土している。

第38号住居跡（第48図）

本住居跡はD11h7・D11hsを中心に確認され、第1号溝の1m北側に位置する。主軸方向はN-40°Eで、長径5.49cm・短径5.34mの円形の平面形を呈する。壁はややゆるやかに立ちあがり、壁高は30～35cmを測る。床面はロームで平坦であり、やや柔らかく、炉跡周辺も硬くない。炉跡は中央よりやや北側に位置し、長径119cm・短径75cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に25cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、いずれも硬く、ブロック化している。炉床は硬く焼けている。ピットはB～B₁が主柱穴と考えられ、長径45～80cm・深さ55～77cmほどで深い。特にB₁は太く、深い柱穴である。壁付近にも小ピットが散在する。

覆土は西壁近くと、中央より東側に擾乱を受けているが、その他は自然堆積の状態を示し、黒



第48図 第38号住居跡実測図

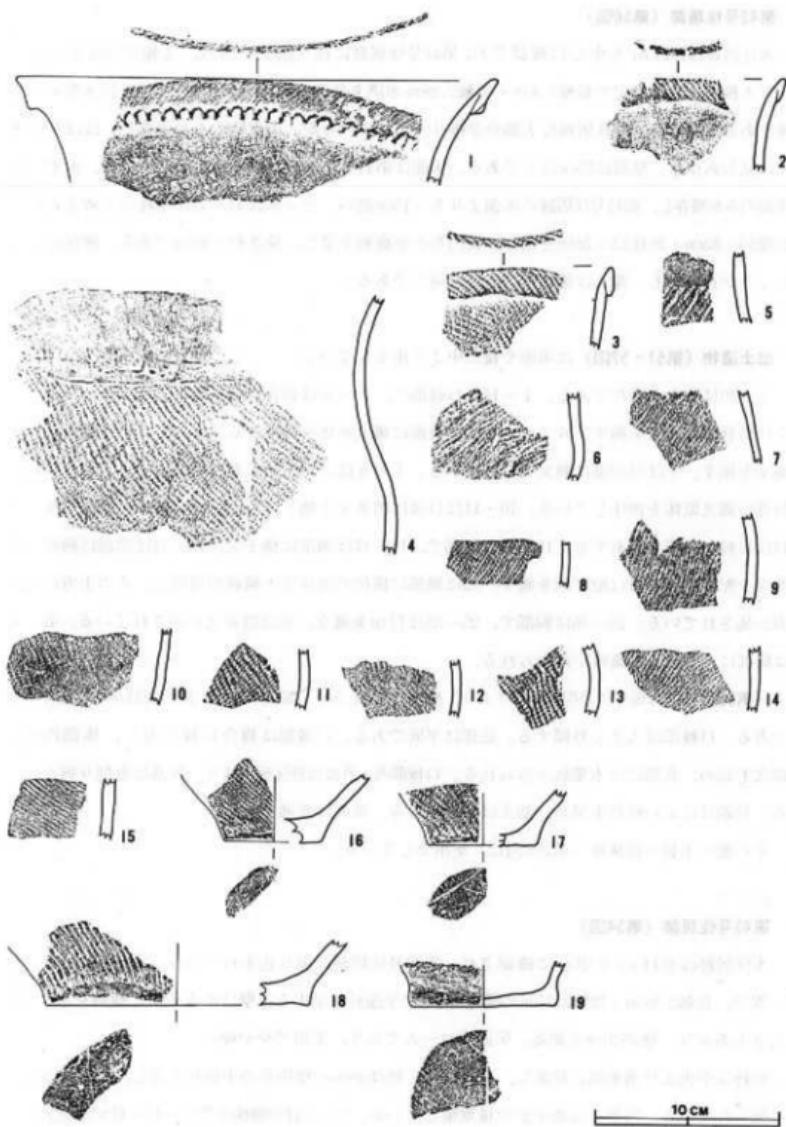
褐色土・暗褐色土・褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第49図）は西側の床面や床面直上より出土している。

【図版解説】
絞り口付縄文

1~19は弥生土器片である。1~3は複合口縁で口唇部に繩文を施し、口辺部に付加条繩文を施す。1は口辺下端に刻み目を有する。3は口辺部に付加条の繩文を施す。4~5は頸部であり、4は横位の沈線で頸部と胴部を区画し、頸部には刷毛目が窺え、煤が付着している。頸部には繩文が施されている。6~15は胴部片で、6~14は付加条繩文が施され、15は撚糸文が施されている。16~19は底部で、いずれも木葉痕がみられる。

その他に磨石（第211図11）・敲石（第212図20）が出土している。



第49図 第38号住居跡出土遺物拓影図

第42号住居跡（第50図）

本住居跡はE11b8を中心確認され、第41号住居跡に掘り込まれている。主軸方向はN-30.5°-Wと推定され、推定で長軸7.4m・短軸5.28mの隅丸長方形の平面形を呈し、比較的大型の住居跡である。壁は第41号住居跡に大部分が掘り込まれているが、南東壁のみが残存し、ほぼ垂直ぎみに立ちあがる。壁高は55cmほどである。床面は第41号住居跡に掘り込まれているが、南東側の床面のみが残存し、第41号住居跡の床面より5~15cm高い。ピットはP~Pが主柱穴と考えられ、長径55~83cm・短径13~28cmを測り、楕円形の平面形を呈し、深さ47~60cmである。壁付近に小ピットが存在する。覆土は第41号住居跡と同じである。

出土遺物（第51・52図）は床面や覆土中より出土している。

1~49は弥生土器片である。1~14は口縁部で、1~9は複合口縁を有し、1・2・3・5・7は口唇部に繩文を施す。6・8・9は口唇部に繩文原体を押圧する。1~7は口辺部に付加条繩文を施す。9は口辺部に刺突文を施す。1~5は口辺下端に刻み目を有する。10~14は口唇部に繩文原体を押圧している。10・11は口縁に撚糸文を施し、12・13は口縁に格子文を配し、14は口縁に柳描文を有する。15~24は頸部で、15~17は頸部に格子文、18~21は頸部に柳描の波状文を配し、19・21は縦区画を施す。22は頸部に横位の波状文と横線が周回し、その上方に縦区画が施されている。25~36は胴部で、25~35は付加条繩文、36は撚糸文が施されている。42~49は底部にいずれも木葉痕が認められる。

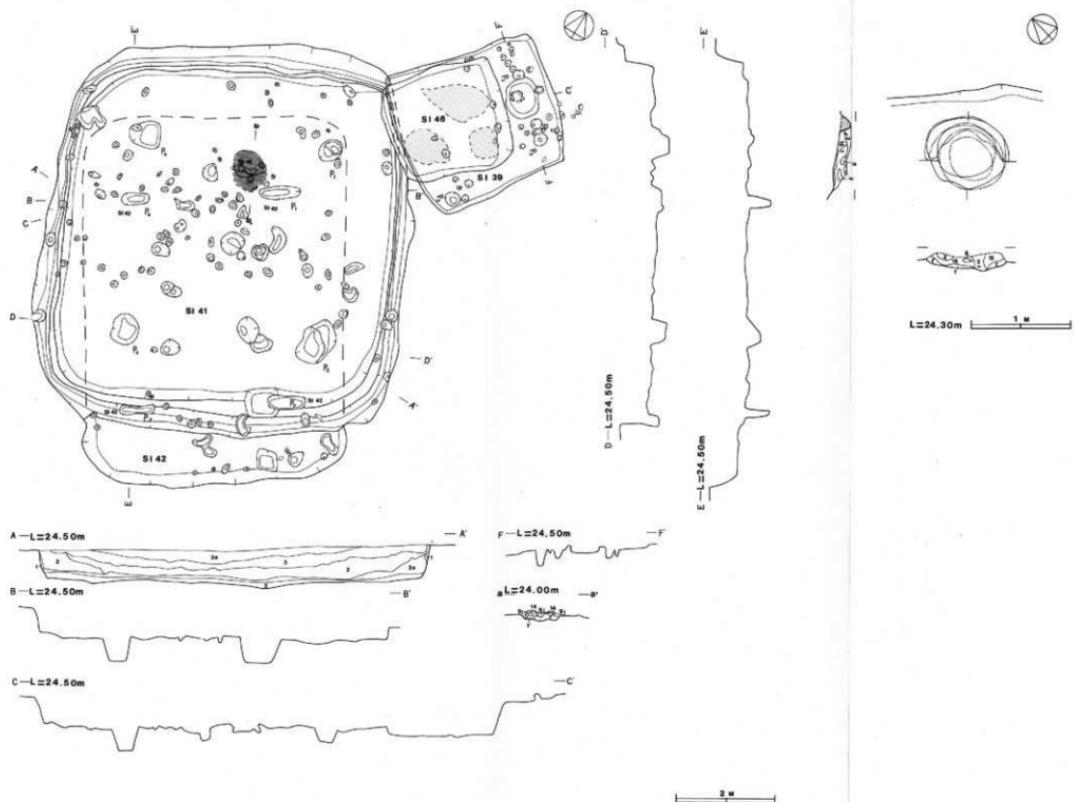
（第53図）1は弥生の手捏ね土器であり、推定口径11.5cm・器高2.8cm・推定底径5cm・現存部3/4である。口縁部は大きく外傾する。底部は平底である。口縁部は複合口縁を有し、体部内面に繩文を認め、底部には木葉痕がみられる。口縁部内・外面は押圧痕が残り、体部は箒削り痕がみえる。色調はにぼい橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

その他に土製の紡錘車（第205図12）が出土している。

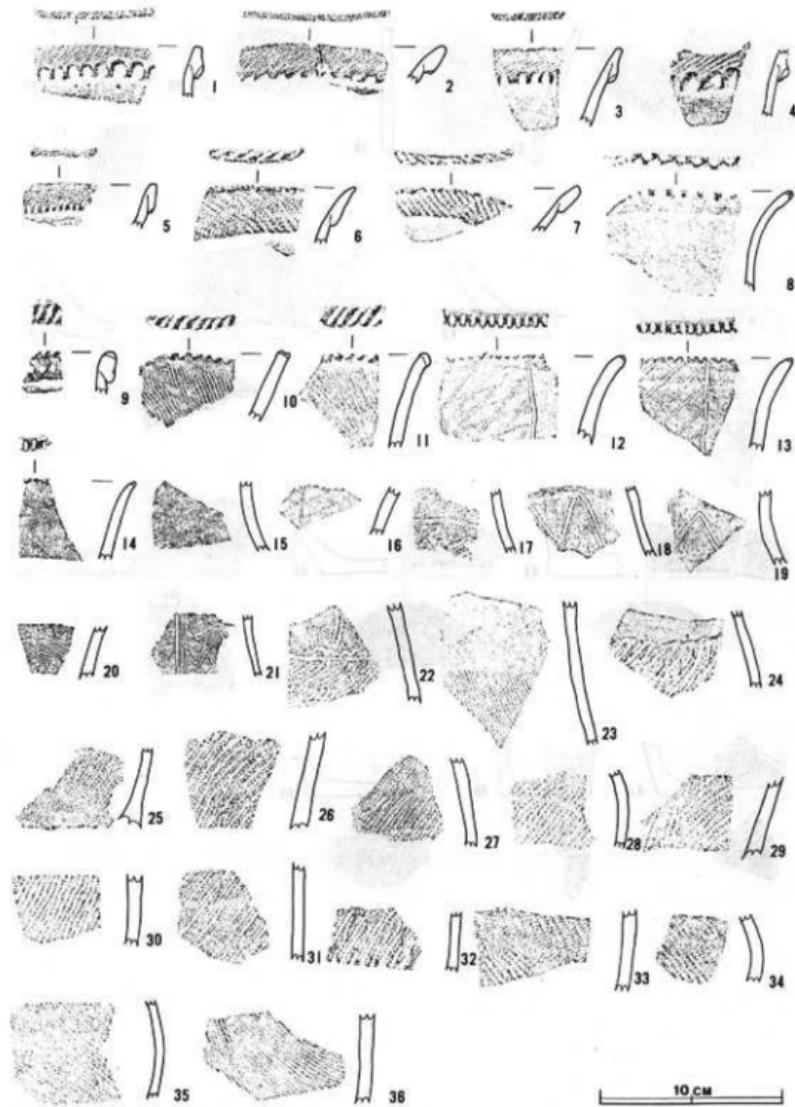
第43号住居跡（第54図）

本住居跡はE11a9を中心に確認され、第39号住居跡に掘り込まれている。主軸方向はN-21°-Wで、長軸3.57m・短軸2.75mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はゆるやかに傾斜を示しながら立ちあがり、壁高20cmを測る。床面はロームであり、平坦でやや硬い。

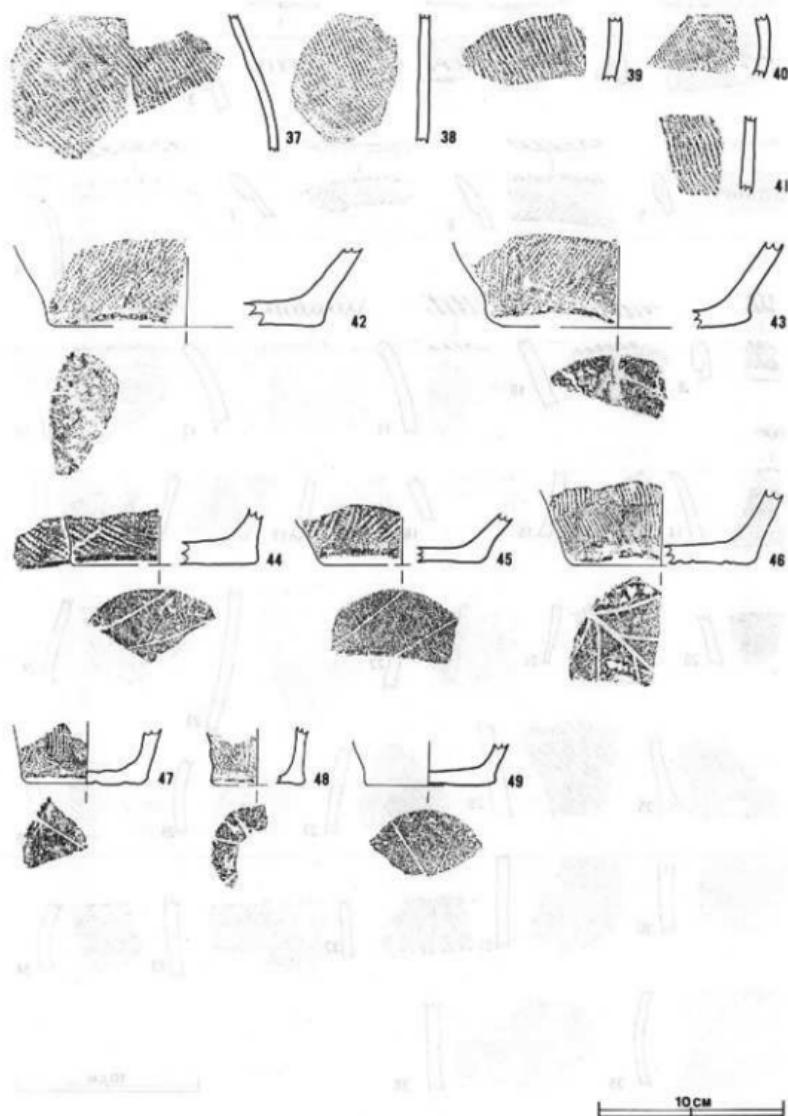
炉跡は中央より南東側に位置し、長径72cm・短径59cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に5cmほど掘られている。内部には焼土が少量堆積している。ピットは10個検出され、日~日が主柱穴と考えられるが、明確ではない。長径は22~30cmを測り、深さは26~59cmを測る。壁付近にも小ピットが散在する。覆土は擾乱を受けているが、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。



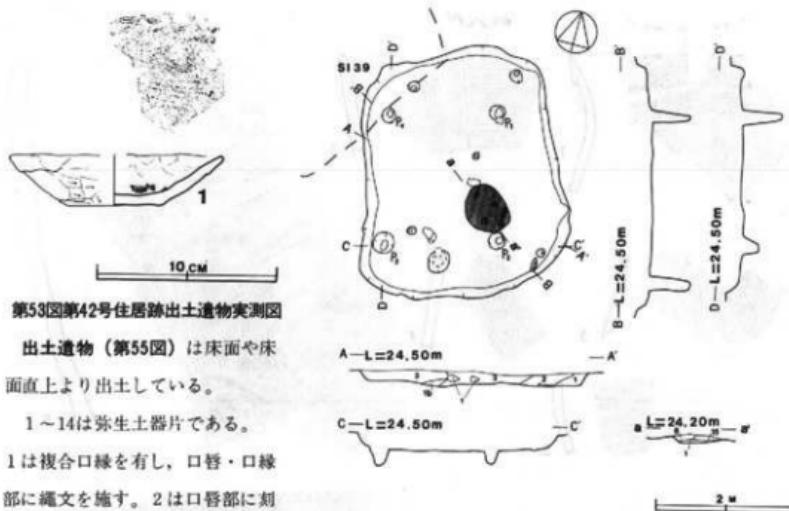
第50図 第39・41・42・46号住居跡、第39号住居跡カマド実測図



第51図 第42号住居跡出土遺物拓影図



第52図 第42号住居跡出土遺物拓影図



第53図 第42号住居跡出土遺物実測図

出土遺物（第55図）は床面や床面直上より出土している。

1～14は弥生土器片である。

1は複合口縁を有し、口唇・口縁部に縄文を施す。2は口唇部に刻み目を有し、口縁部は櫛撻で縦区

画を施し、区画内に横線を充填する。3～5は頸部で横描文を配している。3は横線を周回させ、縦区画を施し、区画内に波状文と横線を充填している。4は縦区画を施す。5は波状文である。6～11は胸部で、6～8は縄文を施している。7・8は付加条縄文を施す。9～11は撻糸文を施している。12～14は底部で、いずれも木葉痕がみられる。

第54図 第43号住居跡実測図

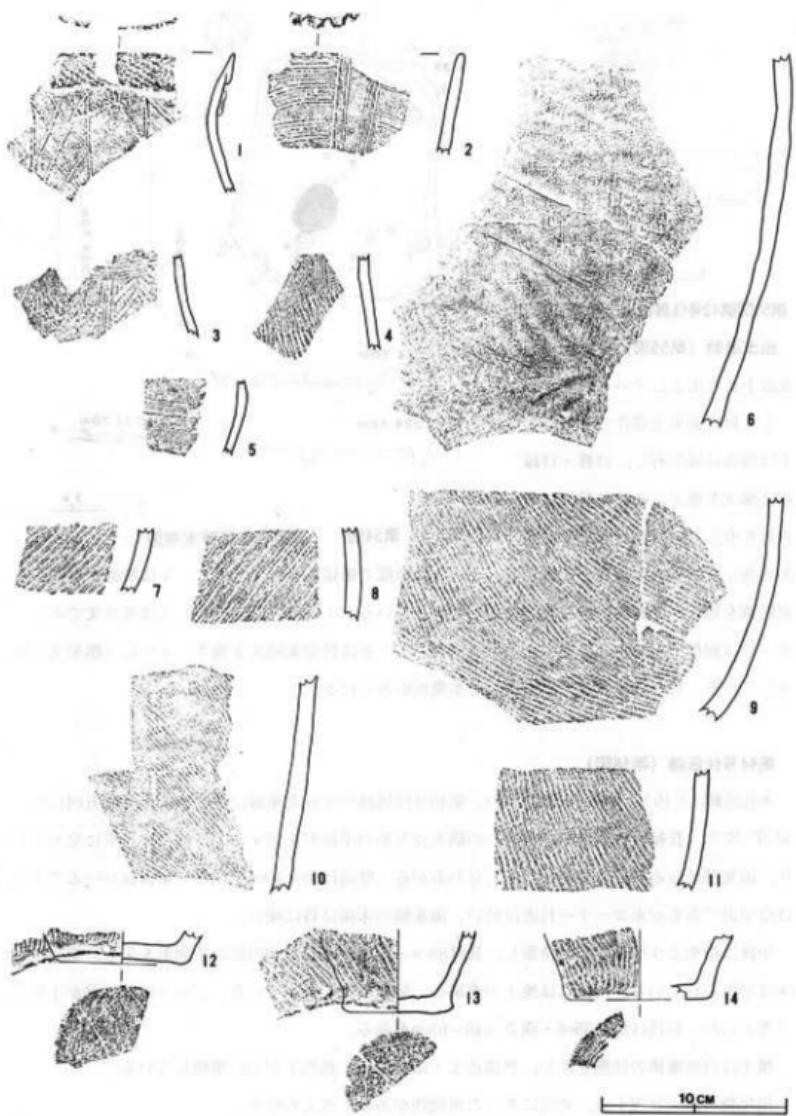
第44号住居跡（第56図）

本住居跡はE10 b6を中心確認され、第45号住居跡の4 m北東側に位置する。主軸方向はN-51.5°-Wで、長軸4.77m・短軸3.80mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、南東壁はゆるやかに傾斜しながら立ちあがる。壁高は30～40cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦であるが東コーナー付近は低い。南東側の床面は特に硬い。

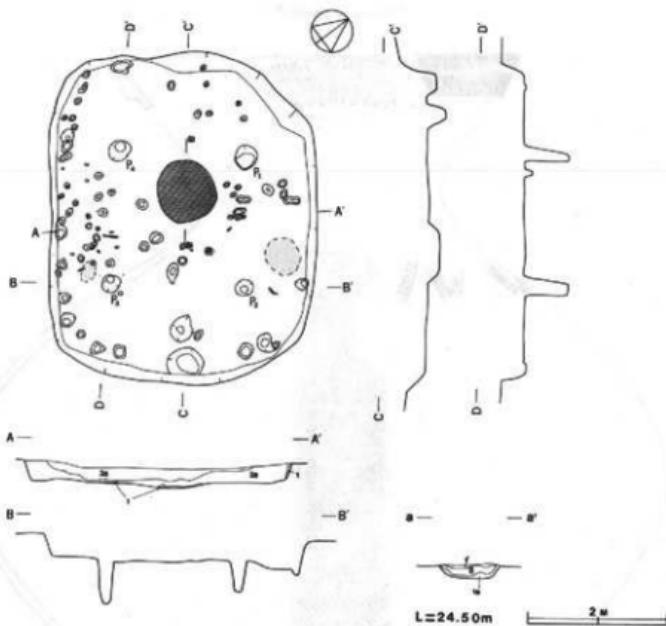
炉跡は中央よりやや北側に位置し、長径89cm・短径85cmのほぼ円形の平面形を呈し、皿状に17cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはR～R₁が主柱穴と考えられ、長径は25～35cm・深さは45～65cmを測る。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主に堆積している。

炭化物の出土状況から、火災にあった可能性があると考えられる。



第55図 第43号住居跡出土遺物拓影図



第56図 第44号住居跡実測図

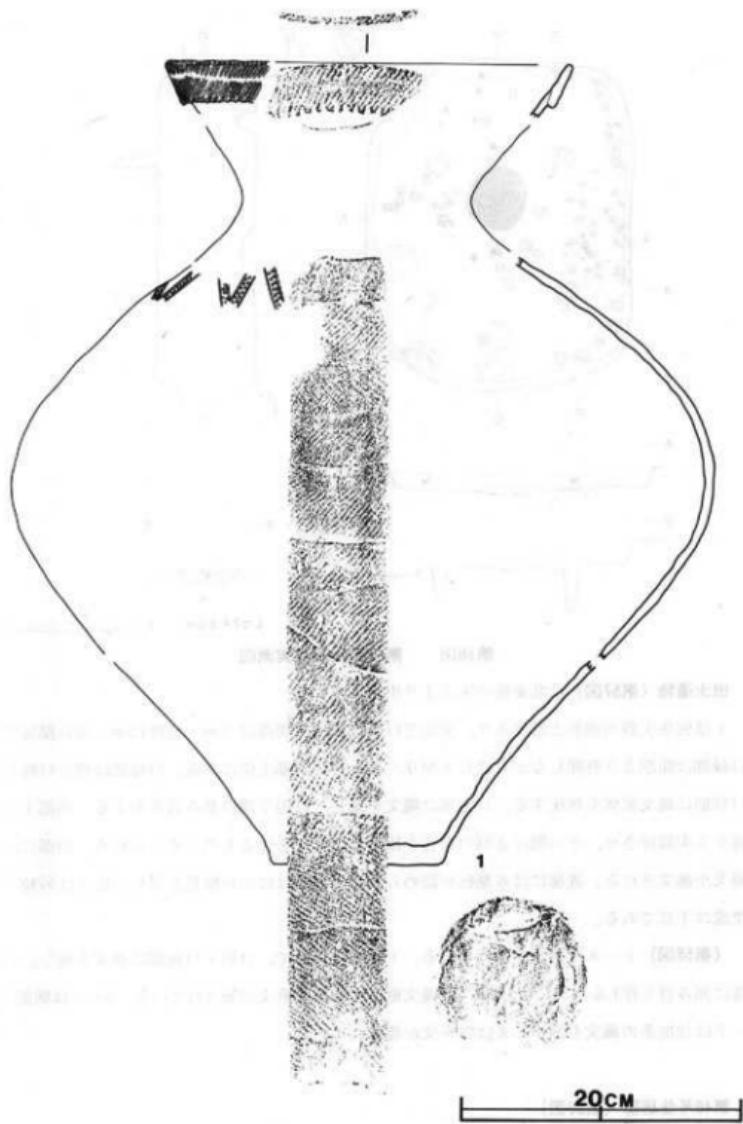
出土遺物（第57図）は北東側の床面より出土している。

1は弥生土器の壺形土器であり、推定で口径29.5cm・現高57.5cm・底径12cm・現存部3/4である。口縁部は頸部より外傾しながら立ちあがり、最大径は胴部上位にある。口縁部は複合口縁を有し、口唇部に縄文原体を押す。口辺部に縄文を施し、口辺下端に刻み目を有する。頸部下位に沈線を2本周回させ、その間に2列の刺突を施し、山形文を作るものと考えられる。胴部には羽状縄文が施される。底部には木葉痕が認められる。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は不良である。

（第58図）1～8は弥生土器片である。1は複合口縁で、口唇・口縁部に縄文を施し、口縁下端に刻み目を有する。3・4は頸部で、縄文原体の側面圧痕文が施されている。5～8は胴部で、5～7は付加条の縄文を施す。8は撚糸文が施されている。

第49号住居跡（第59図）

本住居跡はD 8 j₇・E 8 a₇に確認され、第48号住居跡の10m東側に位置する大型の住居跡である。主軸方向はN-47.5°-Wで、長軸9.17m・短軸7.71mの隅丸長方形の平面形を呈する。



第57図 第44号住居跡出土遺物実測図



第58図 第44号住居跡出土遺物拓影図

壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがり、南東壁はややゆるやかに立ちあがり、北西壁は外反しながら立ちあがる。壁高は45~64cmほどで、東コーナー部が高い。北東壁のはば中央部に、長径200cm・短径100cmの張り出し部が存在している。床面はロームで、中央部が僅かに低いがほぼ平坦である。全体的に硬く、特に中央より西側は硬い。

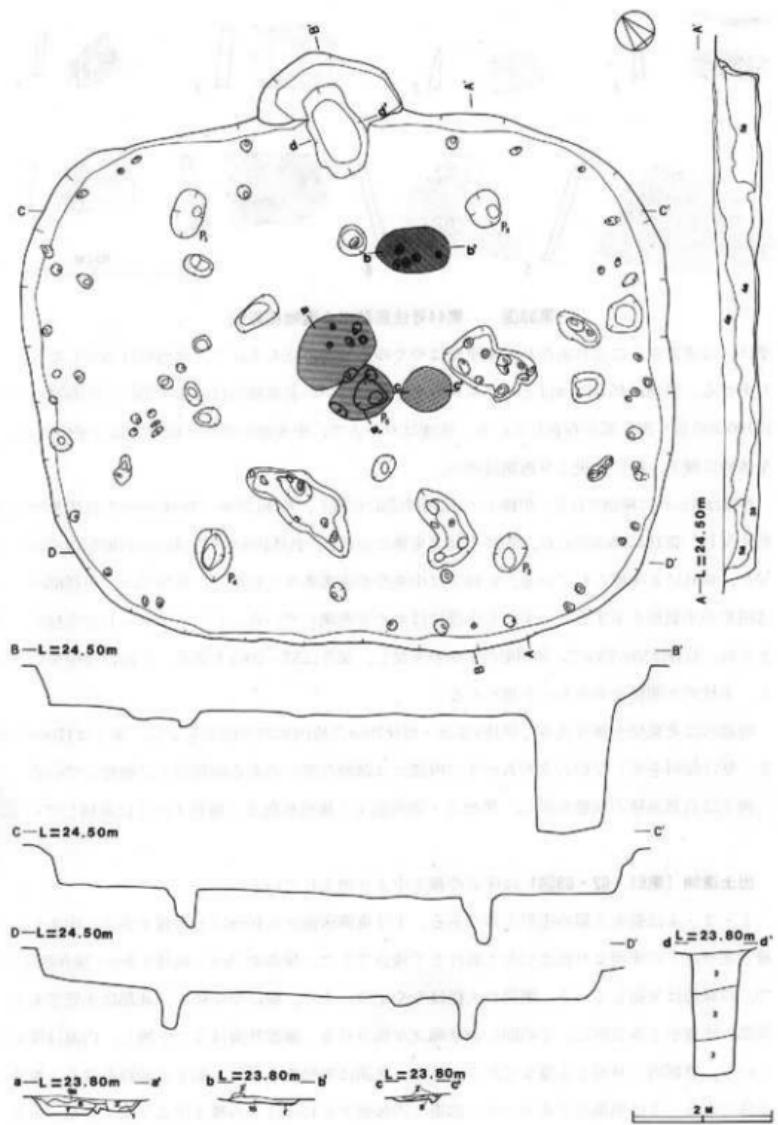
炉跡は3か所に検出される。炉跡1はほぼ中央部に位置し、長径125cm・短径96cmの橢円形の平面形を呈し、皿状に25cm掘られ、炉跡2は北東側に位置し、長径105cm・短径64cmの卵形の平面形を呈し、皿状に8cm掘られている。炉跡3は中央やや南東寄りに位置し、長径75cm・短径65cmのはば円形の平面形を呈する。いずれも内部には焼土が充满している。ピットはR~Rが主柱穴と考えられ、長径は55~75cmで、橢円形の平面形を呈し、深さは57~70cmを測る。Rはほぼ中央に位置し、主柱穴と関係があるものと思われる。

貯蔵穴は北東壁を掘り込み、長径135cm・短径70cmの橢円形の平面形を呈し、深さは170cmを測る。壁は傾斜を示しながら立ちあがり、内部には微妙な違いのある暗褐色土が堆積している。

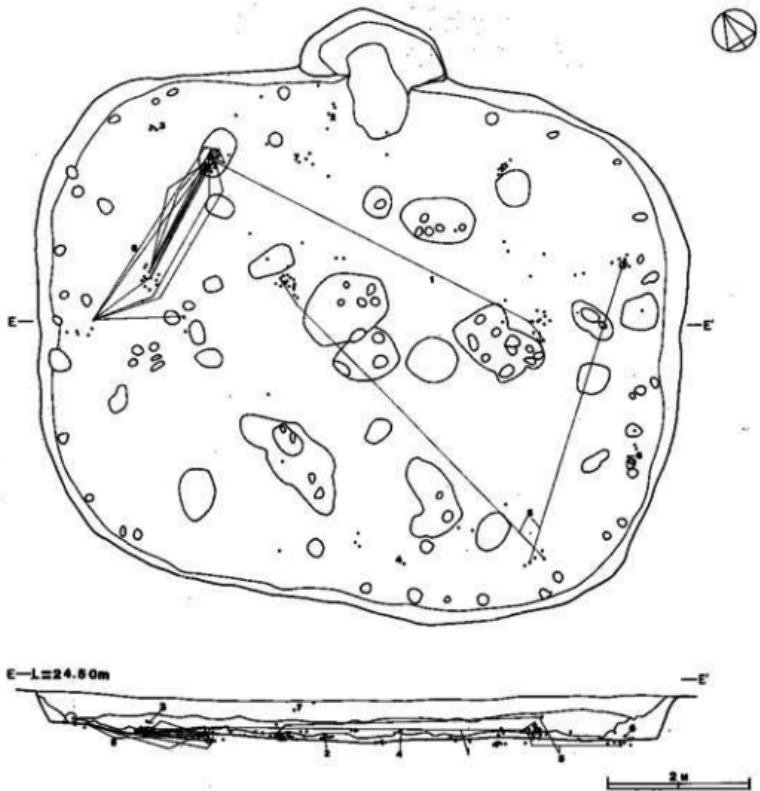
覆土は自然堆積の状態を示し、黒色土・黒褐色土・極暗褐色土・褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第61・62・63図）は床面や覆土中より出土している。

1・3・4は弥生土器の壺形土器である。1は東側床面から10cmほどの覆土中より出土した土器と北壁近くの床面より出土した土器片とで接合できた。現高39.5cm・底径9.8cm・現存部36cmほどで、口縁部は欠損している。胴部最大径はやや上位にあり、胴はやや張る。底部は平底である。頸部に沈線が2本周回し、その間に羽状繩文が施される。胴部外面はなでを施し、内面は摩滅している。底部内・外面とも艶なでがみられる。色調は明褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は不良である。3は頸部片で北コーナー部寄りの床面から15cmほどの覆土中より出土した。頸部には刷毛目整形後、櫛掃で縦区画を施し、区画内に波状文を充填する。4は口縁部であり、南西側床面から12cmの覆土中より出土した土器片と覆土上層より出土した土器片とで接合できた。口径



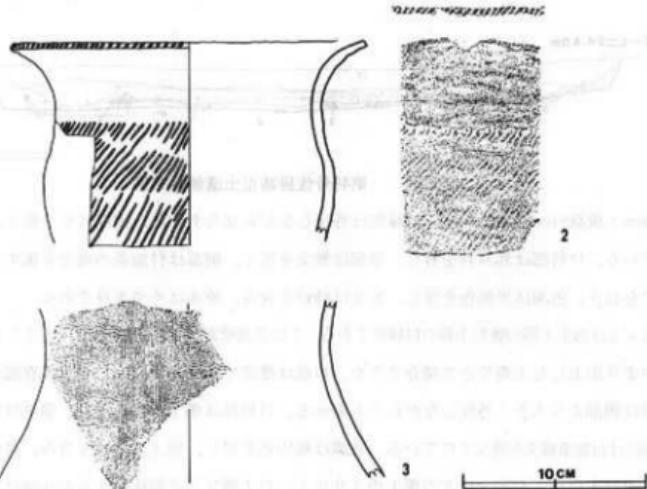
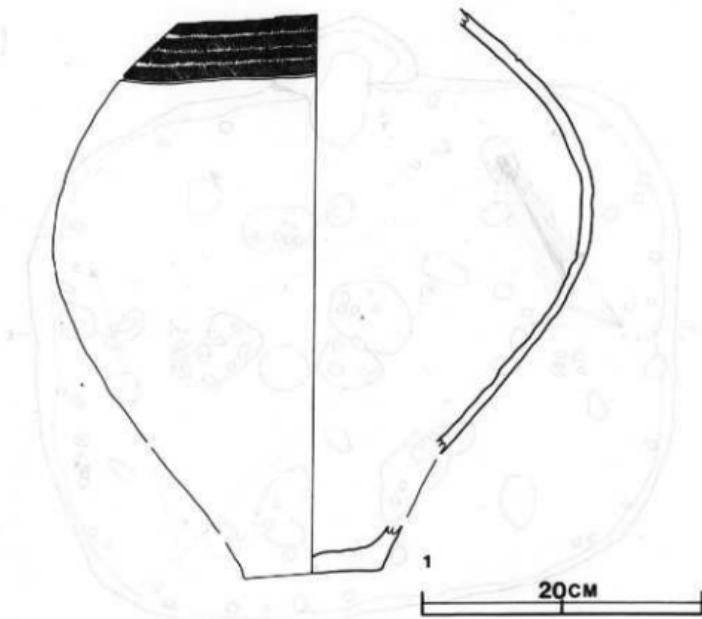
第59図 第49号住居跡実測図



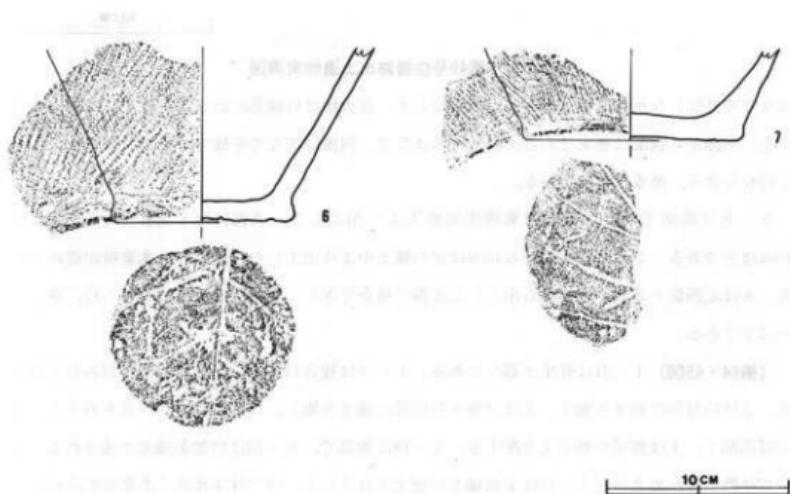
第60図 第49号住居跡出土遺物分布図

17.4cm・現高21cmほどである。口縁部は外反しながら立ちあがる。胴部はやや張り、底部は欠損している。口唇部は刻み目を有し、頸部は無文を置く。胴部は付加条の縄文を施す。頸部外面はなでを行う。色調は黒褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成はやや不良である。

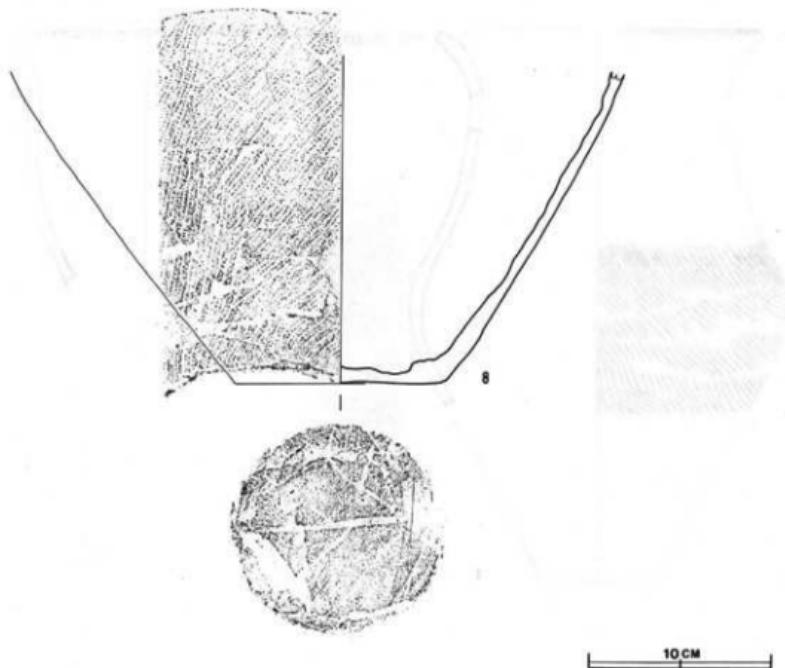
2・5は弥生土器の変形土器の口縁部である。2は北東壁寄りの床面直上から出土した土器片と覆土中より出土した土器片とで接合できた。口径は推定で19cm・現高は11cm・現存部5cmである。口縁部は頸部より大きく外反しながら立ちあがる。口唇部は縄文原体を施し、頸部は無文を置く。胴部には付加条縄文が施文されている。色調は褐灰色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良である。5は南側床面から約30cmほどの覆土中より出土した土器片と北側床面から約10cmほどの覆土中より出土した土器片、東側床面・南側床面から約10cmの覆土中より出土した土器片、更に覆土上層の土器片とで接合できた。口径は15.2cm・現高は14cm・現存部5cmである。底部は欠損している。口縁部は頸部



第61図 第49号住居跡出土遺物実測図



第62圖 第49號住居跡出土遺物實測圖

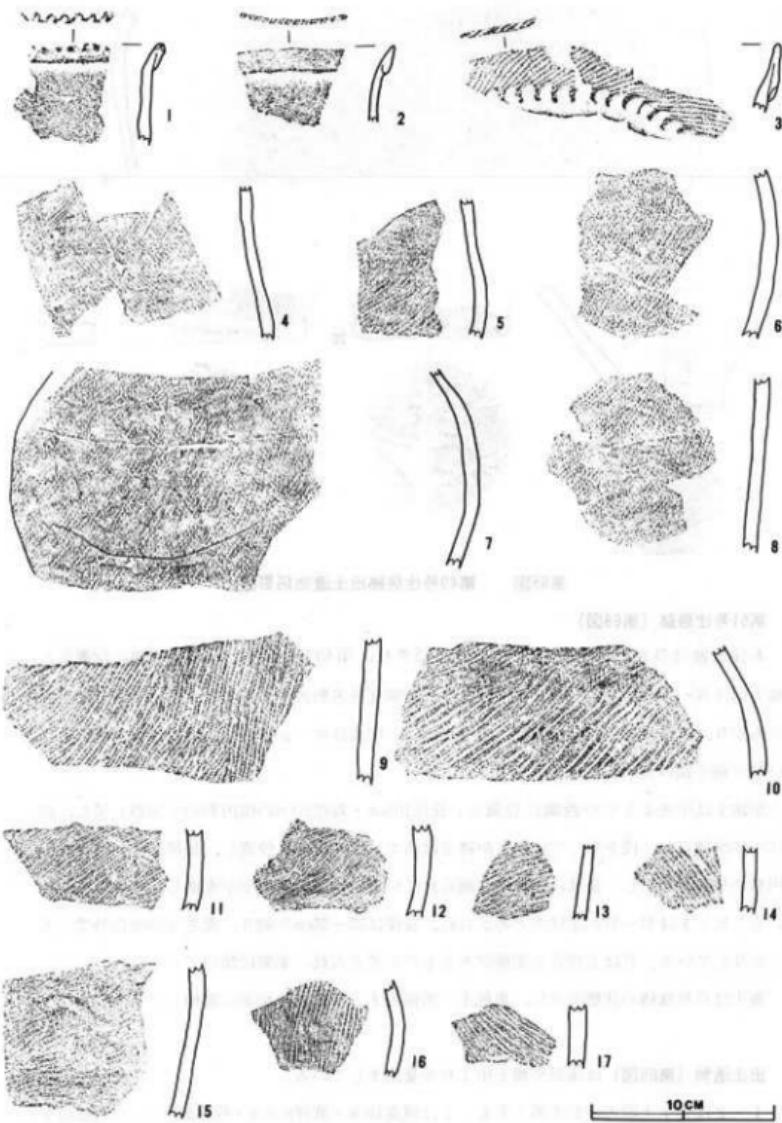


第63図 第49号住居跡出土遺物実測図

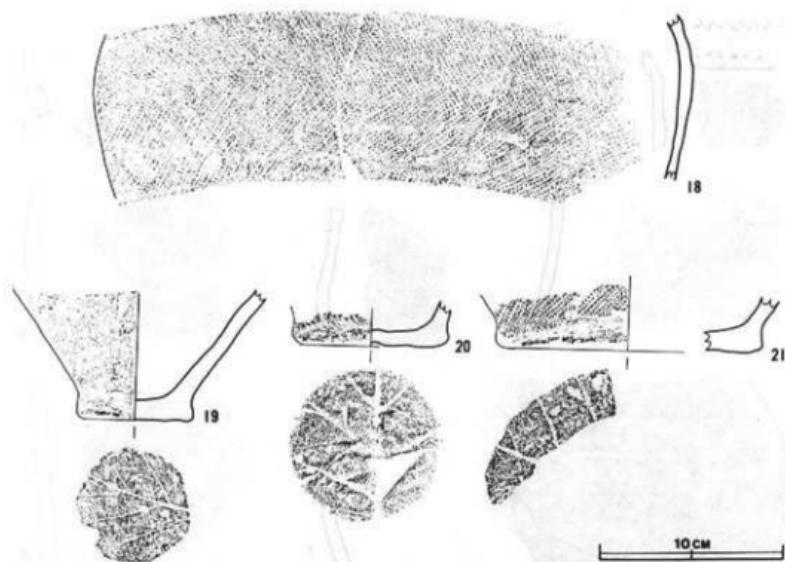
よりやや外反しながら立ちあがる。胴部は張らず、最大径は口縁部にある。口唇部に刻み目を有する。頸部から胴部は無文である。胴部外面はなで、内面は寛なでを施す。色調は褐灰色、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

6～8は底部である。6は南東側床面直上より出土した。底部には木葉痕がみられ、底径10cmほどである。7は北側床面から40cmほどの覆土中より出土した。底部には木葉痕が認められる。8は北西側と北側の床面から出土した土器で接合できた。底部には木葉痕がみられ、底径12cmほどである。

(第64・65図) 1～21は弥生土器片である。1～3は複合口縁で、1は口唇部に刻み目を有する。2は口唇部に繩文を施す。3は口唇・口辺部に繩文を施し、口辺下端に刻み目を有する。4・5は頸部で、4は櫛描の格子文を配する。6～18は胴部で、6～13は付加条繩文が施される。14～17は撚糸文が施文される。18は羽状繩文が施文されている。19～21は底部で木葉痕がみられる。その他に土製の紡錘車(第205図10)が出土している。



第64図 第49号住居跡出土遺物拓影図



第65図 第49号住居跡出土遺物拓影図

第51号住居跡（第66図）

本住居跡は D 8 i9・D 8 i0を中心確認され、第49号住居跡の4m北東側に位置する。主軸方向は N-64°-Wで、長軸6m・短軸5mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は45~65cmを測り、南壁が高い。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬く、北西側は特に硬く踏み固められている。

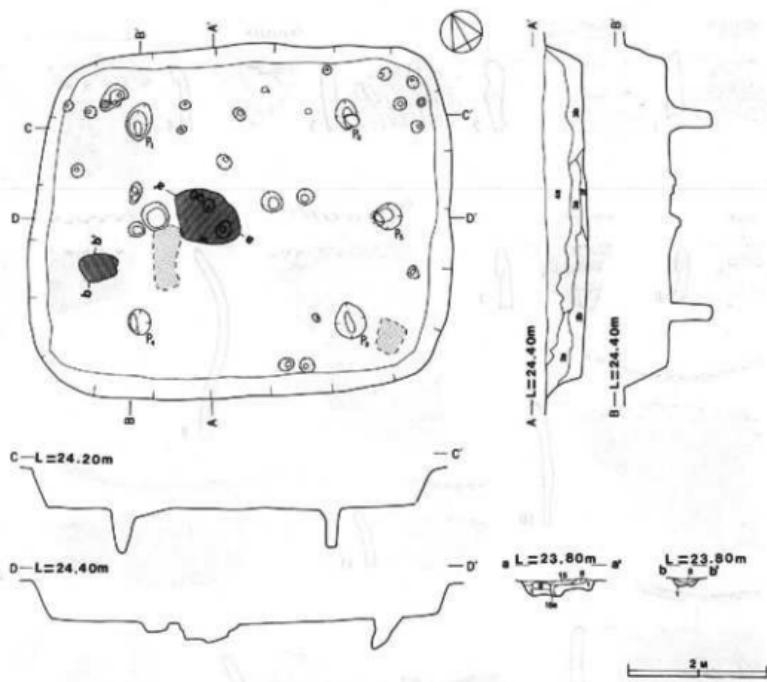
炉跡1は中央よりやや西側に位置し、長径105cm・短径80cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に15~20cm掘られ、段をなしている。炉跡2は西コーナー付近に位置し、長径50cm・短径35cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に10cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはR~Pが主柱穴と考えられ、長径は35~55cmを測り、深さは60cm内外で、太くしっかりしている。Rは主柱穴と関係があるものと考えられ、東側に傾いている。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒色土・黒褐色土・暗褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第69図）

は床面や覆土中より少量出土している。

1・2は弥生土器の壺形土器である。1は現高18cm・底径8.6cm・現存部劣化で、口縁部は欠損している。胴部最大径は上位にあり、胴部に燃糸文が施文されている。底部には木葉痕がみられる。2は口径12cm・現高11cmの口縁部および胴部片である。口縁部は頸部より外反している。口唇



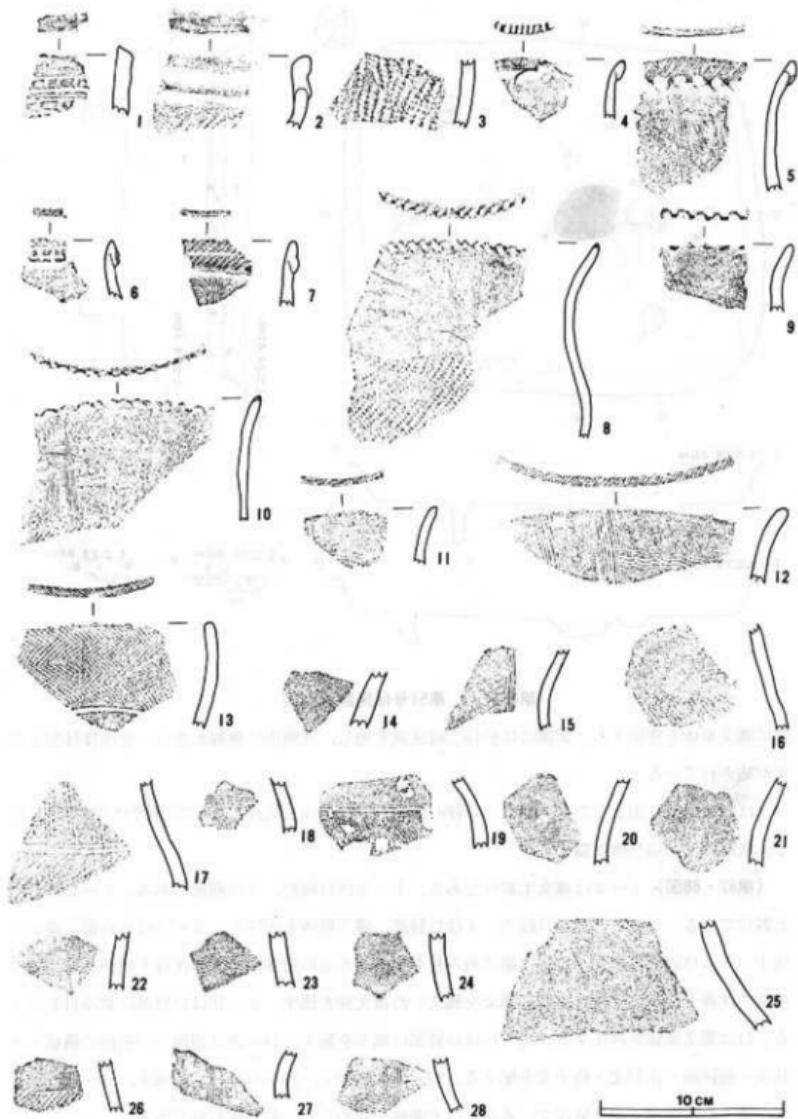
第66図 第51号住居跡実測図

部に縄文原体を押圧する。頸部には横描で縦区画を施し、区画内に横線が走る。胴部は付加条縄文が施されている。

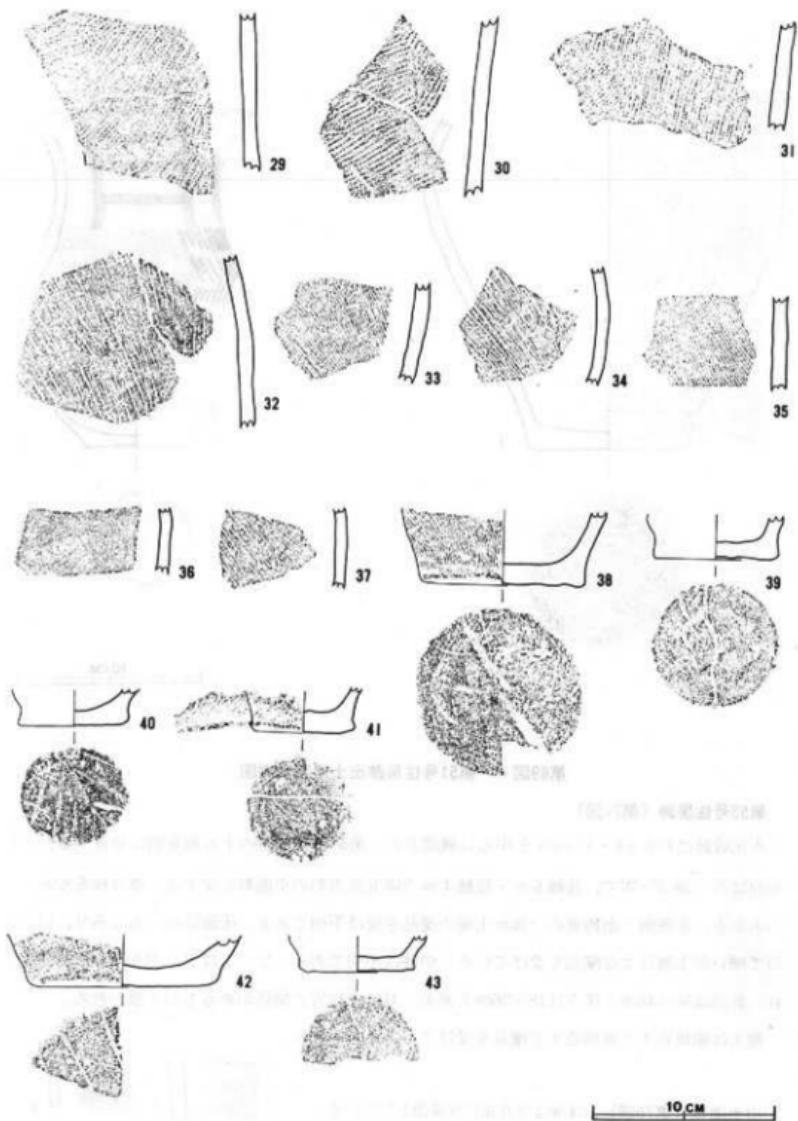
3は覆土中より出土した灯明皿で、口径8.2cm・器高2.2cm・底径5.4cmの完形でロクロ整形である。底部には糸切り痕が見える。

(第67・68図) 1~3は縄文土器片である。1・2は口縁部、3は胴部である。4~43は弥生土器片である。4~7は複合口縁で、4は口唇部に縄文原体を押圧し、5~7は口唇部に縄文を施す。5は口辺部に縄文・口辺下端に刻み目を施す。6は口辺部に2本の沈線を周回させ、更に擬位の沈線を施す。7は口辺部に縄文を施文した後沈線を施す。8~10は口唇部に刻み目を有する。11は縄文原体を押圧する。12・13は口唇部に縄文を施す。14~28は頸部で、横描の横線・波状文・縦区画・山形文・格子文を配する。29~37は胴部で、29~31は付加条縄文、32~37は撚糸文が施される。38~43は底部で、底部には木葉痕が認められ、43は布目痕である。

その他の遺物としては、土製の紡錘車（第205図11）・磨石（第211図13）・敲石（第212図22）・石器（第214図45）が出土している。

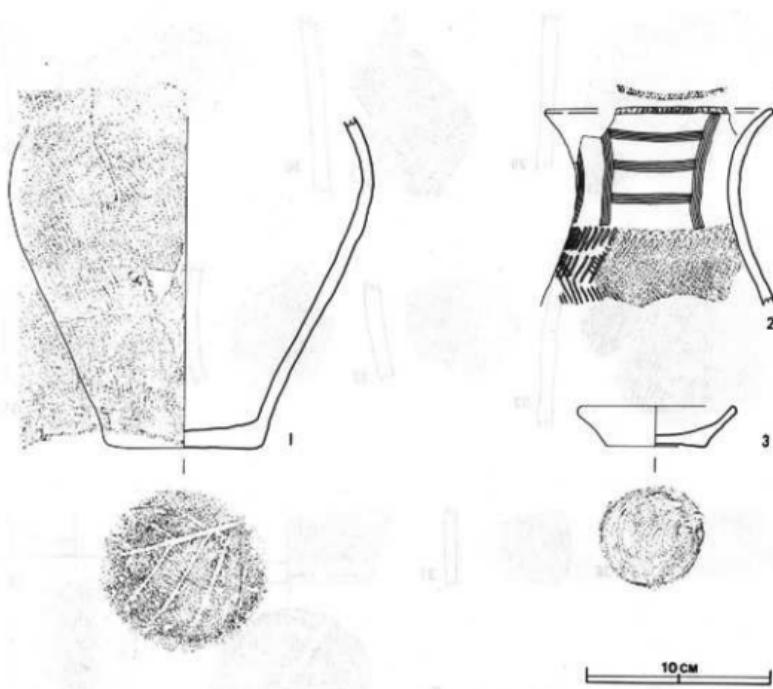


第67图 第51号住居跡出土遺物拓影圖



第68図 第51号住居跡出土遺物拓影図

（写真：大河内義典、監修：田中良輔）



第69図 第51号住居跡出土遺物実測図

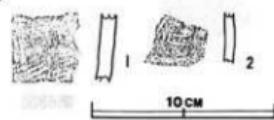
第53号住居跡（第71図）

本住居跡はD 8 c8・D 8 c9を中心確認され、第55号住居跡の1m南東側に位置する。主軸方向はN-38.5°-Wで、長軸5m・短軸4mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがる。北西側と南西側の一部が土壤の擾乱を受け不明である。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬いが土壤による擾乱を受けている。炉跡は不明である。ピットはP₁～P₄が主柱穴と考えられ、長径は35～45cm・深さは18～36cmを測る。P₄は主柱穴と関係があるものと思われる。

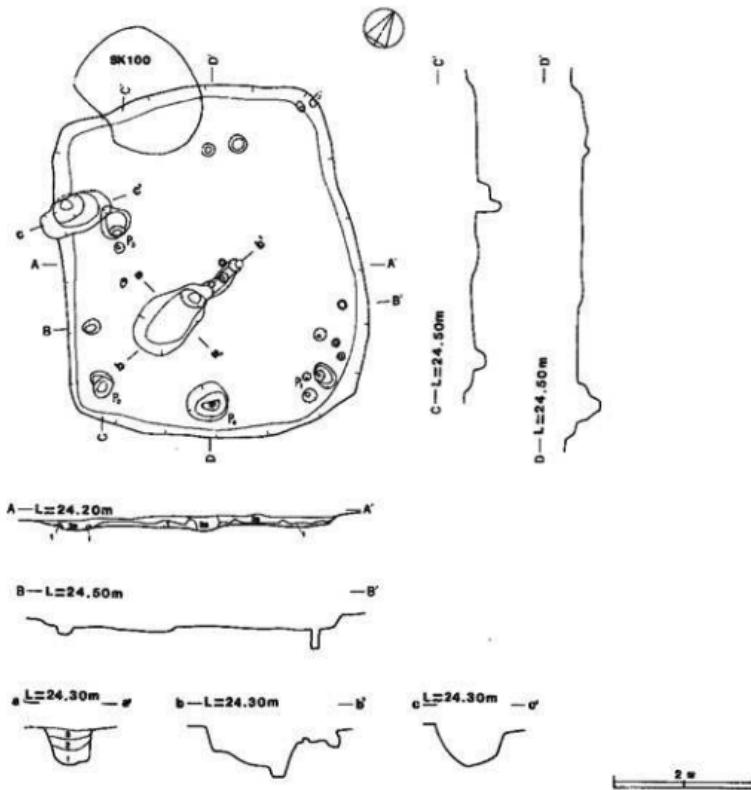
覆土は暗褐色土・黒褐色土で擾乱を受けていると思われる。

出土遺物（第70図）は床面より非常に少量出土している。

1・2は弥生土器片である。1は頭部であり、2は胴部で縄文を配する。



第70図 第53号住居跡出土遺物拓影図

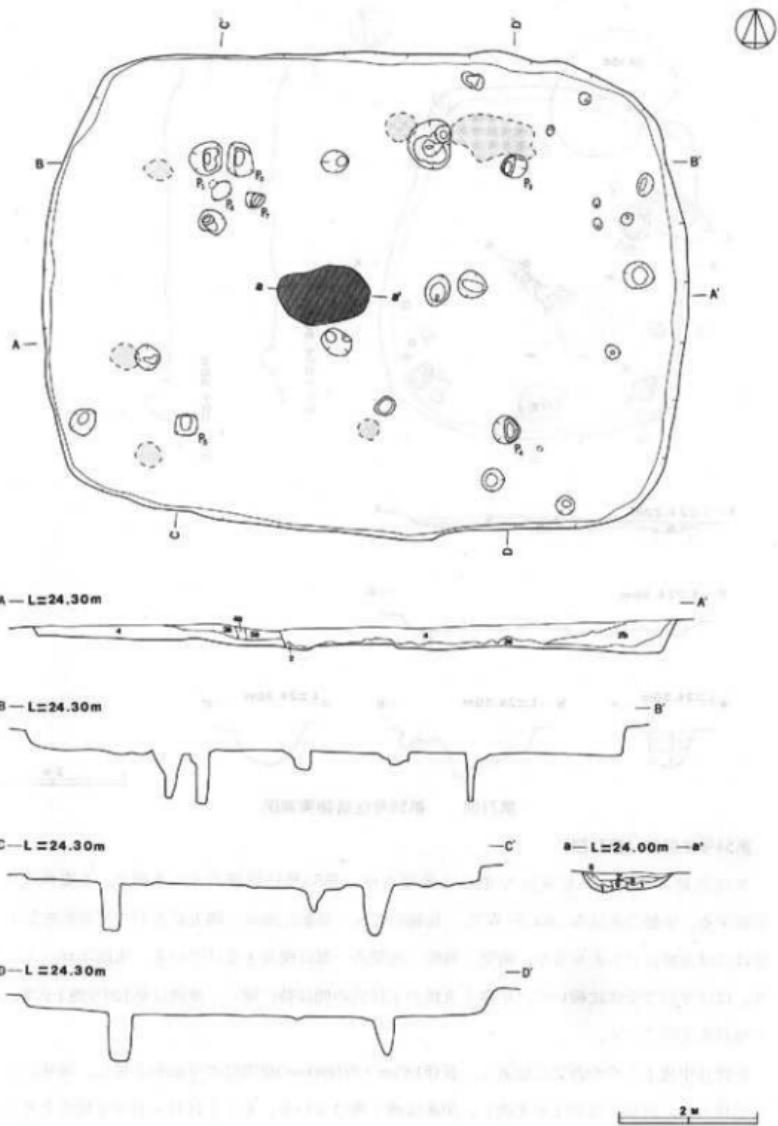


第71図 第53号住居跡実測図

第54号住居跡（第72図）

本住居跡はC8j₆・C8j₇を中心確認され、第55号住居跡の4m北側で、北端縁辺部に位置する。主軸方向はN-83.5-Wで、長軸9.27m・短軸6.88mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがるが、南壁・西壁・北壁の一部は擾乱を受けている。床面はロームであり、ほぼ平坦で全体に硬いが、炉跡と東側の主柱穴の間は特に硬い。南側は第120号地下式窯により擾乱を受けている。

炉跡は中央よりやや西側に位置し、長径130cm・短径80cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に25cmほど掘られ、内部には焼上が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはB₁～B₄が主柱穴と考えられ、長径は30～50cm・深さは70～80cmを測る。北西側の主柱穴B₁・B₂に対し、B₃・B₄は関係あるものと考えられる。覆土は一部擾乱がみられるが、自然堆積の状態を示し、黒色土・黒褐色土・



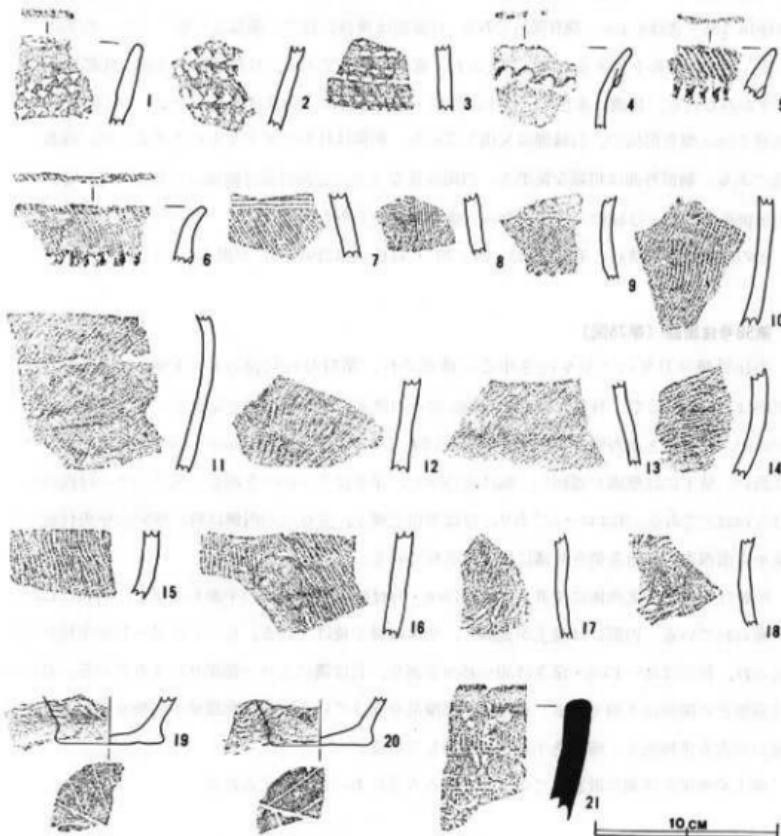
第72図 第54号住居跡実測図

暗褐色土が主に堆積している。

焼土のあり方から火災にあった可能性が窺える。

出土遺物（第73図）は床面や床面よりやや浮いた状態で少量出土している。

1～3は縄文土器片で、1は口縁部、2・3は胴部である。4～20は弥生土器片で、4～6は複合口縁を有し、5は口辺部に斜位の沈線を配し、4・6は口唇・口辺部に縄文を施す。4～6は口辺下端に刻み目を有す。7～9は頸部で、7は横線、8は縦区画を施し、区画内に沈線文を配する。いずれも櫛描文である。10～18は胴部で縄文を施す。19・20は底部で木葉痕がみられる。21は須恵



第73図 第54号住居跡出土遺物拓影図

器の口縁部である。縄文土器片と須恵器片は覆土中より出土している。



第74図 第54号住居跡出土遺物実測図

(第74図) 1・2は覆土中より出土した土師器の壺形土器である。1は口縁部と底部のみで、口径18.1cm・底径8.4cm・現存部分である。口縁部は複合口縁で、頭部より鋭く「く」の字に外傾する。胸部は球形を呈するものと考えられ、底部は平底である。口縁部内・外面、底部外面は範磨きがみられる。色調は赤色で、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。2は現高15cm・底径7cm・現存部分で、口縁部は欠損している。胸部は球形を呈するものと考えられ、底部は平底である。胸部外面は粗雑な範磨き、内面は範なで、底部外面は範削りが施されている。色調は黒褐色で、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

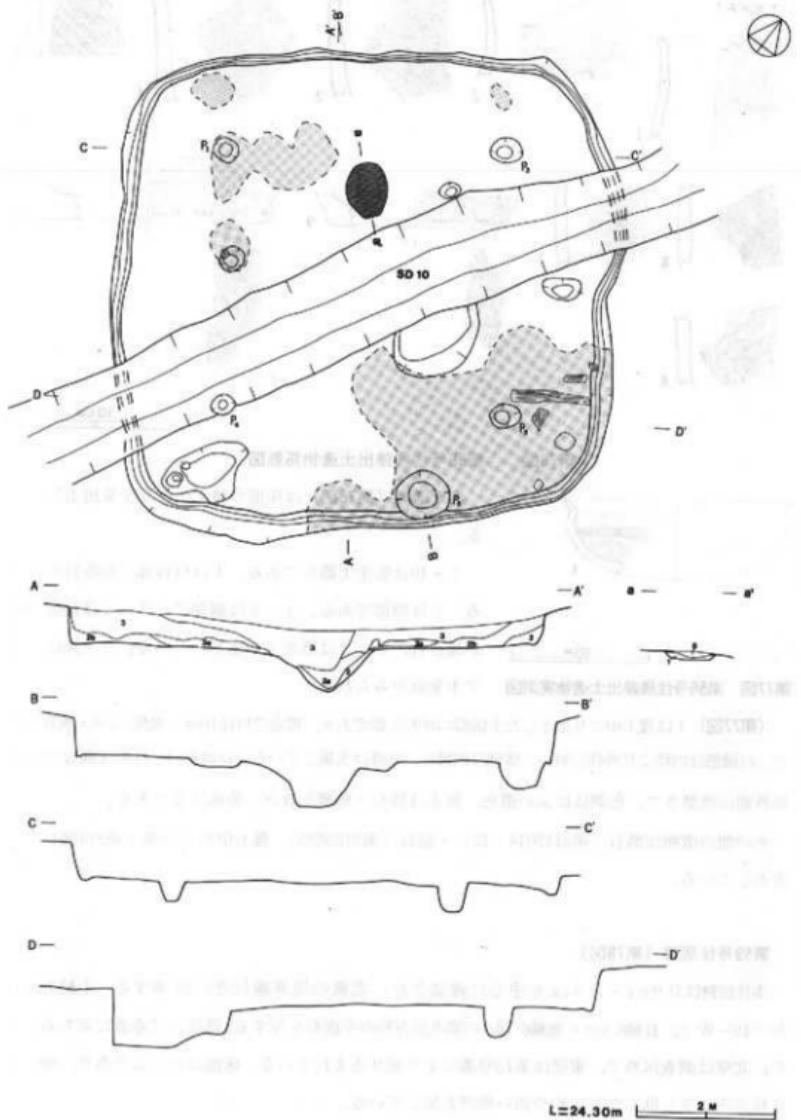
その他の遺物は敲石(第212図23・24・26)・石核(第216図55)が出土している。

第58号住居跡(第75図)

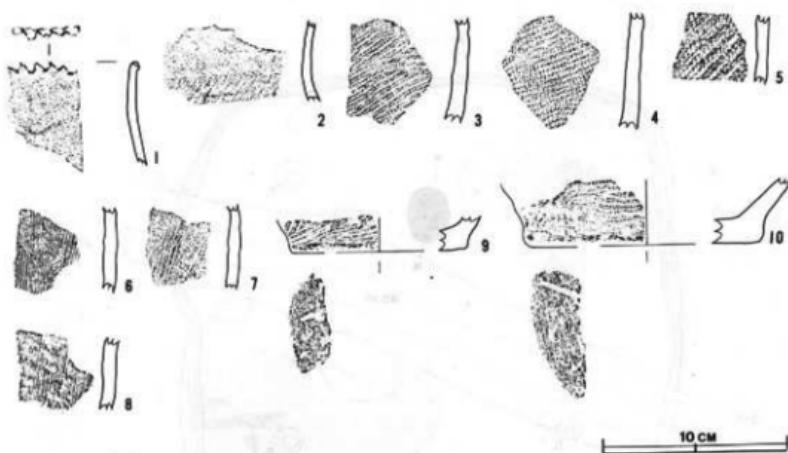
本住居跡はD9i2・D9j2を中心に確認され、第51号住居跡の4m東側に位置する。主軸方向はN-51°-Eで、長軸7.23m・短軸6.85mの隅丸方形の平面形を呈する。壁は垂直に立ちあがるが、北東壁と南西壁は第9号溝に掘り込まれている。壁高は20~60cmを測り、北コーナー付近は低い。壁下には壁溝が周回し、幅は約15cmで、深さは5~10cmを測る。東コーナー付近の壁高は5cmほどである。床はロームであり、ほぼ平坦で硬く、主柱穴の内側は特に硬い。中央付近を北東から南西方向に走る第9号溝に掘り込まれている。

炉跡は中央より北西側に位置し、長径75cm・短径60cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に12cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはR~Pが主柱穴と考えられ、長径は35~45cm・深さは30~45cmを測り、Rは溝により一部掘り込まれている。Rは本住居跡との関係は不明である。覆土は一部擾乱を受けているが、自然堆積の状態を示し、微妙な違いのある黒褐色土・暗褐色土が主に堆積している。

焼土や木炭が床面に散在していることから火災にあったと考えられる。



第75図 第58号住居跡実測図



第76図 第58号住居跡出土遺物拓影図

出土遺物（第76図）は床面や覆土中より少量出土している。

1～10は弥生土器片である。1は口縁部で刻み目を有する。2は頭部である。3～8は胸部で、3～5は付加条縄が施され、6～8は撚糸文が施されている。9・10は底部

第77図 第58号住居跡出土遺物実測図

で木葉痕がみられる。

（第77図）1は覆土中より出土した土器師の環形土器であり、推定で口径16cm・現高5.7cm・現存部分で、口縁部は内稜より外傾し短い。体部は内脣し、底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、体部外面は荒磨きで、色調はにぶい橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。

その他の遺物は磨石（第211図14・15）・敲石（第212図25）、覆土中から石錐（第214図47）が出土している。

第59号住居跡（第78図）

本住居跡はD 9c4・D 9c5を中心確認され、北側の境界線付近に位置する。主軸方向はN-49°-Wで、長軸8.5m・短軸6.78mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがるが、北壁は調査区外で、東壁は第13号溝により掘り込まれている。床面はロームであり、硬く、柱穴内は少し低くなり、やや弱い傾斜を呈している。

炉跡はほぼ中央部に位置し、長径95cm・短径70cmの不整円形の平面形を呈し、皿状に10cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはR-Pが主柱穴と考え

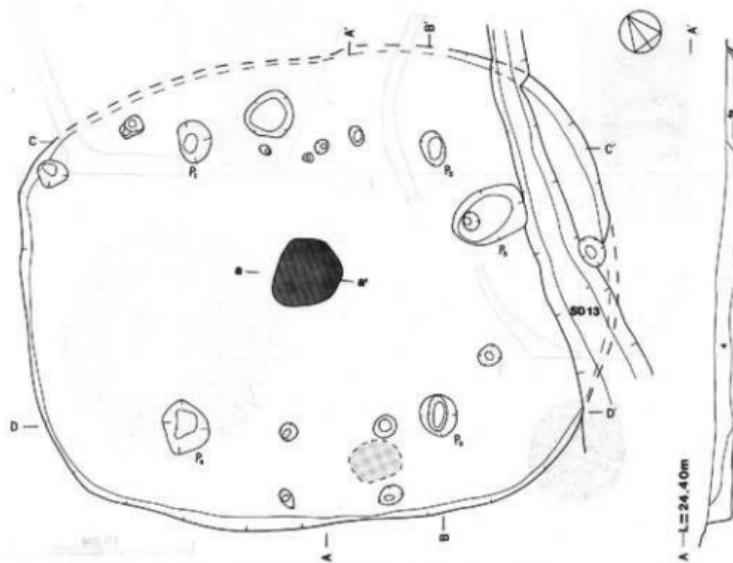


图78第59号住居跡実測図

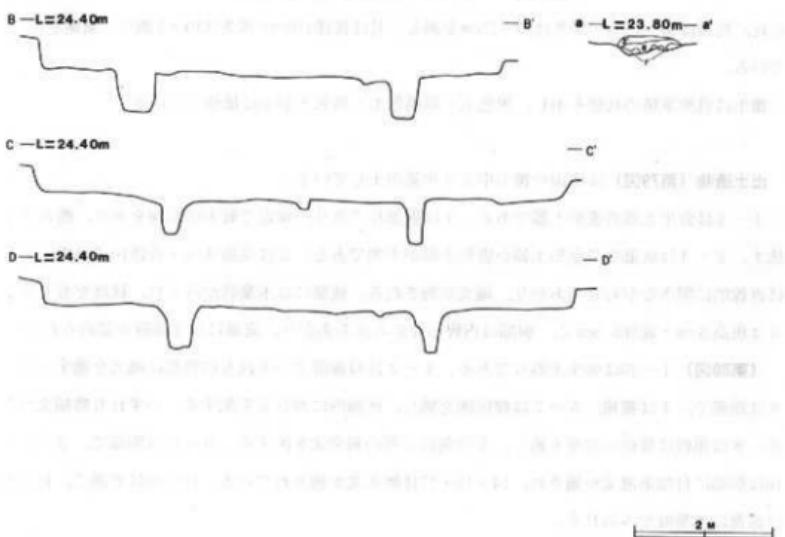
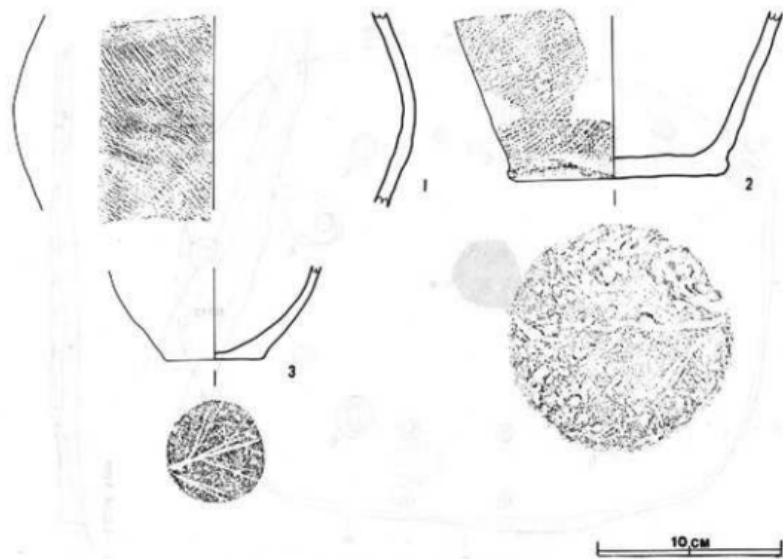


图78图 第59号住居跡実測図



第79図 第59号住居跡出土遺物実測図

られ、長径は50~75cm・深さは53~75cmを測る。1は長径110cm・深さは49cmを測り、東側を向いている。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒色土・暗褐色土・褐色土が主に堆積している。

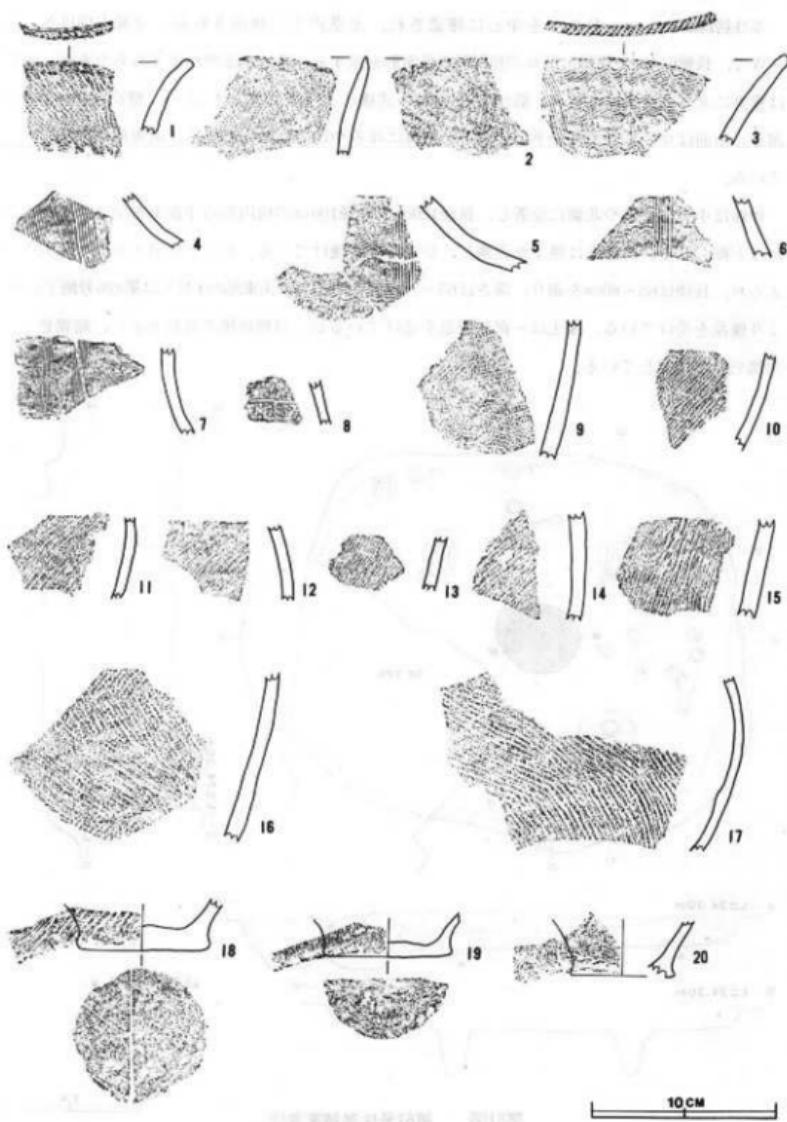
出土遺物（第79図）は床面や覆土中より少量出土している。

1~3は弥生土器の壺形土器である。1は胴部片であり、堆定で最大径22cmを測り、燃糸文を施す。2~3は底部片で壺形土器か壺形土器か不明である。2は現高9cm・底径10.9cmで、胴部は直線的に開きながら立ちあがり、繩文が施される。底部には木葉痕がみられ、桙痕を有する。3は現高5cm・底径5.3cmで、胴部は内脛しながら立ちあがり、底部には木葉痕が認められる。

（第80図）1~20は弥生土器片である。1~3は口縁部でいずれも口唇部に繩文を施す。4~8は頸部で、4は横線、5~7は縦区画を施し、区画内に波状文を配する。いずれも櫛描文である。8は頸部に横位の沈線を施し、その間に2列の刺突文を配する。9~17は胴部で、9~13・16は胴部に付加条繩文が施され、14~15・17は燃糸文が施されている。18~20は底部で、18~19は底部に木葉痕がみられる。

その他の遺物としては土製品（第207図63）・土製の紡錘車（第205図13・14）・磨石（第211図16）が出土している。

(图59) 第59号住居跡出土遺物拓影図

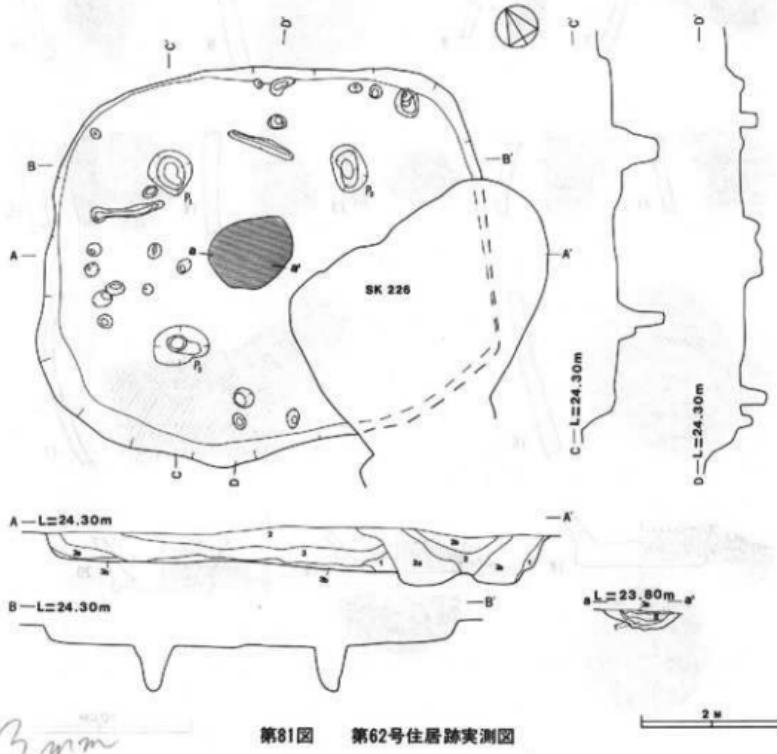


第59図 第59号住居跡出土遺物拓影図

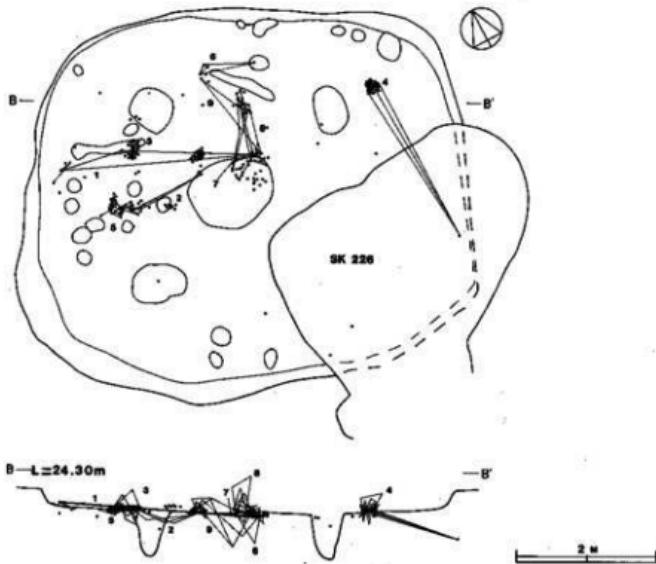
第62号住居跡（第81図）

本住居跡はD 9 j₆・D 9 i₇を中心確認され、土壌の下に検出される。主軸方向はN-61°Wで、長軸6.4m・短軸5.57mの楕円形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがるが、南壁は垂直に立ちあがる。南壁の一部が第226号地下式壙により擾乱を受けている。壁高は20~45cmを測る。床面はロームであり、平坦であるが東側にゆるやかに傾斜している。南東部が擾乱を受けている。

炉跡は中央よりやや北側に位置し、長径120cm・短径100cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に25cmほど掘られる。内部には焼土が充满し、炉床は硬く焼けている。ピットはB-Lが主柱穴と考えられ、長径は65~80cmを測り、深さは65~70cmほどである。南東部の主柱穴は第226号地下式壙により擾乱を受けている。覆土は一部分擾乱を受けているが、自然堆積の状態を示し、暗褐色土・黒褐色土が堆積している。



第81図 第62号住居跡実測図



第82図 第62号住居跡出土遺物分布図

出土遺物（第83・84・85図）は床面や覆土中より出土している。

1～4は弥生土器の変形土器である。1はほぼ中央床面に出土した土器片・西側床面及び床面から6cmの覆土中より出土した土器片で接合できた。口径は13.4cm・器高16.6cm・底径7cm・現存部 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は頸部よりゆるやかに外反しながら立ちあがる。胴部は余り張らず、最大径は胴部上位にあり、口縁部とほぼ同じである。底部は平底である。口唇部に撚糸文を施し、口辺部から頸部には半截竹管による格子文を配し、胴部上位には横位に近いL Rの撚糸文を施し、更に下位に縦位に近いR Lの撚糸文を施す。底部には木葉痕が認められる。口縁部内面は横なで、頸部から胴部内面はなでを行う。色調は黒褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

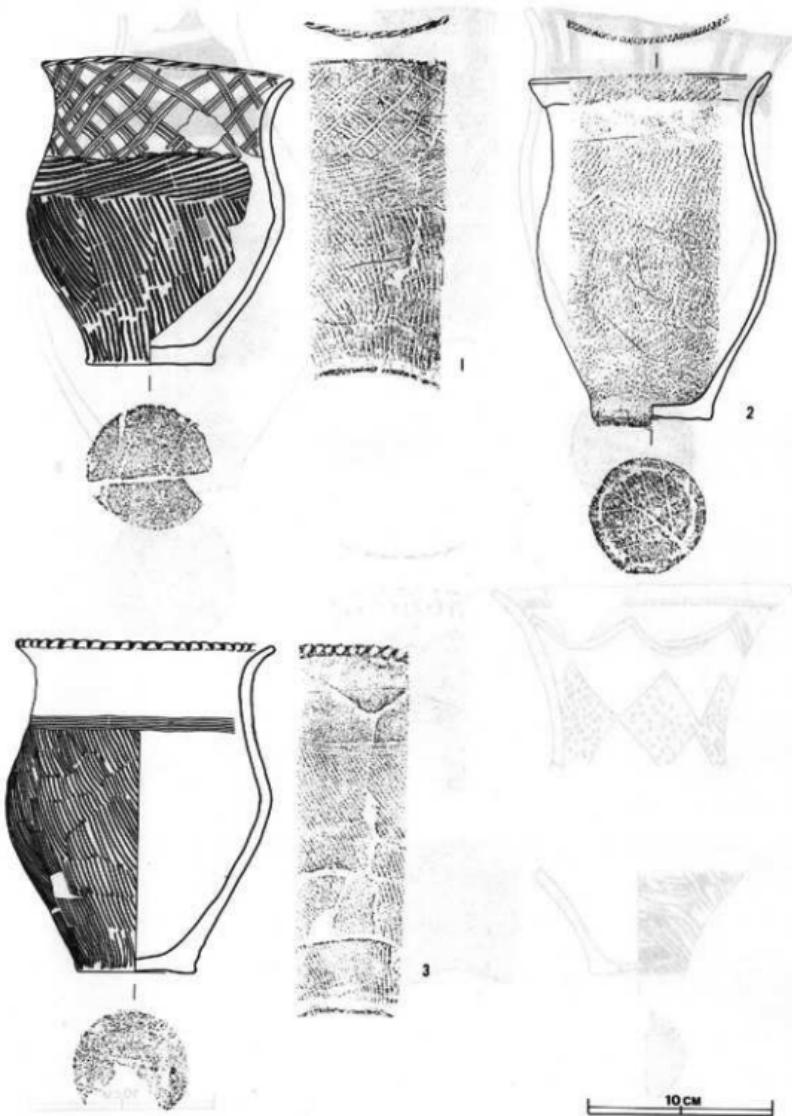
2は西側床面に出土した土器片とほぼ中央床面から出土した土器片で接合できた。口径は12.9cm・器高18.6cm・底径6.3cm・現存部 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は頸部よりやや外反しながら立ちあがる。胴部は余り張らず、最大径は胴部中位にある。底部は平底である。口縁部は複合口縁を有し、口唇・口辺部には繩文を施す。頸部は無文を置き、胴部は繩文を施文する。底部には木葉痕が認められる。口縁部内面は横なで、胴部内面は竪なでを施す。色調は暗赤灰色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。3は北西側床面や床面直上からまとまって出土した土器片で接合できた。口径は13.8cm・器高17.9cm・底径6.2cm・現存部 $\frac{1}{2}$ ほどである。口縁部は頸部よりやや急に外反しながら立ちあがる。胴部は余り張らず、最大径は胴部上位にあり、口径とほぼ同じである。

底部は平底である。口唇部は繩文原体を押圧する。横位の構描文で頸部文様帯と胴部文様帯を区画している。頸部は無文を置き、胴部は撚糸文を施す。底部には布口痕を認める。口縁部内面や頸部外面は横なでがなされる。色調ははによい褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成はやや不良である。4は北東側床面や床面直上にまとまって出土した土器片と、第226号地下式壙に擾乱を受けた低い床面に出土した土器片で接合できた。口径は14.4cm・器高18.9cm・底径6.6cmではほぼ完形である。口縁部は頸部よりやや少し外反しながら立ちあがる。胴部は殆ど張らず、底部は平底である。最大径は口径にあり、器形はややゆがんでいる。口唇部には繩文を施し、口縁部は構描で8等分の縦区画を施し、更に幅広い区画内に2条の波状文を充填する。頸部には繩文原体を押圧する。胴部は撚糸文が施され、底部には木葉痕がみられる。色調は黒色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成はやや不良である。

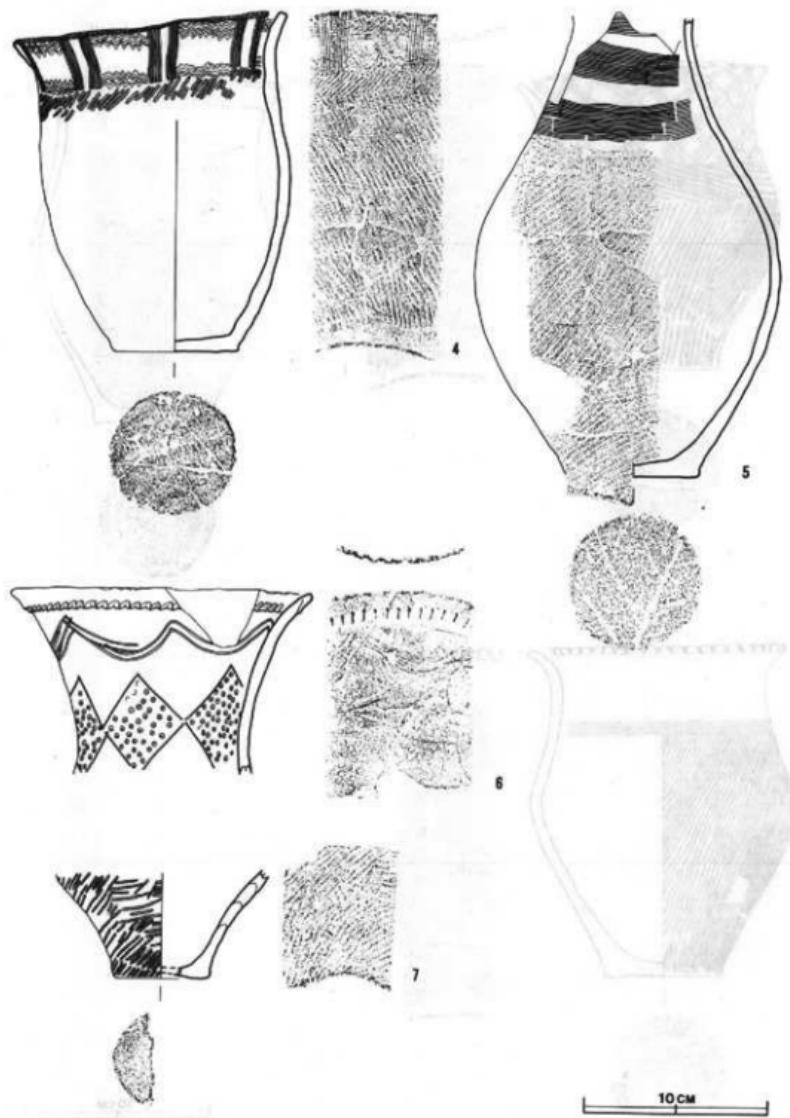
5～9は弥生土器の壺形土器である。5は西側床面にまとまって出土した土器片で接合できた。現高は25cm・底径7.2cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は欠損している。胴部はやや張り、最大径は胴部中位にある。底部は平底である。頸部には構描で横線が3条周回している。胴部には付加条繩文が施されている。底部には木葉痕がみられる。器内面はなでがなされる。色調は橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は不良である。6は北側床面や床面直上に出土した土器片をもって接合できた口縁部である。口径は15cm・現高10cm・現存部 $\frac{1}{2}$ ほどである。口縁部は頸部よりゆるやかに外反しながら立ちあがる。口縁部は複合口縁を有し、口辺下端に刻み目を施し、口縁に波状文が周回する。更に沈線で菱形文を描き、菱形文内に竹管で刺突する。7はほぼ中央の床面から出土した底部及び胴部片である。胴部は底部よりほぼ直線的に外傾する。胴部は付加条繩文を施し、底部には木葉痕が認められる。胴部に稜痕を有する。8はほぼ中央床面や床面直上に出土した土器片、北側床面に出土した土器片で接合できた底部および胴部片である。現高16cm・底径9.4cmほどである胴部は底部より直線的に大きく開き、底部は平底である。胴部には繩文が施文され、胴部内面は摩滅している。底部には木葉痕がみられる。9は中央床面に出土した土器片と北側床面から約8cmの覆土中に出土した土器片で接合できた。現高12cm・推定口径10.4cmの底部および胴部片である。胴部は底部より大きく開く。底部は平底である。胴部は付加条繩文が施されている。底部には木葉痕がみられる。

(第86図) 1～17は弥生土器片である。1～5は口縁部で、1～3は複合口縁を有し、口唇・口辺部に繩文を施し、1・2は口辺下端に刻み目を有する。4・5は口縁に繩文を施している。6～9は頸部で、6～8は構描の波状文・縦区画を施し、区画内に波状文を充填する。10～15は胴部で、付加条繩文が施されている。16・17は底部で、木葉痕が認められる。

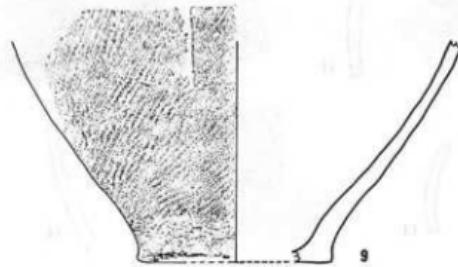
その他に土製の紡錘車(第205図15)・磨石(第211図17)・敲石(第212図27)・砥石(第213図32・33)・石核(第216図56・57)などがある。砥石は覆土中より出土している。



第83図 第62号住居跡出土遺物実測図

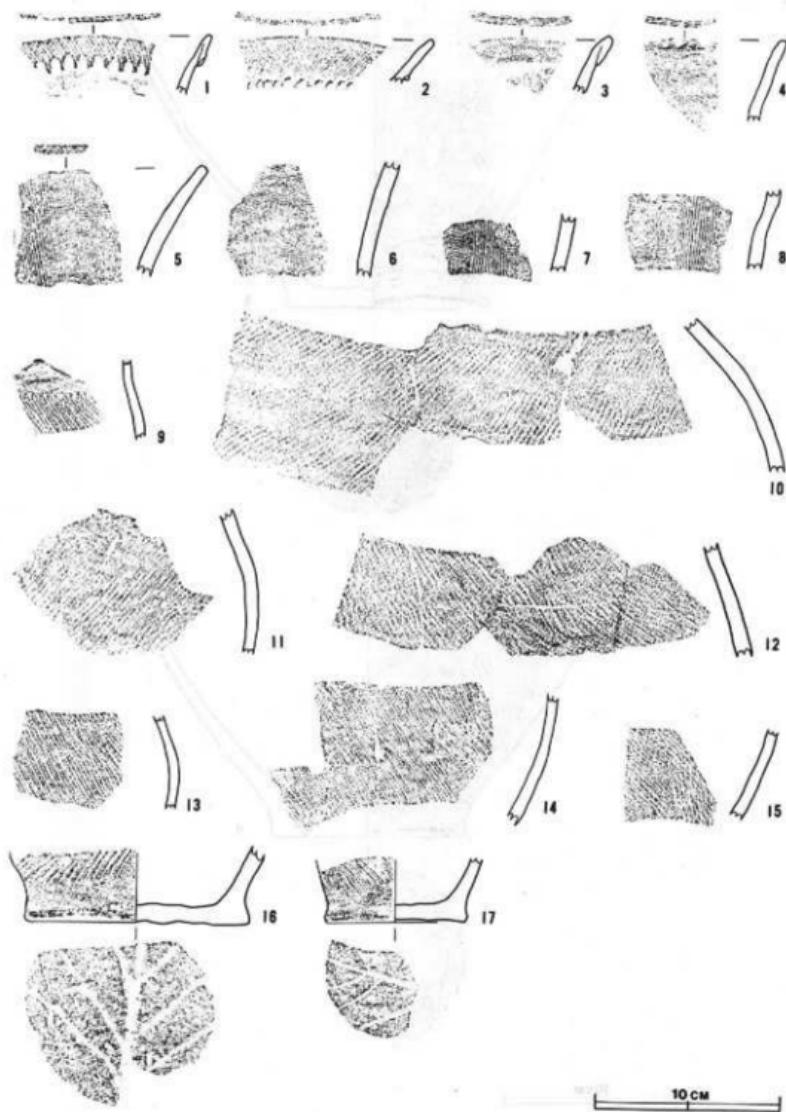


第84図 第62号住居跡出土遺物実測図



10 CM

第85図 第62号住居跡出土遺物実測図



第86図 第62号住居跡出土遺物拓影図

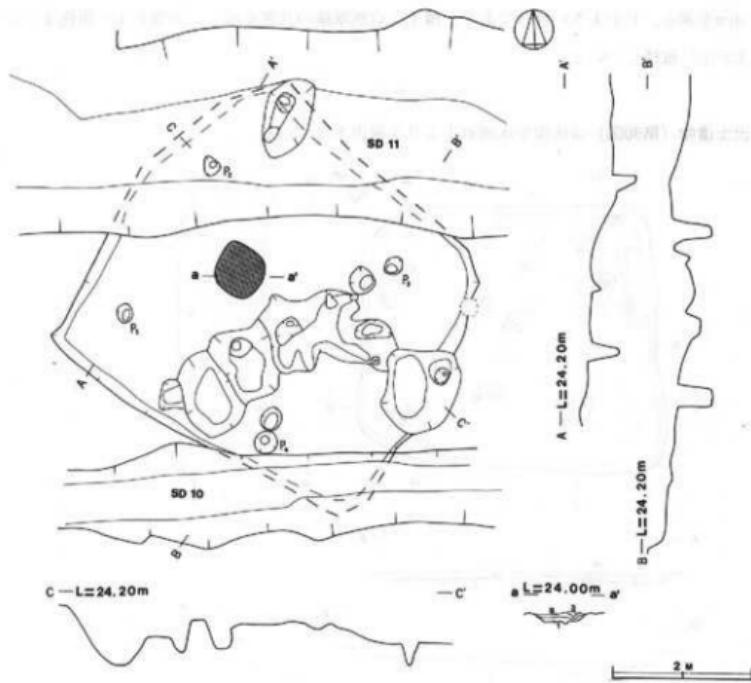
第64号住居跡（第87図）

本住居跡はD 8 f₆を中心とし、第10・11号溝に挟まれて位置する。主軸方向はN-50°-Wで、長軸約5.1m・短軸約4.5mの隅丸長方形の平面形と推定される。壁は土壌や溝によって大部分が擾乱を受け、わずかに南壁コーナー部と東コーナー部の一部が残る。床面は土壌や溝によって掘り込まれ、凹凸が著しい。

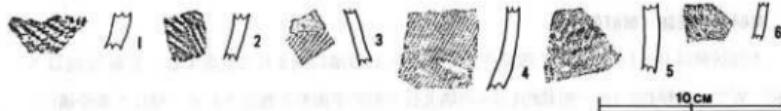
炉跡は中央より北西寄りに位置し、長径80cm・短径70cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に13cmほど掘られる。内部には非常に硬い焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはB-Pが主柱穴と考えられ、長径は25cm・深さは35cmを測る。

出土遺物（第88図）は床面や覆土中より縄文土器片・弥生土器片が数点出土している。

1・2は縄文土器の胴部片である。3～6は弥生土器片であり、3は頸部で、4～6は胴部片で、縄文が施されている。



第87図 第64号住居跡実測図



第88図 第64号住居跡出土遺物拓影図

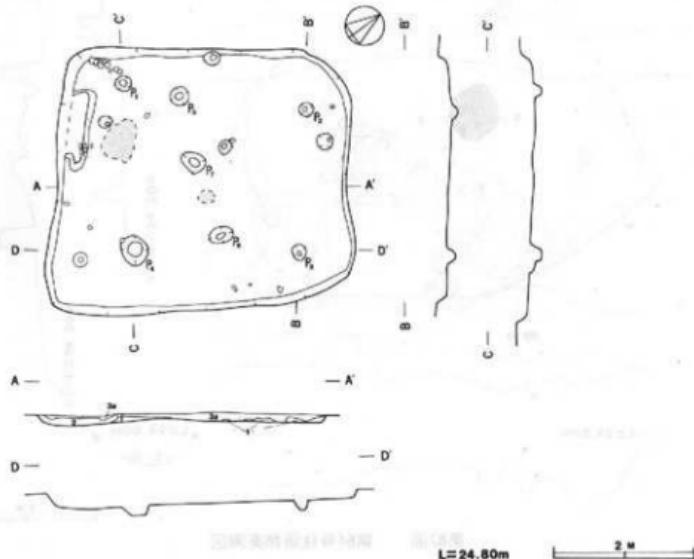
古墳時代(五頭期)

第24号住居跡(第89図)

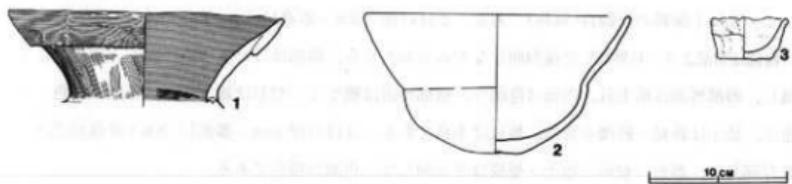
本住居跡はE11g₆・E11g₇を中心に確認され、第21号住居跡の9m西側に位置する。主軸方向はN-37.5° Eで、長軸4.17m・短軸3.75mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがるが、北壁はほぼ垂直に立ちあがる。壁高は約18cmを測る。床面はロームでありほぼ平坦でやや柔らかいが、南北側の一部が硬く一段高くなっている。

炉跡は検出されない。ピットはP₁～P₇が主柱穴と考えられ、長径は20～45cmほどで、深さは10～14cmを測る。P₁が大きい柱穴である。覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・褐色土・暗褐色土が主に堆積している。

出土遺物(第90図)は床面や床面直上より少量出土している。



第89図 第24号住居跡実測図



第90図 第24号住居跡出土遺物実測図

1は土師器の壺形土器の口縁部である。口径は19.5cm・現高6cmで、口縁部は複合口縁で外反する。口縁部内・外面は横なで、頸部は刷毛目、色調は赤色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。赤彩されている。

2は土師器の壺形土器である。口径は18.8cm・器高9.9cm・現存部9.5cmで、口縁部は棱より直線的に開く。胴部は底部より一旦大きく開きやや垂直気味に立ちあがり、底部は丸底である。口縁部内・外面は窪なで、胴部外面はなで、内面は窪で整形を行う。色調は口縁部はにぶい橙色、胴部は黒褐色、内面は橙色である。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

3は手捏ね土器である。口径5.2cm・器高3cm・底径3.9cmで完形である。体部外面は指圧痕やつなぎ目が残り、内面は指なでで底部はなで整形を行う。色調はにぶい橙色、胎土は砂粒・スコリアを含み、焼成は普通である。

第41号住居跡（第50図）

本住居跡はE11 b8を中心確認され、第42号住居跡を掘り込んでいる。主軸方向はN-27°Wで、長軸7.82m・短軸7.43mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は50~68cmを測る。北コーナーは第46号住居跡と重複している。壁下には壁溝が北東壁の一部を除いて周回し、幅は約35cmを有し、深さは約5cmを測る。床面はロームであり非常に凹凸して硬く第42号住居跡を掘り込んでいる。

炉跡は中央より北側に位置し、長径69cm・短径57cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に11cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ビットはB~Bが主柱穴と考えられ、長径は50~95cm・深さは約30cmを測る。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主に堆積している。

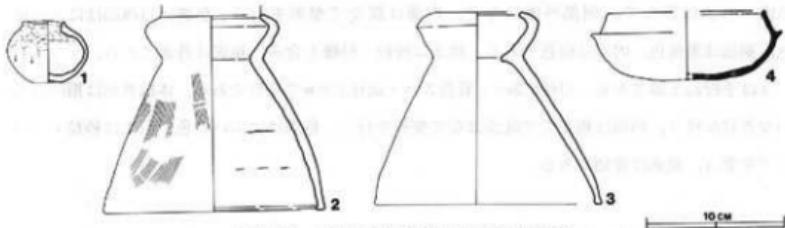
出土遺物（第91図）

1は手捏ね土器であり、口径3cm・器高4.4cm・底径2.1cmで完形である。口縁部は短く立ちあがり、胴部は扁平の球形を呈し底部は平底である。胴部外面は窪なで、内面は指なでと思われる。色調はにぶい橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。

2・3は土師器の炉器台(仮称)である。2は口径7.2cm・器高14.1cm・底径15.6cm・現存部%で、口縁部は頸部より一旦外傾した後内傾しながら立ちあがる。脚部は「ハ」の字に開く。器受部は摩滅し、脚部外面は刷毛目。内面は簾割り、裾部外面は横なでで整形は難である。色調は橙色・褐色で、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は不良である。3は口径6cm・器高13.9cm・底径16.2cm・現存部%で、器形・整形・胎土・焼成は2と同じで、色調は橙色である。

4は覆土中より出土した須恵器の壺形土器であり、推定で口径11.2cm・現高4.9cm・現存部%で、口縁部は外縁より内凹し、体部に稜を有し底部は丸底である。ロクロ整形で、体部外面には白灰色の自然釉がみられる。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良好である。須恵器は覆土中より出土し、混入したものと考えられる。

その他に管状土錐(第205図3)・球状土錐(第207図49~57)・土製品(第207図61)・鉄製の輪(第204図4)が出土した。この輪は覆土中より出土し、後世ものと思われる。



第91図 第41号住居跡出土遺物実測図

第45号住居跡(第92図)

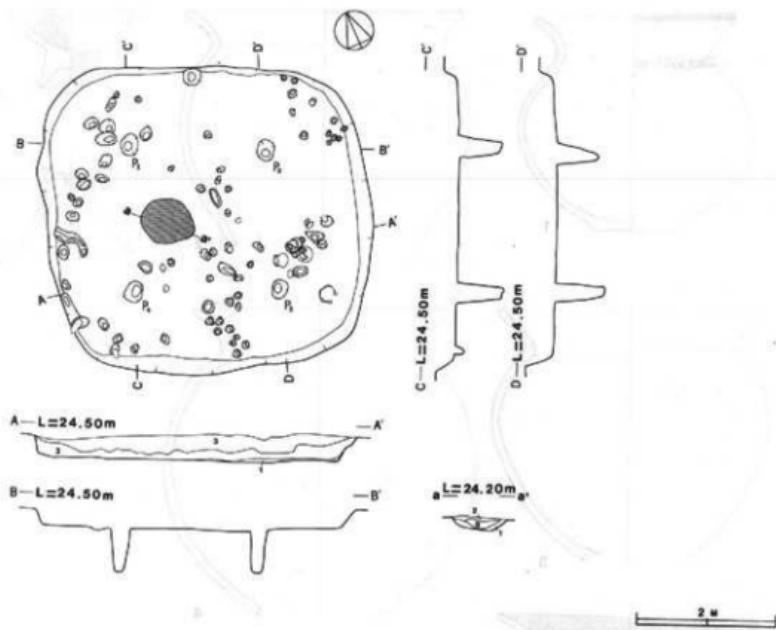
本住居跡はE10c4・E10c5を中心に確認され、第44号住居跡の4m南西側に位置する。主軸方向はN-63°Wで、長軸4.68m・短軸4.43mの隅丸方形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがり、壁高は20~40cmを測り、南壁コーナー部が高い。床面はロームでありほぼ平坦で全体的に硬いが、東側は特に硬い。主柱穴の内側はごくわずかに低い。

炉跡は中央部やや西寄りに位置し、長径81cm・短径65cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に15cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は焼けている。ピットはH~Pが主柱穴と考えられ、長径は30cm・深さは61~71cmを測る。

覆土は自然堆積の状態を示し、微妙な違いのある黒褐色土・褐色土が堆積している。

出土遺物(第93図)は床面や床面よりやや浮いた状態で出土している。(図93)参考土器

1は土師器の壺形土器であり、口径14.1cm・器高15.5cm・底径5.5cm・ほぼ完形で、口縁部は頸部より外反し、口唇部に刻み目を有し、頸部の1/4のみにボタン状粘土板が貼られている。胴部はやや扁平であり、底部は平底である。口縁部外面はなで、内面は横なでで、胴部外面は簾割り、



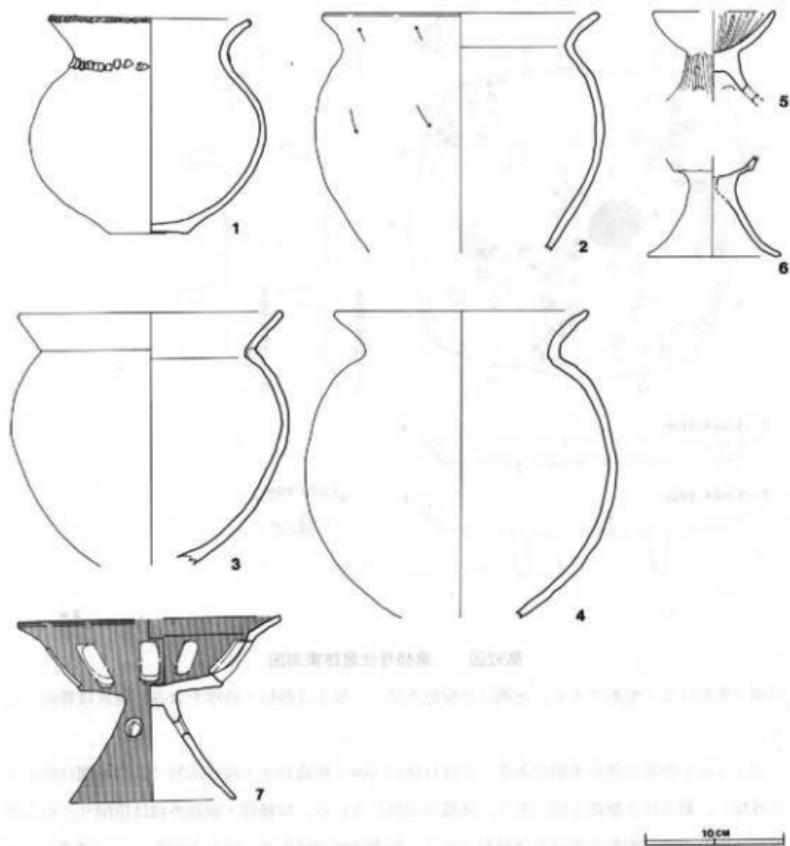
第92図 第45号住居跡実測図

内面と底部はなで整形である。色調は赤橙色を呈し、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

2・4は土師器の変形土器である。2は口径19.5cm・現高17cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は頸部より外反し、最大径は胴部上位にあり、底部は欠損している。口縁部・胴部外面は窪削り、口縁部内面は窪なで、胴部内面はなで整形を行う。色調は暗赤褐色で、胎土は砂粒・バミスを含み、焼成は不良である。4は口径17.9cm・現高22cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は頸部より鋭く外反し、胴部は球形を呈している。口縁部内面は窪なで、胴部外面は窪削り、胴部内面はなで底部は欠損している。色調は灰褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

3は土師器の台付変形土器で、口径18.6cm・現高18cm・ほぼ完形である。口縁部は頸部より直線的に開く。胴部は最大径が上位にあり、台は欠損している。口縁部内面は鏡磨き、胴部外面は荒い窪なでであろうと思われ、内面はていねいな窪なで整形を行う。色調は灰褐色で、胎土は砂粒・砂礫・スコリアを含み、焼成は普通である。

5~7は土師器の器台形土器である。5は推定で口径8.5cm・現高6cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、器底部は欠損している。器受部はゆるやかに開きながら口縁部に至る。脚部に4孔を有する。器受

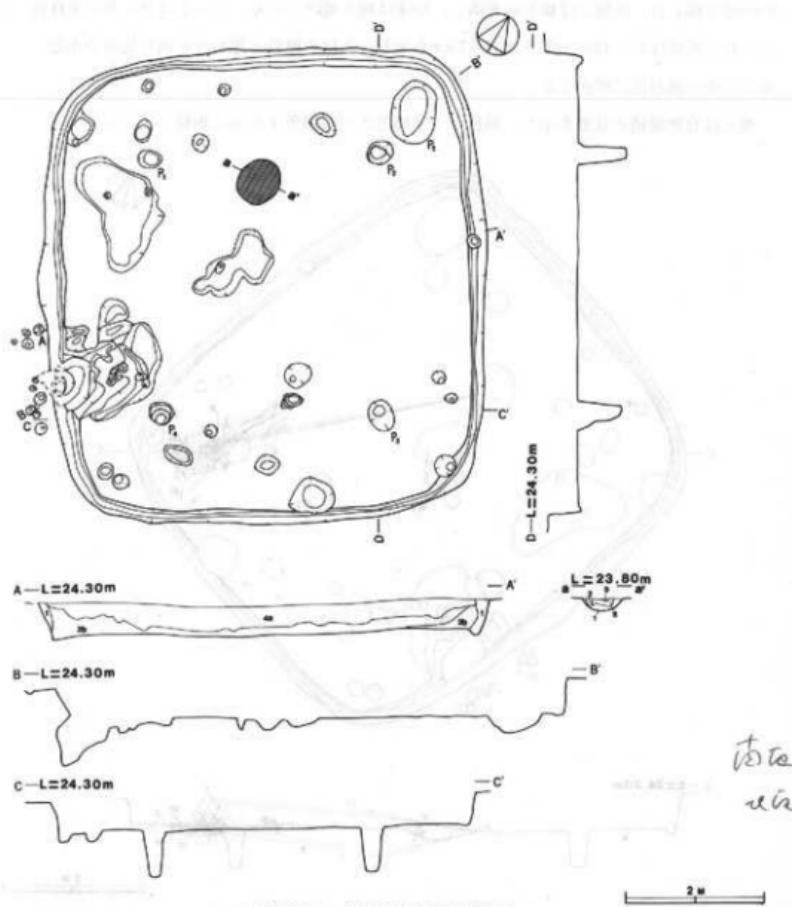


第93図 第45号住居跡出土物実測図

部外面は窓で、内面は放射状の磨き、脚部は磨きを行い、色調は褐色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。6は現高7cm・底径9.4cm・孔径1cm・現存部%で口縁部は欠損している。器受部外面に棱がみえ中央孔を有する。脚部は裾で大きく開く。脚部外面は窓で整形を行う。色調はにぶい赤褐色、胎土は砂粒・スコリアを含み、焼成は普通である。7は装飾器台であり、推定で口径18.5cm・器高13cm・推定で底径11.6cm・現存部%ほどである。器受部は内面の棱より外傾し、窓を10個有する。脚部は「ハ」の字に開き、3孔を有する。器受部が大きく口径が最大径を測る。器受部外面はていねいな磨き、内面はていねいな放射状の磨きで、脚部外面はていねいな磨き、内面は窓で整形を行う。色調は赤色、胎土は砂粒・スコ

リアを含み、焼成は良好である。赤彩されている。

その他に磨石（第211図12）・凹石（第215図52）が出土している。



第94図 第52号住居跡実測図

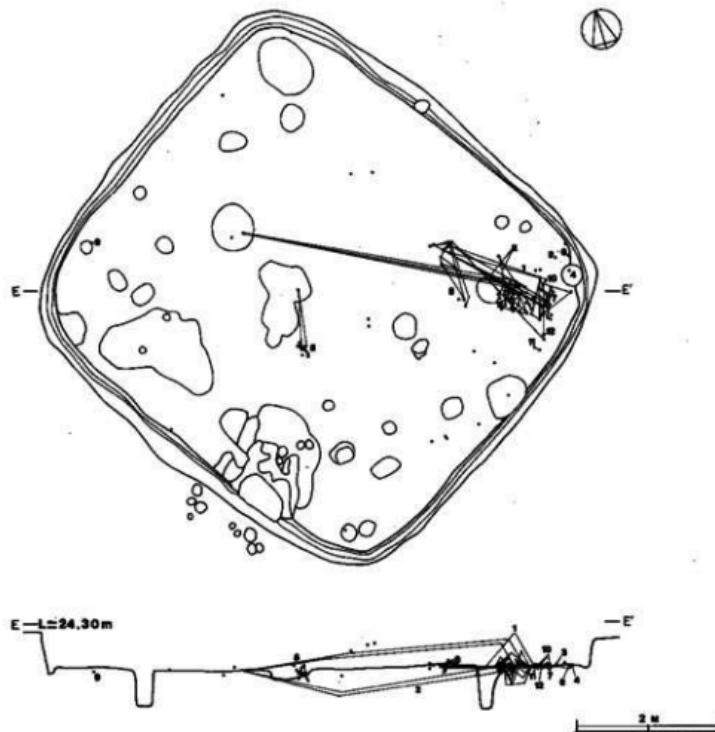
第52号住居跡（第94図）

本住居跡は D 8 e9・D 8 e0を中心確認され、第51号住居跡の9m北側に位置する。主軸方向は N-36°-Wで、長軸6.8m・短軸6.45mの隅丸のはば方形の平面形を呈する。壁は垂直に立ちあがり、北コーナー一部は土壤に搅乱を受けている。壁高は約50cmを測る。壁下には壁溝が周回し、幅は15~20cmを有し、深さは5cmほどである。床面はロームでありはば平坦で全体的に硬

く、中央部は特に硬く踏み固められている。

炉跡は中央よりやや北西側に位置し、長径65cm・短径60cmのほぼ円形の平面形を呈し、皿状に15cmほど掘られ、内部には焼土が充满し、炉床は硬く焼けている。ピットはB～B'が主柱穴と考えられ、長径は35～45cm・深さは55～75cmを測る。入口の施設と思われる掘り込みや小ピットが南コーナー部付近に所在する。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒色土・黒褐色土・暗褐色土が主に堆積している。



第95図 第52号住居跡出土遺物分布図

出土遺物（第96図）は東コーナー部床面より多量出土している。

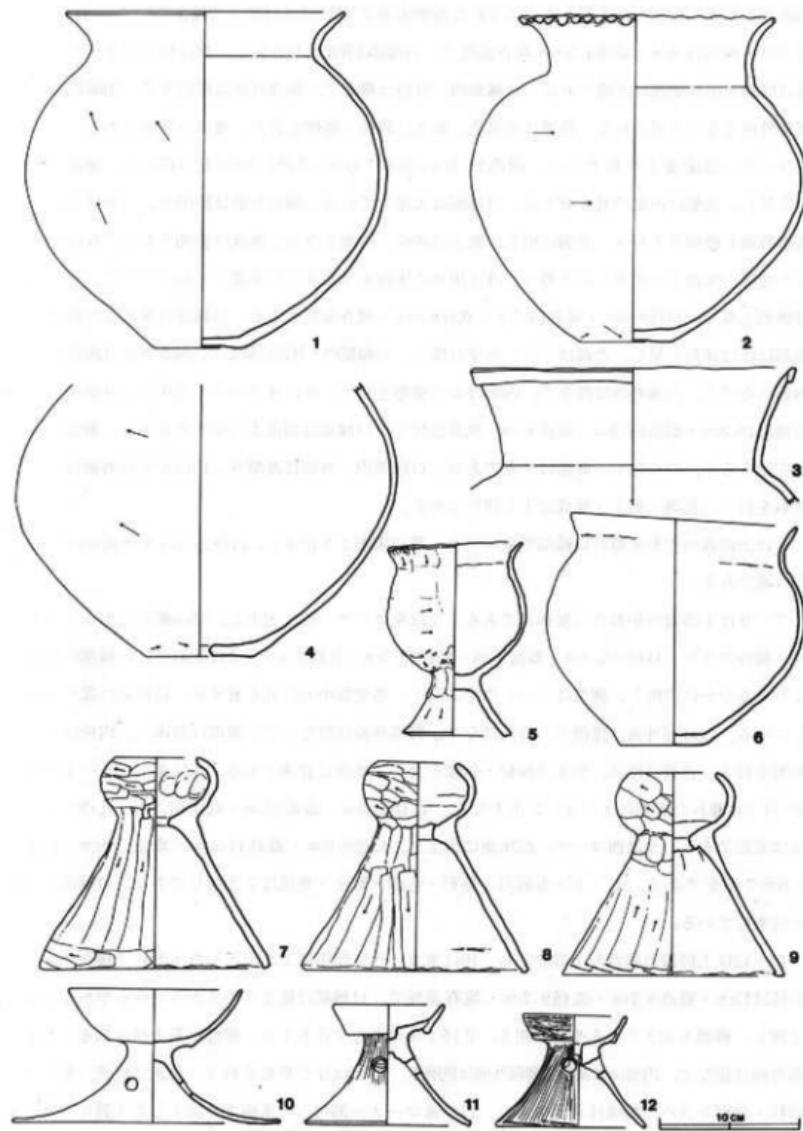
1・2・4～6は土師器の瓈形土器である。1は東コーナー部付近の床面より出土し接合できた。口径は19.6cm・器高24.1cm・底径6.4cm・現存部5%で、口縁部は頸部より鋭く「く」の字に外傾し、胴部は球形を呈し底部は平底である。口縁部は横なで、胴部外面は範削りで、内面や底部はなで整形を行う。色調は橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。2は東コーナー

部床面より多く出土した土器と4mはなれた西側床面より出土した1片とで接合できた。口径は17.8cm・現高23.4cm・底径6.3cm・現存部%で、口縁部は頭部より外反し、押圧痕が配される。胴部は球形を呈し底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は窪削りで、内面はなで、底部外面もなでと思われる。色調は赤黒色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。4は東コーナー部床面より出土した。現高19.5cm・底径7.6cm・孔径1.3cm・現存部%で、胴部は球形を呈し、底部は平底で孔を有する。口縁部は欠損している。胴部外面は窪削り、内面はなで、底部外面も窪削りを行う。色調は橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。5は中央より北側の床面より出土した土器片とほぼ中央の床面より出土した土器とで接合できた。5は台付變形土器で、口径9.3cm・現高13.7cm・底径6.6cm・現存部%である。口縁部は頭部より外反し、胴部はほぼ球形を呈し、台部は「ハ」の字に開く。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は窪削り、内面はなで、台部外面は窪なで、内面はなで整形を行う。6は東コーナー部床面より出土した。口径は15.8cm・器高15.9cm・底径6cm・現存部%で、口縁部は頭部よりやや外傾する。胴部は球形を呈するが、やや短く、底部は平底である。口縁部内・外面は窪削り、内面や底部外面はなで整形を行う。色調・胎土・焼成は1と同じである。

3は土師器の壺形土器の口縁部で東コーナー部の床面より出土し、口径22.6cm・現高9cmで複合口縁である。

7~9は土師器の炉器台（仮称）である。7は東コーナー部に出土し、45cm離れて出土した1片と接合できた。口径は5.9cm・器高15cm・底径15.5cm・孔径2.3cm・ほぼ完形で、口縁部は頭部よりゆるやかに内傾し、脚部は「ハ」の字に開く。器受部中心に孔を有する。口縁部に媒が付着している。口縁部外面は窪削り、内面はなで、脚部外面は窪なでで、裾部は窪削り、内面はなで整形を行う。色調は橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。8は東コーナーより西側に1.5m離れた床面にまとめて出土した。口径5.6cm・器高15cm・底径15.5cm・孔径2.4cmでほぼ完形である。9は西コーナー部床面に出土し、口径6.2cm・器高14.6cm・底径15.6cm・孔径1.8cmで完形である。8・9とも器形・整形・色調・胎土・焼成は7と同じであり、口縁部に媒が付着している。

10~12は土師器の器台形土器である。10は東コーナー部床面より出土した土器片で接合できた。口径は12cm・器高9.7cm・底径9.7cm・現存部%で、口縁部は稜よりやや大きくゆるやかな曲線で開く。脚部も大きくゆるやかに開き、孔径1cmの孔を3孔有する。裾部が最大径を測る。器受部外面は窪なで、内面は摩滅し、脚部外面は窪磨き、内面はなで整形を行う。色調は橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。11は東コーナー部付近の床面より出土した土器片で接合できた。口径7.7cm・器高8.7cm・底径11.6cm・現存部%で、口縁部はやや外傾し、脚部は「ハ」の字にやや大きく開き、器受部中央に直徑1.1cmの貫通しない孔がある。脚部に直徑1.1cmの孔を



第96图 第52号住居跡出土遺物実測図

3孔有する。口縁部外面はなでとみられ内面は荒磨き、脚部外面は荒磨きで内面はなで整形を行う。色調は明赤褐色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。12は東コーナー部床面より出土し、口径7.2cm・器高8cm・底径10.5cmではば完形である。器形、胎土・焼成は11と同じであるが器受部中心に孔径1.1cmの孔があり、口縁部外面は荒磨きで、色調は赤色である。

その他に砥石（第213図31）と磨製石斧（第214図46）が覆土中より出土している。

〔調査地〕 井ノ原 考古学

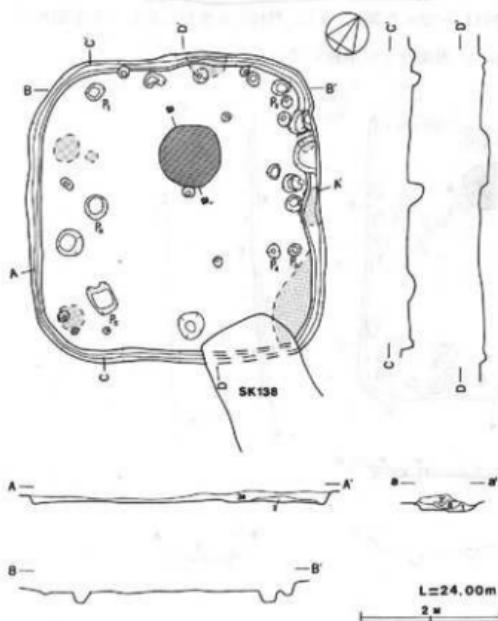
〔図97図〕 第56号住居跡

本住居跡はC 8 i 4を中心確認され、調査区の北西側の縁辺部に位置している。主軸方向はN-38°-Wで、長軸4.43m・短軸4.18mの隅丸方形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがり、南東壁は擾乱を受けている。壁高は10cm内外で、壁下には壁溝が周回し、幅は10~15cmで深さは5cmと浅い。北東壁には焼土がみられる。床面はロームでありほぼ平坦で硬く、炉跡付近から北コーナー部は特に硬い。

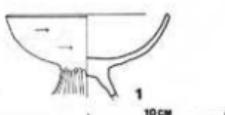
炉跡は中央よりやや北側に位置し、長径95cm・短径90cmの円形の平面形を呈し、皿状に15cmほど掘られる。内部には焼土が充満し、炉床は硬い。ビットは多数検出され、主柱穴と考えられるものは不明であるが、B・B'・E・E'が直線に並ぶ。長径は25~50cm・深さは13~23cmを測る。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土が主に堆積している。

焼土のあり方や覆土中に焼土が含まれていることから火災にあったものと思われる。



第97図 第56号住居跡実測図



第98図 第56号住居跡
出土遺物実測図

出土遺物（第98図）は床面より少量出土している。

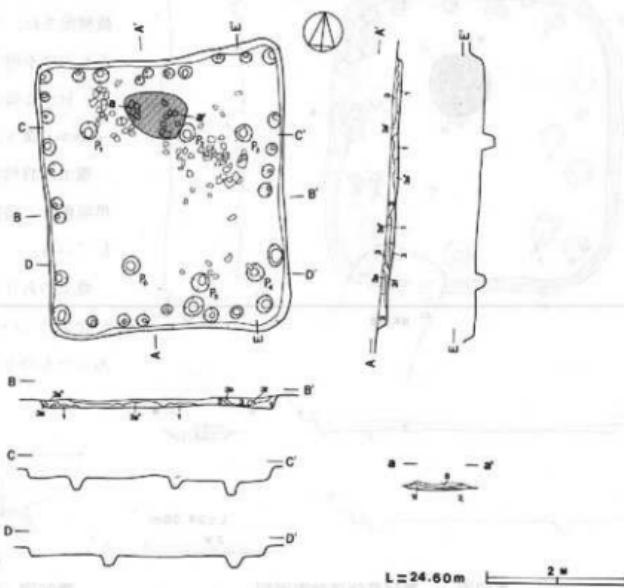
1は土器の器台形土器の器受部で、口径11.5cm・現高5.8cmである。口縁部は外縁を有し、開きながら立ちあがり、脚部に3孔を有する。器受部外面は笠削り、内面はなでで、脚部外面は笠磨き、内面はなで整形を行う。色調はにほい橙色・暗赤褐色で、焼成は普通である。

古墳時代（和泉期）

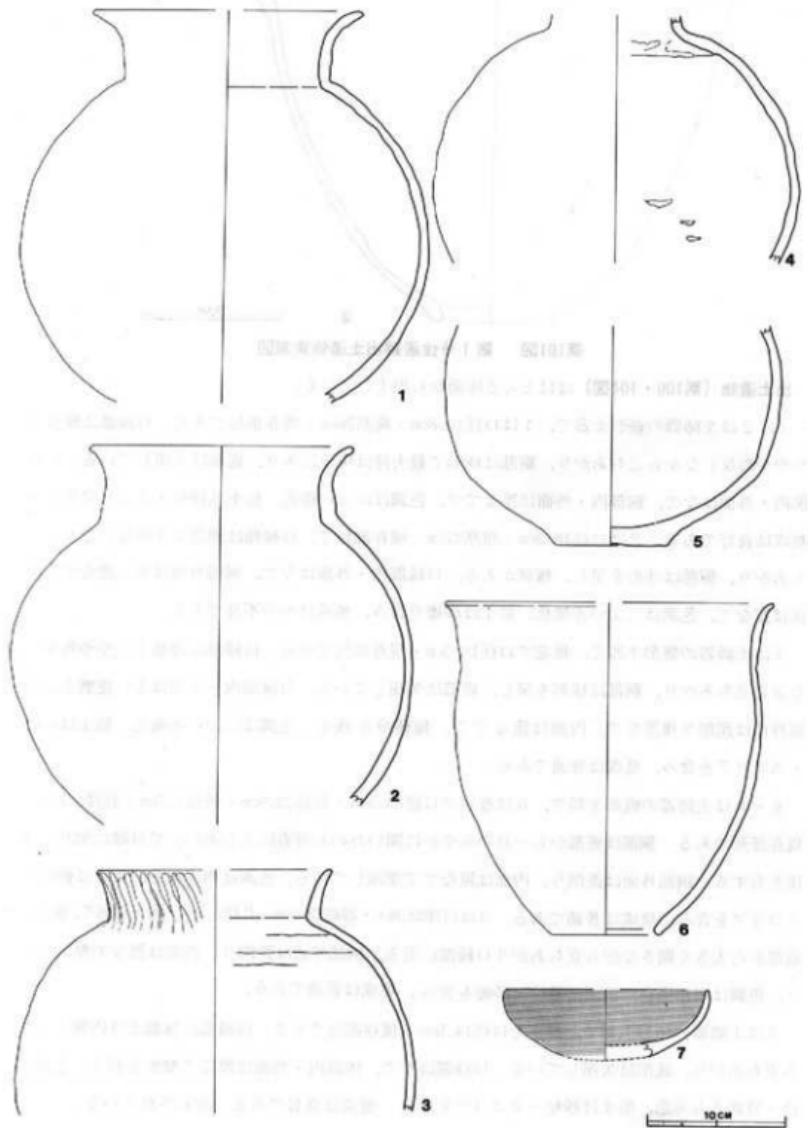
第1号住居跡（第99図）

（説明） 郡島古墳群

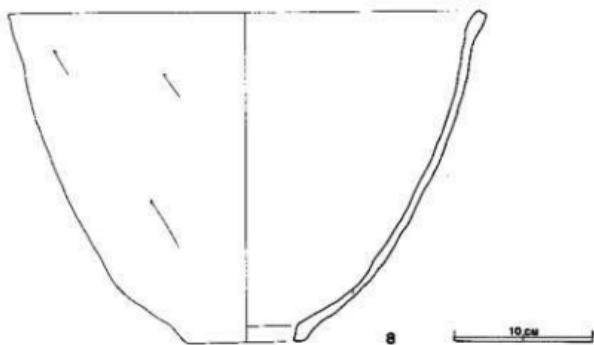
本住居跡はD12 i sを中心確認され、第2号住居跡の10m西側に位置する。主軸方向はN-13°-Wで長軸3.86m・短軸3.47mのほぼ隅丸方形の平面形を呈する。東壁・西壁はほぼ垂直並みに立ちあがり、南壁・北壁はゆるやかに立ちあがる。壁高は12~15cmを測る。床面はロームであり炉跡付近が非常に硬く壁側はやや柔らかく、北東側から南北側にごくゆるやかに傾斜している。炉跡は中央より北側、戸の西側に位置し、長径70cm・短径66cmの卵形の平面形を呈し、皿状に5cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはB~B'が主柱穴と考えられ、長径は24~27cmで、深さは13~27cmを測る。また、壁柱穴と思われるピットが32個検出される。覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が堆積している。



第99図 第1号住居跡実測図



第100圖 第1号住居跡出土遺物実測図



第101図 第1号住居跡出土遺物実測図

出土遺物（第100・101図）はほとんど床面から出土している。

1・2は土師器の壺形土器で、1は口径18.8cm・現高28cm・現存部 $\frac{2}{3}$ である。口縁部は頸部よりやや外反しながら立ちあがり、胴部は球形で最大径は中位にあり、底部は欠損している。口縁部内・外面はなで、胴部内・外面は艶などで、色調はにぶい橙色、胎土は砂粒・スコリアを含み、焼成は良好である。2は口径18.3cm・現高27cm・現存部 $\frac{2}{3}$ で、口縁部は頸部より外反しながら立ちあがり、胴部は球形を呈し、模痕がある。口縁部内・外面はなで、胴部外面は粗い艶などで、内面は艶などで、色調はにぶい赤褐色、胎土は砂礫を含み、焼成はやや不良である。

3は土師器の壺形土器で、推定で口径16.5cm・現存部 $\frac{2}{3}$ である。口縁部は頸部よりやや外反しながら立ちあがり、胴部は球形を呈し、底部は欠損している。口縁部内・外面は太い艶磨き、胴部外面は範削り後艶などで、内面は艶などで、輪積痕が残る。色調はにぶい赤褐色、胎土は砂礫・スコリアを含み、焼成は普通である。

6・8は土師器の壺形土器で、6は推定で口径23.3cm・器高23.9cm・底径7.7cm・孔径6.8cm・現存部 $\frac{2}{3}$ である。胴部は底部から一旦ゆるやかに開いたのち直立に立ちあがって口縁に至り、外縁を有する。胴部外面は範削り、内面は艶などで摩減している。色調は明赤褐色、胎土は砂礫・スコリアを含み、焼成は普通である。8は口径33.8cm・器高23.7cm・孔径7.1cm・現存部 $\frac{2}{3}$ で、胴部は底部から大きく開きながら立ちあがり口縁部に至る。胴部外面は範削り、内面は艶などで整形を行う。色調は明赤褐色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

7は土師器の壺形土器で、推定で口径14.5cm・現存部 $\frac{2}{3}$ である。口縁部は体部より内側しながら立ちあがり、底部は欠損している。口縁部はなで、体部内・外面は艶などで整形を行なう。色調は内・外面とも赤色、胎土は砂粒・スコリアを含み、焼成は良好である。赤彩されている。

第2号住居跡（第102図）

本住居跡はD12j8・D12j9を中心に確認され、第3号住居跡・第5号住居跡に完全に掘り込まれておらず、住居跡が3軒重複している。主軸方向はN-0°で、長軸8m・短軸7mの方形の平面形を呈する。壁は垂直ぎみに立ちあがり、西壁は一部擾乱を受けている。壁高は25-45cmを測り、壁下に幅20cm、深さ5-10cmを測る壁溝が周回していると考えられる。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬い。東側は特に硬く、西側は耕作による擾乱がみられ明確でない。床面のほぼ全体に焼土が検出され、木炭も出土している。

炉跡は北側に位置し、長径240cm・短径80cmの長椭円形の平面形を呈し、直状に10cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、が床は硬く焼けている。ピットは10個検出されたが、主柱穴と考えられるものはB-Bで、南西側のB-BはBの支柱穴と思われ、B-Bも主柱穴と関係があると考えられる。

貯蔵穴は南側に所在し、長軸96cm・短軸52cmの長方形の平面形を呈し、深さは床面より60cmを測る。壁は傾斜を示して立ちあがり、北壁は第3号住居跡の貯蔵穴と重複している。

覆土は自然堆積の状態を示し、暗褐色土や黒褐色土が主に堆積し、ローム粒子や赤褐色粒子を含んでいる。

焼土や木炭が床面に出土していることから火災にあったものと考えられる。

出土遺物（第103図）

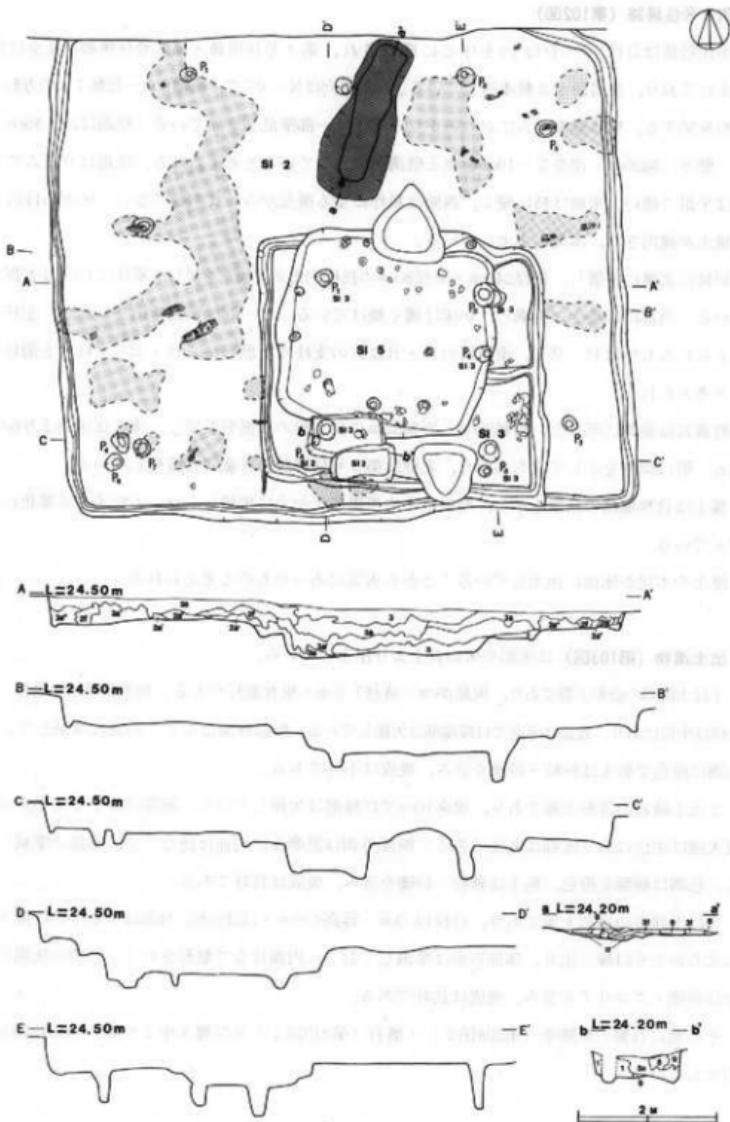
は床面や床面直上より出土している。

1は土師器の壺形土器であり、現高28cm・底径7.1cm・現存部%である。胴部は球形を呈し、最大径は中位にあり、底部は平底で口縁部は欠損している。胴部外表面はなで、内面は摩滅している。色調は橙色で胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は不良である。

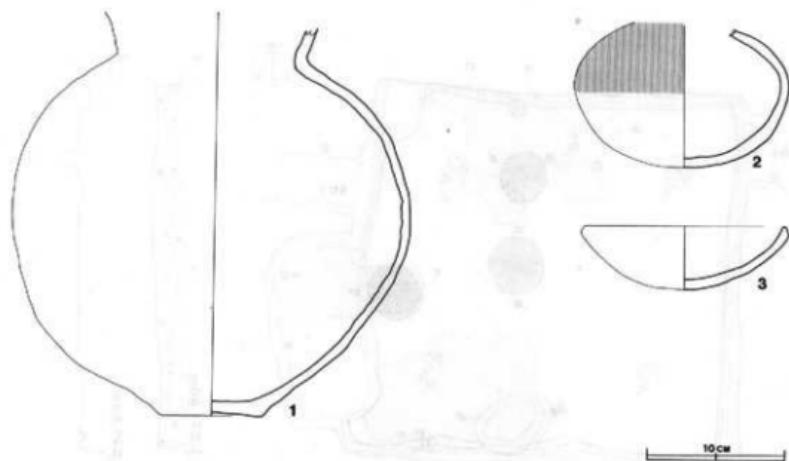
2は土師器の壺形土器であり、現高10cmで口縁部は欠損している。胴部は扁平な球形を呈し、最大径は中位にあり底部は丸底である。胴部外表面は施磨き、内面は施なでで、底部は摩滅している。色調は胴部が橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良好である。

3は土師器の壺形土器であり、口径14.3cm・器高4.6cm・ほぼ完形、体部はゆるやかに開きながら立ちあがり口縁に至る。体部外表面は摩滅しており、内面はなで整形を行う。色調は灰褐色で胎土は砂礫・スコリアを含み、焼成は良好である。

その他に石製の紡錘車（第208図2）、磨石（第210図1）及び覆土中より砥石（第213図30）が出土している。



第102回 第2・3・5号住居跡実測図



第103図 第2号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡（第104図）

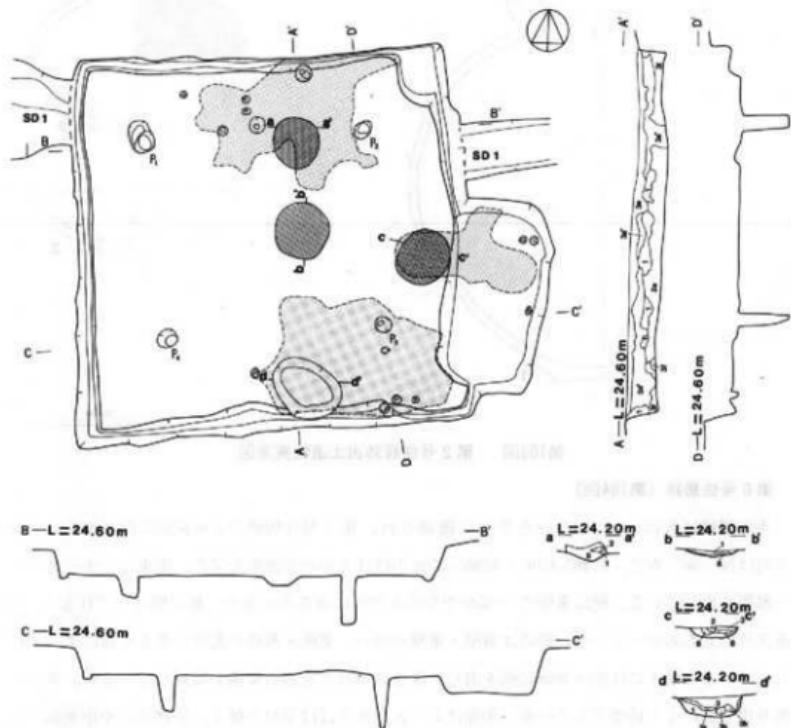
本住居跡はE12a7・E12a8を中心に確認され、第1号住居跡の2m東側に位置する。主軸方向はN-88°Wで、長軸5.62m・短軸5.37mのほぼ方形の平面形を呈し、南東コーナー付近が一部張り出している。壁は東壁の一部がややゆるやかに立ちあがるが、他の壁はいずれもほぼ垂直に立ちあがっている。壁高は南壁・東壁が高い。東壁・西壁の北側は第1号溝によって掘られている。壁下には20~30cmの幅を有し、深さ5cmほどを測る壁溝が周回しているが、東側は張り出し部により破壊されている。床面はロームでありほぼ平坦で硬く、炉跡付近や中央部は特に硬い。

炉跡は3か所に検出された。炉跡1は北側、炉跡2は中央部、炉跡3は東側に位置し、炉跡1は長径74cm・短径64cm・深さ13cmのほぼ円形で皿状に掘られ、炉跡2は長径75cm・短径74cm・深さ10cmの円形で皿状に掘られ、炉跡3は長径83cm・短径73cm・深さ6cmの卵形で皿状に掘られている。いずれも焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットはB~B'が主柱穴と考えられ、深さは33~70cm・長径は25~30cmを測る。Bは主柱穴と係わりがあるものと思われる。B'は段を有している。

貯蔵穴は南壁下のほぼ中央に所在し、長径100cm・短径80cmの楕円形の平面形を呈する。床面から底面までの深さは22~28cmを測り、壁は傾斜を示して立ちあがる。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土や暗褐色土が主に堆積している。

焼土のあり方・焼土中の木炭・覆土中の赤褐色粒子等から火災にあったものと考えられる。



第104図 第6号住居跡実測図



出土遺物（第106図）は北西や南西コーナーの床面より多く出土している。

1・2は土師器の菱形土器である。1は中央部やや西側の床面より20cmの覆土中より出土した土器片と南西コーナー部床面より約30cmの覆土中より出土した土器片とで接合できた。距離は3.6m離れていた。口径19.1cm・器高30.2cm・底径7.8cm・現存部3/4で、口縁部は頸部より外反し、胴部はほぼ球形を呈し、底部は平底である。口縁部は横なで、頸部は笠削り、胴部外面は寛なで、内面は摩減している。色調はにぶい橙色、胎土は砂粒を含み、焼成は良である。2は北西コーナー部床面にまとまって出土した土器片と北西側床面直上より出土した土器片とで接合できた。推定口径30cm・器高22.8cm・底径8cm・現存部3/4で、口縁部は頸部よりゆるやかに外反し、最大径は口縁部にあり、広口である。胴部は扁平な球形を呈し、胴部最大径は上位にある。底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は刷毛目、内面はなでを施し、色調はにぶい橙色、胎土

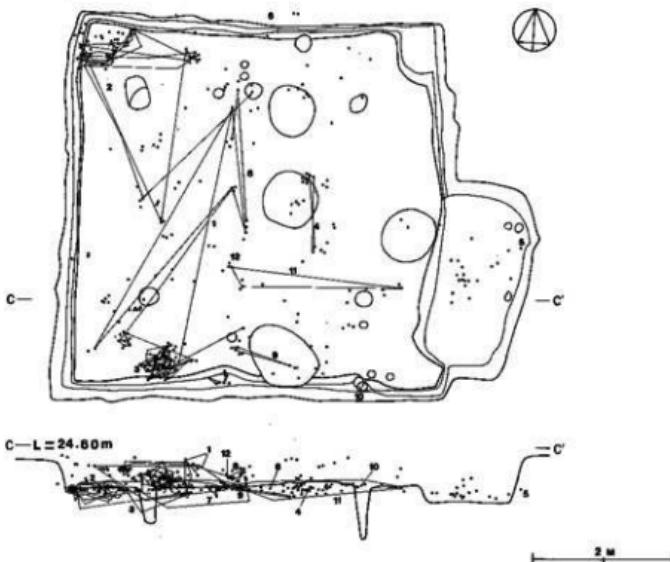
は砂砾を含み、焼成は普通である。

3は土師器の壺形土器であり、北西コーナー部付近の床面より約10cmの覆土中にまとまって出土した土器片で接合できた。現高25cm・底径3.7cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、胴部はほぼ球形を呈し、最大径は下位にある。底部は平底で口縁部は欠損している。胴部外面は刷毛目、内面はなで輪積痕が認められる。色調はによい橙色、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

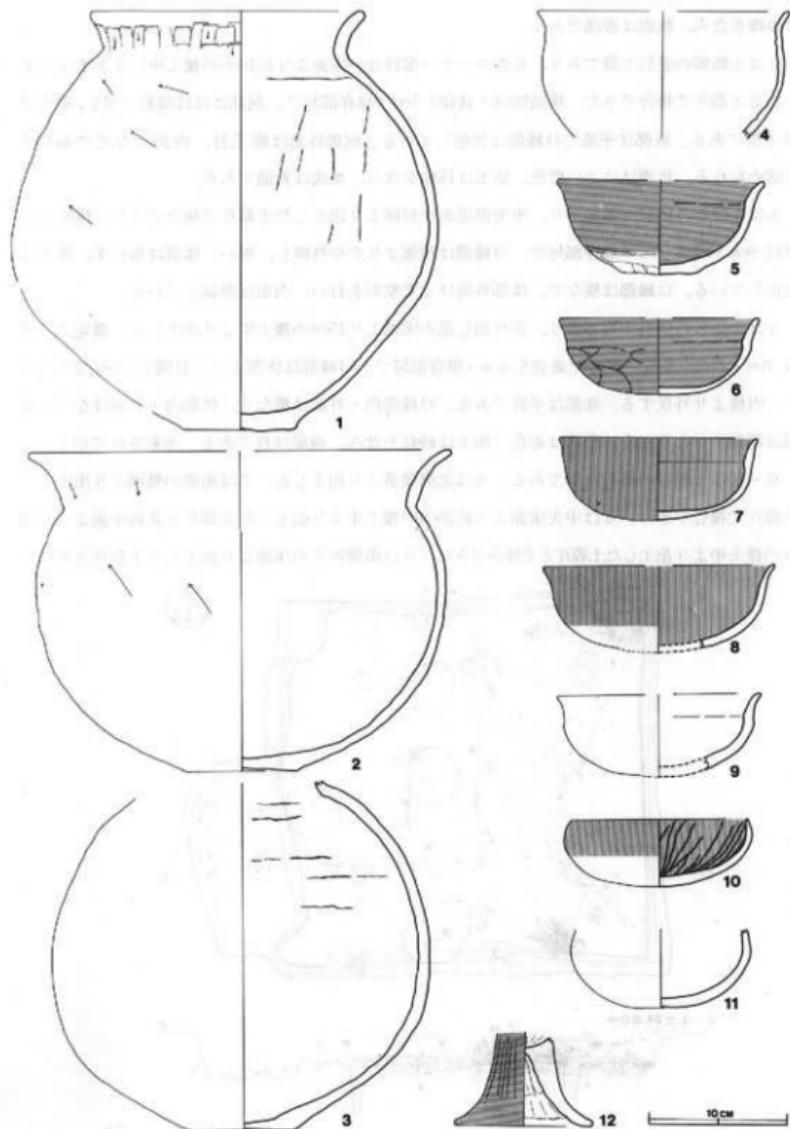
4は土師器の鉢形土器であり、中央部床面や炉跡より出土した土器片で接合できた。推定で口径17.9cm・現高9cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は頸部よりやや外傾し、短い。体部は張らず、底部は欠損している。口縁部は横なで、体部外面はなで整形を行い、内面は摩滅している。

5は土師器の塊形土器であり、張り出し部の床面より15cmの覆土中より出土した。推定で口径14.7cm・器高6.8cm・推定で底径5.4cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は体部より一旦開きながら立ちあがり、内側より外反する。底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、体部内・外面はなで、底部は笠削りがなされる。色調は赤色、胎土は砂粒を含み、焼成は良である。赤彩されている。

6～10は土師器の环形土器である。6は北側壁溝より出土した。7は南側の壁溝より出土した土器片で接合できた。8は中央床面より約20cmの覆土中より出土した土器片と北側床面より約10cmの覆土中より出土した土器片とで接合できた。9は南壁近くの床面より出土した土器片と貯蔵穴



第105図 第6号住居跡出土遺物分布図



第106図 第6号住居跡出土遺物実測図

より出土した11器片と接合できた。10は南壁下東側の壁溝より出土した。6・7・9はほぼ同形であり、6は推定で口径14cm・器高5.5cm・現存部%，7は推定で口径14cm・器高5.9cm・現存部%，9は推定で口径14.5cm・現高5.9cm・現存部%である。6・7・9とも口縁部は一旦開きながら立ちあがり、内稜より外反し、底部は丸底である。口縁部内・外面は横なで、体部外面は鉈削り、内面はなで整形を行う。色調は6・7が赤色、9が明赤褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。6・7は赤彩されている。8は推定で口径16.7cm・現高6cm・現存部%で、体部は一旦開きながら立ちあがり、外反して口縁部に至る。底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、体部内・外面はなで、色調はにぶい赤褐色、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。赤彩されている。10は口径12.6cm・器高4.8cmで完形である。体部は一旦開きながら立ちあがり、口縁部でやや内彎する。底部は丸底である。口縁部内・外面は横なで、体部外面は鉈削り、内面は荒磨きで色調は赤色、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。赤彩されている。

11は土師器の塊形土器であり、中央より南側床面より出土した土器片と東側床面より出土した土器片と接合できた。現存部%で口縁部は欠損している。体部は底部より一旦開きながら立ちあがり、やや内彎する。底部は丸底である。体部内・外面はなで、色調はにぶい橙色、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

12は土師器の高杯形土器の脚部であり、中央よりやや南側の床面から約15cmの覆土中より出土した。脚部は接合部よりやや開き、裾部で開く。赤彩されている。

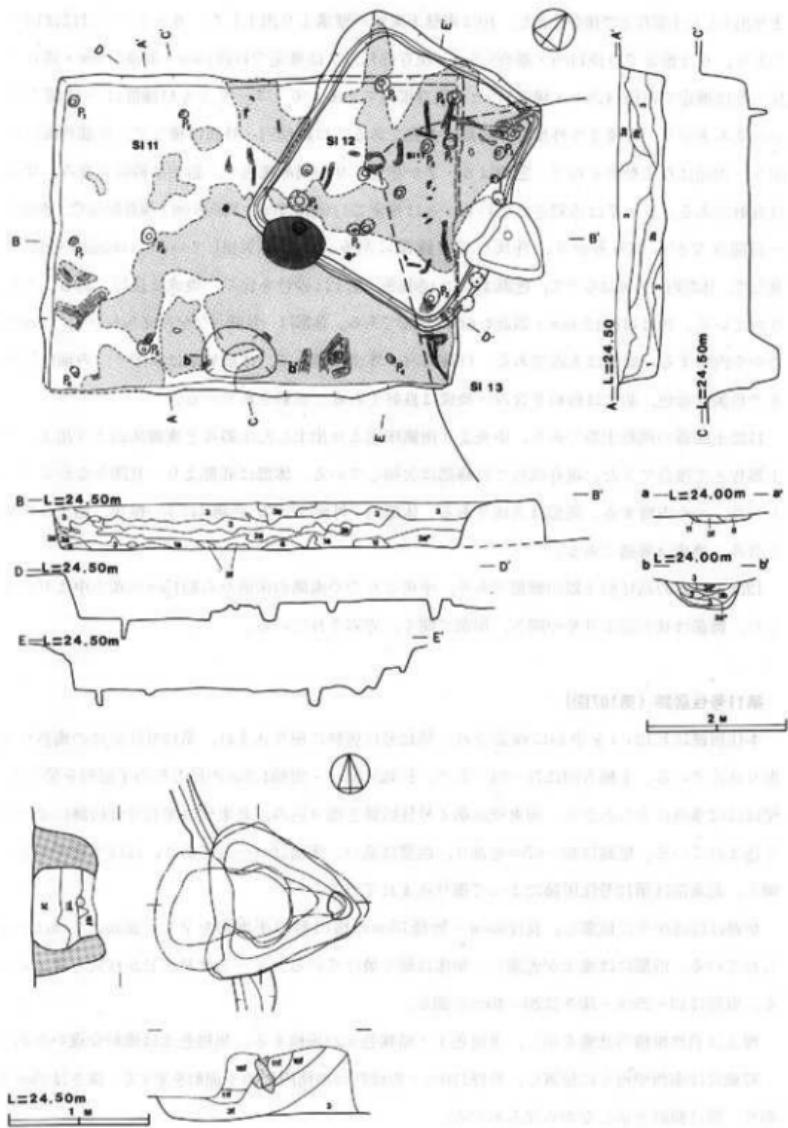
第11号住居跡（第107図）

本住居跡はE12c4を中心に確認され、第12号住居跡に掘り込まれ、第13号住居跡の南西壁を掘り込んでいる。主軸方向はN-54°-Eで、長軸5.85m・短軸4.5mの長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがる。南東壁は第4号住居跡を掘り込み、北東壁は第12号住居跡により掘り込まれている。壁高は40~67cmを測り、西壁は高い。床面はロームであり、ほぼ平坦で非常に硬く、北東部は第12号住居跡によって掘り込まれている。

炉跡はほぼ中央に位置し、長径88cm・短径73cmの楕円形の平面形を呈し、皿状に7cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットは日~旦が柱穴と考えられる。直径は13~25cm・深さは20~40cmを測る。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土が堆積する。黒褐色土は微妙な違いがある。貯蔵穴は南西壁近くに位置し、長径110cm・短径75cmの楕円形の平面形を呈する。深さは35cmを測り、壁は傾斜を示しながら立ちあがる。

本住居跡は焼土、炭化物の出土や覆土中に含まれる赤褐色粒子より、火災にあったと考えられる。



第107図 第11・12号住居跡、第12号住居跡カマド実測図

出土遺物（第108図）は床面や床面直上より出土している。

1は土師器の塊形土器であり、口径

16.2cm・器高7.1cm・現存部%で底部

は欠損し、口縁部はやや外反する。口

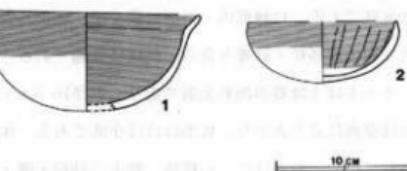
縁部内・外面は横なで、体部外面は箇

削り、内面はなで整形を行う。色調はにふい橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

2は土師器の環形土器であり、推定で口径10.7cm・器高4.4cm・現存部%で口縁部は内脣している。底部は丸底である。口縁部内・外面は横なで、体部外面は箇削り、内面は疎な対磨きを行う。

色調は赤色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。1・2とも赤彩されている。

その他に球状土錐（第206図19）が出土している。



第108図 第11号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡（第109図）

本住居跡はE 12°eに確認され、東端縁辺部の第10号住居跡の4m北東側に位置する。主軸方向はN-41°-Wで、長軸4.6m・短軸2.8mの長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがる。床面はロームで、ほぼ平坦であるが、北東側が低い。本住居跡は第1号溝によって床面や壁が掘り込まれている。

炉跡も第1号溝により掘り込まれている。ピットはH-Rが主柱穴と考えられ、長径は13~35cm・深さは80~90cmを測る。壁柱穴と考えられるピットが32個存在し、南側に小ピットが多数存在する。

貯蔵穴は南西壁の中央よりやや南側に位置し、長径72cm・短径68cmの円形の平面形を呈し、深さは30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ちあがる。

覆土は一部擾乱を受けているが自然堆積の状態を示し、暗褐色土・褐色土が主に堆積している。焼上が南コーナー付近と北側床面に検出され、火災にあったことが推定される。

出土遺物（第110図）

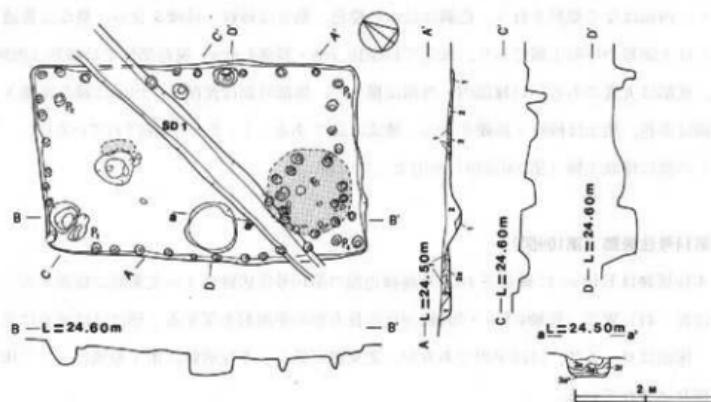
は床面よりやや浮いた状態で出土している。

1は土師器の壺形土器で、現高19cm・推定で底径9.5cm・現存部%である。口縁部は頸部より外傾し、胴部はやや扁平な球形を呈し底部は殆ど欠損している。器外面は箇削り、内面はなでであるが摩滅している。色調はにふい橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。

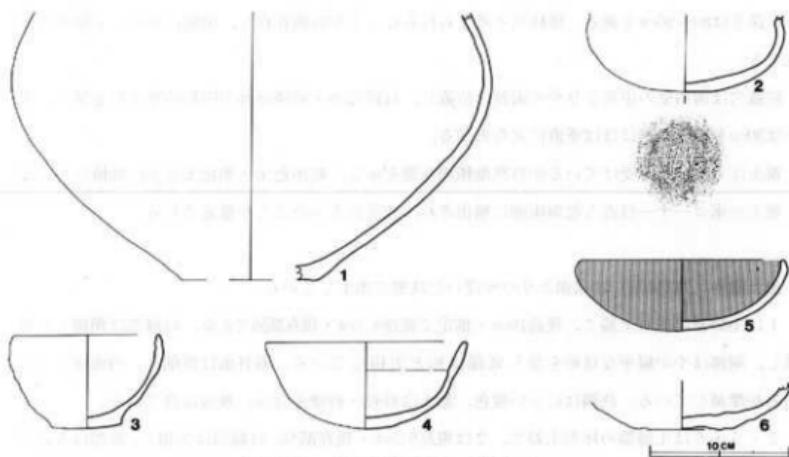
2・5・6は土師器の環形土器で、2は現高5.5cm・現存部%，口縁部は欠損し、底部は丸底である。体部内・外面は箇削り、内面は摩滅している。色調はにふい赤褐色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。5は口径14.5cm・器高5.1cm・完形であり、口縁部はやや内脣し、底部

は丸底である。口縁部内・外面は横なで、体部外面は荒削り、内面はなで整形を行う。色調は赤色で胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。赤彩されている。

3・4は土師器の塊形土器であり、口径10.3cm・器高6.7cm・底径4.9cm・現存部分で口縁部はほぼ垂直に立ちあがり、底部はほぼ平底である。体部内面はなでであるが内・外面とも摩滅し凹凸している。色調はにぶい橙色、胎土は砂粒・礫・スコリアを含み、焼成は不良である。4は口径14.2cm・器高6.2cm・現存部分で、体部内稜より直線的に開き口縁部に至る。底部は丸底である。



第109図 第14号住居跡実測図



第110図 第14号住居跡出土物実測図

る。口縁部内・外面は横なで、体部外面は摩滅している。色調はにぶい赤褐色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は不良である。

第27号住居跡（第29図）

本住居跡はE11h4を中心確認され、第24号住居跡の4m南西側に位置する。主軸方向はN-52.5°Wで、長軸5.62m・短軸5.30mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがり、壁高は10~20cmを測り、北壁や東壁は高い。床面は第30号住居跡を貼床し、5~10cmほど高く、貼床部分は非常に硬い。

炉跡は中央よりやや北西寄りに位置し、長径48cm・短径42cmの円形の平面形を呈し皿状に4cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットは床面に39個検出された。これらは主柱穴と明確に把握できないが且つ柱が主柱穴と考えられる。壁ぎわに小ピットが34個確認され、内側に傾斜しているものが多い。

貯藏穴は南コーナー部に位置し、長軸55cm・短軸40cmの隅丸長方形の平面形を呈する。深さは35cmを測り、壁は傾斜を示しながら立ちあがる。

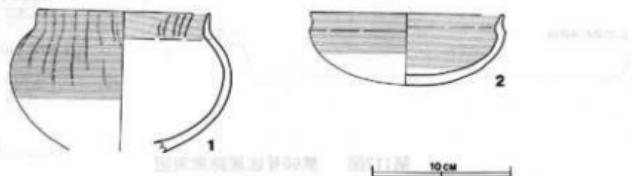
覆土は一部擾乱を受けているが自然堆積の状態を示し、黒褐色土・褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第111図）は床面や床面直上より少量出土している。

1は土師器の塊形土器で、口径12.2cm・現高10cm・現存部5cmである。口縁部は垂直に立ちあがり、体部はやや扁平で底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで後一部分細い籠磨き、体部外面は籠削り後細い籠磨き、内面はなで整形を行う。色調は体部上位が赤色、下位が灰褐色で、胎土は砂粒・砂礫・スコリアを含み、焼成は普通である。赤彩されている。

2は土師器の環形土器で、口径13.8cm・器高5cm・現存部5cmである。口縁部は内・外面に稜を有し、後よりやや外傾し、底部は丸底である。口縁部内・外面は横なで、体部外面は籠削り、内面はなで後細い籠磨きを行う。色調は赤色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

その他に球状土錘（第206図38~42）・輕石（第215図49~51）が出土している。



第111図 第27号住居跡出土遺物実測図

第60号住居跡（第112図）

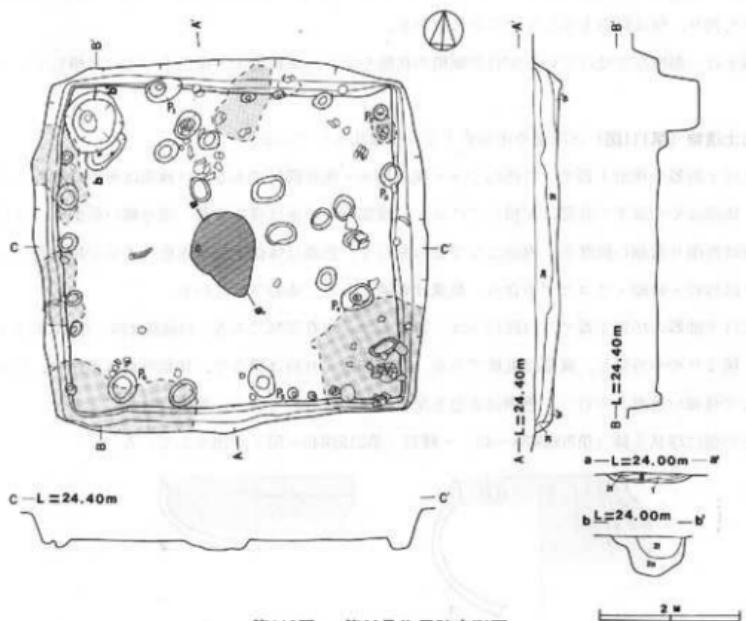
本住居跡はD 9 f₇・D 9 f₈を中心に確認され、第61号住居跡の4 m北西側に位置する。主軸方向はN-86°Eで長軸5.62m・短軸5.35mの方形の平面形を呈する。壁は垂直に立ちあがり、壁高は35-45cmを測り北壁が低い。壁下には壁溝が周回し、幅15-20cm・深さ7-10cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬く、炉付近は特に硬い。焼土が検出される。

炉跡はほぼ中央に位置し、長径120cm・短径95cmの卵形の平面形を呈し、皿状に13cmほど掘られている。内部には焼土が充満し、炉床は硬く焼けている。ピットは床面に31個検出されたが、支柱穴と考えられるものは不明である。

貯蔵穴は北西コーナー部に位置し、長径85cm・短径80cmのほぼ円形の平面形を呈し、深さは55cmを測る。壁は外傾しながら立ちあがる。内部は柔らかい暗褐色土が堆積している。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・褐色土が主に堆積している。

焼土のあり方や覆土中に焼土粒子が含まれていることから火災にあったと考えられる。



第112図 第60号住居跡実測図

出土遺物（第113・114・115図）は床面や焼土上より出土している。

1～3・5は土師器の壺形土器である。1は口径21.3cm・器高29.8cm・底径7.7cm・現存部%で、口縁部は頸部より一旦やや垂直に立ちあがり、端部で外反し後を有す。胴部は扁平な球形を呈し、最大径は中位にある。底部は平底で狭い。口縁部内・外面、胴部外面とも刷毛目、内面は剥落のため不明で、底部外面はなで整形を行う。色調はにぶい黄褐色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成はやや不良である。2は口径18.3cm・器高28.8cm・底径6.8cm・現存部%で、口縁部は頸部より外反しながら立ちあがり稜を有する。胴部は球形を呈し、最大径は胴部中位にある。底部は平底で狭い。口縁部内・外面は指なで、胴部外面・底部外面は箇削り、胴部内面はなで整形を行う。色調は橙色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。3は推定口径20.6cm・現高17cm・現存部%で、口縁部は頸部より外傾しながら立ちあがり稜を有する。胴部は大きく内嚙するものと考えられ、胴部の一部と底部は欠損している。口縁部外面は刷毛目後横なで、内面は横なで後刷毛目で、胴部外面は刷毛目後窪なで、内面はなで整形を行う。色調はにぶい橙色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。5は口径18.5cm・現高20cm・現存部%で、口縁部は頸部より外反しながら立ちあがり、稜を有する。胴部は球形を呈し、底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は箇なで、内面はなで整形を行う。色調はにぶい橙色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

4・6～10・12は土師器の壺形土器であり、4・6・7・12は小型である。4は口径15.7cm・器高18cm・現存部%で、口縁部は頸部より外反しながら立ちあがり、稜を有す。胴部は球形を呈し、最大径は胴部中位にある。底部は丸底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は箇削り、内面は窪なで整形を行う。色調はにぶい橙色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良好である。6は口径13.4cm・器高12.2cm・底径4.2cm・現存部%で、口縁部は頸部よりやや外反しながら立ちあがり、稜を有す。胴部はやや球形を呈し、底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は箇削り、内面や底部外面はなで整形を行う。色調はにぶい橙色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。7は口径11.2cm・器高12.9cm・底径4.6cm・現存部%で、口縁部は頸部より外反しながら立ちあがり、稜を有す。胴部は球形を呈し、底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部内・外面は摩減している。色調はにぶい橙色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。12は口径11.2cm・現高8cm・現存部%で、口縁部は頸部よりやや外反しながら立ちあがる。胴部は球形を呈すると考えられ、底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は箇削り、内面は窪なで整形を行う。色調は赤色。胎土は砂粒を含み、焼成は普通で、赤彩されている。8は口径18.8cm・器高29.6cm・ほぼ完形で、口縁部は頸部より外反しながら立ちあがり、稜を有す。胴部は球形を呈し、最大径は中位にあり底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は箇削り、内面はなで、底部外面はなで整形を行う。色調はにぶい赤褐色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

含み、焼成は不良である。9は口径19.5cm・現高24cm・現存部%で、口縁部は頸部より外反しながら立ちあがり、稜を有する。胴部は球形を呈し底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、胴部外面上位は刷毛目、他は窓なで整形を行う。色調はにぶい褐色、胎土は砂粒を含み、焼成は良である。10は現高18cm・底径6.2cm・現存部%で、口縁部は欠損する。胴部は球形を呈するものと考えられ、底部は平底である。胴部外表面は窓なで、内面はなでで、色調はにぶい黄橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

11は土師器の鉢形上器で、現高21.5cm・底径8.9cm・孔径7.9cm・現存部%である。胴部は底部よりゆるやかな曲線を示しながら立ちあがり、口縁部は欠損している。胴部外表面は窓なで、内面はなでで、色調はにぶい橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。

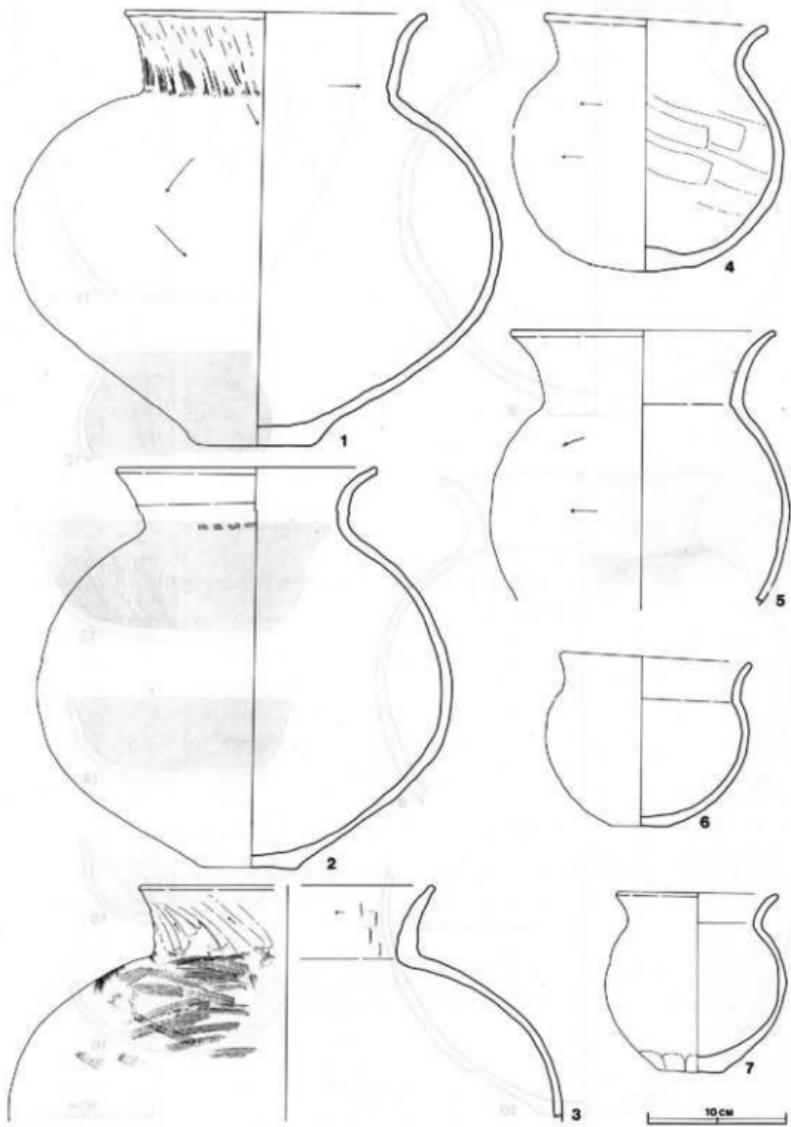
13は土師器の鉢形土器であり、口径21.3cm・器高8.6cm・現存部%で、口縁部は頸部より外反しながら立ちあがり、稜を有する。体部は内彎しながら立ちあがる。底部は丸底である。口縁部内・外面は窓なで、体部外表面は窓削り後窓なで、内面は放射状の窓磨きで、色調は赤色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。赤彩されている。

14・15・19は土師器の壺形土器である。14は口径15.6cm・器高6cm・現存部%で、口縁部は体部の棱よりやや外傾して立ちあがり、体部は内彎しながら立ちあがる。底部は丸底である。口縁部は横なで、体部外表面は窓削りで、色調は赤色、胎土は砂粒を含み、焼成は良である。赤彩されている。15は口径13.9cm・器高6.4cm・現存部%で、口縁部は体部よりやや外傾して立ちあがり、底部は丸底である。口縁部内・外面は横なで、体部外表面は窓削りで、内面は放射状に窓磨きを行う。色調は橙色で、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成はやや不良である。19は口径10.9cm・器高6.3cm・完形で、口縁部は頸部より垂直に立ちあがり、体部は内彎しながら立ちあがる。底部は丸底である。体部内面には擦痕がみられる。口縁部内・外面は横なで、体部外表面は窓削り、内面は窓磨きで、色調はにぶい橙色、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。

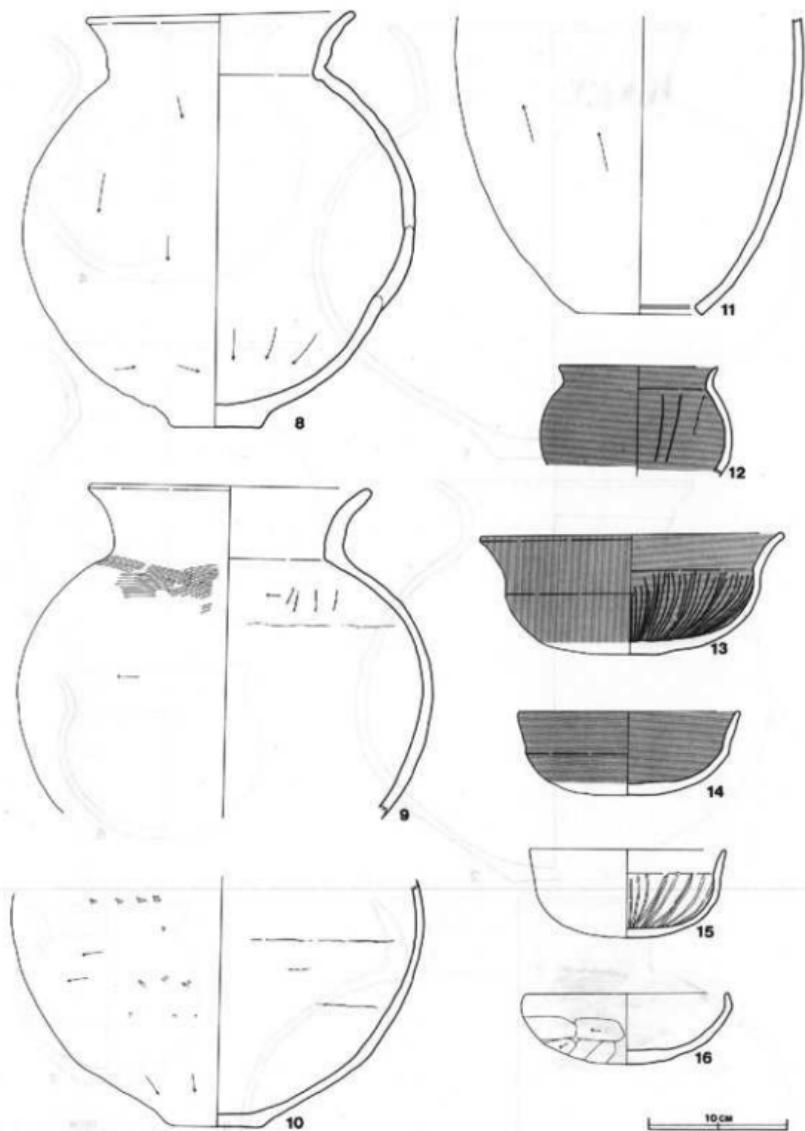
16~18・20は土師器の壺形土器であり、16は口径14.4cm・器高5cm・ほぼ完形で、口縁部は体部から内彎しながら立ちあがり、底部は丸底である。色調は橙色で、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

17は口径12.4cm・器高5cm・完形で、口縁部は内棱よりやや外傾しながら立ちあがり、底部は丸底である。18は推定口径14.5cm・器高4.8cm・現存部%で、口縁部は外傾する。底部は丸底で、中央に窪みがある。20は口径13cm・器高5.8cm・現存部%で、口縁部はやや垂直に立ちあがり、底部は丸底である。色調はにぶい褐色で、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良好である。

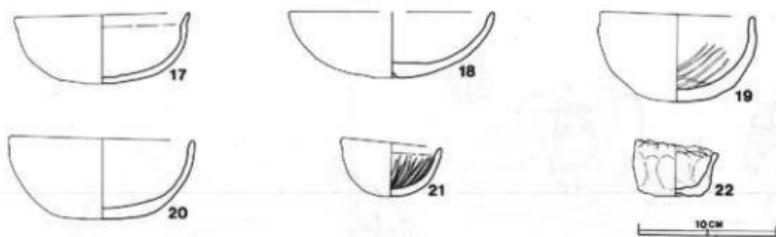
21は非常に小型の土師器の鉢形土器と考えられ、口径7cm・器高4cm・完形で、口縁部は外傾し、底部は丸底である。体部外表面は窓なで、内面は放射状の窓磨きを行う。色調は橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。



第113図 第60号住居跡出土遺物実測図



第114図 第60号住居跡出土遺物実測図



第115図 第60号住居跡出土遺物実測図

22は手捏ね土器であり、口径5.8cm・器高3.7cm・完形で、口縁部はやや外傾して立ちあがる。体内部・外面は指圧痕が残る。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。その他に土製品（第207図62）・石製模造品（第208図6）及び覆土中より尖頭器（第214図48）が出土している。

古墳時代（鬼高期）

第3号住居跡（第102図）

本住居跡はD12 j₉・D12 j₁₀に確認され、第2号住居跡を掘り込んで重複している。主軸方向はN-0°で、長軸4.02m・短軸3.80mのほぼ方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがるが、北壁の一部は第5号住居跡のカマドと北壁によって掘り込まれている。壁高は12cmを測る。壁下には壁溝が周回していると思われるが、一部掘り込まれている。壁溝は幅20cmを有し、深さは5cmほどである。床面はロームであり平坦で非常に硬いが、大部分の床面は第5号住居跡に掘られている。

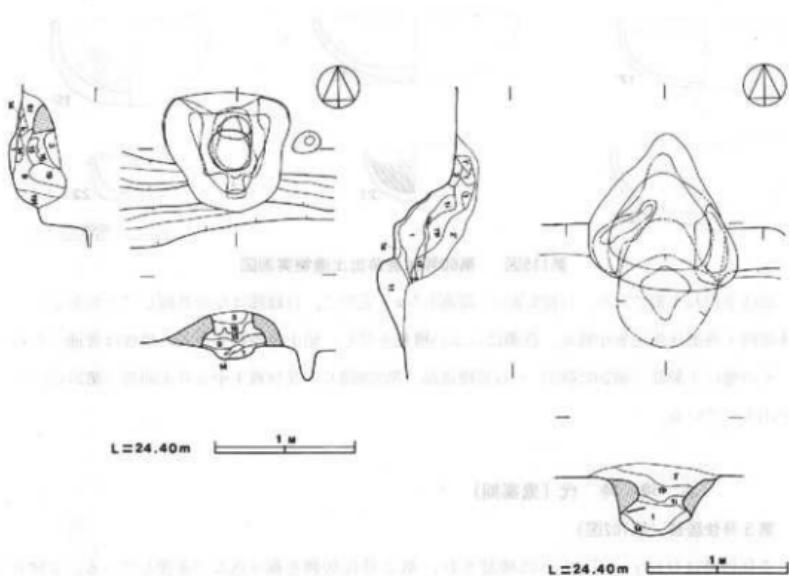
カマド（第116図）は南壁や東寄りに位置し主軸方向S-0°で、長径88cm・短径80cmほどである。遺存度は非常に良好で壁を60cm幅で外側に三角形状に20cmほど掘り込んで煙道部とし、火床は床面より8cm掘り込まれている。袖部は砂質粘土で造られ南壁より住居側に約80cmほど突出し、天井部も粘土から成り、土器設置部が残る。燃焼部に多量の赤褐色土が堆積し、薄い灰層が認められる。ピットは床面や壁に13個検出されたが、第3号住居跡の主柱穴と考えられるものはB-B'で東側のPは主柱穴と何らかの関係があるものと思われる。

貯蔵穴は南西コーナー部付近に位置し、長軸106cm・短軸60cmの長方形の平面形を呈し、床面から底面までの深さは20~40cmを測り、壁は傾斜を示しながら立ちあがる。

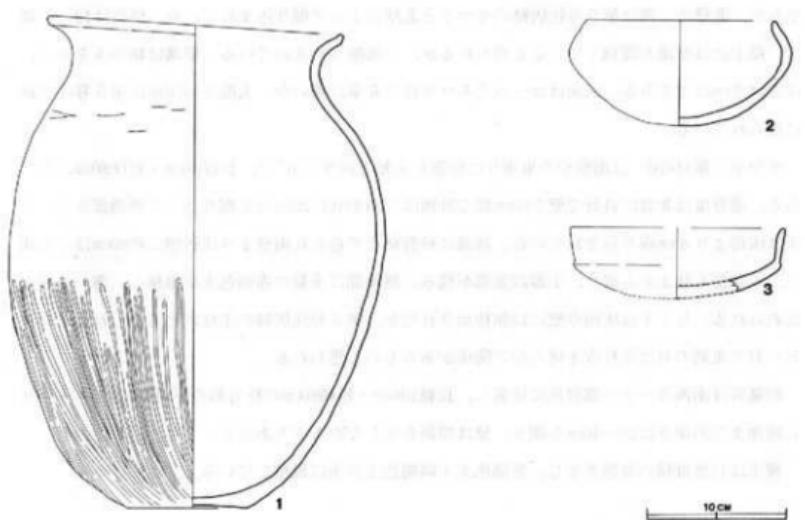
覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第117図）は床面や床面直上より出土している。

1は土師器の腰形土器であり、口径21cm・器高37.7cm・底径8.6cm・現存部%で、口縁部は頸部よ



第116図 第3・5号住居跡カマド実測図



第117図 第3号住居跡出土遺物実測図

り外反し、胴部はやや長削で底部は平底である。胴部外面下位は窓磨き、内面はなで、色調は灰褐色を呈し、胎土は砂礫を含み、不良である。

2は土師器の塊形土器であり、口径13.5cm・器高7.6cm・ほぼ完形で、口縁部は内彎しながら立ちあがり、底部は丸底である。口縁部内・外面はなで、体部外面は窓削り、内面はなで、色調は体部はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

3は土師器の壺形土器である。推定で口径15.3cm・現存部分で、口縁部は棱からほぼ垂直に立ちあがり底部は欠損している。口縁部内・外面はなで、体部外面もなで、色調は赤褐色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良好である。

その他に管状土錐（第205図1）・土製円板（第205図4）・球状土錐（第206図16）・石製の管土（第208図1）が出上している。

第7号住居跡（第7図）

本住居跡はE12azを中心確認され、第9号住居跡を掘り込み第8号住居跡と重複する。主軸方向は、N-25°-Eで長軸7m・短軸6.92mの方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがるが、西壁は第8号住居跡と重複して、壁高は60~80cmを測る。壁下には壁溝が周回し、幅は30cmを有し、深さは5cmほどを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で非常に硬く第9号住居跡を掘り込んでいる。

カマドは北壁の中央に位置していたと思われるが、殆ど攪乱を受けて原形を留めていない。ピットはI₁~II₁が主柱穴と考えられ長径は25~40cmで、深さは70~80cmを測る。II₁の主柱穴との関係は不明である。

貯蔵穴は南壁のほぼ中央に位置し、長径100cm・短径90cmのほぼ円形の平面形を呈し、深さは50cmを測り、やや開いて立ちあがる。

覆土は一部攪乱を受けているが、自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土が堆積している。

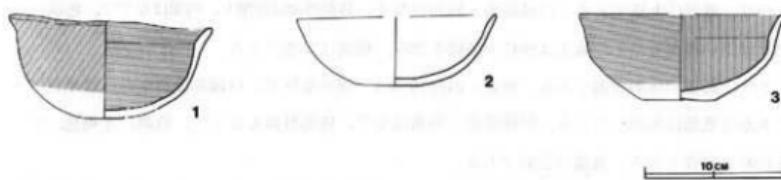
出土遺物（第118図）は床面や床面直上より出土している。

1・3は土師器の塊形土器である。1は口径14.5cm・器高7cm・現存部分である。口縁部はやや外反しながら立ちあがり底部は丸底である。口縁部は横なで、体部外面は窓削り、内面はなで、整形を行なう。3は口径14.5cm・器高6.2cm・現存部分で、口縁部は一旦立ちあがり外反し、底部は平底である。口縁部は横なで、体部内・外面はなで、底部は窓削りを行なう。色調は1がにぶい赤褐色、3が赤褐色で胎土はいずれも砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。3は赤彩されている。

2は土師器の壺形土器で、口径14.2cm・器高5cm・現存部分で、体部は底部よりゆるやかに立ちあがりながら口縁部に至る。口縁部内・外面は横なで、体部内・外面はなで整形を行なう。色

調はにぶい橙色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

その他に管状土錘（第205図2）・球状土錘（第206図17）・石製の鍛錘車（第208図3）・鉄製の刀子（第204図3）が出土し、刀子は茎と鞘口と思われる。



第118図 第7号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡（第120図）

本住居跡はE12 f₅・E12 g₅を中心に確認され、第4号住居跡の4m南側に位置する。主軸方向はN-1°Eで長軸6m・短軸5.47mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがるが、西壁はややゆるやかで壁高は25~50cmを測る。壁下には壁溝が周回し、幅は20~30cmを有し、深さは5~10cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬く踏み固められている。

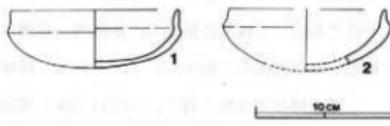
カマド（第120図）は北壁の中央に位置し、主軸方向N-0°で長径115cm・短径100cmである。遺存度は良く、壁を100cm幅で40cmほど外側に三角形状に掘り込んで煙道部とし、火床は床面より掘り込まれて18cm低くなる。袖部は砂質粘土で造られ、北壁より住居側に70cmほど突出する。燃焼部に多量の明赤褐色土・暗赤褐色土・褐色土が堆積している。ピットはP₁~P₃が主柱穴と考えられ、長径が80~95cmを測り段状をなし、深さは110~120cmほどである。P₃は主柱穴と密接な関係があるものと思われる。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・褐色土が主に堆積している。

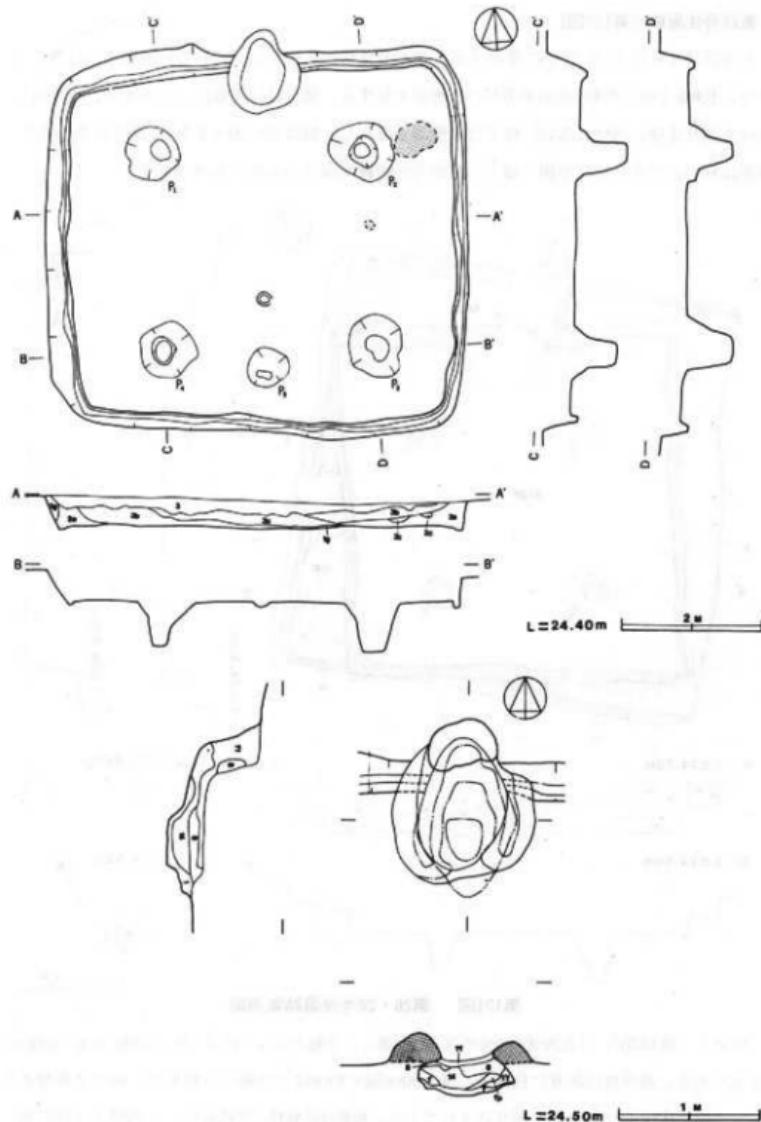
出土遺物（第119図）は床面や床面上直やカマドより少量出土している。

1・2は土師器の環形土器である。1は口径12cm・器高4.2cm・現存部3/4で、口縁部は後より一旦内傾して垂直に立ちあがり底部は丸底である。口縁部内・外面は横なで、体部外面は鋸削り整形を行う。色調は褐色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。2は推定で口径11.2cm・現高4cmの体部片で底部は欠損している。口縁部は内傾する。口縁部内・外面は横なで、体部外面は鋸削り、内面はなで整形を行う。

その他に球状土錘（第206図21~31）・土製品（第207図59）が出土している。



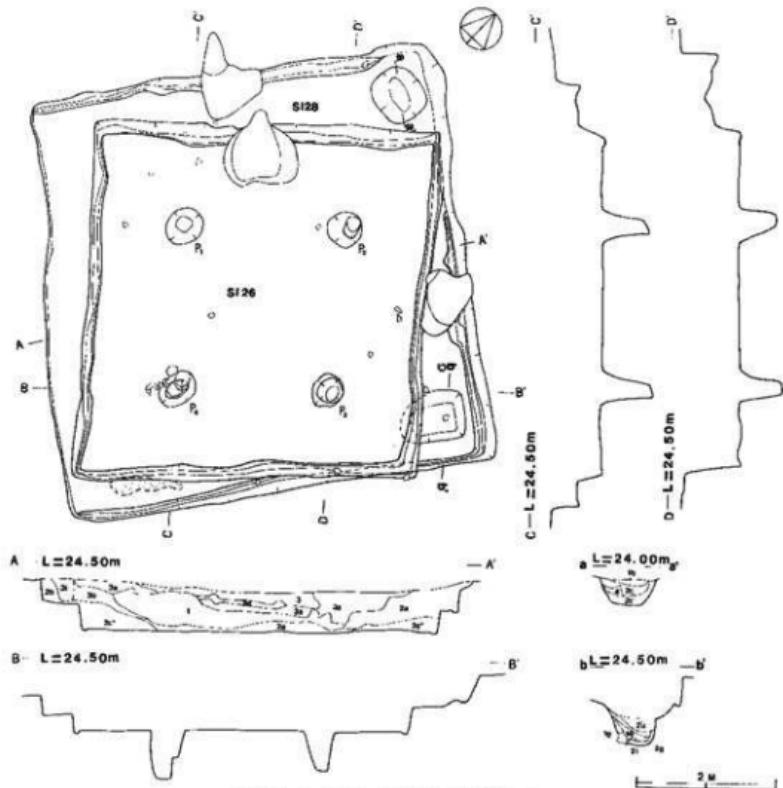
第119図 第17号住居跡出土遺物実測図



第120図 第17号住居跡・カマド実測図

第26号住居跡（第121図）

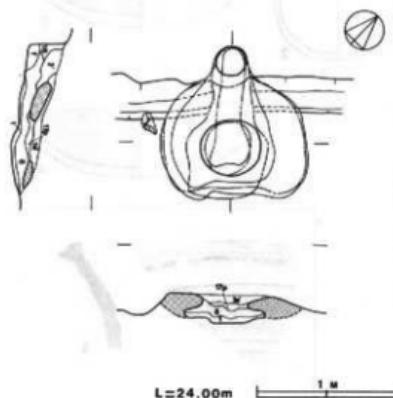
本住居跡はF11 b7を中心確認され、第28号住居跡を掘り込んでいる。主軸方向はN-43°-Wで、長軸5.15m・短軸4.88mの方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は50-80cmを測り北壁と西壁は高い。壁下には壁溝が開き、幅は15-20cmを有し、深さは5cmを測る。床面はロームでありほぼ平坦で硬く、第28号住居跡を掘り込み30-40cmほど低い。



第121図 第26・28号住居跡実測図

カマド（第122図）は北西壁のやや西寄りに位置し、主軸方向N-45.5°-W、長径110cm・短径100cmほどである。遺存度は非常に良好で、壁を90cm幅で40cmほど外側に三角形状に掘り込み煙道部とし、火床は床面より6cm低く掘り込まれている。袖部は砂質粘土で造られ、北西壁より住居側に約70cmほど突出し、天井部も粘土から成り土器設置部が残る。燃焼部に多量の赤褐色土・明褐色土が堆積している。ピットはE-Fが主柱穴と考えられ、長径は50-55cm・深さは55-75cmを測る。

覆土は擾乱を受けているが、主に黒褐色土・明褐色土・褐色土が堆積している。



第122図 第26号住居跡カマド実測図

2は土師器の塊形土器であり、口径7.1cm・器高6.7cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で口縁部は稜より内彎し、小さな底部から胴部が大きく立ちあがる。体部下位に擦痕がみえる。口縁部内・外面は横なで、体部外面はつるつるし、内面はなで整形を行う。色調は黒色、胎土は砂粒・雲母を含み、焼成は良好である。

3・4は土師器の環形土器である。3は口径14.8cm・器高4.5cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で口縁部は内彎し、底部は丸底である。口縁部内・外面は横なで、体部外面はつるつるし、内面はなで整形である。色調はにぶい褐色・黒色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。4は口径16.6cm・器高5.1cm・ほぼ完形で、器形・整形・色調・胎土・焼成は3と同じである。3・4とも内黒土器である。

5は須恵器の口縁部である。

その他に球状土錘（第206図36・37）が出土している。

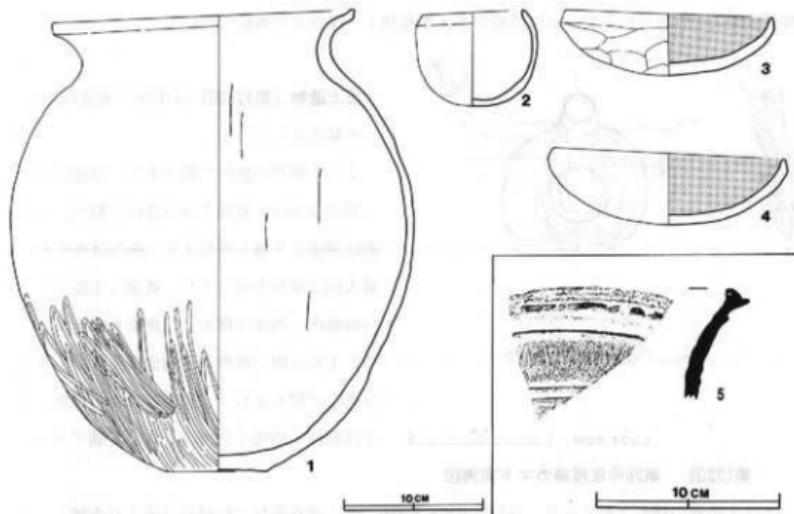
第28号住居跡（第121図）

本住居跡はF11b7を中心確認され、第26号住居跡に掘り込まれている。主軸方向はN-49°Wで、長軸6.11m・短軸6mの方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は30~50cmを測り、北西壁・南東壁は高い。壁下には壁溝が擾乱部分を除いて周回し、幅は10~20cmを有し、深さは3~5cmを測る。床面は第26号住居跡により殆どが掘り込まれ、第26号住居跡の床面より30~40cmほど高い。

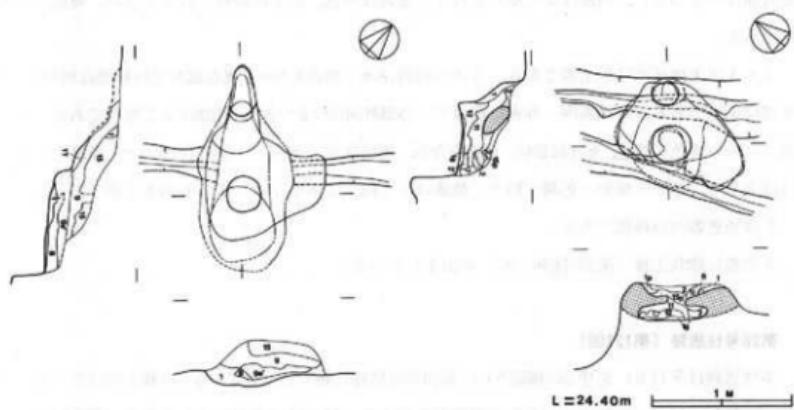
カマド1（第124図）は北西壁の中央に位置し、主軸方向N-43°Wで、長径148cm・短径67cmと推定され、遺存度は悪く、燃焼部は第26号住居跡に掘り込まれている。壁を90cm幅で60cmほど外

出土遺物（第123図）は床面や床面直上より少量出土している。

1は土師器の変形土器であり、口径21.4cm・器高32.6cm・底径7cmのほぼ完形で、口縁部は頸部より強く外反する。胴部はやや長く、最大径は胴部中位にあり、底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面上位はなで、下位は粗い鉛磨き、内面は窓なで、底部は窓なで整形を行う。色調はにぶい橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。



第123図 第26号住居跡出土遺物実測図・拓影図



第124図 第28号住居跡カマド1・2実測図

側に三角形状に掘り込み煙道部とし、火床は床面より掘り込まれて10cm低くなる。袖部は残存せず、北西壁より住居側に約60cmほど突出し、燃焼部に多量の暗赤褐色土・赤褐色土・にふい赤褐色土・褐色土が堆積する。

カマド2（第124図）は北東壁のやや東側に位置し、主軸方向N-45°Eで、長径90cm・短径80cm

と推定され、遺存度は良好であるが燃焼部は第26号住居跡に掘り込まれている。壁を60cm幅で5cmほど外側に三角形状に掘り込み煙道部とし、火床は床面より掘り込まれて6cm低くなる。袖部は砂質粘土で造られ、北東壁より住居側に約40cmほど突出し、燃焼部に暗赤褐色土・赤褐色土・極暗赤褐色土が堆積している。ピットは、第26号住居跡により掘り込まれて不明である。

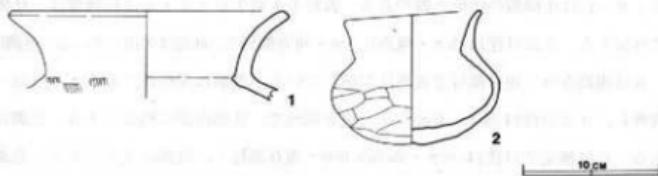
貯蔵穴1は北コーナー部に位置し、長径77cm・短径68cmの楕円形の平面形を呈し、深さ38cmほどで傾斜を示し立ちあがる。

貯蔵穴2は東コーナー部に位置し、長径は不明、短径70cmの平面形を呈し、深さ40cmを測り傾斜を示し立ちあがる。覆土は第26号住居跡と同じである。

出土遺物（第125図）は床面や貯蔵穴より少量出土している。

1は土師器の壺形土器の口縁部のみで、口径19.4cm・現高6cm、口縁部は外反し稜を有す。口縁部内・外面は横なで整形である。

2は土師器の壺形土器であり、口径9.6cm・器高9.3cmの完形である。口縁部は直線的にやや開き、胴部は扁平で底面は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は鉢削り、内面はなで整形である。色調は内・外面とも暗灰色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。



第125図 第28号住居跡出土遺物実測図

第39号住居跡（第50図）

本住居跡はE11a9を中心確認され、第43号住居跡と南東壁が複合している。主軸方向はN-46°-Eで長軸3.26m・短軸2.89mで、隅丸方形の平面形を呈している。壁はゆるやかに立ちあがり、壁高は7cmを測る。南西壁と南東壁は擾乱を受けている。床面はロームであり、平坦で硬いが、大部分の床面は第46号住居跡に掘り込まれている。

カマド（第50図）は北東壁近くに位置し、主軸方向N-46°-Eで長径86cm・短径74cmである。遺存度は悪く住居内に位置し、火床は床面より8cm低く掘り込まれている。袖部は弧状に残存し、燃焼部は円形で多量の赤褐色土・にふい赤褐色土・褐色土が堆積する。ピットはB-Bが主柱穴と考えられ、長径は25~30cmほどで、深さは22~35cmを測り、西コーナーに位置するはずの柱穴は擾乱を受けて存在しない。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第126図）は床面や床面上より出土し、一部は浮いた状態で出土している。

1は土師器の壺形土器の口縁部であり、口径17.4cm・現高6cm、口縁部は頸部より外反する。口縁部内・外面は横なで整形を行う。

2・3・7は土師器の壺形土器である。2は口径13cm・器高9.3cm・現存部 $\frac{3}{4}$ で、口縁部は短く底部は丸底である。口縁部は横なで、体部外面は範削り、頸部内面は刷毛目整形である。色調は赤色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良で赤彩されている。3は推定で口径11cm・現高7.5cm・現存部 $\frac{3}{4}$ で、口縁部は体部より内傾し垂直に立ちあがり、底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、体部外面は範削り、内面はなで整形を行う。色調は暗赤褐色、胎土・焼成は2と同じで赤彩されている。7は現高7cm・現存部 $\frac{2}{3}$ で、口縁部は少し欠損し、底部は丸底である。口縁部は横なで、体部外面は範削り、内面はなで後放射状の範磨き整形を行う。色調・胎土・焼成は3と同じで赤彩されている。

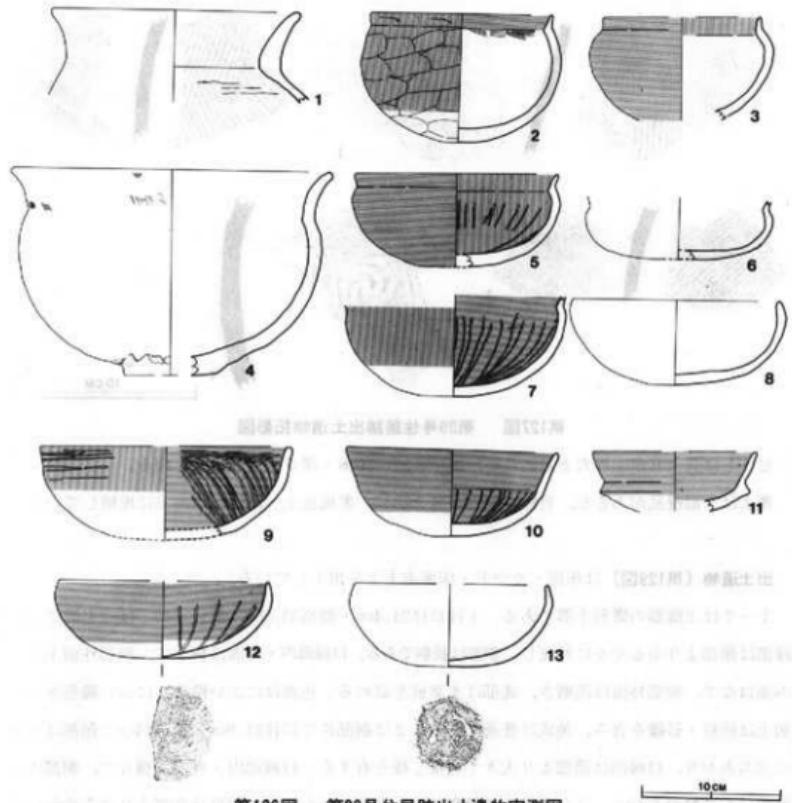
4は土師器の鉢形土器であり、口径22.5cm・器高14.7cm・推定で底径6.8cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は頸部より外反する。口縁部に比べて底部が狭いので不安定な感じがする。口縁部は横なで、胴部外面上位は摩滅し、下位から底部は範削り、内面はなで整形である。色調はにぶい赤褐色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

5・6・8～13は土師器の壺形土器である。器形を大別すると5・6は口縁部は一旦体部より内傾して外反する。5は口径14.4cm・現高6.7cm・現存部 $\frac{3}{4}$ で、底部は欠損している。色調は暗赤色である。6は現高5cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で底部は欠損している。色調は黒褐色である。8・12・13は口縁部が内脇し、8は口径14.8cm・器高6cm・現存部 $\frac{3}{4}$ で、底部内面に粗痕がある。色調はにぶい橙色である。12は推定で口径14.9cm・器高5.6cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、底部は丸底である。色調は赤色である。13は推定で口径13.7cm・器高5.9cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で底部に「+」の字が陰刻されている。色調はにぶい赤褐色である。9・10は口縁部が外傾する。9は推定で口径17.6cm・現高6.5cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、色調は暗赤褐色である。10は口径14.9cm・器高6.2cm・ほぼ完形で、色調は赤色である。11は外脇を有し、口縁部は棱より外傾し、推定で口径11.6cm・現高4cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、底部は欠損している。底部は赤色である。5・9～12は赤彩されている。5・6・8・11～13の口縁部内・外面は横なでであるが、9は範磨き、10はていねいな範なでをしている。いずれの上器も体部外面は範削り、内部はなでをした後、5・9～12は範磨きをしている。

覆土中より須恵器片（第127図）が少量出土している。

1は頸部から胴部片で頸部は範なで、胴部は平行文、一部範なでを施し、内面は同心円が窺える。2は胴部片で格子文、内面は同心円がみえる。3は胴部片で平行文が施される。4は胴部片で渦巻文が窺える。

その他に敲石（第212図21）が出土している。

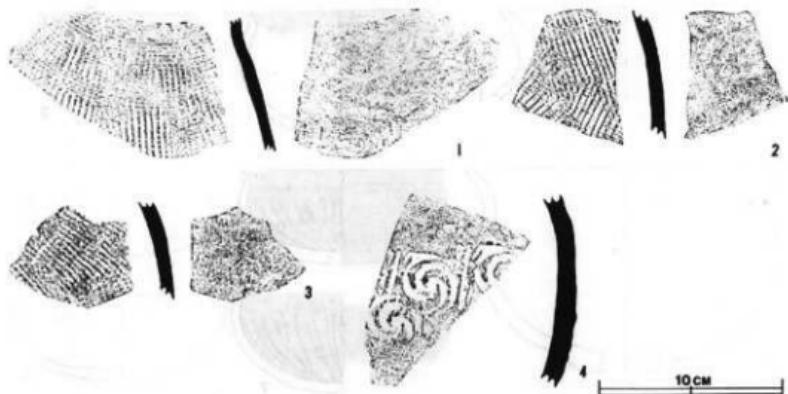


第126図 第39号住居跡出土遺物実測図

第47号住居跡（第128図）

本住居跡はD7jo・D8jiを中心確認され、本遺跡の最西端に位置し、付近に第62号土壙が存在する。主軸方向はN-57.5°-Wで、長軸4.77m・短軸4.23mの方形の平面形を呈する。壁は垂直に立ちあがって壁高は50~60cmを測り、南西壁は攪乱を受けている。壁下には壁溝が周回し、幅は15~20cm・深さは5~10cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬く踏み固められ、南東側がわずかに高い。

カマド（第128図）は北西壁のほぼ中央に位置し、主軸方向はN-57°-Wで長径128cm・短径99cmほどである。遺存度は良好で、壁を70cm幅で60cmほど外側に三角形状に掘り込み煙道部とし、火床は床面より8cm掘り込んで低くなる。袖部は左側袖部のみ残り砂質粘土で造られ、北西壁より住居側に約50cmほど突出する。燃焼部に多量の赤褐色土が堆積し、土師器が出土している。



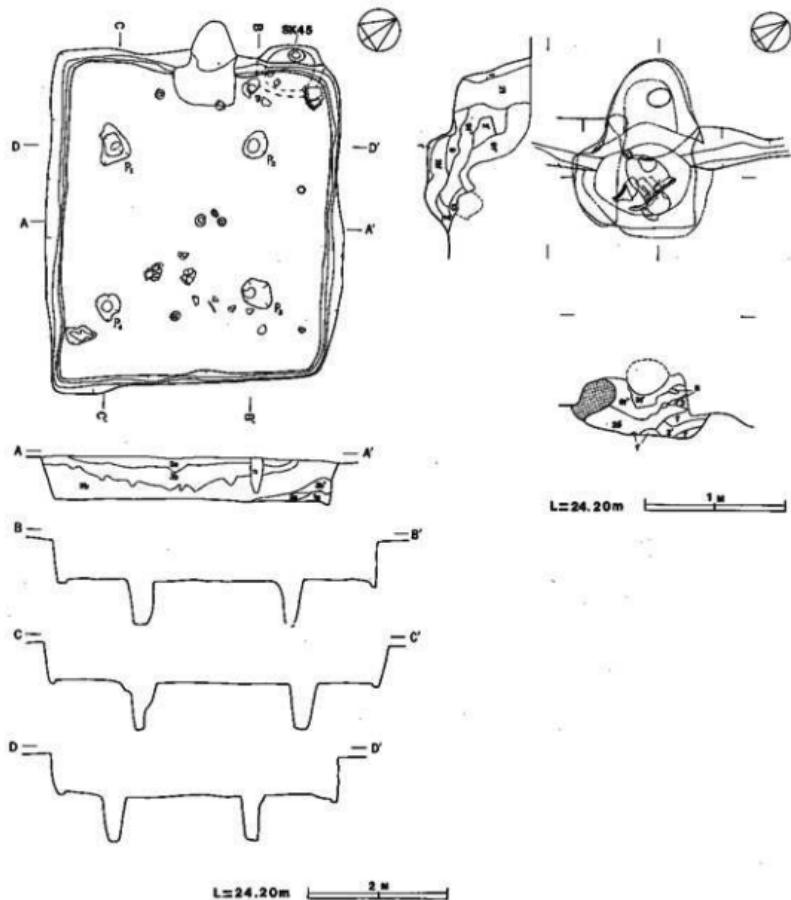
第127図 第39号住居跡出土遺物拓影図

ピットは日～月が主柱穴と考えられ、長径は35～50cm・深さは65cm内外を測る。

覆土は一部擾乱があるが、自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第129図）は床面・カマド・床面直上より出土している。

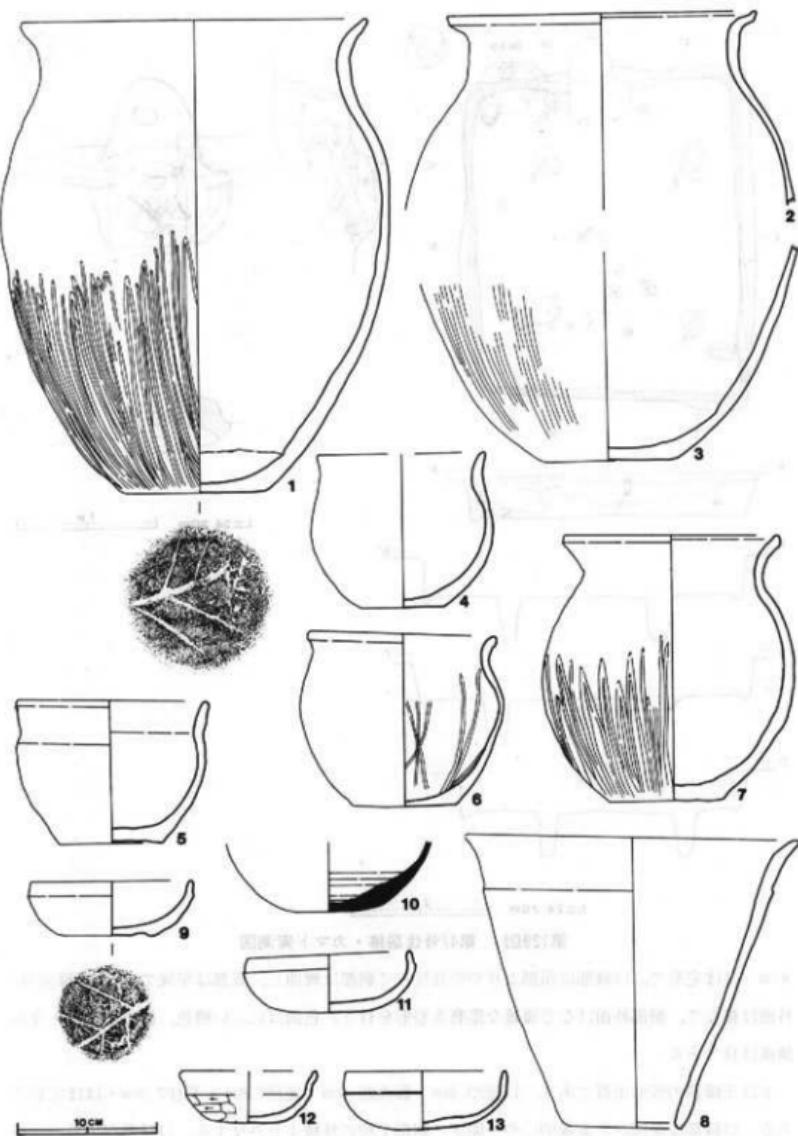
1～7は土師器の變形土器である。1は口径24.4cm・器高33.8cm・底径10cm・ほぼ完形で、口縁部は頭部よりゆるやかに外反し、胴部は長胴である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面上位と内面はなで、胴部外面は箆磨き、底部は木葉痕を認める。色調はにぶい橙色・にぶい褐色を呈し、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。2は胴部片で口径21.9cm・現高14cmで頭部は垂直に立ちあがり、口縁部は頭部より大きく外反し稜を有する。口縁部内・外面は横なで、胴部内・外面はなで整形を行う。3は底部片で現高15cm・底径9cmを測り、胴部は底部よりゆるやかに開き、底部は平底である。胴部外面は雑な箆磨き、底部はなで整形を行う。4～7は小型であり、4は推定で口径11.8cm・器高11cm・推定で底径6cm・現存部5cmで、口縁部は頭部よりわずかに外反し胴部最大径は中位にあり、底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は箆削り、内面・底部はなで整形である。色調はにぶい橙色で、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。5は口径13.4cm・器高10.3cm・底径7.4cm・ほぼ完形で、口縁部は内稜よりわずかに外傾し、広口で胴は張っていない。底部は平底である。口縁部内・外面・胴部内面は横なで、胴部外面・底部は箆削り整形である。色調は赤褐色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。6は口径13.1cm・器高12.4cm・底径7.4cm・ほぼ完形である。口縁部は頭部よりやや外反し、胴部最大径は上位にあり、底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部内面はなで後まばらな箆磨き整形を行う。色調は黒褐色、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。7は口径15cm・器高19cm・底径



第128図 第47号住居跡・カマド実測図

8 cm・ほぼ完形で、口縁部は頸部よりやや外反して胴部は彎曲し、底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面はなで後端を箇磨き整形を行う。色調はにじい橙色、胎土は砂粒を含み、焼成は良である。

8は土師器の瓶形土器であり、口径23.4cm・器高20.8cm・底径7.8cm・孔径7.3cm・ほぼ完形である。口縁部は底部から直線的にやや開き、胴部上位の外縁より外反する。口縁部内・外面は横なで、胴部内面はなで、外面は箇削りと考えられる。色調は灰褐色、胎土は砂粒を含み、焼成は不良である。



第129図 第47号住居跡出土遺物実測図

9・11～13は土師器の壺形土器であり、9・11は外縁より内壁する。9は口径11.4cm・器高3.9cm・底径6.8cm・ほぼ完形で、底部に木葉痕がみられる。11は口径11.5cm・器高4.2cm・ほぼ完形である。12は口縁部が外縁より外反し、推定で口径9.4cm・器高3.8cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、13は口縁部が外縁より垂直に立ち、口径11.3cm・器高4.2cm・ほぼ完形で、いずれも口縁部は横なで、体部外面は範削り、内面はなでである。

10は須恵器の壺形土器と思われ、クロコ整形である。

第48号住居跡（第130図）

本住居跡はE 8 a2を中心確認され、第45号住居跡の8m南西側に位置する。主軸方向はN-11.5°Eで長軸4.2m・短軸4mの隅丸方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は45cmを測り、北壁は土壌により搅乱を受けている。壁下に壁溝がカマドや貯蔵穴を除いて周回し、幅は20～30cmを有し、深さは5cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬く、主柱穴内は特に硬く、南側は搅乱を受けている。

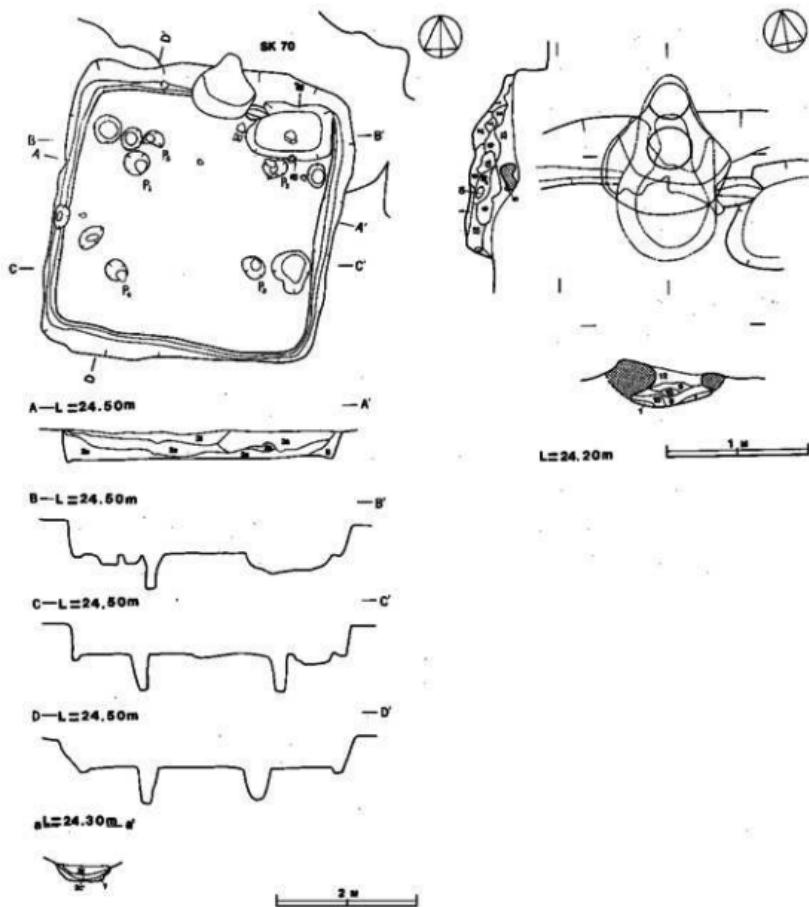
カマド（第130図）は北壁のやや東寄りに位置し、主軸方向N-12°Eで長径132cm・短径87cmほどである。遺存段は悪く壁を40cm幅で30cmほど外側に三角形状に掘り込んで煙道部とし、火床は床面より20cm掘り込まれて低くなる。煙道部付近は第70号土壙により搅乱を受けている。袖部は砂質粘土で造られ、北壁より住居側に約15cmほど突出している。燃焼部には大量の暗赤褐色土・赤色土・極暗赤褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。ピットは11個検出され、B～Eが主柱穴と考えられ、長径は30～35cm・深さは44～57cmを測る。北西コーナー部にP・Rの2個のピットが所在する。

貯蔵穴はカマドの東側、北東コーナー部に位置し、長径120cm・短径80cmの楕円形の平面形を呈し、深さは22cmを測る。壁は傾斜を示しながら立ちあがる。壁上は搅乱を受けていると思われ、黒褐色土・微妙な違いのある2層の暗褐色土・褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第131図）は床面から少量出土している。

1は土師器の壺形土器であり、口径25.2cm・器高23.2cm・底径9cm・孔径8.7cm・ほぼ完形である。口縁部は外縁より急角度で外反し、胴部は底部より一旦やや開き、ほぼ垂直に立ちあがる。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は範削り、内面は細い窓磨き整形を行う。色調は暗灰色で、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。

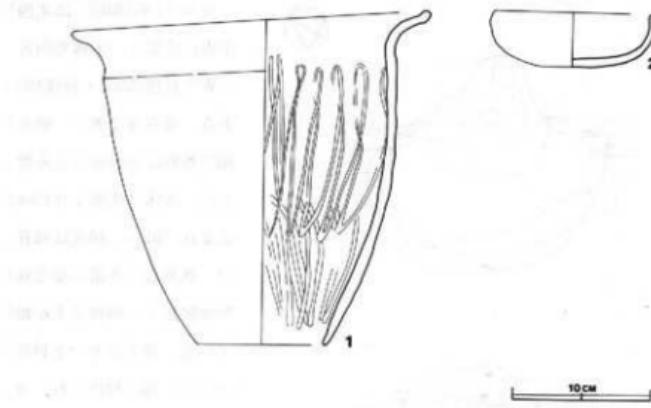
2は土師器の壺形土器であり、口径11.3cm・器高3.9cm・ほぼ完形である。口縁部はやや内脣し、底部は丸底である。口縁部内・外面は横なで、体部外面は範削り整形を行う。色調は橙色、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。



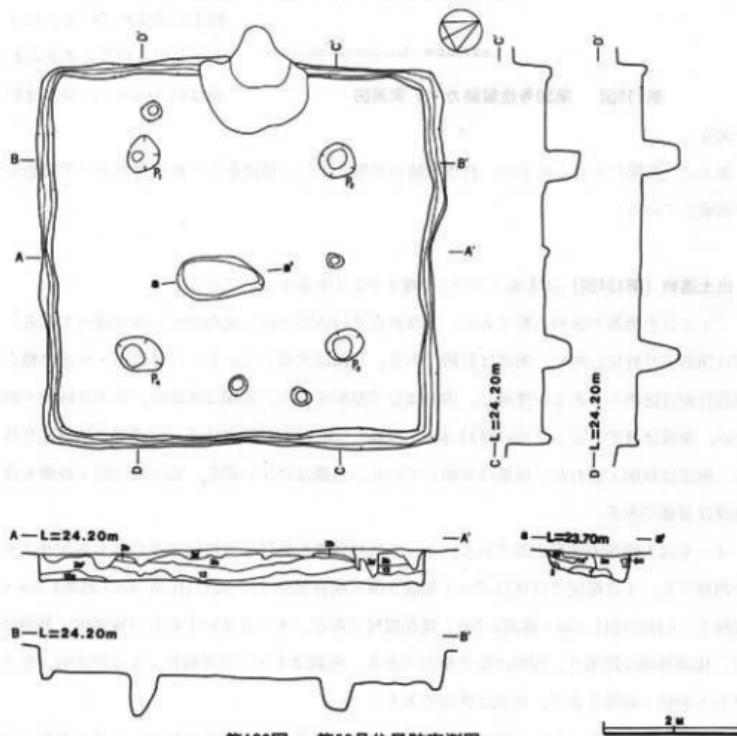
第130図 第48号住居跡・カマド実測図

第50号住居跡（第132図）

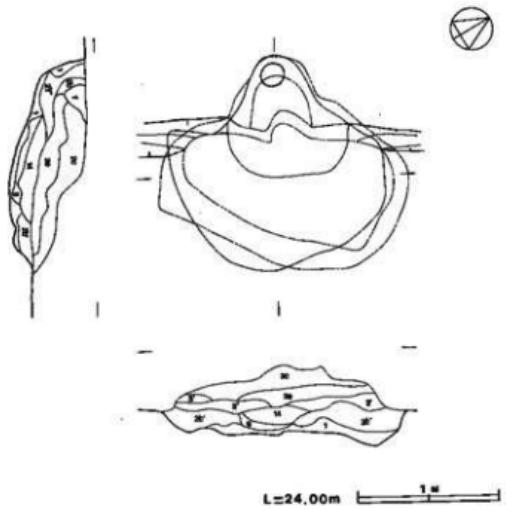
本住居跡は E 7 co を中心に確認され、本遺跡の最西端部に位置する。主軸方向は N-60°-W で、長軸 5.5m・短軸 5.4m の方形の平面形を呈する。壁は垂直に立ちあがり、壁高は 30~50cm を測る。北東壁は擾乱を受けている。壁下に壁溝が周回し、幅は 15~20cm を有し、深さは 5~10cm を測る。床面はロームであり、ほぼ平坦でとても硬い。中央部より南側の床面は土壠に掘られている。



第131図 第48号住居跡出土遺物実測図



第132図 第50号住居跡実測図



第133図 第50号住居跡カマド実測図

を測る。

覆土は一部攪乱が見られるが、自然堆積の状態を示し、暗褐色土・板暗褐色土・黒褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第134図）は床面・カマドや覆土中より少量出土している。

1・2は土師器の変形土器である。1は推定で口径25.5cm・現高28cm・現存部 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は頸部より外反し短く、胴部は長胴である。底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は範磨きであるが摩滅し、内面はなで整形を行う。色調は灰褐色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。2は口径14.4cm・現高9.5cm・現存部 $\frac{1}{2}$ である。口縁部は頸部より外反する。胴部は長胴と思われ、底部は欠損している。色調はにふい橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

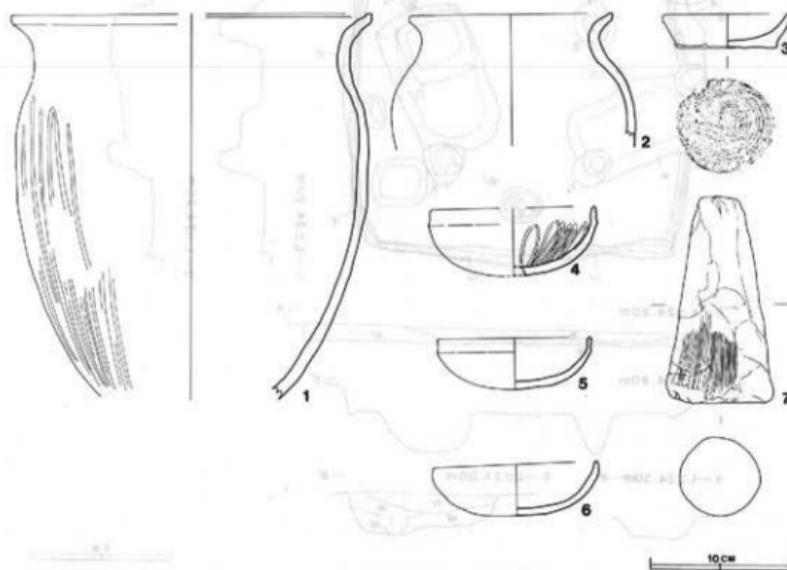
4・6は土師器の環形土器である。4・5は口縁部が外縁よりほぼ垂直に立ちあがり、6はやや内側する。4は推定で口径11.7cm・現高5cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、5は口径10.9cm・器高3.7cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、6は口径11.6cm・器高3.7cm・現存部 $\frac{1}{2}$ である。4・6はいずれも口縁部内・外面は横なで、体部外面は範削り、内面はなで整形である。色調は4・5が灰褐色、6は灰赤色、胎土はいずれも砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

3は灯明皿と考えられ、口径9cm・器高2.5cm・底径7cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、ロクロ整形で糸切り

カマド（第133図）は北西壁の中央に位置し、主軸方向N-60°-Wで長径155cm・短径150cmである。遺存度は悪い。壁を100cm幅で外側に50cm掘り込み煙道部とし、火床は床面より15cm掘り込まれて低い。袖部は残存しない。燃焼部に多量の暗赤褐色土・明赤褐色土・暗褐色土が堆積している。焼土がカマド付近や北コーナー部に検出され、カマドの袖部であろうと思われる砂質粘土が含まれている。ピットはP-Pが主柱穴と考えられ、直径は42~61cmで、深さは約55cm

痕が窺える。覆土中より出土し、混入したものと思われる。

7は土製の支脚で、全長14.7cm・直径5.8cmの完形で焼土が付着している。色調は橙色、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。



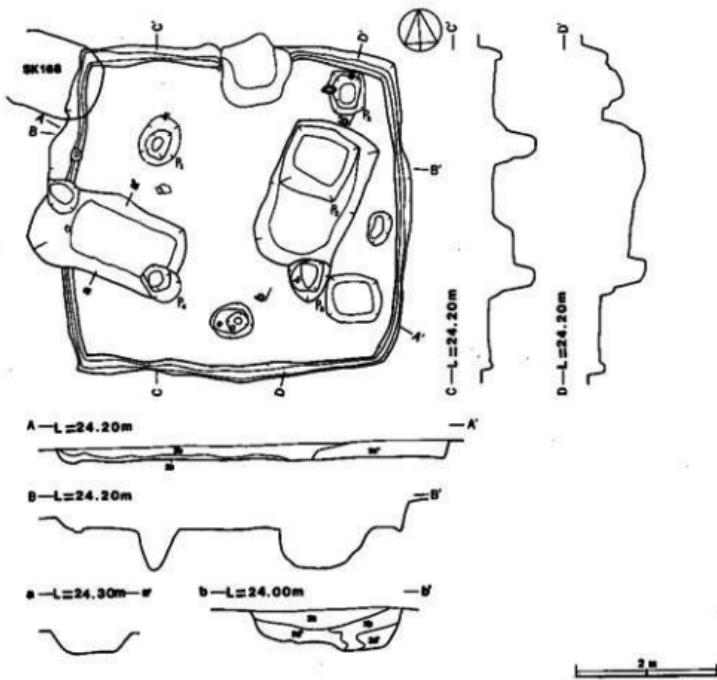
第134図 第50号住居跡出土遺物実測図

第55号住居跡（第135図）

本住居跡はD 8b7を中心確認され、第53号住居跡の1m北西側に位置する。住軸方向はN-6.5°-Eで、長軸5m・短軸4.7mの方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は15~40cmを測る。西壁の一部は土壤により搅乱を受けている。壁下に壁溝がカマドを除いて周回し、幅は約15cmを有し、深さは約8cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬いが、土壤により搅乱を受けている。

カマド（第136図）は北壁の中央よりやや東側に位置し、主軸方向N-3°-Eで長径75cm・短径50cmほどである。遺存度は悪く、壁を80cm幅で40cmほど外側に掘り込んで煙道部とし、火床は床面より15cmほど掘り込まれ低くなる。袖部は残存しない。燃焼部に大量の赤褐色土・暗赤褐色土・にふい赤褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。ピットはB~Rが主柱穴と考えられ、長径は55~70cmを有し、深さは56~67cmを測る。Bは土壤により搅乱を受け、Rは不明である。

覆土は自然堆積の状態を示し、暗褐色土が堆積している。



第135図 第55号住居跡実測図

出土遺物（第137図）はカマド・床面や床面上より少量出土している。

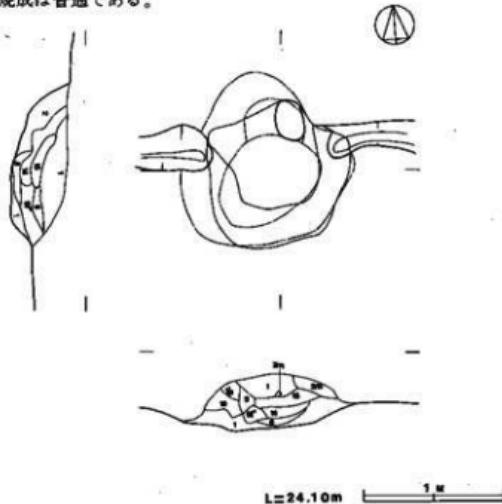
1は土師器の瓶形土器であり、推定で口径23cm・器高18.6cm・底径11.6cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は急角度で外傾し、胴部は底部よりやや直線的に開く。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は笠削り、内面上位はなで、下位は笠削り整形である。色調は暗灰色・にぼい橙色、胎土は砂粒・砂礫・スコリアを含み、焼成は良である。

2は土師器の壺形土器の体部で、現高5.6cm・底径5.7cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、底部は平底である。体部外面は笠削り、内面や底部はなで整形である。色調はにぼい橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

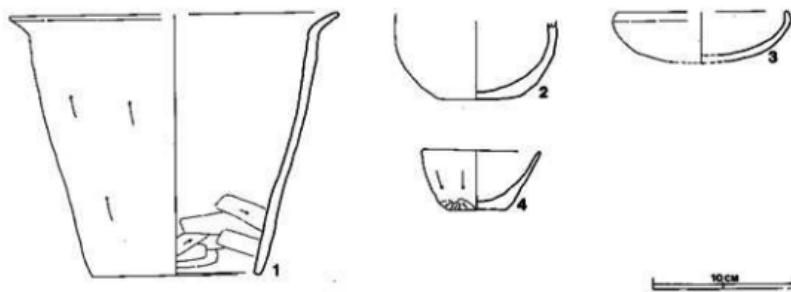
3は土師器の杯形土器であり、推定で口径12cm・現高3.5cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は外縁より内側へと傾き、底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、体部外面は笠削り、内面はなで整形である。色調は灰褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

4は土師器の小型鉢形土器であり、口径8.3cm・器高4.3cm・底径4cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は底部よりほぼ直線的に開く。胴部外面は笠削り、内面や底部外面はなで整形を行う。色調は褐灰色。

胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。



第136図 第55号住居跡カマド実測図



第137図 第55号住居跡出土遺物実測図

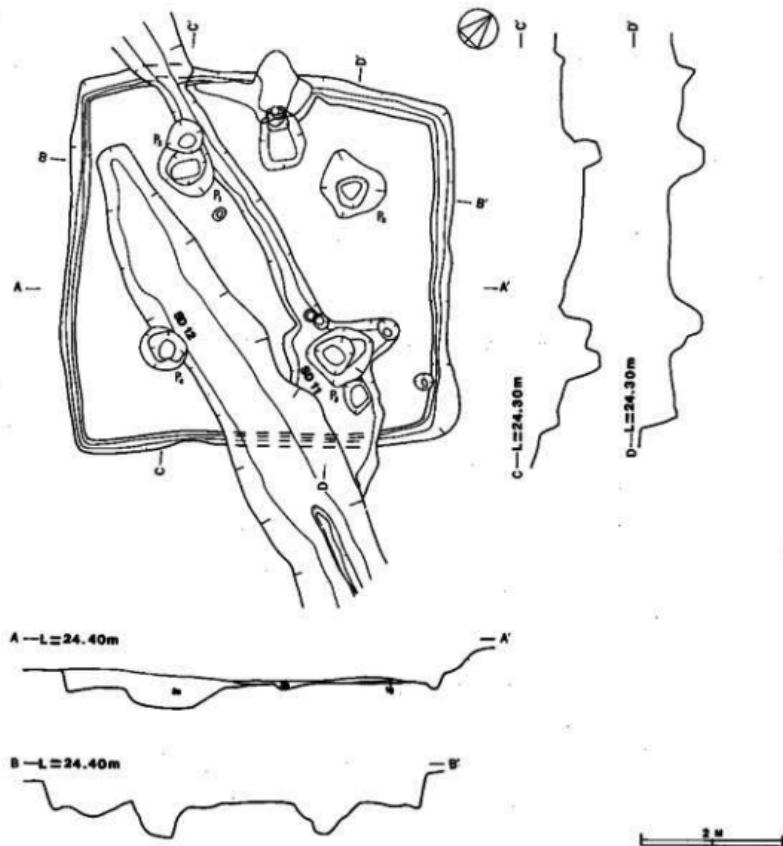
第57号住居跡（第138図）

本住居跡は D 9 g₂を中心確認され、第52号住居跡の 7m 南東側、土壘の北西側に検出された。主軸方向は N-44°W で、長軸 5.43m・短軸 5.33m の方形の平面形を呈する。壁は垂直に立ちあがり、壁高は 15~50cm を測る。南東壁は溝により掘り込まれている。壁下に壁溝が所在し、溝により一部掘り込まれているが、周回しているものと考えられる。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬い。中央部付近は特に硬く踏み固められている。溝が 2 条東西に走り、溝により床面は掘り込まれている。

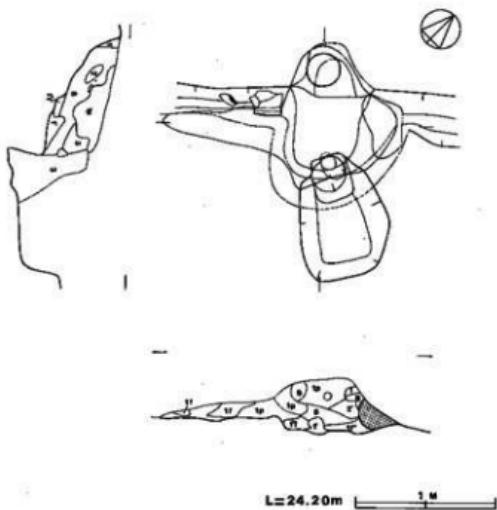
カマド（第139図）は北西壁の中央に位置し、主軸方向 N-44°W で、長径 100cm・短径 90cm ほど

である。遺存度は悪い。壁を60cm幅で30cmほど外側に掘り込んで煙道部とし、火床は床面より15cmほど掘り込まれて低い。袖部は砂質粘土で造られ、右袖部が残存する。燃焼部には赤褐色土・暗赤褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。また土壤とピットにより燃焼部が擾乱を受けている。ピットはP~P'が主柱穴と考えられ、長径は65~100cmを有し、深さは約45cmを測る。

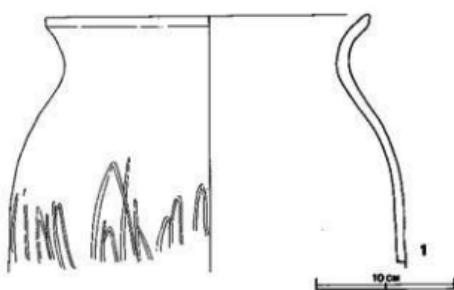
覆土は擾乱を受けているが、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。



第138図 第57号住居跡実測図



第139図 第57号住居跡カマド実測図



第140図 第57号住居跡出土遺物実測図

出土遺物(140図)は搅乱を受けているためか非常に少量であり、床面やカマドより出土した。

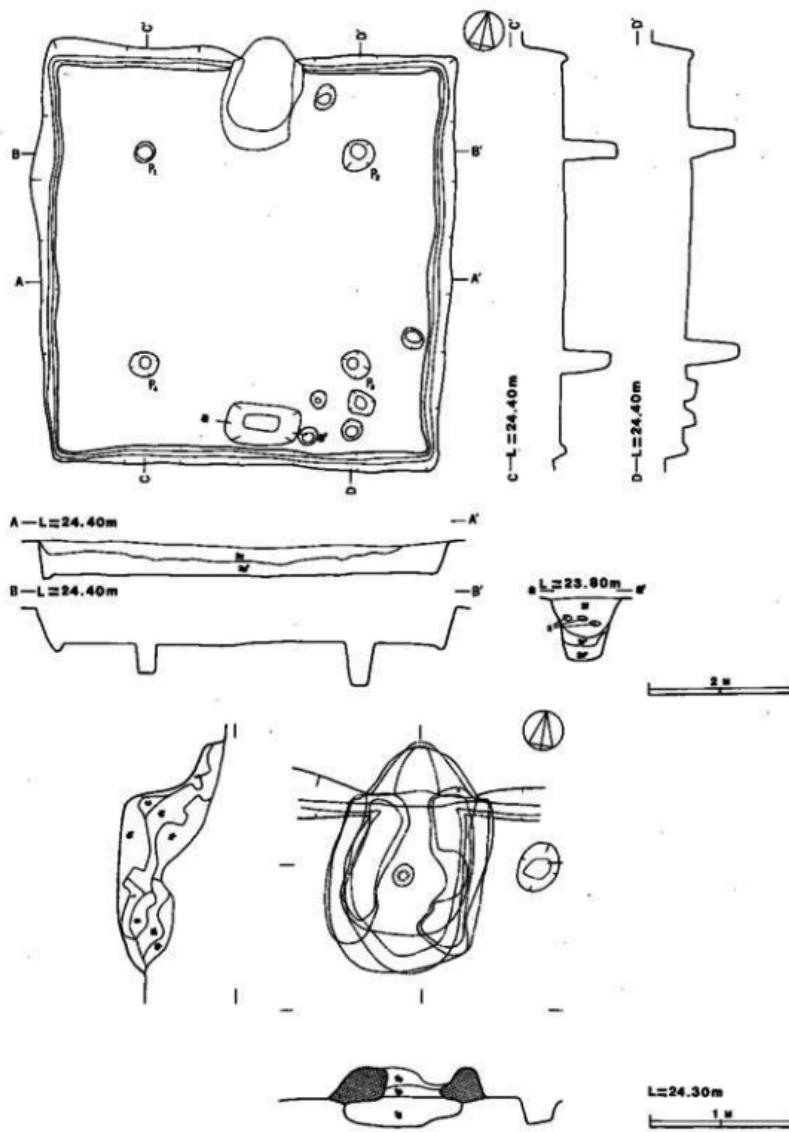
1は土師器の変形土器であり、口径23cm・現高18.5cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は頸部よりゆるやかに外反し、胴部は長胴と考えられ、底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、胴部外

面上位はなでで、中位は雑な範磨きを行なう。

色調は明褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

第61号住居跡（第141図）

本住居跡はD 9号を中心に確認され、第12号溝の北側に位置する。主軸方向はN-7°-Wで、長軸5.95m・短軸5.9mの方形の平面形を呈する。壁は垂直に立ちあがり、壁高は30~55cmを測る。壁下に壁溝が周回し、幅10~15cm・深さ5~10cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬く、カマド付近と中央より東側は踏まれて特に硬くしまっている。

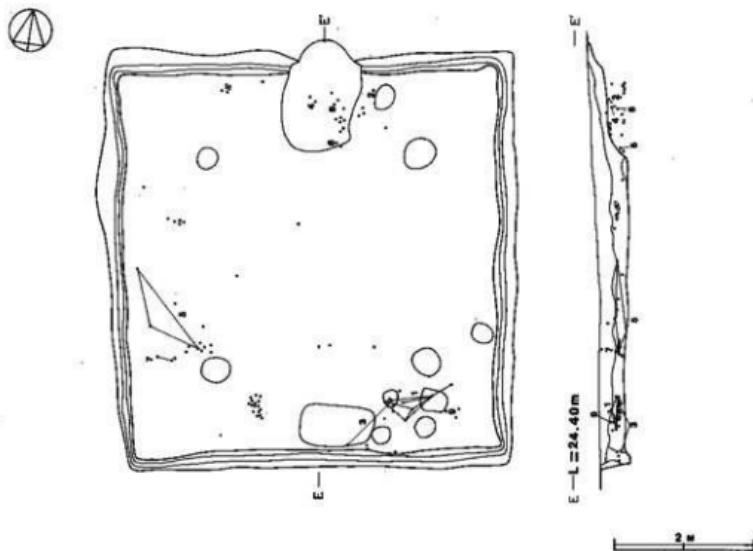


第141図 第61号住居跡・カマド実測図

カマド（第141図）は北壁のほぼ中央に位置し、主軸方向N-5°-Wで長径105cm・短径100cmである。遺存度は非常に良好で、壁を80cm幅で35cmほど外側に掘り込み煙道部とし、火床は床面上より20cm掘り込まれている。袖部は砂質粘土で造られ、北壁より住居側に110cm突出し、掘り込みは少ない。燃焼部に多量の赤褐色土・にぶい赤褐色土・黒褐色土・褐色土が堆積している。ピットはB～Eが主柱穴と考えられ、長径は30～50cmを有し、深さは約75cmを測る。

貯蔵穴は南壁下のほぼ中央に位置し、長軸105cm・短軸58cmの隅丸長方形の平面形を呈し、床面より深さ89cmを測る。壁は傾斜を示しながら立ちあがる。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土が主に堆積している。

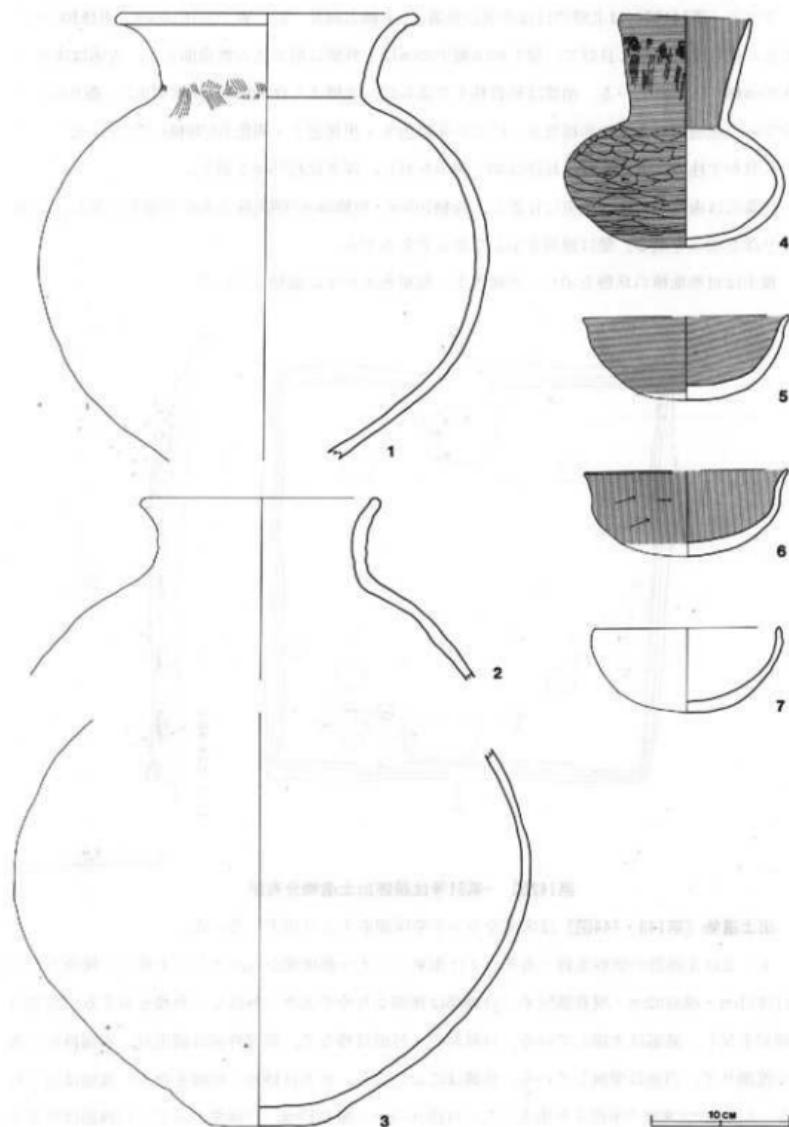


第142図 第61号住居跡出土遺物分布図

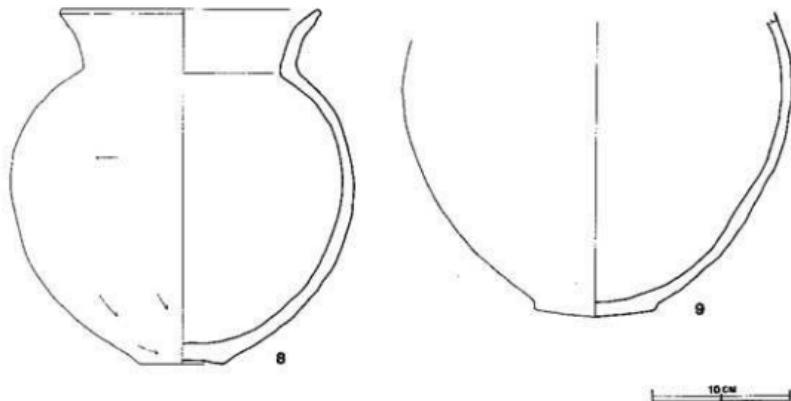
出土遺物（第143・144図）は床面やカマドや床面上より出土している。

1・2は土師器の壺形土器である。1は南東コーナー部床面から出土した土器片で接合できた。口径21cm・現高32cm・現存部6cmで、口縁部は頸部よりやや大きく外反し、外棱を有する。胴部は球形を呈し、底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、頸部外面は刷毛目、胴部外面は雄な箆削りで、内面は摩滅している。色調はにぶい橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。2はカマド東側の床面より出土した。口径16.3cm・現高13cm、口縁部のみで、口縁部は頸部より一旦垂直に立ちあがりやや外反する。口縁部は横なで整形を行った。

3は土師器の壺形土器であり、南壁下の床面より5～8cmの覆土中から出土した土器片で接合



第143図 第61号住居跡出土遺物実測図



第144図 第61号住居跡出土遺物実測図

できた。現高は29.5cm・底径7.3cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、胴部は球形を呈するものと思われ、底部は平底で口縁部は欠損している。胴部外面は範なで、内面や底部外面はなでで、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

4は土師器の壺形土器であり、カマド内より出土した。口径9.2cm・器高16.5cm・ほぼ完形である。口縁部は頸部より直線的にやや外傾し、胴部は扁平な球形を呈し、最大径は胴部中位にある。底部は丸底である。頸部外面は刷毛目、内面は範なで、胴部外面は範削りで内面は摩滅している。色調は明赤褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。赤彩されている。

5～7は土師器の壺形土器である。5は西側の床面より10～20cmの覆土中から出土した土器片で接合できた。推定で口径14.6cm・器高6cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は頸部よりやや外反しながら立ちあがり、底部は丸底で器肉は厚い。6はカマド内より出土した。推定で口径14.3cm・器高6.2cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は頸部よりやや外反しながら立ちあがり、底部は丸底で器肉は厚い。7は西側の床面より12cmの覆土中より出土した土器片で接合できた。口径13cm・器高6cm・現存部 $\frac{1}{2}$ で、口縁部は頸部よりやや外彎しながら立ちあがり、底部は丸底で、器肉は厚い。いずれも口縁部外面は横なで、体部外面は範削り、内面はなで整形を行う。色調は5・6が赤色、7は橙色で、いずれも胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。5・6は赤彩されている。

8・9は土師器の壺形土器である。8はカマド内より出土し、口径18.2cm・現高25.4cm・底径5.9cmで、ほぼ完形である。口縁部は頸部より外反しながら立ちあがり、棱を有し、胴部は球形を呈し、最大径は胴部中位にある。底部は平底で、胴部外面に稜痕がある。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は範なで、内面や底部外面はなで整形を行う。色調は灰褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成は良である。9は南東コーナー部付近の床面より20cmの覆土中より出土した。現高21

cm・底径約9cmで口縁部は欠損している。胴部は球形を呈するものと思われ、底部は平らでなく安定感が非常に悪い。

その他に石製模造品（第208図4）が出土している。

第63号住居跡（第145図）

本住居跡はE 9°hを中心に確認され、土壘の下に位置し、第62号住居跡の7m南西側に所在する。主軸方向はN-6.5°-Wで、長軸5.9m・短軸5.75mの隅丸方形の平面形を呈する。壁は垂直に立ちあがり、壁高は40~55cmを測り西壁が低い。壁下に壁溝が周回し、幅は10~15cmを有し、深さは5~10cmを測る。床面はロームでありほぼ平坦で硬い。

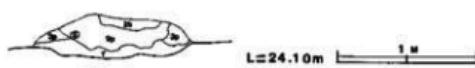
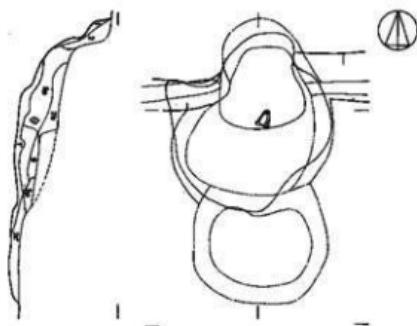
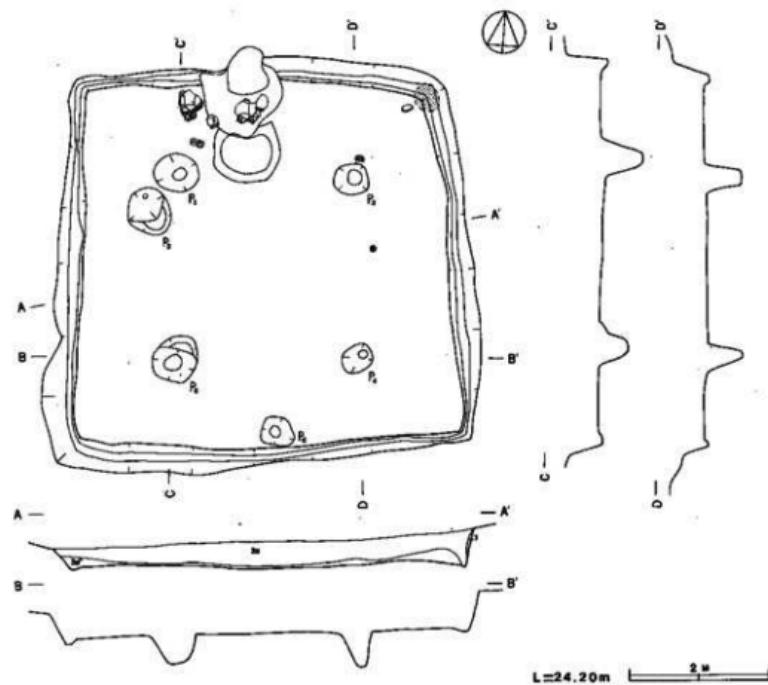
カマド（第145図）は北壁のほぼ中央に位置し、主軸方向N-0°で、長径130cm・短径115cmである。遺存度は悪い。壁を50cm幅で約30cm外側に三角形状に掘り込んで煙道部とし、火床は床面より5cmほど掘り込まれて低くなり、中心側に灰のかき出し口のように掘り込まれている。袖部は残存しない。燃焼部に多量の暗赤褐色土・赤褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。ピットはR-Rが主柱穴と考えられ、長径は50~70cm・深さは42~60cmを測る。R-Rは主柱穴と係わりがあると思われる。

覆土は自然堆積の状態を示し、微妙な違いのある黒褐色土が堆積している。

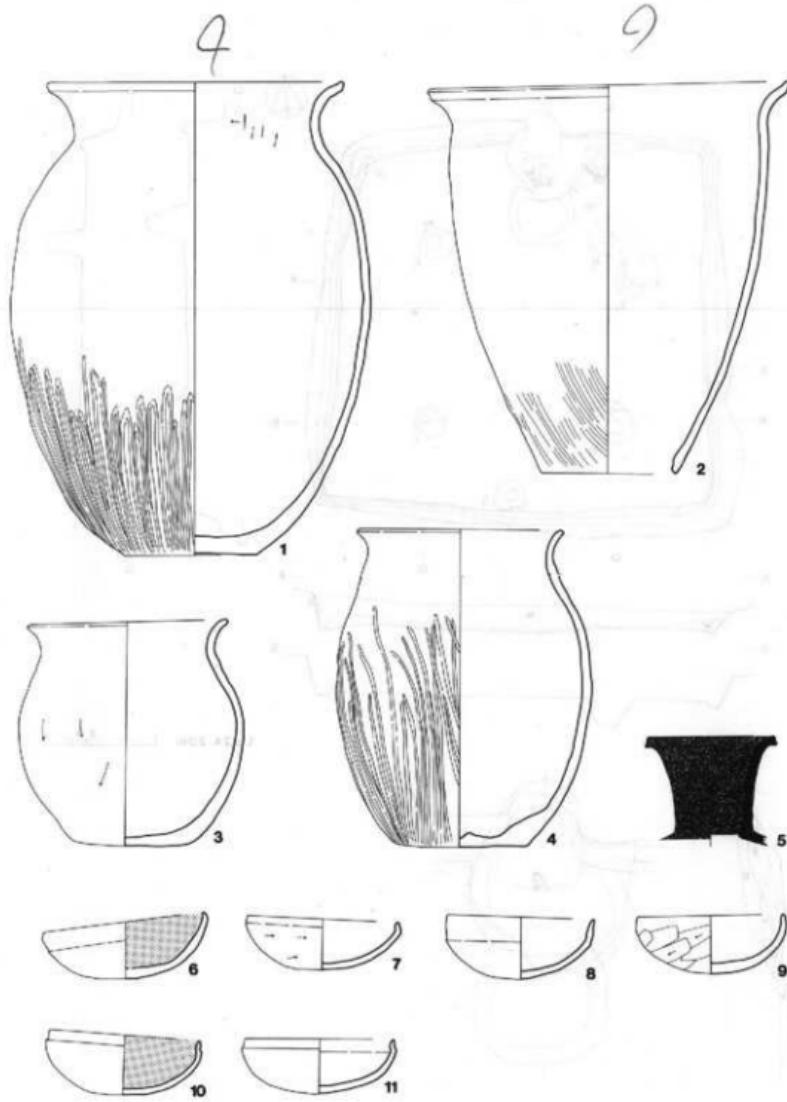
出土遺物（第146図）は床面やカマドや覆土中より出土している。

1・3・4は土師器の壺形土器である。1は口径21cm・器高33.9cm・底径9.5cm・ほぼ完形である。口縁部は頸部よりゆるやかに外反しながら立ちあがり、稜を有する。胴部は余り張らずやや長脚であり、最大径は中位にある。底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面下位は範磨き、内面はなで、底部外面は範なで整形を行う。色調は灰褐色、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。3は口径13.9cm・器高15.9cm・底径8.2cm・ほぼ完形である。口縁部は頸部よりゆるやかに外反しながら立ちあがり、稜を有する。胴部は少し張り、最大径は中位にある。底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は範削り、内面や底部内・外面はなで整形を行う。色調はにぶい橙色。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。4は口径14.4cm・器高22.7cm・底径9.4cm・ほぼ完形で小型である。器形、整形、胎土・焼成とも1と同じで、色調は橙色である。

2は土師器の壺形土器で、口径25.6cm・器高27.8cm・底径9.6cm・孔径9.1cm・ほぼ完形である。口縁部は頸部よりやや急に外傾しながら立ちあがり稜を有する。胴部は一旦やや外傾しながら立ちあがった後、垂直に立ちあがる。口縁部内・外面は横なで、胴部内・外面はなでがみられ、胴部下位は範磨きが施されている。色調はにぶい橙色。胎土は砂粒を含み、焼成はやや不良である。



第145図 第63号住居跡・カマド実測図



第146圖 第63號住居跡出土遺物實測圖

5は須恵器の壺形土器で、口径8.9cmの長頸部のみである。口縁部は頸部よりやや外反しながら立ちあがり稜を有する。ロクロ整形で内・外面に縁軸がみられる。混入したものと考えられる。6～11は土師器の壺形土器である。6・7・9・11は口縁部が内凹し、底部は丸底である。9を除いて稜を有し、6は口径11.5cm・器高4.1cmではほぼ完形である。7は口径10.7cm・器高3.7cm・ほぼ完形である。9は口径10.4cm・器高4.2cm・現存部分で、11は口径10.6cm・器高3.4cmではほぼ完形である。8・10は口縁部が外縁から垂直に立ちあがり、8は外縁よりやや長めの口縁を有す。10は外縁が明瞭であり、底部は丸底である。いずれも口縁部内・外面は横なで、体部外面は範削り、内面はなでて、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。色調は6が黒色、7はにぶい赤褐色、8はにぶい橙色、9はにぶい褐色、10は黒褐色、11はにぶい赤褐色で、6・10は内黒土器である。その他に球状土錘（第207図58）、覆土中より銅製の環状金具（第204図5）が出土している。

第65号住居跡（第147図）

本住居跡はE9a0・E10a1を中心に確認され、土壘の下に位置し、掘立柱建築遺構と重複している。主軸方向はN~40°Wで、推定で長軸約2.5m・短軸約2.4mの方形の平面形を呈している。壁や床面は土壘の構築、溝等により擾乱を受けて不明である。

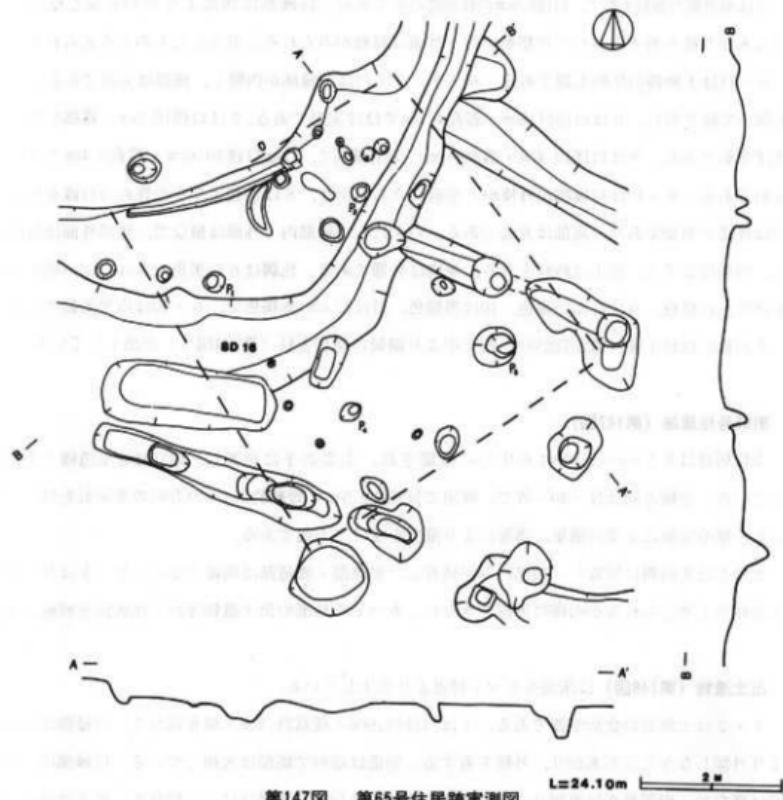
カマドは北西側に位置し、袖部のみが残存し、燃焼部・煙道部は明確でない。ピットはP～Rが主柱穴と考えられるが明確に把握できない。カマドの袖部や出土遺物等から住居跡と判断する。

出土遺物（第148図）は床面やカマド付近より出土している。

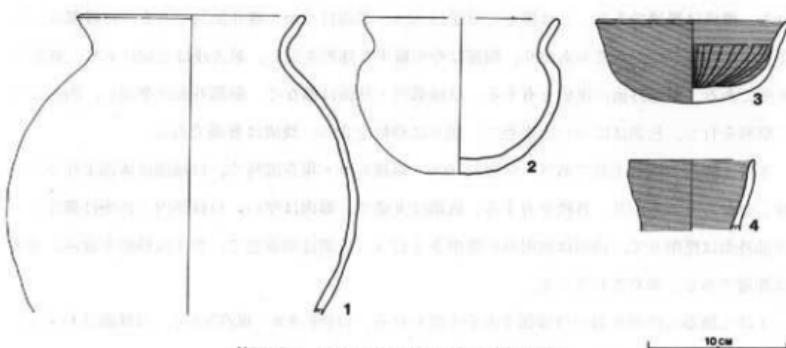
1・2は土師器の壺形土器である。1は口径15.6cm・現高21.5cm・現存部分で、口縁部は頸部より外傾しながら立ちあがり、外縁を有する。胴部は球形で底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は範削りで内面は範なで整形を行う。色調はにぶい橙色で、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。2は推定で口径13.6cm・器高11.2cm・現存部分である。口縁部は頸部よりやや外傾しながら立ちあがり、胴部はやや扁平な球形を呈し、最大径は上位にあり、底部は丸底である。胴部外面に傷痕を有する。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は摩減し、内面はなで整形を行う。色調はにぶい赤褐色で、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

3は土師器の壺形土器であり、口径13.6cm・器高6cm・現存部分で、口縁部は体部よりやや外傾しながら立ちあがり、外縁を有する。底部は丸底で、器肉は厚い。口縁部内・外面は横なで、体部外面は範削りで、内面は放射状の範磨きを行う。色調は暗赤色で、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。赤彩されている。

4は土師器の壺形土器の口縁部であると思われる。口径8.8cm・現高5cmで、口縁部はわずかに外傾しながら立ちあがる。赤彩されている。



第147図 第65号住居跡実測図



第148図 第65号住居跡出土遺物実測図

歴史時代(国分期)

第5号住居跡(第102図)

本住居跡はD12j9・D12j10を中心に確認され、第3号住居跡を掘り込んで、重複して位置している。主軸方向はN-6.5°-Eで、長軸3.15m・短軸3mの隅丸方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は25~30cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で非常に硬く、中央部より西側は特に硬く踏まれている。

カマド(第116図)は北壁やや東寄りに所在し、主軸方向N-6°-Eで、長径125cm・短径100cmである。遺存度は良好で、壁を100cm幅で三角形状に60cmほど掘り込んで煙道部とし、火床は床面を20cmほど掘り込んでいる。袖部は砂質粘土で造られ、北壁より住居側に20cmほど突出し、天井部も粘土から成る。焚口部も検出される。燃焼部に焼土が堆積している。ピットは10個検出されたが、主柱穴と思われるものはない。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色上が主に堆積している。

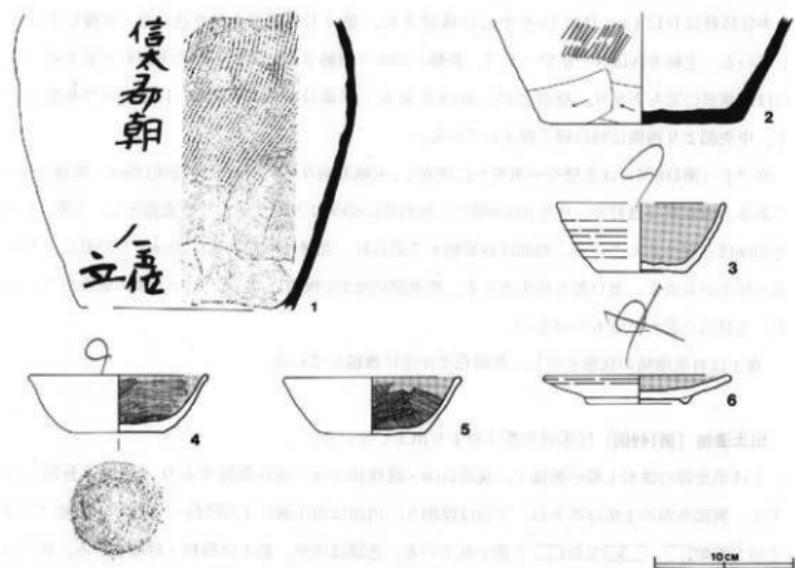
出土遺物(第149図)は床面や覆土中より出土している。

1は須恵器の彫形土器の胴部で、現高21cm・底径15.4cm・現存部約6cmであり、胴部は長脚を呈する。胴部外面の上位は叩き目、下位は範削り、内面は指圧痕により凹凸している。胴部に墨書きで信太郡朝□□五位□と書かれている。色調は灰色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。2は須恵器の彫形土器の底部片で、現高8cm・底径6.1cm・現存部約6cmで、胴部は底部よりやや開きながら立ちあがり、底部は平底である。器外面は叩き目、下位は範削り、内面はなでであるが凹凸している。色調は暗灰黄色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。

3~5は土師器の坏形土器である。3は推定で口径11.9cm・器高5cm・底径6.1cm・現存部約6cmで、底面よりゆるやかに開きながら立ちあがり、底部は平底である。体部外面はロクロ整形、内面は横など、底部は窓などがみられる。色調は橙色を呈し、口縁部はにぶい黄橙色を呈する。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良好である。4は口径12.6cm・器高4.1cm・底径6.4cmの完形であり、体部は底部よりゆるやかに開きながら立ちあがり、底部は平底である。ロクロ整形を行う。底部には糸切り痕が見られる。5は口径12.3cm・器高4.1cm・底径7.3cmのほぼ完形で、器形は4と酷似している。体部外面は横などで、内面は窓磨き、底部は手持ち範削りがなされる。色調は4・5とも外面は橙色、内面は黒色、胎土は砂粒・砂礫・スコリアを含み、焼成は良好である。いずれも内黒土器である。

6は高台付皿形土器であり、口径13cm・器高2cm・底径7cm・現存部約6cmで、底部より非常に大きく開きながら口縁部に至る。高台は貼り付けで、ロクロ整形を行う。色調はにぶい黄橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良好で、内黒土器である。

その他に刀子の刃部と茎（第204図1）と思われるものが出土している。（第204図）2は釘らしいみえる。



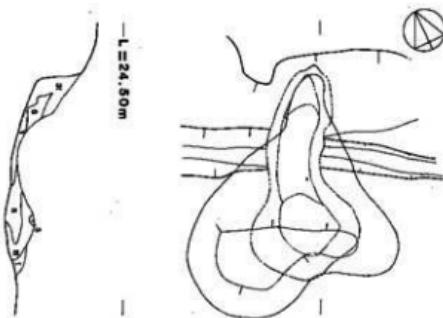
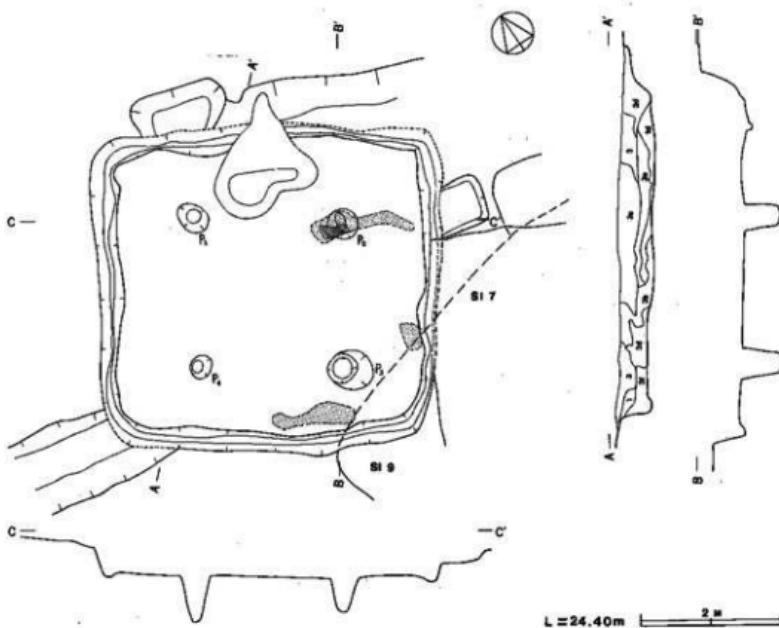
第149図 第5号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡（第150図）

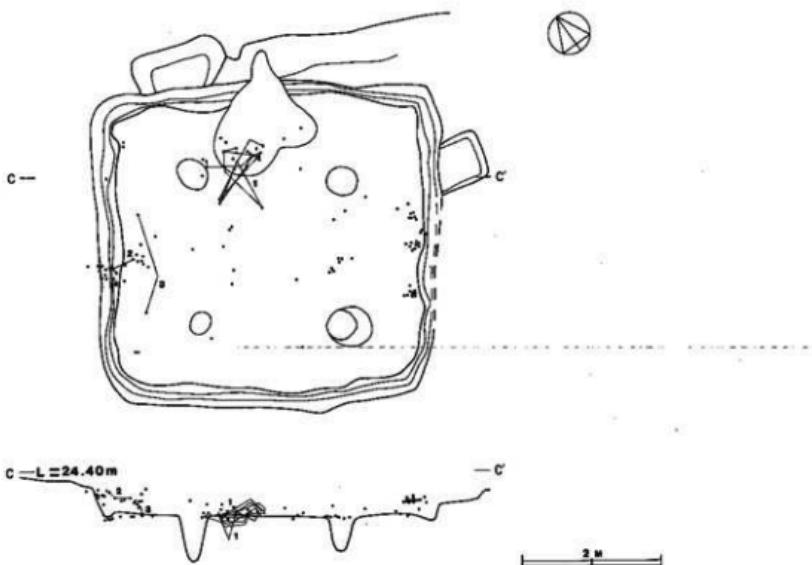
本住居跡はD12 j₁・D12 j₂を中心に確認され、第7・9号住居跡と南東側が複合している。主軸方向はN-36°-Eで、長軸4.9m・短軸4.7mの隅丸方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがる。北東壁と北西壁は、第1号溝に掘られている。壁高は35~45cmを測り、壁下には幅30cm・深さ10cmの壁溝が周回している。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬く、焼土が北側と東側に検出される。

カマド（第150図）は北東壁の中央に位置し、主軸方向N-36°-Eで長径154cm・短径76cmである。第1号溝に掘られるが部分的に残り、赤褐色土・暗赤褐色土・黒褐色土が堆積している。ピットはB-Bが主柱穴と考えられ、長径34~70cm・深さ50~80cmである。南東側の小ピットは本住居跡のものではなく、第9号住居跡のものと思われる。

覆土は擾乱を受けていると思われ、主に黒褐色土・褐色土が堆積している。焼土・木炭のあり方や覆土中の赤褐色粒子が含まれていることから火災があったと考えられる。



第150図 第8号住居跡・カマド実測図



第151図 第8号住居跡出土遺物分布図

出土遺物（第152図）は床面や床面よりやや浮いた状態で出土している。

1・2は土師器の變形土器である。1はカマド付近の床面から出土した土器片で接合できた。

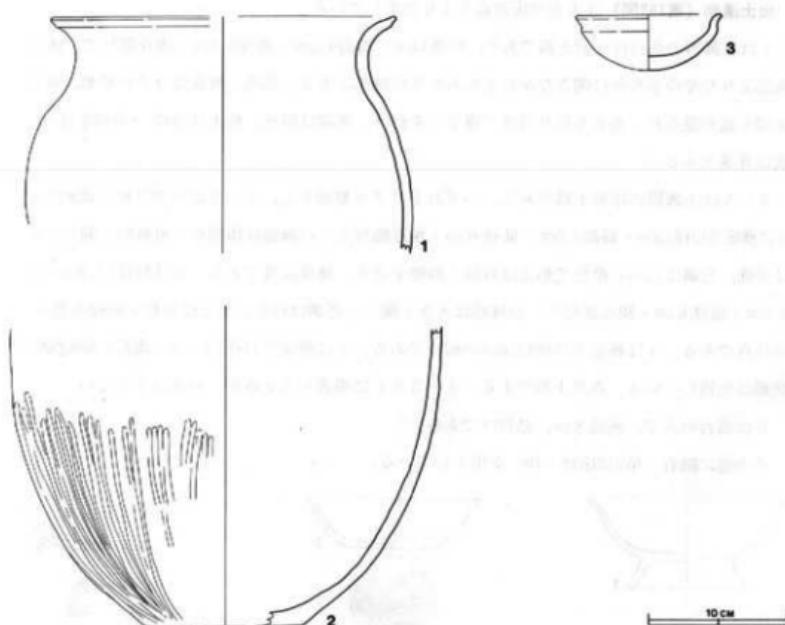
口径24.4cm・現高17cm・現存部 $\frac{3}{4}$ で、口縁部は頸部よりゆるやかに外反し、胴部は張らず、底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、胴部内・外面はなでで、色調は灰褐色。胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。2は西壁下中央の床面より20~30cm浮いた状態で出土し、接合できた。現高21cm・推定で口径11.3cm・現存部 $\frac{1}{4}$ で口縁部は欠損している。胴部は長胴で、底部は平底である。胴部外面は粗雑な範磨き、内面はなでである。

3は土師器の環形土器であり、西側の床面より出土した土器片と床面直上より出土した土器片とで接合できた。口径10.2cm・器高4cmで完形である。口縁部は外縁より外反しながら立ちあがり、底部は丸底で器肉は厚い。口縁部は横なで、体部内・外面は摩滅している。色調は黒色で、胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。

その他に球状土錐（第206図18）が出土している。

第12号住居跡（第107図）

本住居跡はE12b₄・E12c₄を中心確認され、第11・13号住居跡を掘り込んでいる。主軸方向はN-77.5°-Eで、長軸3.6m・短軸3.28mの隅丸方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあ



第152図 第8号住居跡出土遺物実測図

がるが、西壁は傾斜を示す。北壁は第13号住居跡を掘り込む。壁下には壁溝が周回し、幅20cm・深さ5~10cmを測る。床面は貼床をしてあり、踏み固められて非常に硬く、ほぼ平坦で、焼土が検出される。

カマド(第107図)は東壁やや南寄りに位置し、主軸方向S-88°-Eで長径100cm・短径80cmなどを測る。遺存度は非常に良好で、壁を100cm幅で外側に80cmほど三角形状に掘り込んで燃焼部・煙道部とし、火床は床面より18cm低くなる。袖部は砂質粘土で造られ、天井部も粘土から成り、支脚が検出される。燃焼部に多量の暗赤褐色土・明赤褐色土・黒褐色土が堆積している。ピットはP₁~P₆が主柱穴と考えられ、直径20~30cm・深さ26~40cmを測る。P₁・P₂は北東コーナーと南東コーナー付近に位置する。

覆土は擾乱を受けているが、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。

焼土や木炭が床面から出土し、覆土中に赤褐色粒子が含まれていることから火災にあったと考えられる。

出土遺物（第153図）は床面や床面上より出土している。

1は土師器の高台付環形土器であり、口径14cm・器高6.5cm・底径8.1cm・現存部約で、体部は底部よりややゆるやかに開きながら立ちあがり口縁部に至る。器内・外面はロクロ整形、底部に糸切り痕が見られ、高台を貼り付けて横なでを行う。色調は橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

2～5は土師器の環形土器であり、いずれもロクロ整形をし、2・3は糸切り痕が認められる。2は推定で口径12cm・器高3.6cm・底径6cm・現存部約で、口縁部は体部から直線的に開く。底部は平底、色調はふいに橙色で胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。3は口径12.3cm・器高3.7cm・底径6cm・現存部約で、口縁部は大きく開く。色調は橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。4は推定で口径13.8cmの破片である。5は推定で口径13.3cm・現高4.5cmの破片で、底部は欠損している。内黒土器である。4・5ともに墨書きがみえるが、判読はできない。

6は高台のみで、底径8cm、貼付けである。

その他に敲石（第212図18・19）が出土している。



第153図 第12号住居跡出土遺物実測図

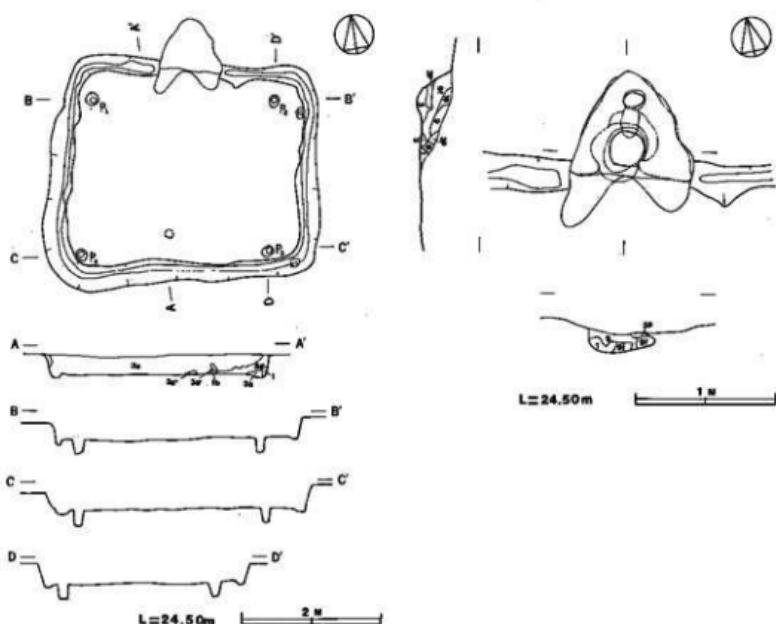
第15号住居跡（第154図）

本住居跡はE12h3・E12h4を中心に確認され、第17号住居跡の3m南西に位置する。主軸方向はN-13°-Eで、長軸3.8m・短軸3.14mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがる。壁高は20～33cmで、東壁がやや高い。壁下には壁溝がカマドを除いて周回し、幅25～35cmを有し、深さ4～8cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬く、中央部は特に硬い。

カマド（第154図）は北壁の中央に位置し、主軸方向N-13°-Eで長径89cm・短径70cmほどである。遺存度は非常に良好で、壁を90cm幅で60cmほど外側に三角形状に掘り込まれて煙道部とし、火床は床面より3cm掘り込んで低くなる。袖部は砂質粘土で造られ、北壁より住居側にわずかに出ている。燃焼部に多量の暗赤褐色土や黒褐色土が堆積している。ピットはR～Rが主柱穴

と考えられ、各コーナー付近の壁近くに位置する。長径15~20cm・深さ21~24cmほどである。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土が主に堆積している。



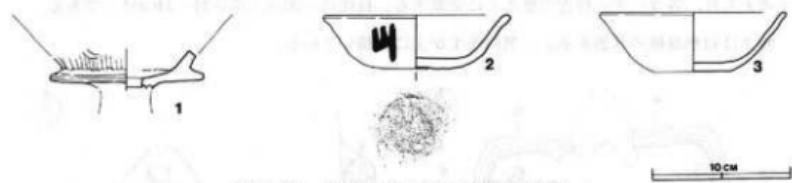
第154図 第15号住居跡・カマド実測図

出土遺物（第155図）は床面や覆土中より少量出土している。

1は土師器の装飾器台の器受部で器受部に3孔。中心に孔径2.2cmの孔を有する。器外面は範磨き、接合部は範なで付けである。

2・3は土師器の環形土器である。2は口径13cm・器高3.9cmのほぼ完形で、口縁部は直線的に開く。体部に山の墨書が認められる。体部はロクロ整形、底部は糸切り後範削り、色調はにじい橙色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良好である。3は口径13.1cm・器高4.2cm・底径5.4cmのほぼ完形であり、口縁部は底部より直線的に開く。2・3の底部は平底である。体部はロクロ整形を行い、下部は範削り、底部は範なで施す。色調は内面がにじい橙色、外表面は黒色を呈する。胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良好である。

その他に球状土錐（第206図20）が出土している。

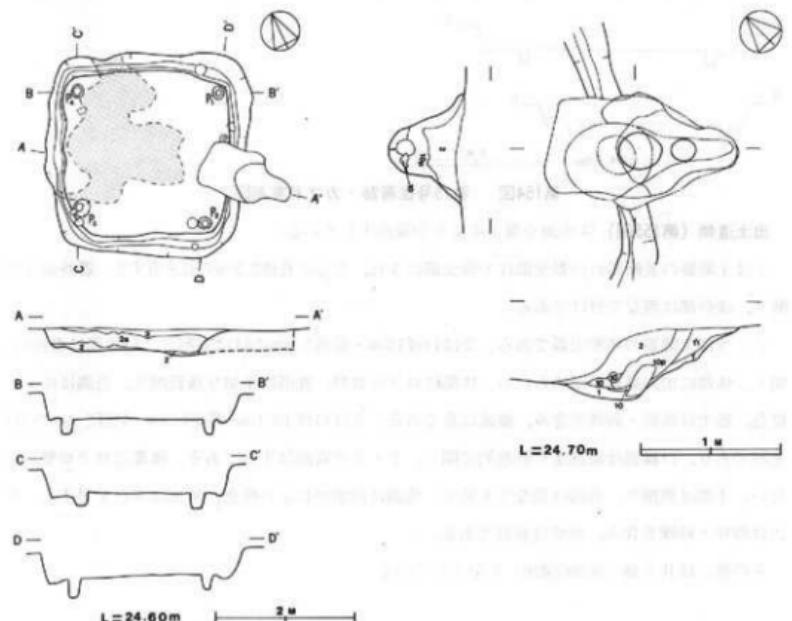


第155図 第15号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡（第156図）

本住居跡はF12 b5を中心確認され、第16号住居跡の5m西側に位置する小型の住居跡である。主軸方向はS-52.5°-Eで、長軸2.87m・短軸2.85mの隅丸方形の平面形を呈する。北壁と南壁はほぼ垂直に立ちあがり、東壁と西壁はやや傾斜を示す。壁高33~40cmを測り、壁下には壁溝が周回し、幅約30cmを有し、深さ5cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で非常に硬く踏み固められている。

カマド（第156図）は南東壁の南寄りに位置し、主軸方向S-44°-Eで、長径124cm・短径82cmほどである。遺存度は良好で、壁を70cm幅で外側に80cmほど三角形状に掘り込んで煙道部とし、



第156図 第19号住居跡・カマド実測図

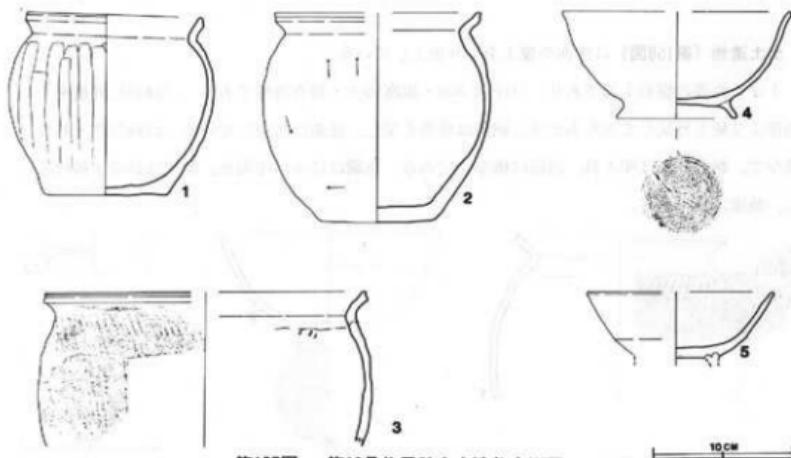
火床は床面より11cm掘り込み低くなる。袖部は明確に残存しないが、南東壁より住居側に40cmほど突出し、土器設置部や煙道部が検出された。燃焼部には暗赤褐色土・赤色土・暗褐色土が堆積し、支脚を有する。ピットはP₁～P₄が主柱穴と考えられ、長径18～23cmほどを測り、深さ22～25cmで、各コーナーの壁近くに位置する。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土が主に堆積している。焼土が北西側に床面の約半分ほど検出され、火災にあったと考えられる。

出土遺物（第157図）はカマド内や東壁付近の床面や床面上より出土している。

1～3は土師器の変形土器で、小型である。1は口径12.3cm・器高12.9cm・底径8.8cm・現存部5%で、口縁部は頸部より「く」の字に外反し、最大径は胴部中位にあり、底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は範削り、内面・底部ともになで、色調はにぶい赤褐色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。2は推定で口径14.6cm・器高15cm・底径8cm・現存部5%で、口縁部は頸部より鋭く「く」の字状に外反し、外棱を有する。最大径は胴部中位にあり、底部は平底である。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は範削り、内面はなで、底部は範削りと思われる。色調は褐色灰、胎土は1と同様で、焼成は不良である。3は胴部片で、推定で口径22.6cm・現高11cm、口縁部は頸部より外反し、口縁に稜を有する。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は叩き目、内面は横なのである。

4・5は土師器の高台付壺形土器である。4は推定で口径16.3cm・器高7.7cm・底径8.5cm・現



第157図 第19号住居跡出土遺物実測図

存部 $\frac{1}{3}$ で、口縁部は底部よりゆるやかに開く。体部外面はロクロ整形、内面は荒磨き、底部は糸切り痕が窺え、高台を貼り付けて横なでを施す。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。5は推定口径13.3cm・現高4.8cm・底径5.1cm・現存部 $\frac{1}{3}$ で、口縁部は下位の棱より直線的に開き、高台は欠損している。胴部には焼土が付着している。体部はロクロ整形で、下部は範削りを施す。底部は摩滅している。色調はにぶい褐色を呈し、胎土は砂粒を含み焼成は不良である。

第20号住居跡（第17図）

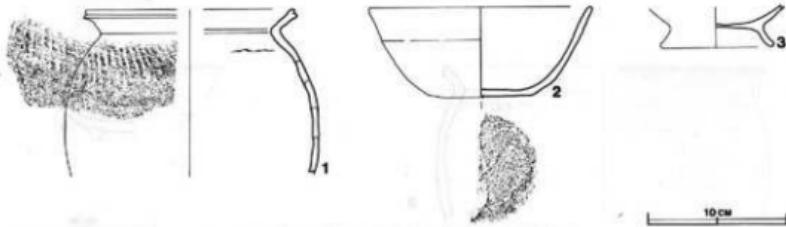
本住居跡はE12e1・E12f1を中心に確認され、第18号住居跡に貼床をしている。主軸方向はS-84°-Eで、長軸3.2m・短軸2.5mの長方形の平面形を呈している。壁は残存しない。床面は第18号住居跡より15cmほど高く、貼床したと考えられる。

カマド（第17図）は東壁中央に位置し、主軸方向S-82°-Eで長径90cm・短径87cmほどである。遺存度は不良で、壁を80cm幅で20cmほど外側に三角形状に掘り込んでいる。火床は床面より掘り込んで10cm低くなる。袖部は明確でなく、住居側に70cmほど突出している。燃焼部に多量の赤褐色土・暗赤褐色土が堆積している。ピットはB～Eが主柱穴と考えられ、長径20～34cm・深さ23～33cmを測る。

覆土は第18号住居跡と同じである。焼土が床面に検出されたことから火災にあったと考えられる。

出土遺物（第158図）は床面や覆土中より出土している。

1は土師器の変形土器であり、口径14.8cm・現高12cm・現存部 $\frac{1}{3}$ である。口縁部に外棱を有し、頸部より鋭く外反して立ちあがり、胴部は球形を呈し、底部は欠損している。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は叩き目、内面は横なでである。色調はにぶい赤褐色、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良である。



第158図 第20号住居跡出土遺物実測図

2は土師器の壺形土器であり、口径15.9cm・器高6.5cm・推定底径6.5cm・現存部%で、口縁部は底部より直線的に開き、底部は平底である。体部外面はロクロ整形、内面は箒磨きを施す。色調は橙色を呈し、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

3は土師器の高台付壺形土器の底部片で、推定底径7.7cm・現高3cm、体部外面はロクロ整形、内面は箒磨き、高台は横なで整形である。

第22号住居跡（第159図）

本住居跡はE11f8に確認され、第24号住居跡の4m北東側に位置する。主軸方向はN-27°-Eで、長軸4.23m・短軸3.99mの長方形の平面形を呈する。北壁と南壁がほぼ垂直に立ちあがり、他の壁は傾斜を示す。壁高は15cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬く、南東コーナー付近の床面がやや高い。

カマド（第159図）は北壁ほぼ中央に位置し、N-32°-Eで長径87cm・短径77cmである。遺存度は良好である。壁を60cm幅で20cmほど外側に三角形状に掘り込み煙道部とし、火床は床面より掘り込まれて5cm低くなる。袖部は砂質粘土で造られ、北壁より住居側に25cmほど突出している。燃焼部には暗赤褐色土・明赤褐色土が堆積する。ピットはP₁～P₂が主柱穴と考えられ、長径20～43cm・深さ16～33cmを測る。P₁・P₂はカマドを挟んで位置している。

貯蔵穴は西壁中央に位置し、長径95cm・短径75cmの楕円形の平面形を呈し、深さは床面より45cmを測り、ややゆるやかな傾斜を示しながら立ちあがる。

覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主に堆積している。

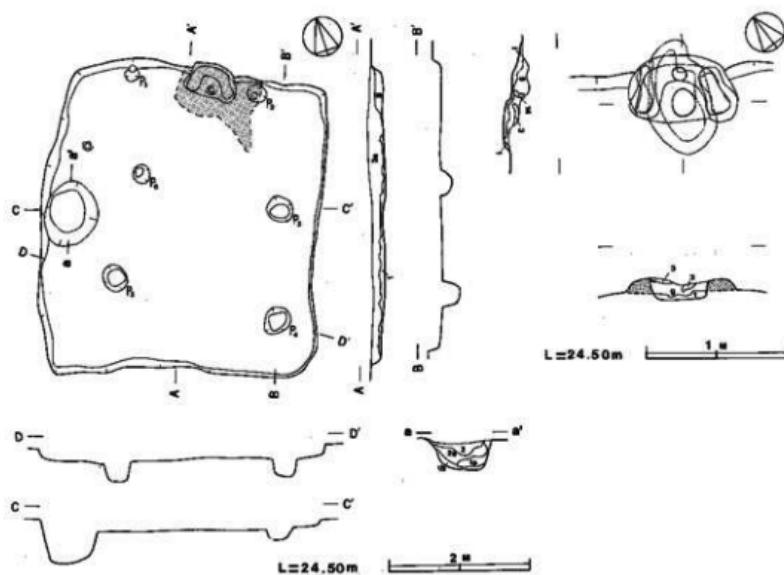
出土遺物（第160図）

はカマドやカマドの西側の床面や床面直上より出土している。

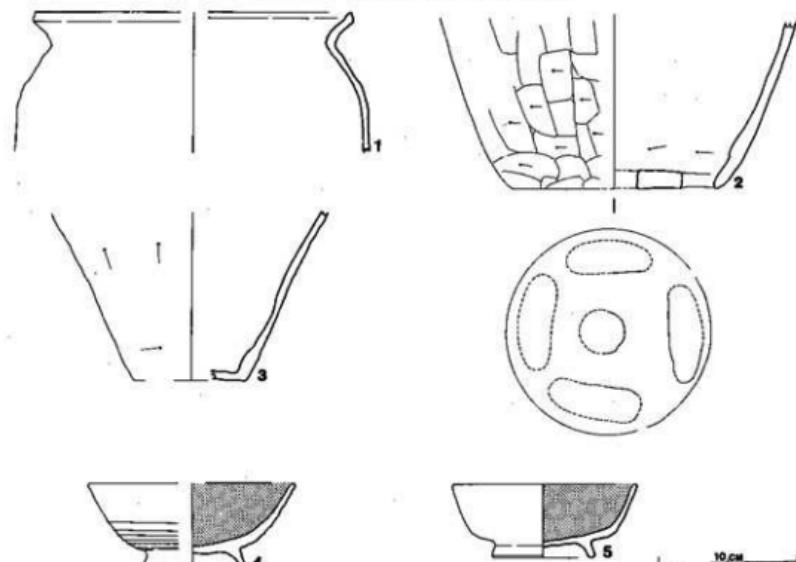
1・3は土師器の壺形土器である。1は口縁部片である。推定口径22.6cm・現高10cm、口縁部は頸部より外反し、稜を有する。口縁部内・外面は横なで、胴部内・外面はなで、外面は凹凸している。3は底部から胴部にかけての破片であり、胴部は底部より直線的に開く。現高12cm・底径8cm・胴部外面は雑な箒削り、内面はなで、底部は不明である。

2は土師器の壺形土器であり、底部から胴部にかけての破片である。現高12cm・推定底径14.7cm・底部の中火孔径は推定で3.3cm・周辺の孔径は推定で長径7cm・短径2.5cmで楕円形を示し、4孔があるものと考えられる。胴部外面は箒削り、内面はなで、底部は箒なでである。

4・5は土師器の高台付壺形土器である。4は口径14.6cm・器高6.1cm・底径7.1cm・現存部%で、口縁部は棱より直線的に大きく開き、稜は明確である。体部外面はロクロ整形、内面は箒磨き、底部内面は格子状の箒磨き、高台は貼り付け横なで整形を行う。色調は内面が黒色を呈し、胎土は砂粒・砂礫を含み焼成は普通である。5は口径13cm・器高5.3cm・底径6.9cmではば完形で



第159図 第22号住居跡・カマド実測図



第160図 第22号住居跡出土遺物実測図

ある。口縁部は底部より一旦大きく開いた後、直線的に開く。体部外面は横なで、内面は笠磨きを施し、高台は貼り付け後横なで整形を行う。色調は内面が黒色を呈し、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。4・5ともに内黒土器である。

その他に球状土鉢（第206図35）が出土している。

第29号住居跡（第162図）

本住居跡はE11j3を中心に確認され、第27号住居跡の1m南西側に位置する。主軸方向はS-86°-Eで、長軸4.39m・短軸3.77mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はゆるやかに立ちあがり、壁高20~35cmを測る。床面はロームでありほぼ平坦で、主柱穴内は硬く、壁周辺はやや柔らかい。

カマド（第162図）は東壁のやや南側に位置し、S-85°-Eで長径128cm・短径120cmほどである。遺存度はやや良好で、壁を110cm幅で外側に70cmほど三角形状に掘り込んで煙道部とし、火床は床面より掘り込み12cm低くなる。袖部は砂質粘土で造られ、右袖部は擾乱を受け、東壁より住居側に約55cmほど突出し、土器設置部が残り、燃焼部に多量の暗赤褐色土・赤褐色土・黒褐色土・褐色土が堆積している。ピットはP₁~P₄が主柱穴と考えられ、長径20~28cm・深さ15cm内外を測る。B₁・B₂は壁近くに位置し、P₁・P₂はやや内側に位置する。

貯蔵穴は北壁近くに位置し、長径110cm・短径75cmの格円形の平面形を呈し、深さ56cmを測り、傾斜を示しながら立ちあがる。

覆土は擾乱を受けているが、黒色土・暗褐色土・褐色土が主に堆積している。

出土遺物（第161図）は床面から出土している。



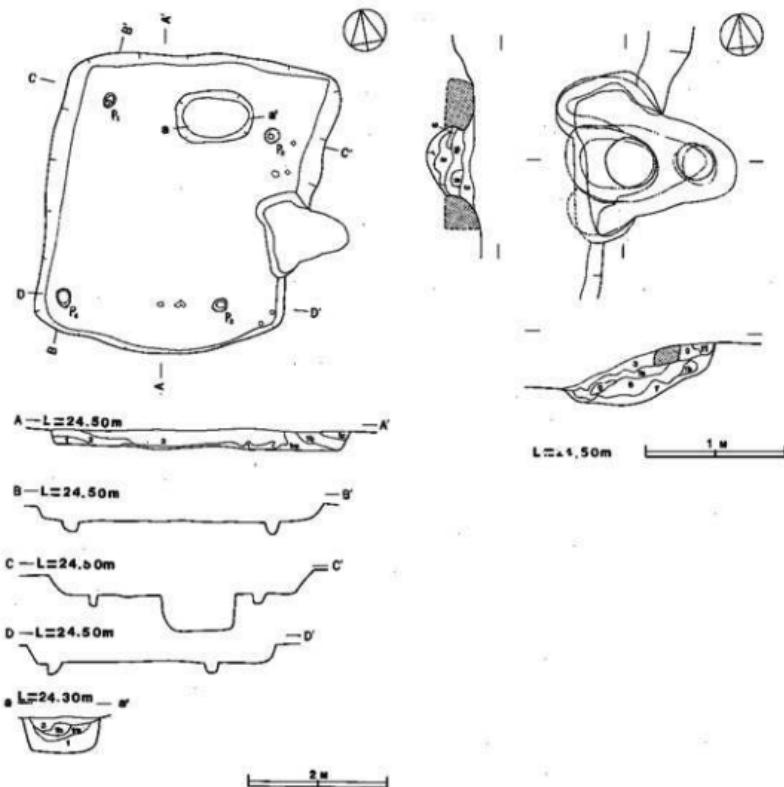
1は土師器の環形土器であり、推定で口径12.6cm・器高3.2cm・現存部26である。口縁部は底部より直線的に大きく開き、稜を内・外面に有する。体部はロクロ整形・底部は笠削りを施し、色調は橙色を呈し、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。

第161図 第29号住居跡出土
遺物実測図

第37号住居跡（第163図）

本住居跡はE11b5・E11b6を中心に確認され、第23号住居跡の1.5m北側に位置する。主軸方向はN-2°-Eで、長軸3.4m・短軸3.13mの隅丸長方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高は22~35cmを測り、南東壁が高い。壁下には壁溝が周回し、幅は20cm・深さは7cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬く、特に中央付近は硬い。東側は擾乱を受けている。

カマド（第163図）は北壁の中央やや東寄りに位置し、主軸方向N-1°-Eで、長径100cm・短径96cmである。遺存度は比較的良好く、壁を90cm幅で外側に100cmほど三角形状に掘り込んで煙道

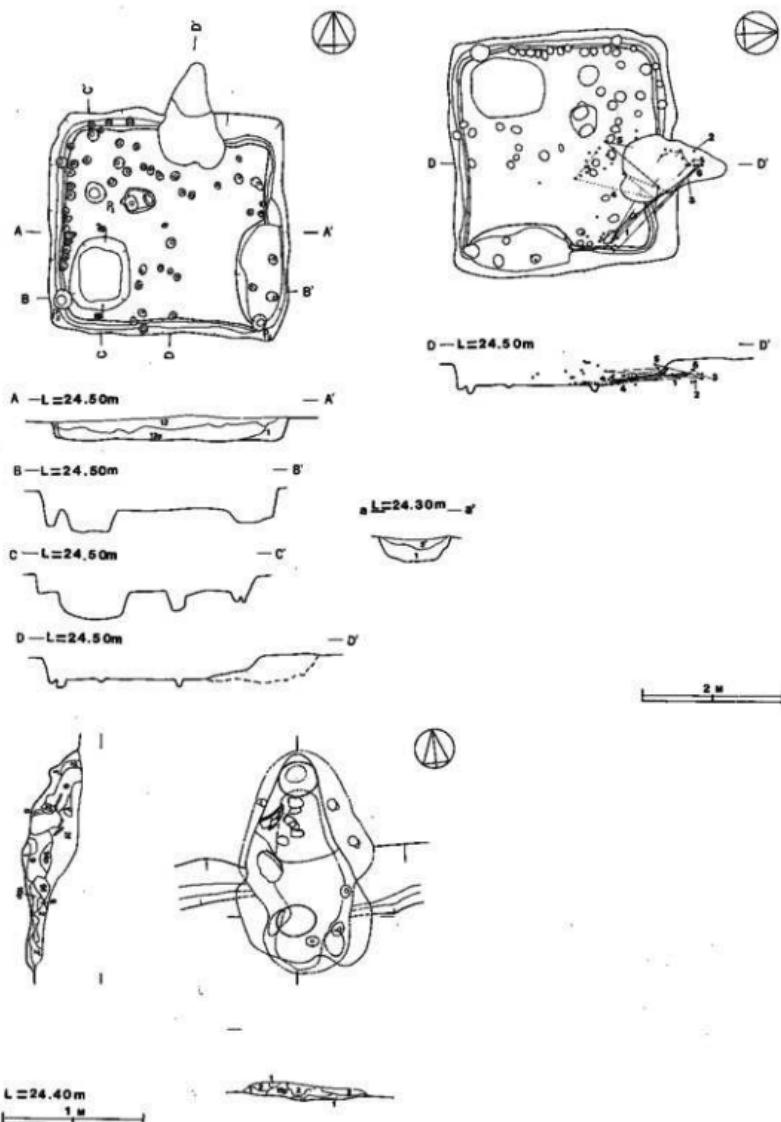


第162図 第29号住居跡・カマド実測図

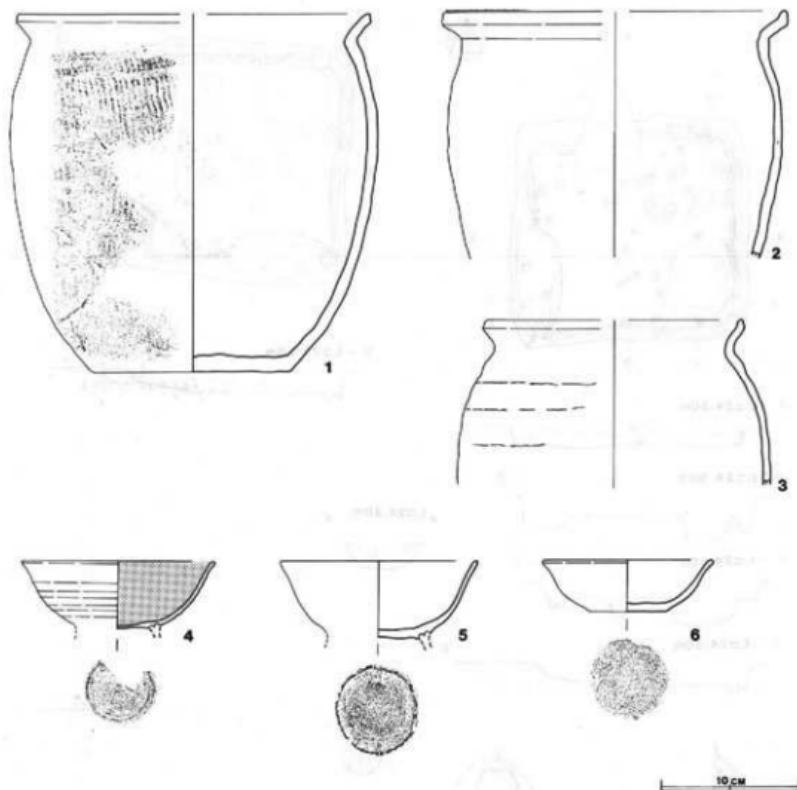
部とし、火床は床面より掘り込み10cm低くなる。袖部はごく一部残存するのみである。燃焼部に多量の赤褐色土・暗赤褐色土・にぶい赤褐色土・褐色土が堆積し、支脚や土師器が出土している。ビットは57個検出され、主柱穴と明確に把握することはできないが、R₁～R₄が主柱穴と想像される。西壁に小ビットが15個検出された。

貯蔵穴は南西コーナー部に位置し、長軸105cm・短軸83cmの隅丸長方形の平面形を呈し、深さ38cmを測る。壁はゆるやかに外側に傾斜しながら立ちあがる。

覆土は自然堆積の状態を示し、極暗褐色土・暗褐色土・褐色土が主に堆積している。



第163図 第37号住居跡・カマド実測図、出土遺物分布図



第164図 第37号住居跡出土遺物実測図

出土遺物（第164図）は床面・床面上直・覆土中・カマド内より出土している。

1～3は土師器の菱形土器で、1はカマド内より出土した胴部片と東壁下近くの床面より出土した底部と床面より5cmの覆土中より出土した胴部片とで接合できた。推定で口径25cm・器高25.6cm・底径14cm・現存部分で、口縁部は頸部より外傾し、稜を有し、広口である。胴部はゆるやかな曲線を示し、底部は平底で、最大径は胴部上位にある。口縁部内・外面は横なで、胴部外面は叩き目を呈し、下位は笠削り、内面も底部もなでである。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は砂粒・砂礫・スコリアを含み、焼成は普通である。2はカマド内北西側より出土する。推定で口径24.3cm・現高18cmの胴部片で、口縁部は頸部の稜より一旦外傾し、垂直に立ちあがる。胴部はゆるやかな曲線を示し、口縁部内・外面は横なで、胴部外面は笠削り、内面はなでである。色調は橙色で、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は普通である。3はカマド内北側より出土した土器片と東壁下近くの床

面より3~7cmの覆土中より出土した土器片とで接合できた。推定で口径18.2cm・現高12cmの胴部片で、器形・整形・胎土・焼成は2と同様であり、色調は赤褐色を呈する。

4・5は高台付壺形土器で、4はカマド東側より出土した土器片と南側の床面より10cmの覆土中より出土した土器片と中央よりやや北東側の床面より出土した土器片とで接合できた。口径13.7cm・現高4.8cm・現存部%で、口縁部は底部から外傾し、後を7本有する。高台は欠損している。体部外面はロクロ整形、内部は窓なで、底部外面は糸切り痕が窺える。色調は内面が黒色、外面は橙色を呈し、胎土は砂粒・砂礫を含み、焼成は良好である。5はカマド直上8cmより出土した土器片とカマド内北側より出土した土器片と北壁東側床面より16cmの覆土中より出土した土器片、それに中央より北側の床面から20cmの覆土中より出土した土器片とで接合できた。口径14cm・現高5.4cm・現存部%で、口縁部は底部よりやや外傾する。高台は欠損している。体部外面はロクロ整形、内部は窓なでを施す。色調はにふい橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。6は壺形土器で、カマド内より出土した。口径12cm・器高3.7cmのほぼ完形で、口縁部は底部よりやや大きく外傾する。底部は平底である。ロクロ整形後内面はなでを施し、底部には糸切り痕が認められる。色調は橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。

その他に球状土錐（第207図48）が出土している。

第46号住居跡（第50図）

本住居跡はE11a9を中心に確認され、第39号住居跡・第41号住居跡と重複している。主軸方向はN-45° Eで、推定で長軸2.44m・短軸2.2mの隅丸方形の平面形を呈する。壁は垂直に立ちあがり、壁高66~85cmを測る。床面はロームであり、ほぼ平坦で硬く、ほぼ全面に焼土が検出される。

炉跡は不明である。

ピットは五個ほど検出されるが、いずれも小ピットで壁近くに位置し、柱穴は検出されない。

出土遺物はごく少量の破片が出土した。

4

住居跡時期別一覧表

生存時代

番号	主軸方向	平面形	規 模 (長軸×短軸)	縁高	壁溝	主柱穴	炉	位 置	備 考
4	N - 54° - E	隅丸長方形	3.85 × 3.11	28~32		P ₁ ~ P ₆	1	南西側	
9	N - 17° - W	隅丸長方形	8.3 × 5.7	35~50			1	中央部	
10	N - 78.5° - W	隅丸長方形	5.34 × 4.75	30~40		P ₁ ~ P ₄	1	中央部	
13	N - 44° - W	隅丸長方形	5.7 × 4.8			P ₁ ~ P ₄	1	中央部	
16	N - 86° - W	隅丸長方形	4.28 × 3.7	15~30		P ₁ ~ P ₄			
18	N - 70° - W	隅丸長方形	5.15 × 4.57	33~53		P ₁ ~ P ₄	1	中央部	
21	N - 45° - W	隅丸長方形	6.2 × 5.3	40~50		P ₁ ~ P ₄	1	中央部	
23	N - 55° - W	楕円形	5.94 × 5.07	50		P ₁ ~ P ₄	1	西側	
25	N - 57° - W	隅丸長方形	3.89 × 3.45	10~27		P ₁ ~ P ₄	2	南東側 南西側	
30	N - 52.5° - W	隅丸長方形	4.37 × 3.99	5~10		P ₁ ~ P ₄	2	中央部 東	
31	N - 60.5° - W	隅丸長方形	10.43 × 8.27	60~70		P ₁ ~ P ₄	2	中央部 南	コト一
32	N - 58.5° - W	隅丸長方形	6.23 × 4.97	45~55		P ₁ ~ P ₄			
33	N - 57.5° - W	楕円形	6.74 × 5.93	40~60		P ₁ ~ P ₄	2	中央部 北西側	
34	N - 0°	円形	3.86 × 3.84			P ₁ ~ P ₆	1	北側	
35	N - 42.5° - W	楕円形	5.64 × 5.35	20~33			2	北西側 中央部	
36	N - 62.5° - W	楕円形	4.75 × 4.47			P ₁ ~ P ₄	1	西側	
38	N - 40° - E	円形	5.49 × 5.34	30~35		P ₁ ~ P ₄	1	北側	
42	N - 30.5° - W	隅丸長方形	7.4 × 5.28	55		P ₁ ~ P ₄			
43	N - 21° - W	隅丸長方形	3.57 × 2.75	20		P ₁ ~ P ₄	1	南東側	
44	N - 51.5° - W	隅丸長方形	4.77 × 3.8	30~40		P ₁ ~ P ₄	1	北側	火災
49	N - 47.5° - W	隅丸長方形	9.17 × 7.71	45~64		P ₁ ~ P ₄	3	中央部 北東側	
51	N - 64° - W	隅丸長方形	6.0 × 5.0	45~65		P ₁ ~ P ₄	2	西側 西コト一	
53	N - 38.5° - W	隅丸長方形	5.0 × 4.0			P ₁ ~ P ₃			
54	N - 83.5° - W	隅丸長方形	9.27 × 6.88			P ₁ ~ P ₅	1	西側	火災
58	N - 51° - E	隅丸長方形	7.23 × 6.85	20~60	有	P ₁ ~ P ₄	1	北西側	火災
59	N - 49° - W	隅丸長方形	8.5 × 6.78			P ₁ ~ P ₄	1	北側	
62	N - 61° - W	楕円形	6.4 × 5.47	20~45		P ₁ ~ P ₃	1	北側	
64	N - 50° - W	隅丸長方形	5.1 × 4.5			P ₁ ~ P ₄	1	北西側	

古墳時代（五鏡期）

番号	主軸方向	平面形	規 模 (長軸×短軸m)	壁高(m)	壁溝	主柱穴	炉	位 置	備 考
24	N - 37.5° - E	隅丸長方形	4.17 × 3.75	18		P ₁ - P ₄			
41	N - 27° - W	隅丸長方形	7.82 × 7.4	50 ~ 68		P ₁ - P ₄	1	北 側	
45	N - 63° - W	隅丸方形	4.68 × 4.43	20 ~ 40		P ₁ - P ₄	1	西 側	
52	N - 36° - W	隅丸方形	6.8 × 6.45	50	有	P ₁ - P ₄	1	北 西 側	
56	N - 38° - W	隅丸方形	4.43 × 4.18	10	有		1	北 側	

古墳時代（和泉期）

番号	主軸方向	平面形	規 模 (長軸×短軸m)	壁高(m)	壁溝	主柱穴	炉	位 置	備 考
1	N - 13° - W	隅丸長方形	3.86 × 3.47	12 ~ 15		P ₁ - P ₆	1	北 側	
2	N - 0°	方 形	8.0 × 7.0	25 ~ 45	有	P ₁ - P ₄	1	北 側	火 災
6	N - 88° - W	方 形	5.6 × 5.37	30 ~ 50	有	P ₁ - P ₄	3	北 東 中央	火 災
11	N - 54° - E	長 方 形	5.85 × 4.5	40 ~ 67		P ₁ - P ₈	1	中央部	火 災
14	N - 41° - W	長 方 形	4.6 × 2.8			P ₁ - P ₈	1		火 災
27	N - 52.5° - W	隅丸長方形	5.62 × 5.3	10 ~ 20		P ₁ - P ₈	1	北 西 側	
60	N - 86° - E	方 形	5.62 × 5.35	35 ~ 45	有		1	中央部	火 災

古墳時代（鬼高期）

番号	主軸方向	平 面 図	規 模 (長軸×短軸m)	壁高(m)	壁溝	主柱穴	カマフ	位 盆	備 考
3	S - 0°	方 形	4.02 × 3.8	12	有	P ₁ - P ₃	1	南 壁	
7	N - 25° - E	方 形	7.0 × 6.92	60 ~ 80	有	P ₁ - P ₆	1	北 壁	
17	N - 1° - W	隅丸長方形	6.0 × 5.47	25 ~ 50	有	P ₁ - P ₄	1	北 壁	
26	N - 43° - W	方 形	5.15 × 4.88	50 ~ 80	有	P ₁ - P ₄	1	北 西 壁	
28	N - 49° - W	方 形	6.11 × 6.0	30 ~ 50	有		2	北 西 東 壁	
39	N - 46° - E	隅丸方形	3.26 × 2.89	7		P ₁ - P ₃	1	北 東 側	
47	N - 57.5° - W	方 形	4.77 × 4.23	50 ~ 60	有	P ₁ - P ₄	1	北 西 壁	
48	N - 11.5° - E	隅丸方形	4.2 × 4.0	45	有	P ₁ - P ₄	1	北 壁	
50	N - 60° - W	方 形	5.5 × 5.5	30 ~ 50	有	P ₁ - P ₄	1	北 西 壁	
55	N - 6.5° - W	方 形	5.0 × 4.7	15 ~ 40	有	P ₁ - P ₄	1	北 壁	
57	N - 44° - W	方 形	5.43 × 5.33	15 ~ 50	有	P ₁ - P ₄	1	北 西 壁	
61	N - 7° - W	方 形	5.95 × 5.9	30 ~ 55	有	P ₁ - P ₄	1	北 壁	
63	N - 6.5° - W	隅丸方形	5.9 × 5.75	40 ~ 55	有	P ₁ - P ₄	1	北 西 壁	
65	N - 40° - W	方 形	2.5 × 2.4			P ₁ - P ₄	1	北 西 側	

歴史時代（国分期）

番号	主軸方向	平面形	規 格 (長軸×短軸m)	壁高(m)	壁溝	主柱穴	カマド	位 置	備 考
5	N - 6.5° - E	隅丸方形	3.15 × 3.0	25~30		P ₁ ~ P ₄	1	北 壁	
8	N - 36° - E	隅丸方形	4.9 × 4.7	35~45	有	P ₁ ~ P ₄	1	北東壁	火 災
12	N - 77.5° - E	隅丸方形	3.6 × 3.28		有	P ₁ ~ P ₄	1	東 壁	火 災
15	N - 13° - E	隅丸長方形	3.8 × 3.14	20~33	有	P ₁ ~ P ₄	1	北 壁	
19	N - 52.5° - W	隅丸方形	2.87 × 2.85	33~40	有	P ₁ ~ P ₄	1	南東壁	火 災
20	N - 84° - W	長 方 形	3.2 × 2.5			P ₁ ~ P ₄	1	東 壁	火 災
22	N - 27° - E	長 方 形	4.23 × 3.99	15		P ₁ ~ P ₆	1	北 壁	
29	N - 86° - W	隅丸長方形	4.39 × 3.77	20~35		P ₁ ~ P ₄	1	東 壁	
37	N - 2° - E	隅丸長方形	3.4 × 3.13	22~35	有	P ₁ ~ P ₃	1	北 壁	

3 土 壤

本遺跡において検出した土壌は232基である。特に西側においては、土壌群といってよいほど多數を検出した。

土壌の平面形は円形・橢円形・不整円形・不整橢円形・隅丸方形・隅丸長方形・不整方形とさまざまである。遺物は約半数の土壌の覆土中より出土しており、縄文土器・弥生土器・土師器・内耳形土器・陶器の小片である。検出した土壌を一覧表にすると次の通りである。なお地下式塙（第101・103・120・226号）は表に記載せず後述する。

土壌一覧表

区 号 遺跡番号	地 区	主軸方向	平 面 形	規 模 (m)		各 部 の 状 況	出 土 遺 物	備 考
				長軸 × 短軸	壁 高			
第165号 1	E12 e 3	N - 75° - W	隅丸長方形	1.7×0.75	0.30	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	覆土中に土 師器片が4 片出土する。	
# 2	E12 e 5	N - 10° - E	橢 圆 形	1.6×1.4	0.35	東壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は段状になり、やや柔らかい。	覆土中に土 師器片が2 片出土する。	
# 3	E12 e 6	N - 16° - E	隅丸長方形	1.75×1.03	0.35	北壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、柔らかい。		
# 4	E12 e 6	N - 3° - E	橢 圆 形	1.2×0.9	0.13	壁は非常にゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、柔らかい。		
# 5	D12 j 6	N - 13° - W	隅丸長方形	1.8×0.9	0.43	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で硬くしまっている。	覆土中に土 師器片が4 片出土する。	
# 6	E12 i 5	N - 35° - W	不 整 圆 形	1.35×1.1	0.23	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、柔らかい。		
# 7	E12 i 5	N - 53° - W	隅 九 方 形	1.2×0.92	0.15	壁は非常にゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、ほぼ円形状を呈する。		
# 8	F12 a 6	N - 29° - E	橢 圆 形	1.1×0.87	0.17	西壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや硬い。		
# 9	F12 a 7	N - 28° - W	円 形	0.6×0.55	0.13	北壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、柔らかい。		
# 10	E12 j 7	N - 0°	圓 形	0.65×0.65	0.15	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はやや硬く、裏側に傾斜している。		
# 11	E12 j 7	N - 39° - W	橢 圆 形	0.65×0.57	0.27	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は屈折し平出で、やや硬い。		
# 12	E12 j 7	N - 88.5° - W	圓 形	0.54×0.52	0.18	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は平坦で、やや硬い。		
# 13	E12 i 7	N - 52° - E	隅丸長方形	2.3×1.1	0.36	南東壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は段状になり、やや硬い。		
# 14	E12 g 1	N - 81° - W	不 整 隅 九 長 方 形	2.17×1.29	0.19	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや硬い。		

区 段 通 路 番 号	地 区	主軸方向	平 面 形	規 格		各 部 の 状 況	出 土 遺 物	備 考
				長 辺 × 短 辺	壁 高			
第166区 15	E12g1	N - 53.5° - W	不整円形	2.18 × 1.8	0.15	東・西壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は平坦で、やや硬い。		
# 16	E12g2	N - 50° - E	不整円形	1.5 × 1.1	0.18	南東・南西壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は平沢で、やや硬い。		
# 17	F12e3	N - 62° - W	隅丸方形	1.14 × 1.1	0.60	南・北壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は平坦で、硬い。		
# 18	F12d3	N - 69.5° - W	隅丸方形	1.42 × 1.31	0.50	壁は傾斜を示しながら立ちあがる。 底面は平坦で、よくしまり硬い。		
# 19	F12d4	N - 50.5° - E	不整円形	2.12 × 1.55	1.00	南側は底さ43cmの所より掘り込まれる。 底面はほぼ平沢で、硬くしまっている。	獨立中に自然石1個出土する。	
# 20	F12e4	N - 52.5° - W	不整円形	1.28 × 1.04	0.28	壁はなだらかに傾斜している。 底面は平沢で、やや硬い。		
# 21	F12d6	N - 43° - W	隅丸長方形	3.5 × 1.2	0.35	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平沢で、やや硬い。	壁上中に縦 文字部片1 片出土する。	第2号房 を掘りこ んでいる。
# 22	F11a9	N - 45° - W	不整円形	0.78 × 0.7	0.62	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は硬く、直径1mの凹形である。		
# 23	F11e9	N - 23.5° - E	隅丸方形	1.35 × 1.26	0.37	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平沢で、非常に硬い。		
# 24	E11h2	N - 45° - W	隅丸長方形	1.45 × 0.85	0.78	北西壁は垂直に立ちあがる。 底面は硬く、北西側に傾斜する。		
# 25	E11h2	N - 61.5° - E	不整円形	1.45 × 1.17	0.51	壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面は硬く、南西側に少し傾斜する。		
第167区 26	E11h2	N - 32.5° - W	隅丸長方形	3.15 × 0.93	0.22	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平沢で、やや柔らかい。		
# 27	E11h1	N - 0°	円形	0.49 × 0.42	0.39	壁は南側に掘り込まれている。 底面は平沢で、硬く使い。		
# 28	E11h1	N - 26° - E	隅丸長方形	1.22 × 0.9	0.21	壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平沢で、柔らかい。		
# 29	E10h6	N - 10.5° - E	不整円形	2.3 × 1.46	0.13	西壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は北側にゆるやかに傾斜する。		
# 30	E11h1	N - 45° - W	不整円形	1.74 × 1.45	0.31	壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平沢で、やや柔らかい。		
# 31	E11h1	N - 65.5° - W	不整形	1.56 × 0.65	0.18 0.43	南・北壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は中央に傾斜している。	西側床面 は掘られ ている。	
# 32	E10g9	N - 85° - W	隅丸方形	1.17 × 1.10	0.15 0.20	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は中央に傾斜している。		
# 33	E10g9	N - 81.5° - W	不整円形	1.79 × 1.18	0.24 0.27	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平沢で、やや柔らかい。		
# 34	E11g1	N - 12° - E	不整円形	1.3 × 1.08	0.20	南西壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平沢で、やや硬い。		

区段 直標番号	地 区	主軸方向	平 面 形	規 模(単)		各 部 の 状 況	出 土 遺 物	備 考
				長辺×短辺	壁高			
第167回 35	E 10 b9	N - 27.5° - W	不 整 方 形	2.32×1.86	0.15	壁はなだらかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
	D 11 j8	N - 30° - W	不 整 方 形	2.22×1.13	0.25 1 0.35	北西壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	覆土中に土師部 片2枚、陶土部 片2枚を出土する。	
第168回 37	E 8 c3	N - 72° - W	不 整 方 形	1.88×1.0	0.82	北西壁はややなだらかに立ちあがる。 底面は陥状になり、硬い。		第38号土堵 と重複して いる。
	E 8 d2	N - 8 ° - E	不 整 方 形	1.5×1.0	0.87	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は丸株をおびて、硬い。	覆土中に土師部 片4枚、陶土部 片小片2片を出 土する。	
39	E 8 d2	N - 43° - W	不 整 円 形	1.3×1.2	0.70	西壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は柔らかい、面積は狭い。		
	E 8 c2	N - 49.5° - E	円 形	1.2×0.9	0.68	西壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は硬く、円形を呈する。	覆土中に土師部 片小片2片を出土 する。	
41	E 8 c1	N - 70.5° - W	円 形	1.12×0.85	0.15 1 0.20	壁は非常にゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
	E 8 c1	N - 3.5° - W	不 整 形	2.8×0.87	0.32 1 0.66	南壁は垂直に立ちあがる。 底面は凹凸状で、やや柔らかい。		
43	E 7 b0	N - 0 °	円 形	1.37×1.3	0.35 1 0.40	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は平坦で、硬い。	覆土中に土師部 片小片5片を出 土する。	
	E 7 c1	N - 20° - W	不 整 円 形	1.52×1.17	0.90	南壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は南側に傾斜している。	覆土中に土師部 片小片1片を出 土する。	
45	D 7 i9	N - 41.5° - E	長 円 形	0.98×0.74	0.30	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はやや丸株をおび、やや硬い。	人骨の頭部 部の断面が 出土する	第47号住居 跡の北西壁、 後壁の人骨か。
	E 7 b9	N - 18° - E	不 整 円 形	0.5×0.4	0.55	東壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬く、面積が狭い。		
47	E 7 b9	N - 30° - E	長 円 形	0.84×0.5	0.15 1 0.40	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は陥状になり、硬い。	覆土中に土 師部1片を 出土する。	
	E 7 a9	N - 70° - E	不 整 棱 円 形	1.3×1.03	0.42 1 0.67	西壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は西側にゆるやかに傾斜する。	覆土中に土 師部1片を 出土する。	
49	E 7 a9	N - 24° - W	楕 円 形	1.15×0.94	0.34 1 0.42	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は北側にゆるやかに傾斜する。	覆土中に自 然石3個を 出土する。	
	E 7 b9	N - 0 °	不 整 形	2.1×0.74	0.30 1 0.70	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は凹凸状で、硬い。	覆土中に赤陶 器2片、土師器2 片、自然石1個 を出土する。	
51	E 7 b9	N - 16° - E	不 整 形	1.78×1.34	0.20 1 0.48	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	覆土中に自然石 1個、赤陶器1 片を出土する。	
	E 8 b1	N - 37.5° - W	不 整 形	1.88×1.1	0.20	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや硬い。	覆土中に自然石 4個、赤陶器2 片を出土する。	
53-A	E 7 a9	N - 83° - W	不 整 形	4.42×1.55	0.30 1 0.60	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は凹凸状で、やや硬い。	覆土中に自然石 8個、土師器8 片、赤陶器3 片を出土する。	
	E 7 a9	N - 7 ° - E	は ば 円 形	1.75×1.34	0.80	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は横円形を呈し、やや硬い。		53-A・B 53-B・C は重複して いる。

区画 連番号	地 区	主軸方向	平 底 形	規 模		各 部 の 状 況	出土遺物	備 考
				長径	短径			
第172回 53-C	E 7 a0	N - 83°- W	楕 円 形	1.34×0.92	0.50	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は不整形を呈し、南西壁を盛り込 む。		
	E 8 a1							
第169回 54	E 8 a1	N - 49.5°- E	隅丸長方形	1.45×0.77	0.12 0.24	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は凹凸状で、柔らかい。		
# 55	E 8 b1	N - 0°	円 形	0.84×0.76	0.25	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は丸味を帯びて、柔らかい。		
# 56	E 8 b1	N - 50°- W	不整椭円形	0.39×0.99	0.18 0.27	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、柔らかい。		
# 57	D 8 i2	N - 0°	円 形	1.25×1.17	0.26 0.35	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 58	D 8 j3	N - 20.5°- W	隅丸長方形	19.7×6.0	0.10 0.35	東壁は浅く、ゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、柔らかい。	礫土中に自然石 1個、土師器2 片、陶土器等 片を出土する。	
# 59	D 8 j4	N - 15.5°- W	不 整 形	2.22×1.32	0.25	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや柔らかい。	礫土中に弧形土 1片、土師器等 片を出土する。	
# 60	D 8 j5	N - 86°- W	不 整 形	1.86×1.28	0.10	東壁はピットが存在し、垂直ぎみに立 ちあがる。 底面は平底で、やや柔らかい。	礫土中に上 部2片を出 土する。	
# 61	D 8 h4	N - 72°- E	楕 円 形	1.65×1.42	0.20 0.23	東・西壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや硬い。	礫土中に上 部2片を出 土する。	
第170回 62	D 8 b4	N - 59.5°- W	隅丸長方形	2.37×1.05	0.20 0.25	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや硬い。	礫土中に上 部器4片 を出土する。	
# 63	E 8 b3	N - 0°	不 整 形	2.72×1.62	0.17	西壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は中央より北側に平底で、硬い。	礫土中に上 部器2片を出 土する。	
# 64	D 8 i1	N - 66.5°- W	隅丸長方形	1.9×0.84	0.28 0.35	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや柔らかい。	礫土中に陶器4 片、土師器2片、 陶土器等 片を出土する。	
第172回 65	E 8 b2	N - 30°- E	楕 円 形	1.3×1.23	0.29 0.37 0.44-0.48	北東壁は垂直に立ちあがる。 底面は斜底をなし、硬い。	礫土中に自然石 2個、陶土器等 2片、陶土器等 3片を出土する。	第66号十 字架と重複 している。
# 66	E 8 b5	N - 38.5°- W	楕 円 形	2.78×1.48	0.65	北東・南西壁は急に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
第170回 67	E 8 b2	N - 59.5°- W	不 整 形	2.06×1.26	0.10 0.76	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は凹凸状で、硬い。	礫土中に土 器4片を出 土する。	
# 68	E 8 a2	N - 70.5°- E	楕 円 形	1.13×0.57	0.17 0.20	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は東側がほぼ平坦である。		
# 69	E 8 a2	N - 28°- E	楕 円 形	1.96×1.3	0.22 0.35	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はやや凹凸状であり、硬い。		
# 70	D 8 j2	N - 66°- W	不 整 形	7.22×1.5	0.15	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面中央部は平坦で、硬い。	礫土中に七 花器9片、 陶土器7片 等を出土す る。	第48号住居 跡のカマド を掘り込んだ さい。
# 71	D 8 i1	N - 67.5°- W	隅丸長方形	8.2×0.93	0.10	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は平底で、柔らかい。	礫土中に七 花器10片を 出土する。	
第170回 72	D 8 i4	N - 72°- W	ほ ば 円 形	1.7×1.0	0.20	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は平底で、やや柔らかい。		第8号溝 に掘られ ている。

区段 遺構番号	地 区	主軸方向	平 面 形	堤 横向		各 部 の 状 況	出土遺物	備 考
				長径×短径	壁高			
第170回 73	D 8 i 5	N - 0°	ほぼ橢円形	2.31×1.58 1 0.17	0.15	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや柔らかい。		
第171回 74	D 8 j 5	N - 82° - E	不 整 形	3.17×1.8	0.28	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや柔らかい。	甕土中に土器片 1斤、土器鋸2片を出土する。	甕き砂湯を 振り込まれて いる。
第170回 75	E 8 a 5	N - 76° - E	不 整 形	2.0×1.07	0.30	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや柔らかい。	甕土中に土器片 1斤、土器鋸2片を出土する。	
第171回 76	D 8 j 3	N - 10° - W	ほぼ橢円形	1.16×0.79 1 0.68	0.15	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 77	D 8 j 4	N - 61° - W	不 整 形	1.36×0.75	0.68	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は南東側に位置し、硬い。		
第172回 78	D 8 j 3		不 整 形		0.75	南壁はゆるやかで、北壁は急に立ちあがる。 底面は北側が平坦で、硬い。	甕土中に土器片 1斤、土器鋸2片、鐵文土器片2片を出土する。	第70号土 器と同様に してある。
第171回 79	E 8 b 4	N - 12.5° - W	不 整 形	2.7×2.2	0.25	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は平坦で、硬い。	甕土中に土器片 1斤、土器鋸1片を出土する。	
# 80	D 8 i 5	N - 0°	円 形		0.28	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、柔らかい。		第8号構に 振り込まれ ている。
第172回 81	E 8 a 3	N - 16° - E	不 整 形	1.15×0.91	0.67	壁は段状に立ちあがる。 底面は凸状で、硬い。		
第171回 82	D 8 i 2	N - 0°	円 形	1.73×1.66	0.60	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は平坦で、硬い。		南東壁面に 瓦が焼出 された。
# 83	E 8 b 6	N - 9° - W	円 形	0.86×0.8 1 0.26	0.10	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は凹状で、やや硬い。		
# 84	E 8 b 8	N - 62° - E	円 形	1.0×0.96 1 0.23	0.19	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや柔らかい。	甕土中に土 器片2片を 出土する。	
# 85	E 8 b 8	N - 37° - W	楕 圆 形	1.21×1.02	0.22	西南壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は南西側に傾斜し、硬い。	甕上中に土 器片3片を 出土する。	
第173回 86	D 8 i 2	N - 24° - E	隅丸方形	1.1×0.91 1 0.25	0.20	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は平坦で、やや柔らかい。		第8号構に 振り込まれ ている。
# 87	D 8 i 1		円 形		0.30	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや柔らかい。		第8号構に 振り込まれ ている。
# 88	D 8 d 0	N - 70.5° - E	ひ し 形	1.04×0.88 1 0.24	0.10	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は西北側に傾斜し、柔らかい。		
# 89	D 8 d 0	N - 55.5° - W	椭 圆 形	0.92×0.62	0.20	南西壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は平坦で、やや柔らかい。		
# 90	D 8 d 0	N - 19° - E	隅丸長方形	1.54×0.89 1 0.57	0.25	南・北壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面は中央部分が盛りれている。	甕土中に土器片 2片、陶瓦上器3片を出土する。	
# 91	D 8 d 0	N - 61° - W	不 整 形	1.3×0.92	0.55	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	甕上中に土 器片3片を 出土する。	
# 92	D 8 d 8	N - 67° - E	椭 圆 形	0.95×0.79	0.42	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	甕土中に土 器片1片を 出土する。	

区段 通番号	地 区	主軸方向	平 地 形	規 模(m)		各 部 の 状 況	出 土 物	備 考
				長径×短径	幅 高			
第173回 93	D 8 d o	N - 84° - W	不 整 形	1.05×0.82	0.50	西壁は斜き他の壁はほぼ垂直に立ちあがる。 床面はほぼ平坦で、硬い。	土 師器4片を 出土する。	
" 94	D 8 d o	N - 0°	ほぼ 円 形	0.77×0.77	0.18	南西壁は垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	土 石1個を 出土する。	
" 95	D 8 e o	N - 27.5° - E	不 整 形	0.9×0.55	0.25	南・北壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はやや丸味をおび、硬い。	土 石1個を 出土する。	
" 96	D 8 e o	N - 13° - W	椭 圆 形	0.88×0.7	0.50	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや硬い。	土 師器1片を 出土する。	
" 97	D 8 b s	N - 0°	円 形	0.88×0.88	0.15 0.35	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は円凸状で硬い。		
" 98	D 8 b s	N - 14° - E	椭 圆 形	1.2×1.0	0.53	西・北西壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は段状になり、硬い。		
第172回 99	D 8 a s	N - 32.5° - E	椭圆长方形	2.0×1.23	0.65 1 0.68	東・西・北壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平凹で、硬い。	土 師器3片、上師器1 片を出土する。	新 302号十 塙により掘 られている。
第174回 100	D 8 c s	N - 80° - W	椭 圆 形	1.9×1.4	0.52 1 0.60	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平凹で、硬い。		第53号作房 跡の西つづ き部を掘 光している。
第172回 102	D 8 a s	N - 28° - E	椭 圆 形	3.2×1.37	0.95	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は平緩で緩く、長方形の平面を呈 する。		
第174回 104	D 8 h z	N - 0°	円 形	1.64×1.55	0.22	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は平坦で、柔らかい。		
" 105	D 8 g ?	N - 28.5° - E	椭 圆 形	0.95×0.74	0.15 1 0.37	西壁はやや垂直ぎみに立ちあがる。そ の他はゆるやかに立ちあがる。 底面はやや柔らかい。		
" 106	D 8 h s	N - 74° - W	椭 圆 形	1.35×1.05	0.40	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は平坦で、柔らかい。	土 石1片、土師器4 片を出土する。	
" 107	D 8 h s	N - 60° - W	椭 圆 形	1.33×0.88	0.20	南壁はやや垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平凹で、硬い。	土 石1片、土師器5 片を出土する。	
" 108	D 8 h s	N - 0°	円 形	1.4×1.4	0.60	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は平坦で、硬い。	土 石1片、土師器4 片を出土する。	
" 109	D 8 g o	N - 13° - W	椭 圆 形	1.04×0.78	0.34 1 0.60	南・北壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は凹凸で、硬い。		
" 110	D 8 g o	N - 55° - W	長 方 形	1.88×1.4	0.50	北東・南壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は凹凸して、硬い。	土 石1片、土師器2片を 出土する。	
" 111	D 9 g 1	N - 49° - W	111椭圓形	1.87×1.0	0.36 1 0.46	南壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は凹凸で、硬い。		
" 112	D 9 h 1	N - 24° - W	椭 圆 形	1.0×0.52	0.20 1 0.27	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は丸味をおびて、硬い。		
" 113	D 9 g 1	N - 90° - E	椭 圆 形	1.05×0.7	0.45 1 0.50	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平凹で、硬い。		
" 114	D 9 f 1	N - 0°	円 形	0.45×0.45	0.52	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は丸味をおび、硬い。		

区番 通番番号	地 区	主軸方向	平 面 形	規 模(単位)		各 部 の 状 況	出 土 遺 物	備 考
				長 度 × 幅 隆	壁 高			
第175回 115	D 9 f1	N - 0°	不整円形	1.0×0.9	0.20	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は半径で、硬い。	覆土中に土器片を出土する。	
# 116	D 9 e1	N - 42° E	円 形	1.18×0.95	0.30 1 0.45	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ半径で、硬い。		
# 117	D 9 e1	N - 62° - W	椭 圆 形	0.76×0.58	0.35	北壁はやや垂直ぎみ。南・東壁はゆる やかに立ちあがる。 底面は半径をとび、硬い。		
# 118	D 9 e1	N - 28° - E	椭 圆 形	0.74×0.48	0.35	北・東・西壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は丸味をおび、柔らかい。	覆土中に土器片を出土する。	
# 119	D 8 e0	N - 84° - W	椭 圆 形	1.28×0.73	0.37 1 0.45	東・西壁はゆるやかに、北壁はほぼ垂 直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ半径で、硬い。		
# 121	C 8 j3	N - 0°	円 形	1.5×1.45	0.45 1 0.65	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は凸凹があり、硬い。	覆土中に土器片 2枚、陶土器 1枚、内燃炉 1個を出土する。	
# 122	C 8 j3	N - 77° - E	椭 圆 形	1.6×1.3	0.40	南壁は最初に、東・西壁はやや垂直に、 北壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ半径で、硬い。	覆土中に陶器 2片と出土す る。	
# 123	D 8 a5	N - 70° - E	椭 圆 形	1.68×1.08	0.20 1 0.25	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は半径で、硬い。		
# 124	D 8 a5	N - 0°	は ば 円 形	1.18×1.17	0.55	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は半径で、硬い。	覆土中に内燃炉 1台、鐵笠太刀 3枚、内燃炉1 個を出土する。	
# 125	D 8 a5	N - 72° - W	不整格円形	1.48×0.94	0.10 1 0.27	南壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがり。そ の他の壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はやや凸凹している。		
# 126	D 8 a6	N - 64° - E	椭 圆 形	0.86×0.7	0.20 1 0.30	東壁はほぼ垂直ぎみに、内壁はゆるや かに立ちあがる。 底面はやや丸味をおび、硬い。		
# 127	D 8 a4	N - 43° - W	不整椭円形	1.25×0.8	0.22	北東壁はほぼ垂直ぎみに、西壁はゆる やかに立ちあがる。 底面は凸凹して、硬い。	覆土中に縄文土 器1片、土器片 2片、内燃炉1 個を出土する。	
# 128	D 8 b5	N - 0°	不整格円形	2.26×1.08	0.95	北壁はゆるやかに、南・西壁はほぼ垂 直に立ちあがっている。 底面はやや傾斜してて、硬い。		
第176回 129	D 8 b5	N - 0°	は ば 円 形	1.15×1.05	0.40	壁はゆるやかに立ちあがっている。 底面はほぼ半径で、硬い。		
# 130	D 8 b5	N - 33° E	不整格円形	1.46×1.05	上段 1.10 下段 0.42 P段 0.60	内壁はほぼ垂直ぎみに、北東壁はやや ゆるやかに立ちあがる。 底面は半径で、下段は丸味をおびて、 硬い。		
# 131	D 8 b4	N - 24.5° - E	椭丸長方形	3.0×1.8	0.35	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ半径で、硬い。		
# 132	D 8 c5	N - 15° - W	不 整 形	1.5×1.07	0.05 1 0.25	西壁はほぼ垂直ぎみに、南壁はやや ゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ半径で、硬い。		
# 133-A	D 8 c5	N - 0°	格 円 形	1.3×0.94	0.45	北壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は丸味をおびて硬い。	第211号土 器と重複し ている。	
# 133-B	D 8 c5	N - 35° - E	椭 圆 形	0.92×0.8	0.24	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ半径で、硬い。		
# 134	D 8 c6	N - 0°	不 整 形	1.7×1.17	0.20 1 0.42	南壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ半径で、硬い。		

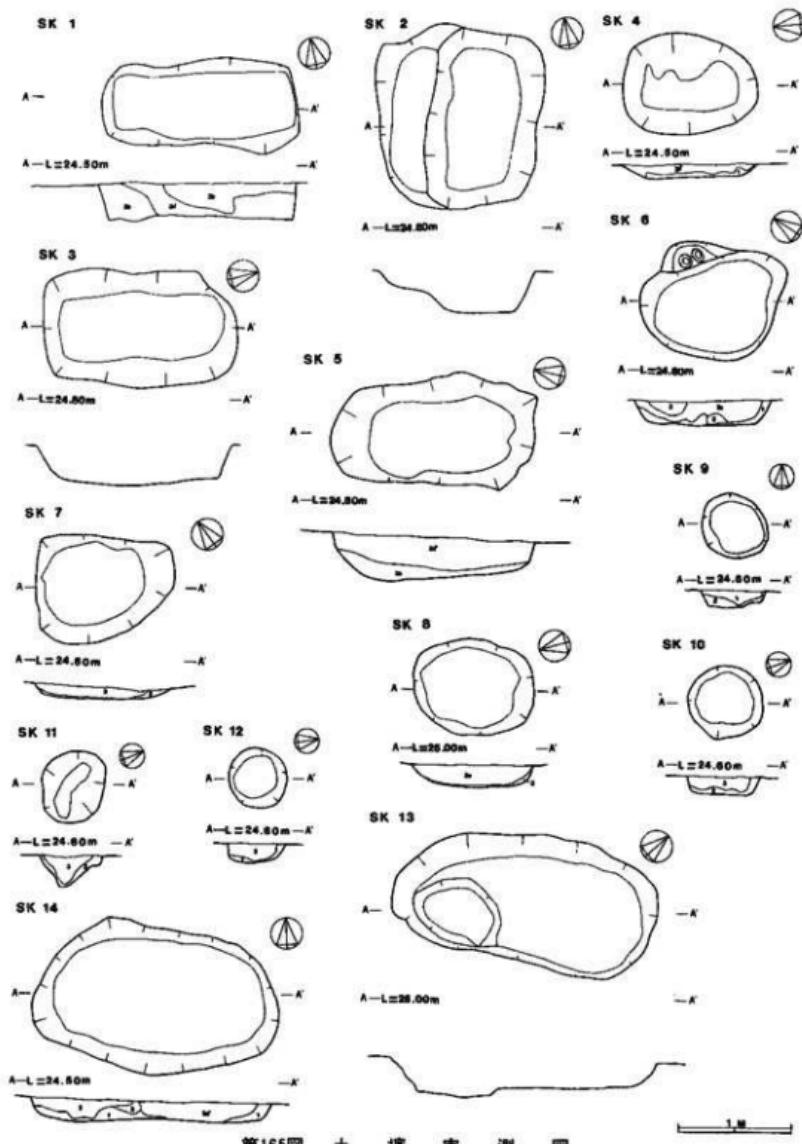
器 版 遺物番号	地 区	主軸方向	平 面 形	規 模(m)		各 部 の 状 況	出 土 遺 物	備 考
				長 棒 × 短 径	壁 高			
第176回 135	D 8 b2	N - 0°	橢 円 形	2.35×1.08	0.25 1 0.40	南壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 裏面は凸凹していて、硬い。		
# 136	D 8 a2	N - 63.5°-W	隅丸長方形	1.83×1.24	0.17 1 0.20	南壁はややゆるやかに、西壁にはほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 137	D 8 a1	N - 16.5°-W	不 整 形	1.54×1.28	0.15 1 0.27	西壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 裏面は凸凹していて、硬い。		
第184回 138	C 8 i4		隅丸長方形			壁はゆるやかに立ちあがる。 裏面は東側にゆるやかに傾斜している。		第103号地 下式焼上より標本をうけている。
# 139	C 8 i5	N - 47°- E	隅丸長方形	0.9×0.44	0.24	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 裏面はほぼ平坦で、硬い。	覆土中に標文ナ ミナケル上跡部 片を出土する。	第103号地 下式焼の東 側に発掘し てある。
第176回 140	D 8 b2	N - 58.5°- W	橢 円 形	1.34×1.1	0.24 1 0.30	南・西壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 裏面はほぼ平坦で、柔らかい。		
第177回 141	D 8 b1	N - 0°	円 形	0.87×0.87	0.30	壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面は平底で、硬い。		
# 142	D 8 b6	N - 71.5°- W	椭 円 形	2.14×1.12 2.52×1.55	0.08 1 0.12	壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平底で、硬い。		
# 143	D 8 a5	N - 77°- W	椭 円 形	(1.9×1.37) 2.24×1.65	0.10	壁はゆるやかに立ちあがっている。 底面はほぼ平底で、硬い。		底面・蓋面に 柄子が20-30 cmの厚さで取 られている。
# 144	D 8 a7	N - 57°- W	不 整 形	1.53×1.18	0.30	壁はややゆるやかに立ちあがっている。 底面はほぼ平底で、やや硬い。	覆土中に器 生土器2片 を出土する。	
# 145	D 8 a8	N - 70°- W	不整椭円形	1.85×1.4	0.21	壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平底で、硬い。		
# 146	D 8 a6	N - 62°- W	不整椭円形	1.3×0.9	0.17 1 0.30	東・北東壁はほぼ垂直に立ちあがっ ていて。 底面はほぼ平底で、やや硬い。	覆土中に陶片 片、土器部片 を出土する。	
# 147	C 8 j3	N - 69°- W	椭 円 形	5.3×4.3	0.10 1 0.35	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は強く、硬い。		
# 148	C 8 j3	N - 29°- E	椭 円 形	0.65×0.53	0.53	南西壁は東壁に比べ、やや垂直に立 ちあがる。 底面は強く平底で、硬い。		
# 149	D 8 j3	N - 43°- W	不 整 方 形	1.0×0.93	0.30	南東壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平底で、硬い。		
# 150	C 8 j4	N - 0°	円 形	7.5×7.0	0.64	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は強く、硬い。		
# 151	D 8 a2	N - 45°- E	不 整 形	1.25×1.1	0.43	北西壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平底で、硬い。	覆土中に上 器部小片2 片出土する。	
# 152	C 8 j3	N - 32°- W	小 椭 形	1.13×0.72	0.12 1 0.60	南壁にはほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は内凸して硬い。	覆土中に標文土 器小片3片出土 する。	
# 153	D 8 b2	N - 52°- W	椭 円 形	1.0×0.7	0.70	南・北壁は垂直に立ちあがる。 底面は強く、硬い。		
第178回 154	D 8 a3	N - 26.5°- W	不 整 形	1.8×0.78	0.35	北壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平底で、硬い。		

図 噴 道標号	地 区	主軸方向	平 面 形	規 模(回)		各 部 の 状 況	出 土 物 賦	備 考
				長 径 × 短 径	壁 高			
第178回 155	D 8 a3	N - 0°	椭 圆 形	0.77×0.57	0.20	南東壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、やや硬い。	陶土中に織文土器1片、弦纹土器2片を出土する。	
# 156	D 8 a3	N - 58° - E	椭 圆 形	0.97×0.79	0.20 0.30	南西壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面は凸凹して、硬い。	覆土中に鉢形土器1片を出土する。	第187号土器と重複している。
# 157	D 8 a4	N - 0°	不 整 形	1.22×1.15	0.30 0.35	南壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は凹凸して、硬い。	覆土中に鉢形土器3片を出土する。	
# 158	D 8 c2	N - 37° - E	隅丸長方形	2.15×1.4	0.54	北東壁はほぼゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 159	D 8 c1	N - 0°	円 形	1.3×1.2	0.40 0.50	西壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 並面はやや丸味をおび、硬い。	覆土中に上部器3片、底部土器1片を出土する。	
# 160	D 8 b1	N - 0°	円 形	0.95×0.93	0.28	南・東壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 161	D 8 b2	N - 44.5° - W	不整橢円形	1.55×0.78	0.30	北西壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦である。		
# 162	D 8 c2	N - 58° - W	隅丸長方形	0.8×0.6	0.13 0.18	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 163	D 8 c2	N - 0°	円 形	1.5×1.5	0.32	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は平坦で、硬い。		
# 164	D 8 a6	N - 59° - E	椭 圆 形	1.24×0.78	0.20	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 165	D 8 a7	N - 25° - E	不 整 形	1.3×0.9	0.33	壁はシットが存在するため垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 166	D 8 a7	N - 50° - W	ほぼ円形	1.15×1.05	0.35 0.40	西壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	覆土中に土器脚1片、麻糸土器1片、弦纹土器1片を出土する。	
第179回 167	D 8 a7	N - 20° - E	椭 圆 形	1.1×0.52	0.40	東・西壁はやや垂直に立ちあがる。 底面はやや丸味をおび、硬い。		
# 168	D 8 b6	N - 69° - W	椭 圆 形	1.44×1.08	0.50 0.60	北・東壁は垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 169	C 8 j6	N - 70° - W	隅丸長方形	2.1×1.47	0.20 0.40	越山全体にゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 170	C 8 j4	N - 27° - W	不整長方形	2.4×0.9	0.20 0.38	南・東壁は垂直に立ちあがる。 底面は凸凹して、硬い。		
# 171	C 8 j5	N - 73° - W	椭 圆 形	1.76×1.1	0.28 0.37	壁はややならかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦である。	覆土中に織文土器1片を出土する。	
# 172	D 7 j4	N - 31° - W	不 整 形	2.2×1.4	0.20	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 173	C 8 j5	N - 0°	円 形	1.57×1.35	0.20 0.50	東・西壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はやや丸味をおび、硬い。		
# 174	D 8 b4	N - 68° - E	不 整 形	1.0×0.7	0.20 0.30	南・北壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は凸凹して、硬い。	覆土中に鉢形土器2片を出土する。	

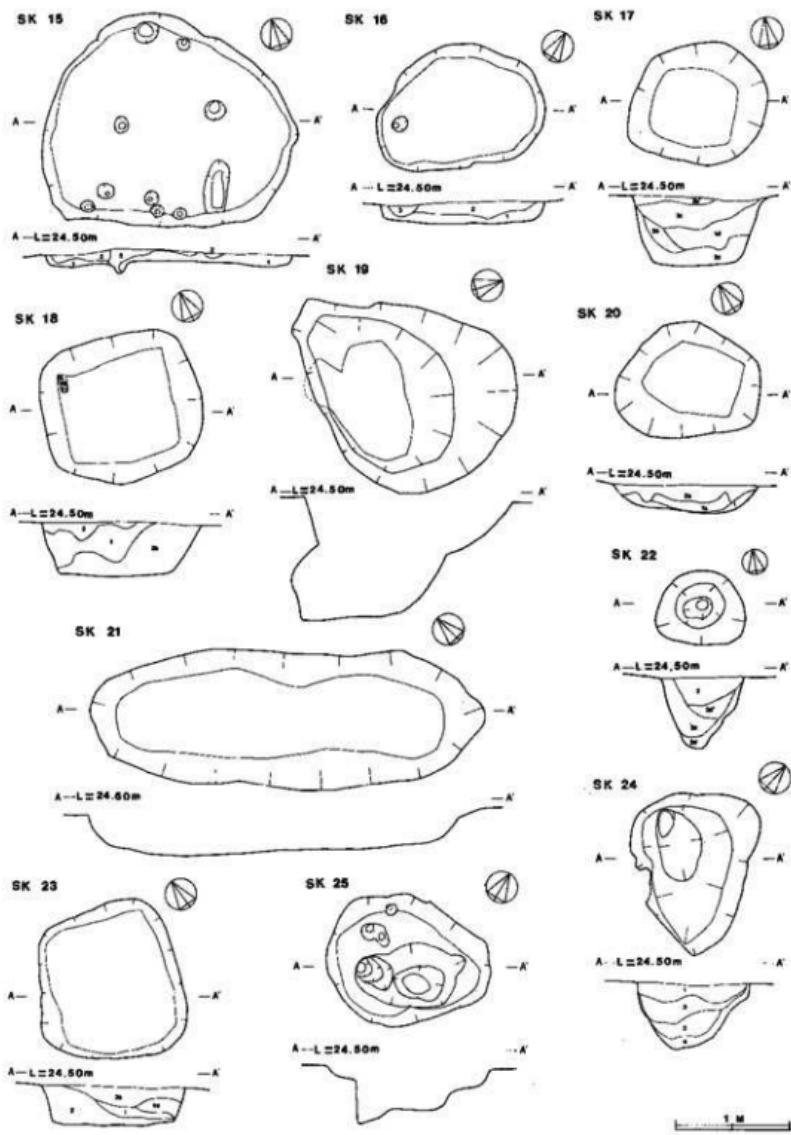
层番 遺構番号	地 区	主軸方向	平 面 形	規 模(m)		各 部 の 状 況	出土遺物	備 考
				長径×短径	壁高			
第179回 175	D 8 c 7	N - 0°	不整円形	1.5×1.3	0.17 ↓ 0.32	壁は垂直ぎみに立ちあがる。 底面はピットが存在するため西凸して 傾く。		
第178回 176	D 8 c 2	N - 83.5°-W	隅丸長方形	2.44×1.3	0.20 ↓ 0.25	南壁はピットが存在するためやや東 ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		第163・180 号土器と重 複している。
第179回 177	D 8 b 3	N - 73°-W	隅丸長方形	1.62×0.98	0.30	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	陶土中に上部器 1片、鐵文上部 1片を出土する。	
# 178	D 8 b 3	N - 12°-W	不整椭円形	1.7×0.74	0.25 ↓ 0.33	北壁はゆるやかに、その他のやせゆる やかに立ちあがる。 底面はやや丸味を含び、硬い。	陶土中に上 部器1片を 出土する。	
第180回 179	D 8 c 3	N - 43°-E	椭 圆 形	1.4×0.8	0.20 ↓ 0.25	東・南壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はやや丸味を含び、硬い。		
# 180	D 8 c 2	N - 0°	不 整 形	1.44×1.29	0.15	北・東壁はほぼ垂直ぎみに立ちあ がる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	陶土中に幾 何文片、土器部 1片を出土する。	
# 181	D 8 d 3	N - 38°-E	椭 圆 形	1.7×1.12	0.22 ↓ 0.30	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は凹凸で、硬い。		
# 182	D 8 d 2	N - 0°	不 整 形	0.7×0.7	0.45	南・東壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は平坦で、硬い。		
# 183	D 8 d 2	N - 15°-E	不整椭円形	1.14×0.83	0.06	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は丸味を含び、硬い。		
# 184	D 8 c 4	N - 61.5°-W	不整椭円形	1.34×1.2	0.28	北壁は振り込まれている。 底面は丸味を含び、熱斜して硬い。		
# 185	D 8 d 3	N - 18°-E	不整椭円形	1.4×1.0	0.23 ↓ 0.26	壁は全般的にゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	陶土中に繩 文土器1片を 出土する。	
# 186	D 8 b 4	N - 50.5°-W	椭 圆 形	0.95×0.7	0.20 ↓ 0.35	東壁は垂直に立ちあがる。 底面は丸味を含び、硬い。		
# 187	D 8 a 3	N - 0°	不 整 形	2.86×1.2	0.15 ↓ 0.30	北・東壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	陶土中に繩 文土器2片を 出土する。	第186号土 器と重複し ている。
# 188	D 8 a 3	N - 70°-E	不 整 形	2.36×0.8	0.30	南・東壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は凹凸で、硬い。	陶土中に上部 3片、鐵文上部 2片、底部上層 3片を出土する。	
第181回 189	D 7 j 3	N - 17°-W	椭 圆 形	0.97×0.65	0.30	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 190	D 8 b 4	N - 57°-W	不 整 形	1.3×0.85	0.30	北・東壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は北側がほぼ平坦である。		
# 191	D 8 b 2	N - 50°-E	不 整 形	2.2×0.8	0.27 ↓ 0.35	西壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はピットがあるため西凸して傾く。	陶土中に上 部器4片を 出土する。	
# 192	D 8 b 3	N - 0°	隅丸長方形	1.4×1.2	0.30	東・西壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	陶土中に上部 9片、鐵文上部 1片を出土する。	第193号土 器と重複し ている。
# 193	D 8 b 3	N - 0°	椭 圆 形	2.37×1.65	0.15 ↓ 0.20	東壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	陶土中に鐵文土 器1片、青銅石 1個を出土する。	
# 194-A	D 8 b 3	-	不 整 形	-	0.15 ↓ 0.40	北西壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		第193号土 器により隣 室に受けつい ている。

区 域 番号	地 区	主軸方向	平 面 形	規 模		各 部 の 状 況	出 土 物	備 考
				長径×短径	號高			
第181回 194-B	D 8 b 3	N - 49°- W	楕 円 形	1.77×0.72	0.30 1 0.50	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は凸出して、硬い。		第194号-A 上端に素掘 している。
# 195	D 8 c 2	N - 31.5°- E	不整長方形	2.37×1.3	0.35	北西壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は南東向きに傾斜している。	覆土中に土器片 2片、鐵文上器 1片、朱牛土器 1片を出土する。	
# 196	D 8 b 3	N - 63°- W	椭 円 形	0.83×0.57	0.30	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は丸味をおび、抜く、硬い。		
# 197	D 8 a 4	N - 0°	椭 円 形	0.88×0.75	0.33	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 198	D 8 a 4	N - 48°- W	椭 円 形	1.04×0.87	0.45	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は抜く、硬い。		覆土中に朱牛土 器1片、鐵文上器 1片を出土する。
# 199	D 8 a 4	N - 0°	椭 円 形	1.37×0.8	0.62	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は抜く、硬い。		覆土中に鐵 文上器1片 を出土する。
第182回 200	D 8 a 4	N - 0°	円 形	0.5×0.5	0.70	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面は抜く、硬い。		
# 201	D 8 a 4	N - 0°	円 形	0.55×0.53	0.40	南壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は非常に抜く、硬い。		
# 202	D 8 a 5	N - 36°- E	不 整 形	1.5×0.94	0.20	北壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		覆土中に土 器片1片 を出土する。
# 203	D 8 c 6	N - 76°- E	椭 円 形	1.04×0.68	0.47	壁はやや急に、西壁はゆるやかに立 ちあがる。 底面は抜く、硬い。		
# 204	D 8 c 6	N - 61°- E	椭丸長方形	1.3×0.9	0.15 1 0.20	南・東壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	覆土中に土器片 1片、朱牛土 器2片を出土 する。	
# 205-A	D 8 c 6		方 形		0.30	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		第205号-C 上端により 削り込まれ ている。
# 205-B	D 8 c 6	N - 25°- W	不 整 形	0.95×0.64	0.25 1 0.30	南壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は丸味をおび、硬い。		第205号-C 上端により 削り込まれ ている。
# 205-C	D 8 c 6		不 整 形		0.50 1 0.60	北壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は凹凸している。		
# 206-A	D 8 c 7	N - 28°- E	不 整 形	1.35×0.52	0.20 1 0.35	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面はやや丸味をおび、凹凸している。		第206号-B 上端により 削り込まれ ている。
# 206-B	D 8 c 7	N - 23°- W	椭 円 形	1.47×1.0	0.90	北壁は段状になり、ほぼ垂直ぎみに立 ちあがる。 底面は抜く、硬い。		
# 207	D 8 c 7	N - 0°	不整椭円形	1.25×1.15	0.12 1 0.20	壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがっている。 底面はほぼ平坦で、硬い。	覆土中に土 器片小片2 片出土する。	
# 208	D 8 c 7	N - 0°	円 形	1.17×1.03	0.25 1 0.35	南・北壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがっ ていて。 底面は丸味をおび、硬い。		
# 209	D 8 c 6	N - 30°- E	椭丸長方形	2.1×7.9	0.10 1 0.20	東壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はゆるやかに傾斜して、凹凸して いる。		
# 210	D 8 c 6	N - 0°	不 整 円 形	0.77×0.6	0.35 1 0.53	東壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。 底面はくぼみがあり、硬い。		

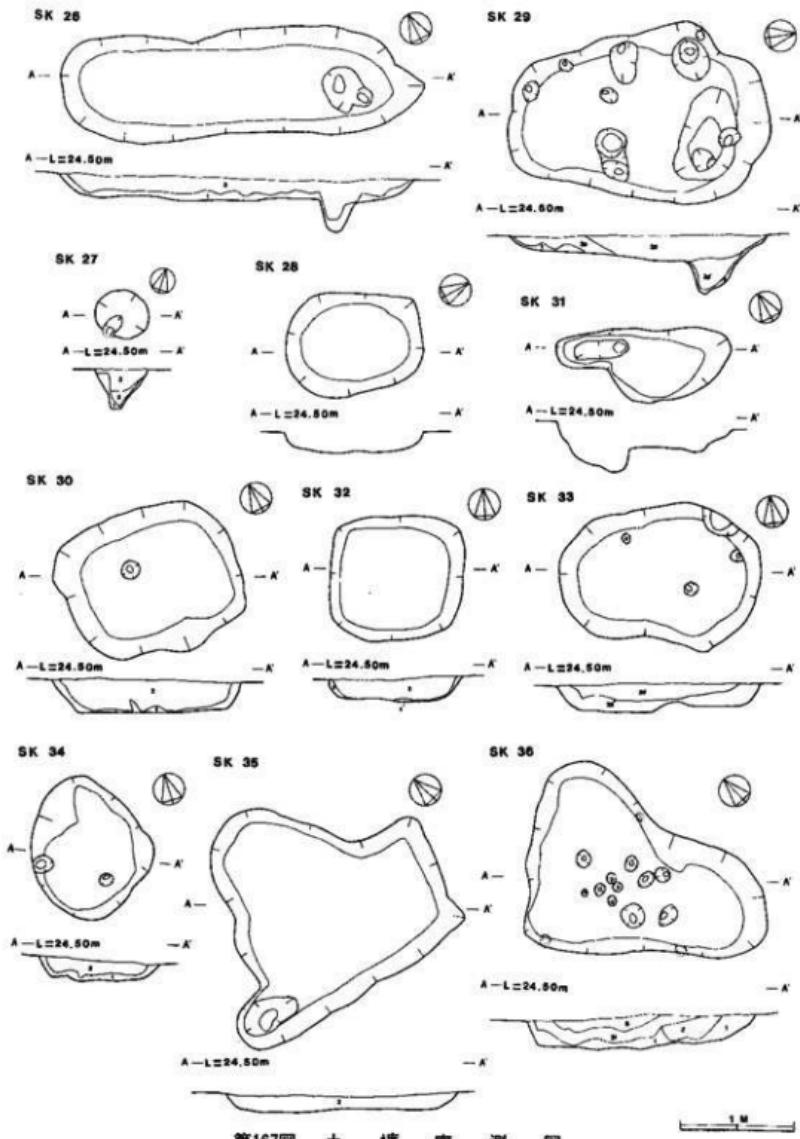
団 区 遺 跡 番 号	地 区	主軸方向	平 面 形	規 格(m)		各 部 の 状 況	出 土 遺 物	備 考
				長 径 × 短 径	高 さ			
第182回 211	D 8 e5	N - 55° - E	椭 圆 形	0.95 × 0.7	0.38 1 0.40	南側は垂直に立ちあがる。 北面は丸味を帯び、強く、硬い。		
# 212	D 8 e7	N - 66.5° - W	椭 圆 形	0.84 × 0.65	0.40	東はほぼ垂直に立ちあがる。 裏面は丸味を帯び、強く、硬い。		
第183回 213	D 8 d6	N - 10° - E	椭 圆 形	1.4 × 1.3	0.42	西壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 214	D 8 e8	N - 0°	円 形	0.95 × 0.95	0.25 1 0.30	西壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 215	D 8 e8	N - 34° - E	椭 圆 形	0.95 × 0.73	0.45	南壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面は丸味を帯び、強く、硬い。	覆土中に 1.25 mm 小片を出 土する。	
# 216-A	D 8 e0	N - 31° - E	隅九長方形	1.34 × 0.78	0.35 1 0.65	東はほぼ垂直に立ちあがる。 裏面はほぼ平坦で、硬い。		第216号 - A 土塊により 張り込まれ ている。
# 216-B	D 8 e0	N - 0°	椭 圆 形	1.23 × 0.55	0.60	東・北壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はビットが存在し、硬い。		
# 217	D 8 e0	N - 0°	椭 圆 形	0.68 × 0.58	0.30 1 0.35	北壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 218	D 8 b0	N - 0°	不 整 圆 形	0.97 × 0.58	0.65	南壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面は丸味を帯び、硬い。	覆土中に陶文土 器小片を 1 片出 土する。	
# 219	D 8 b9	N - 54° - E	椭 圆 形	1.07 × 0.73	0.30 1 0.40	東・東壁は段状に、ややゆるやかに立ち あがる。 底面はやや丸味を帯び、硬い。		
# 220	D 8 b0	N - 16° - E	椭 圆 形	1.0 × 0.78	0.35	南・西壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		
# 221-A	D 8 a2	N - 44° - W	ほ ぼ 四 形	0.6 × 0.55	0.29 1 0.34	壁はゆるやかに立ちあがる。 底面は丸味を帯び、硬い。	覆土中に上 輪跡 1 片を 出土する。	第221号 - B 土塊により 張り込まれ ている。
# 221-B	D 8 a2	N - 31° - E	椭 圆 形	1.1 × 0.65	0.49	南・西壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面は丸味を帯び、強く、硬い。		第221号 - C 土塊により 張り込まれ ている。
# 221-C	D 8 a2	N - 62° - E	不 整 形	1.27 × 0.79	0.42	壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面は平坦で、硬い。		
# 222	D 8 d2	N - 60° - W	不 整 形	2.45 × 1.3	0.30 1 0.40	壁はほぼ垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	覆土中に土 輪跡 1 片を 出土する。	
# 223	D 8 d3	N - 11° - E	不整椭圆形	1.44 × 1.16	0.12 1 0.20	南壁はビットが存在し、ほぼ垂直に 立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	覆土中に上 輪跡 1 片を 出土する。	
# 224	D 8 f3	N - 79° - W	隅九長方形	1.8 × 1.24	0.25	壁はややゆるやかに立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。	覆土中に鐵 骨(骨)が出 土する。	第11号構 造に張り込 んでいる。
# 225	D 9 i5	N - 50° - E	隅九長方形	0.8 × 0.6	0.33 1 0.40	東壁は垂直に立ちあがる。 底面はほぼ平坦で、硬い。		

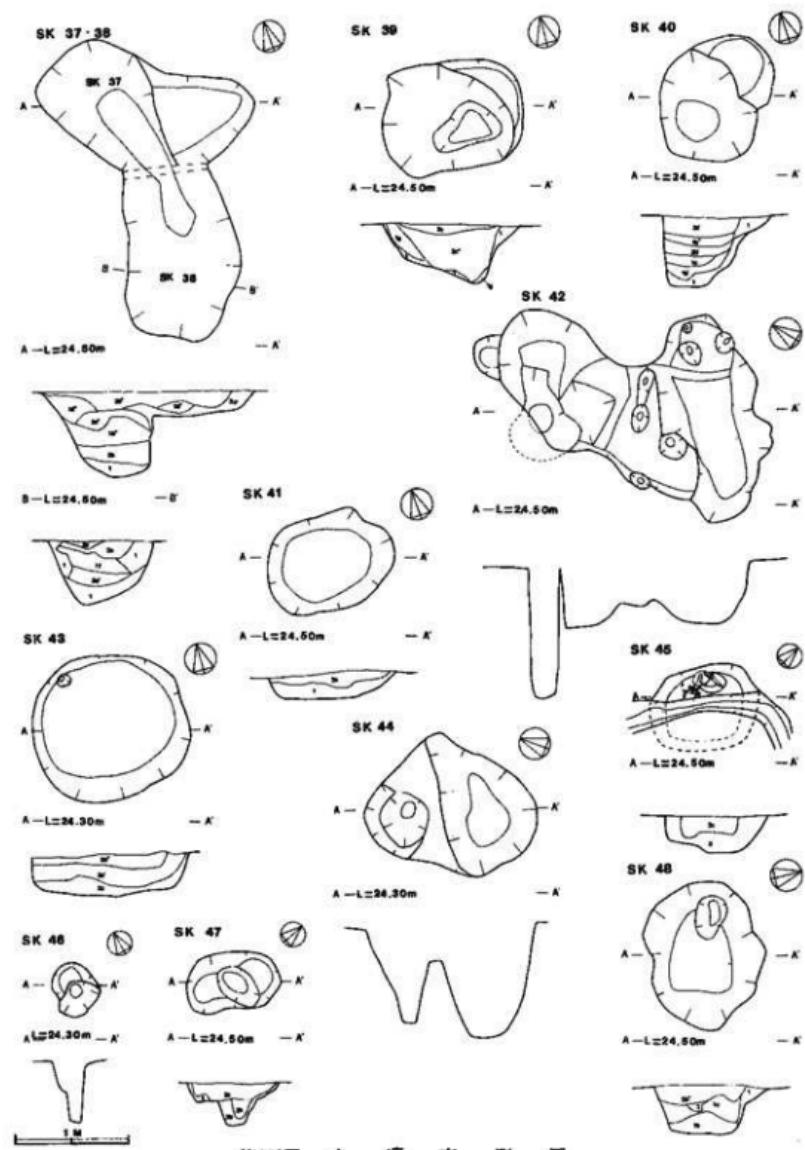


第165図 土 壤 実 測 図

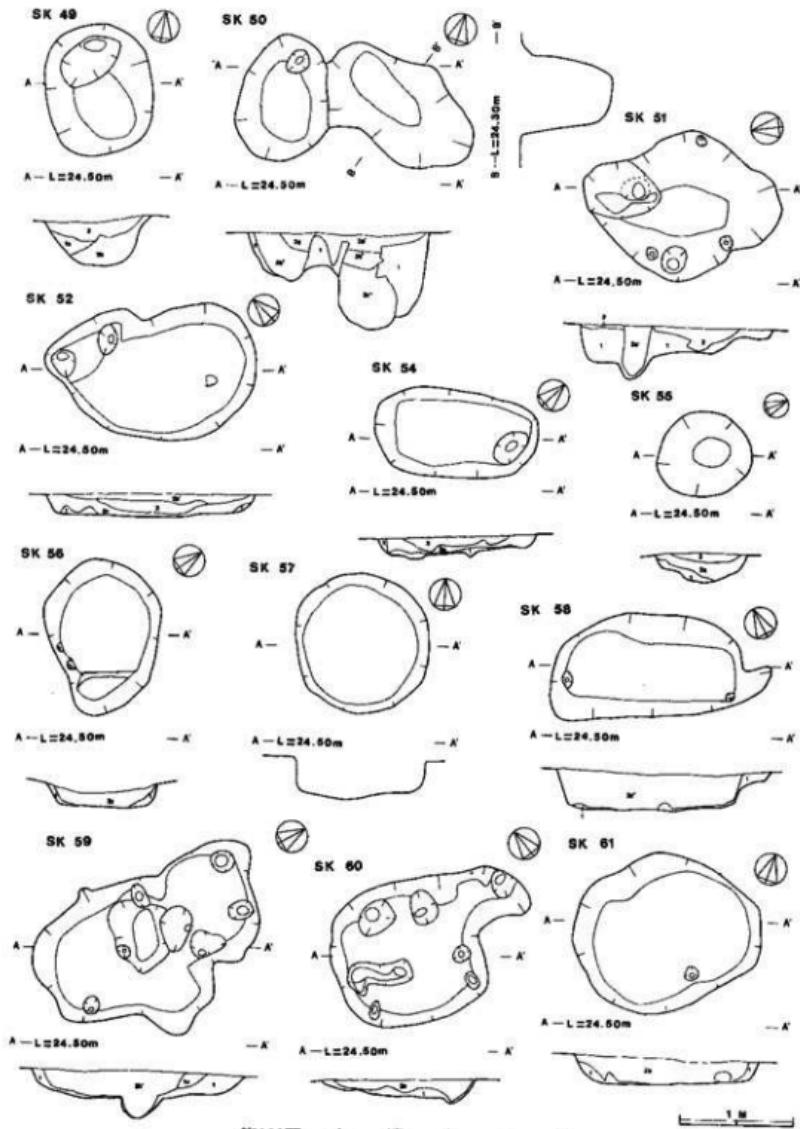


第166図 土 壤 実 測 図

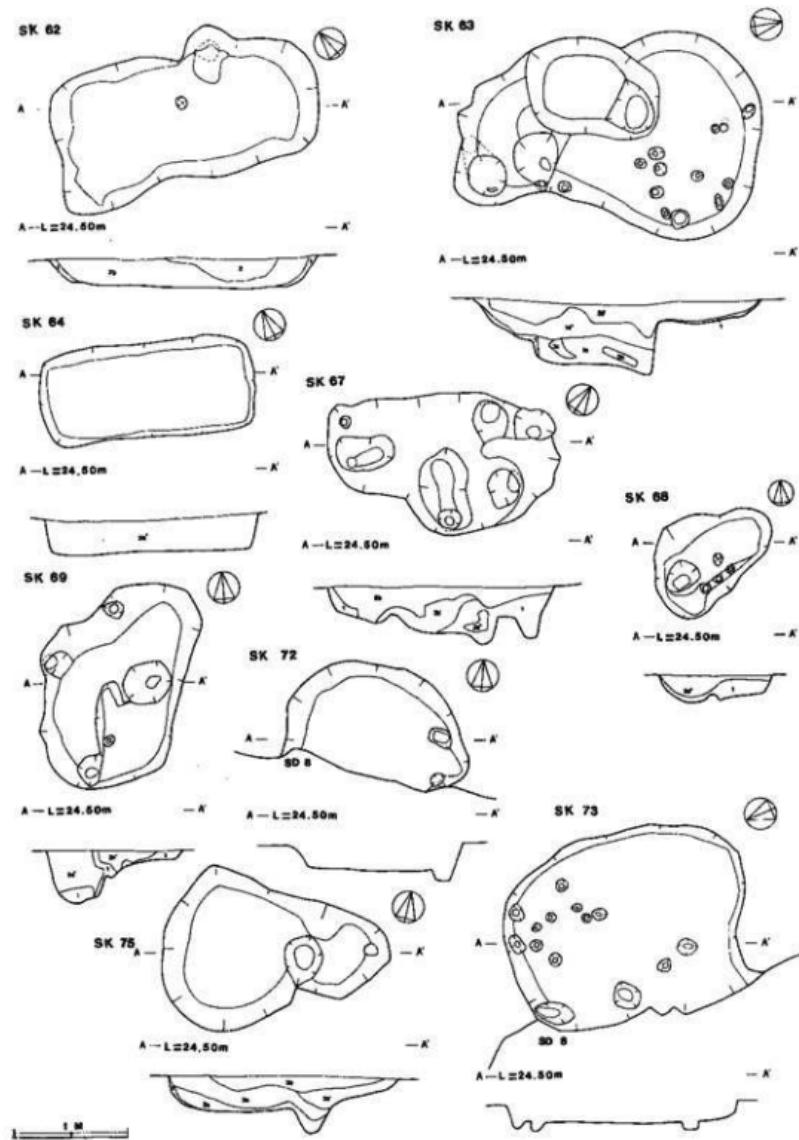




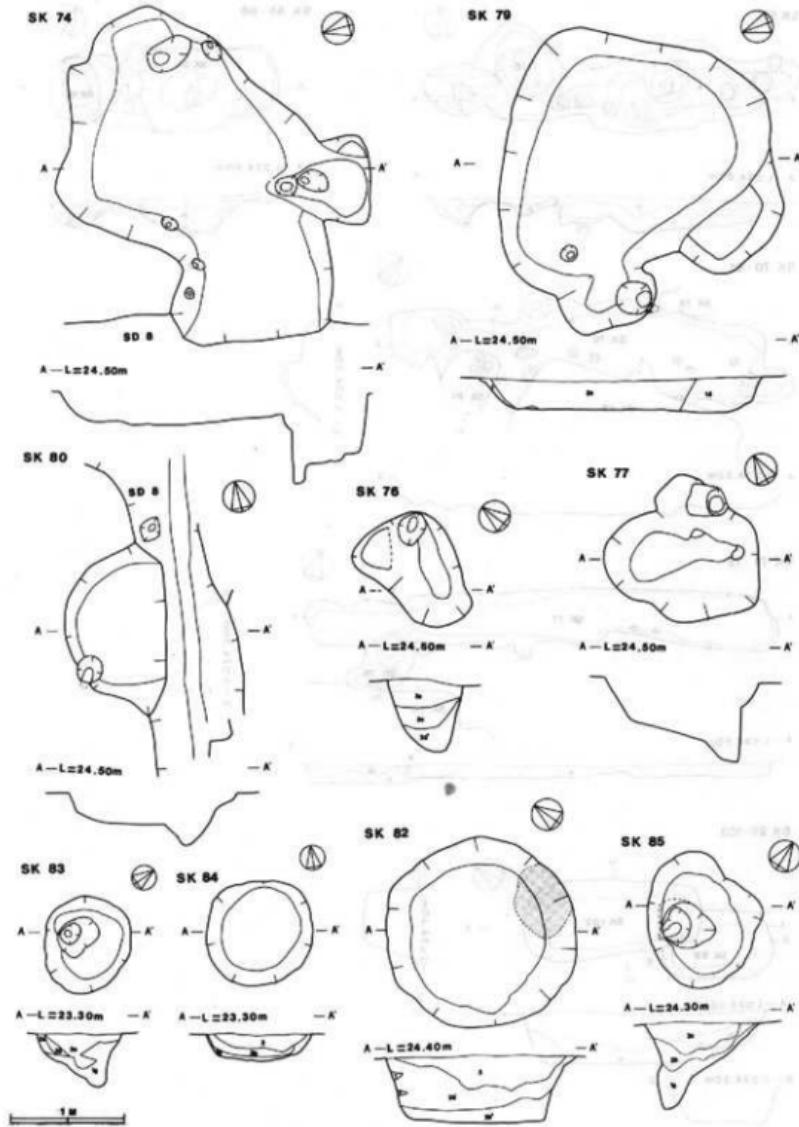
第168図 土 壤 実 測 図



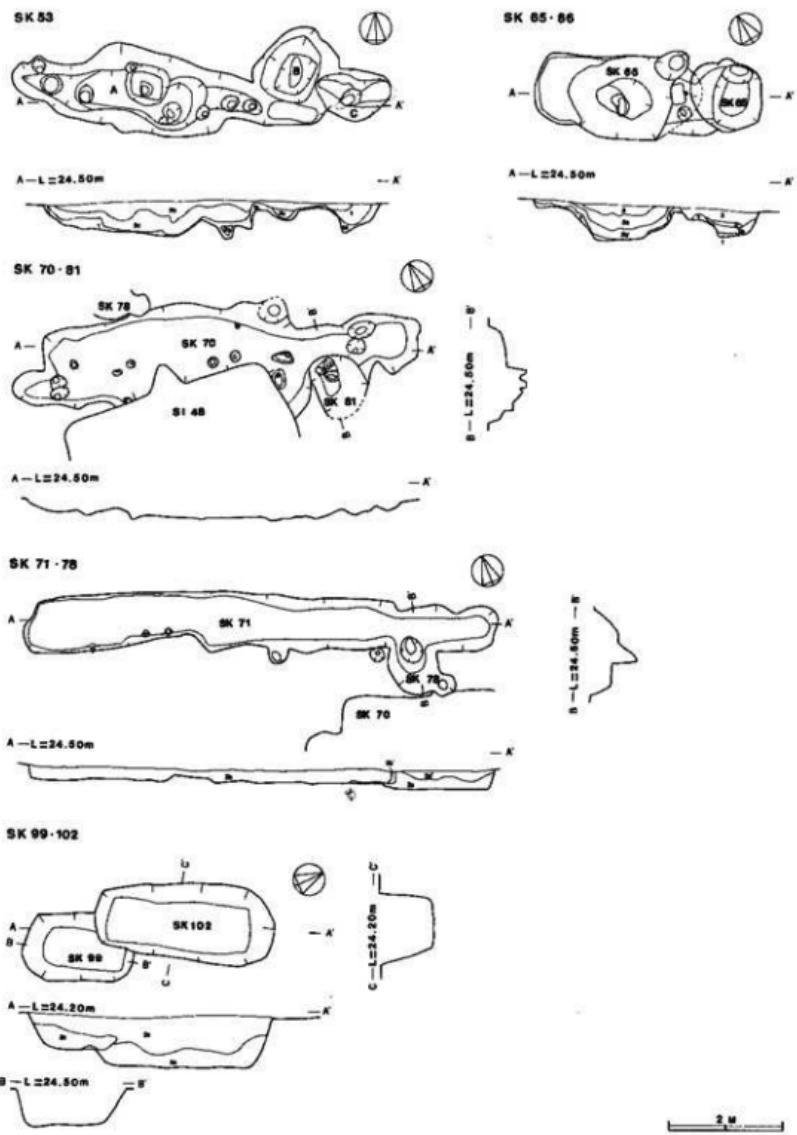
第169図 土 壤 実 測 図



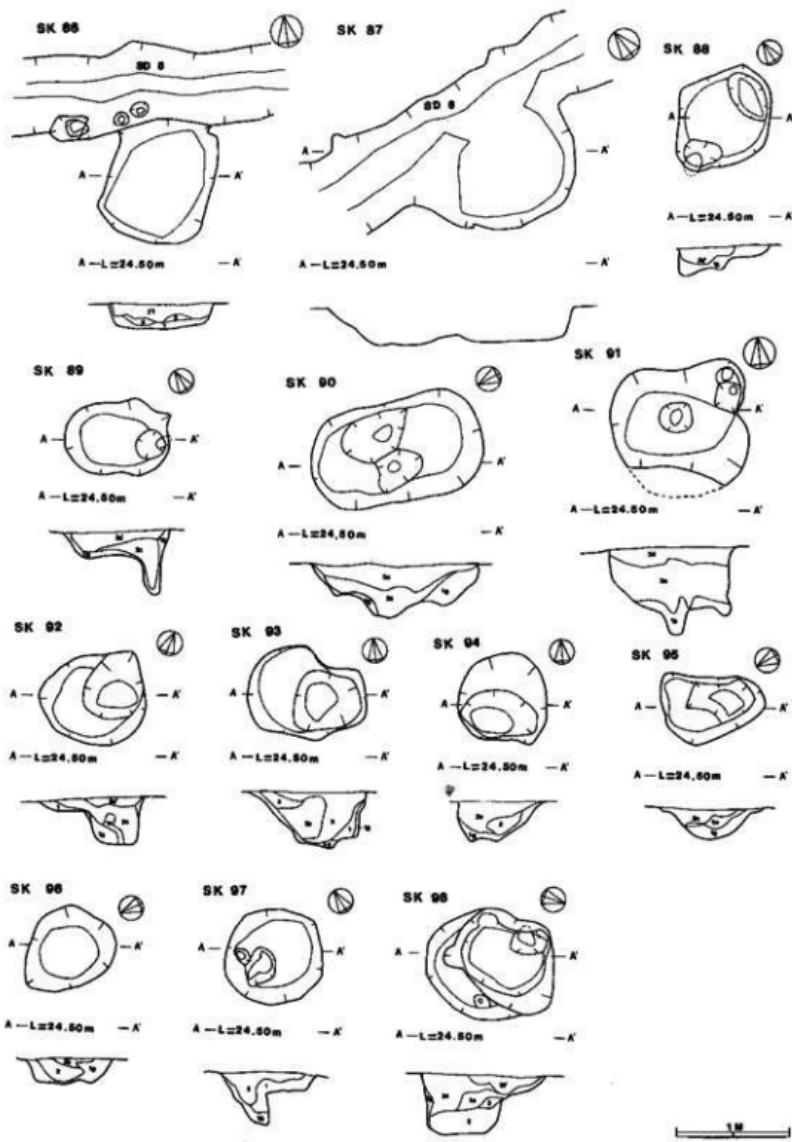
第170図 土 壤 実 測 図

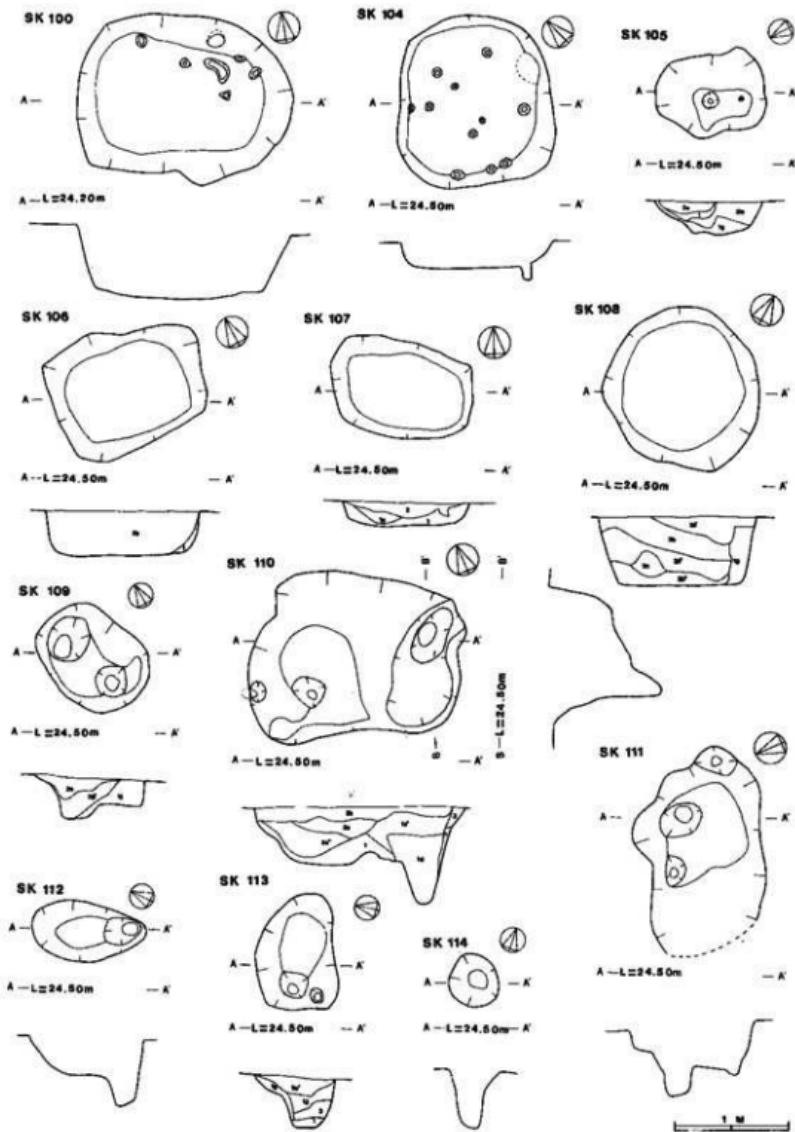


第171図 土 壤 実 測 図

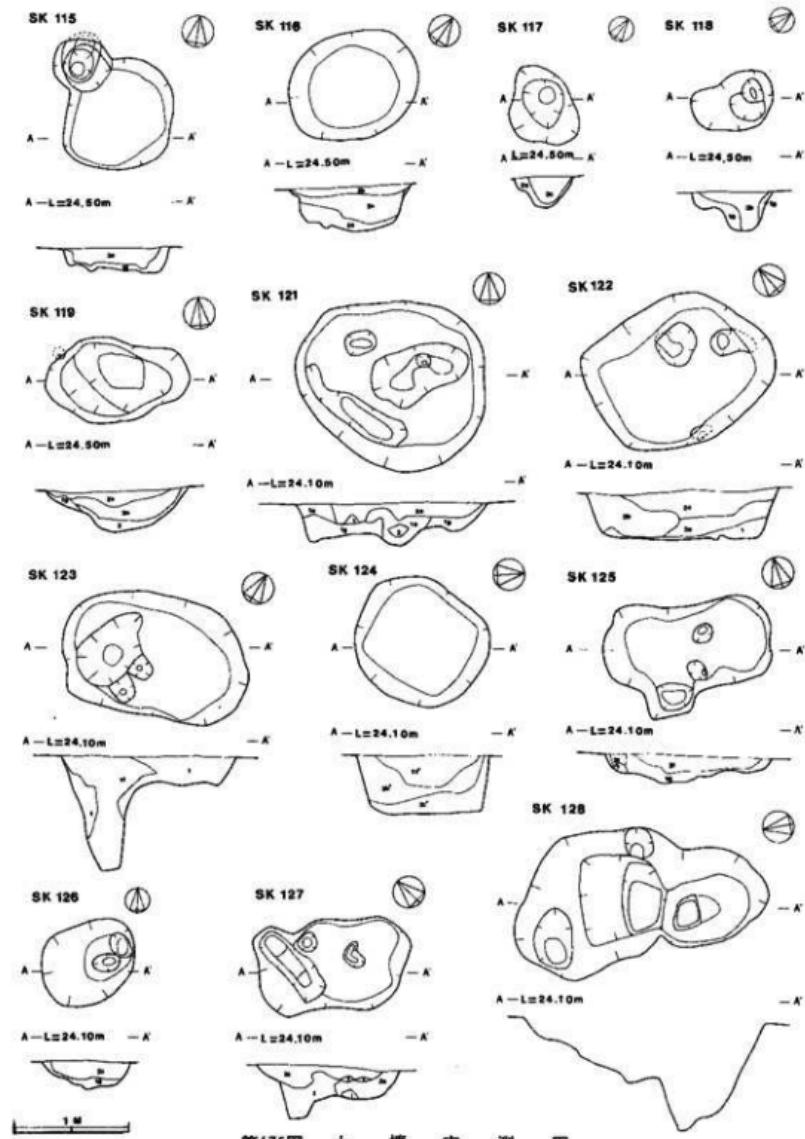


第172図 土 壤 実 測 図

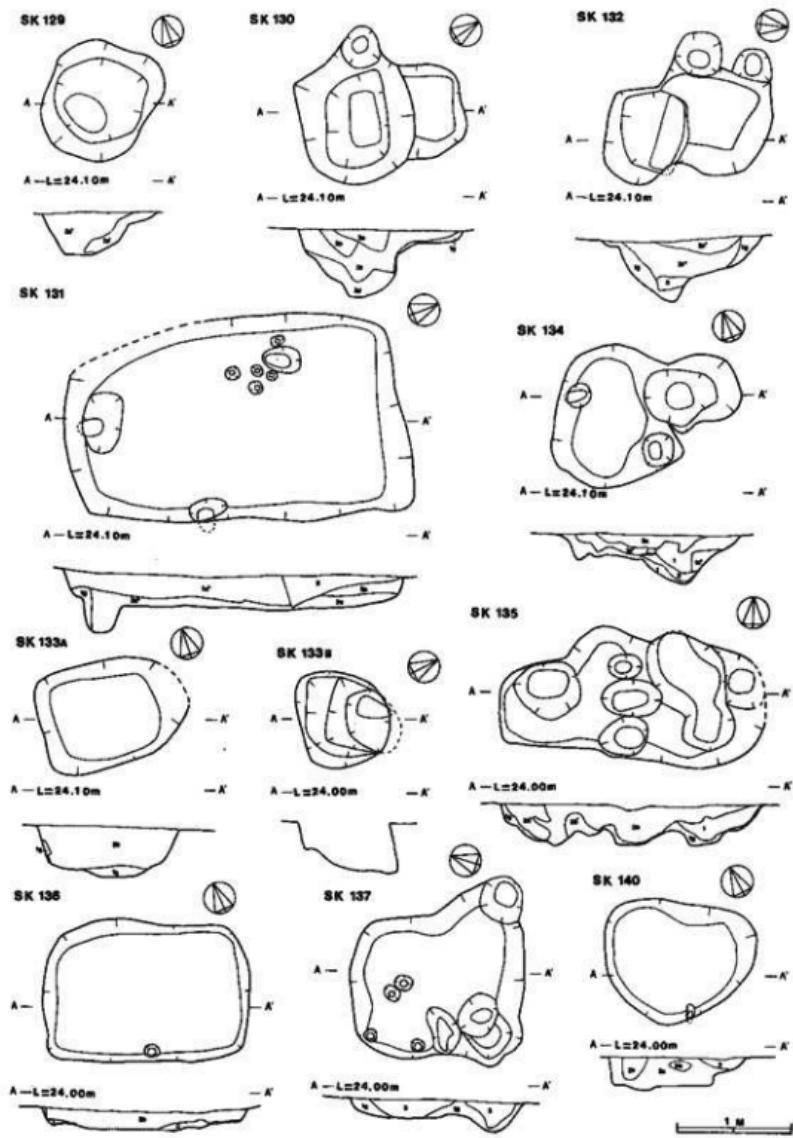




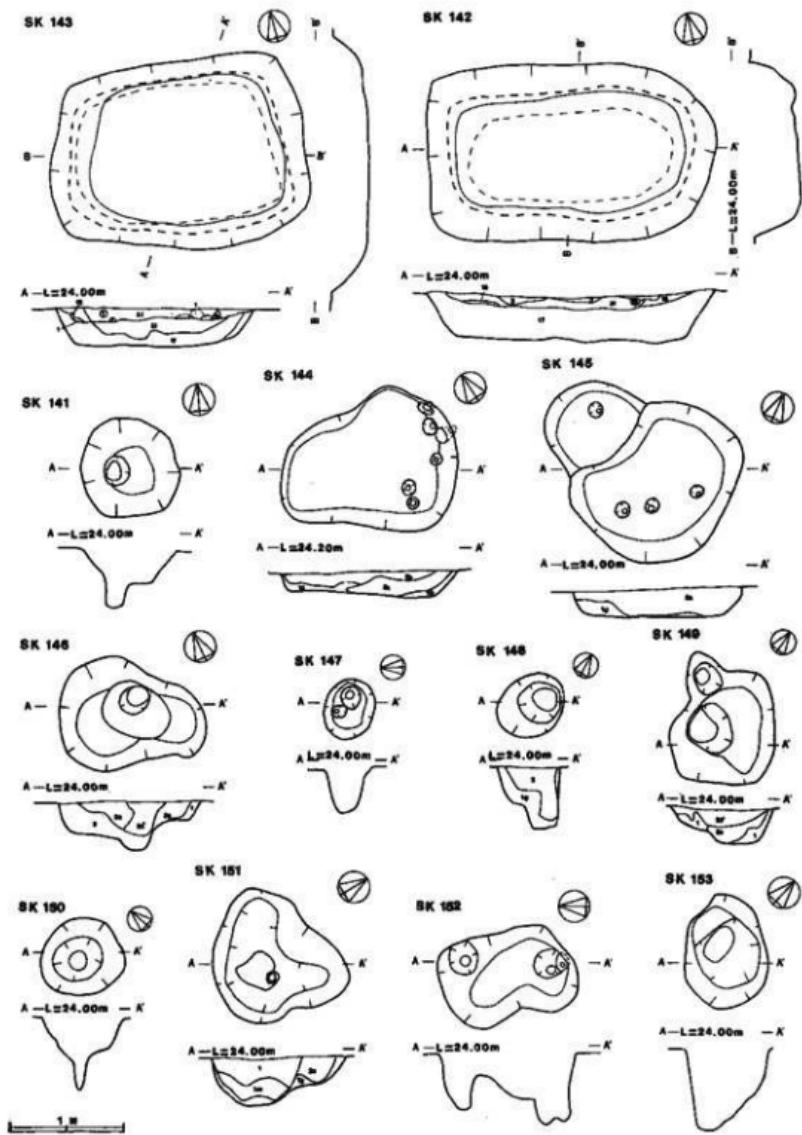
第174図 土 壤 実 測 図



第175図 土 壤 実 測 図



第176図 土 壤 実 測 図



第177図 土 壤 実 測 図

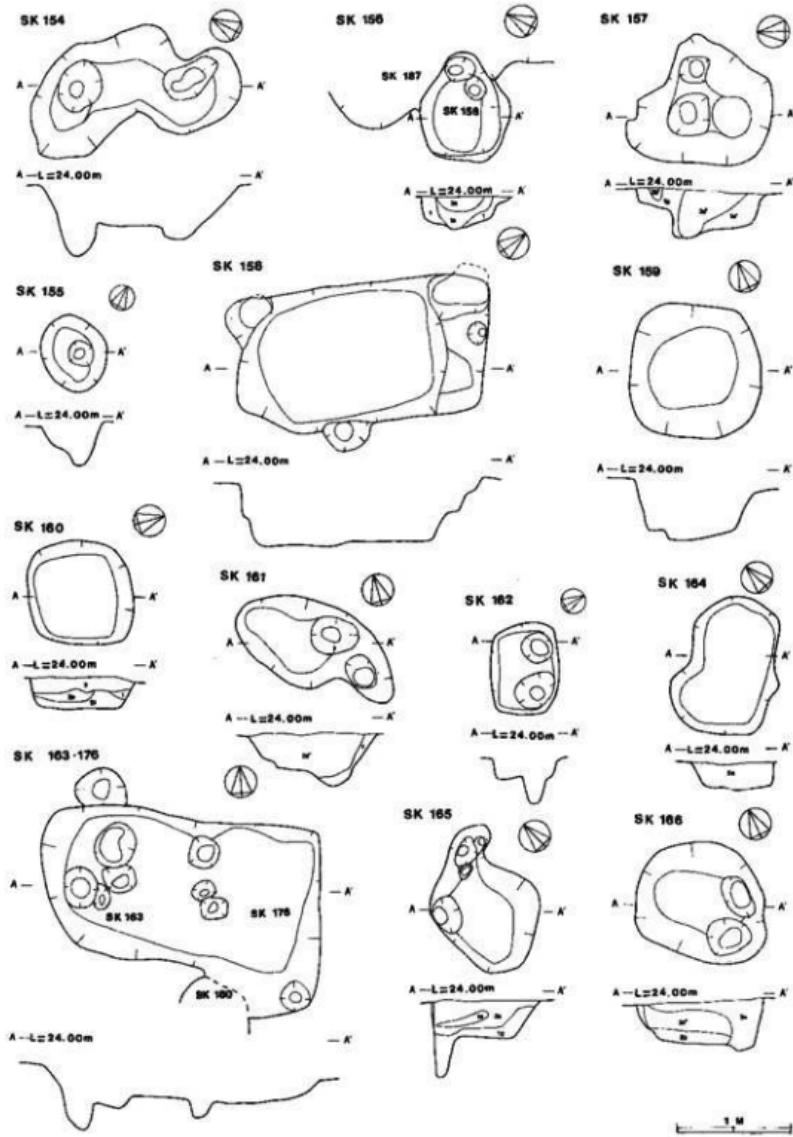
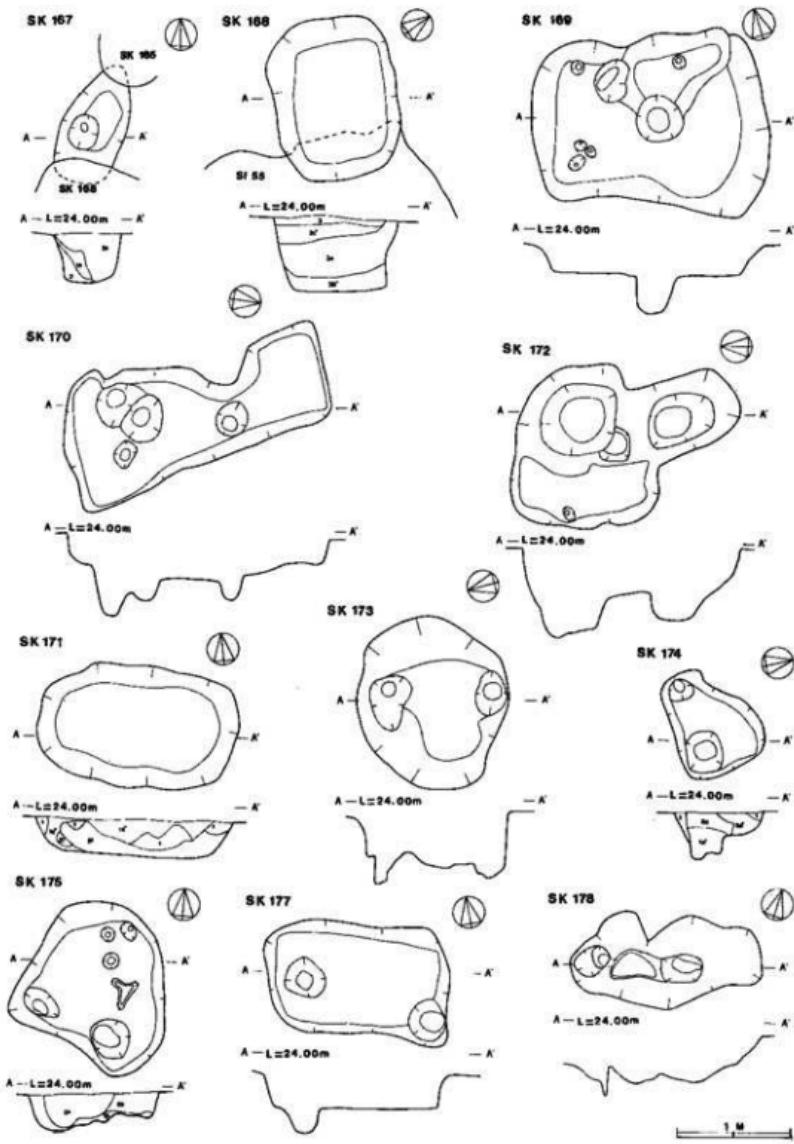
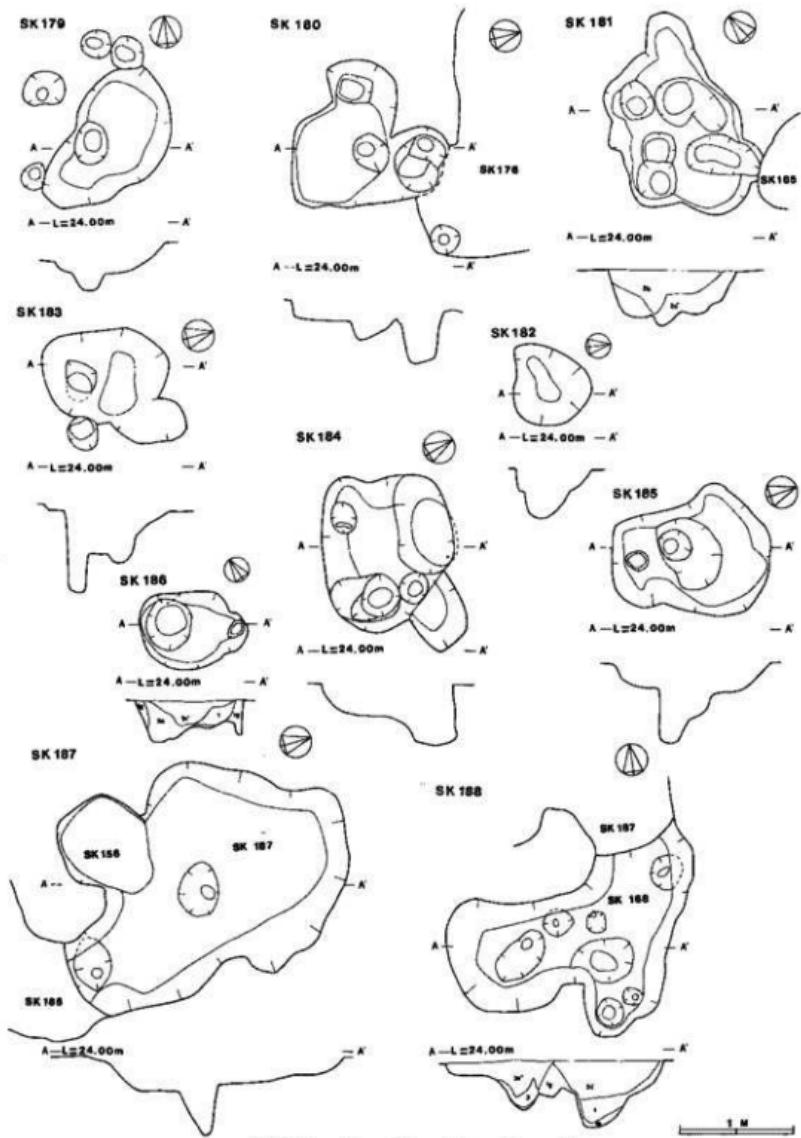


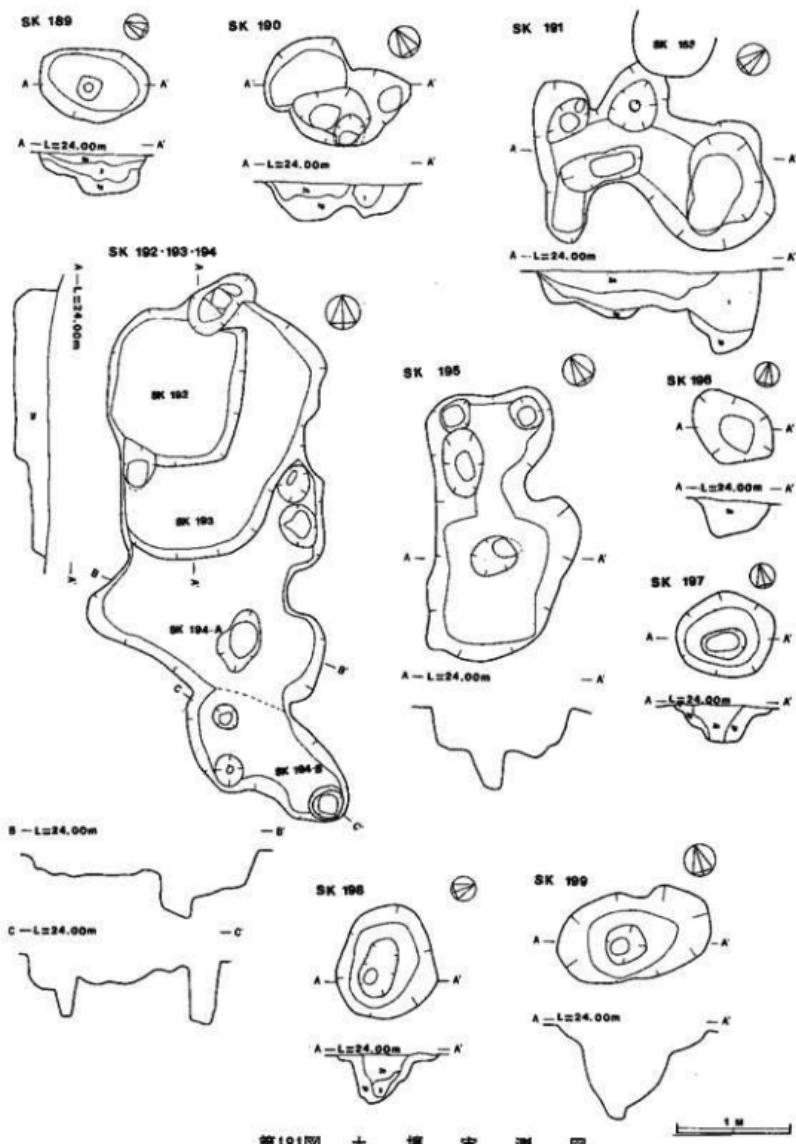
図178 土 壤 実 測 図



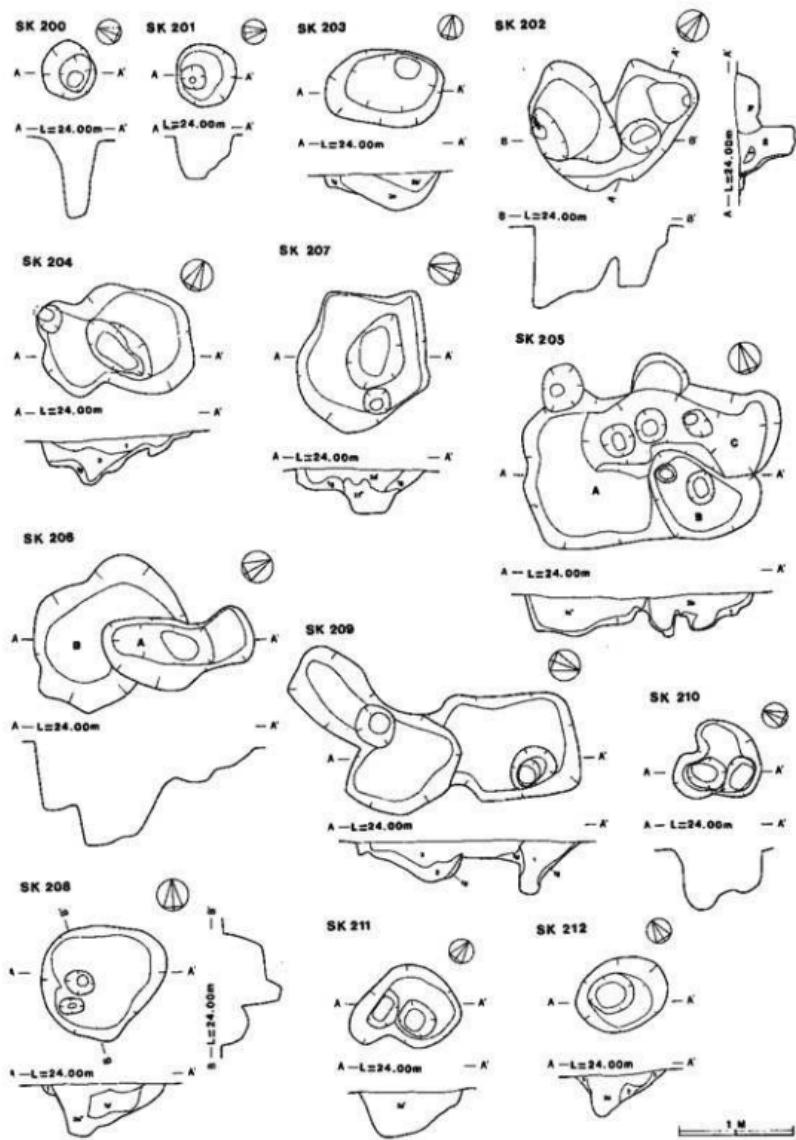
第179図 土 壤 実 準 図



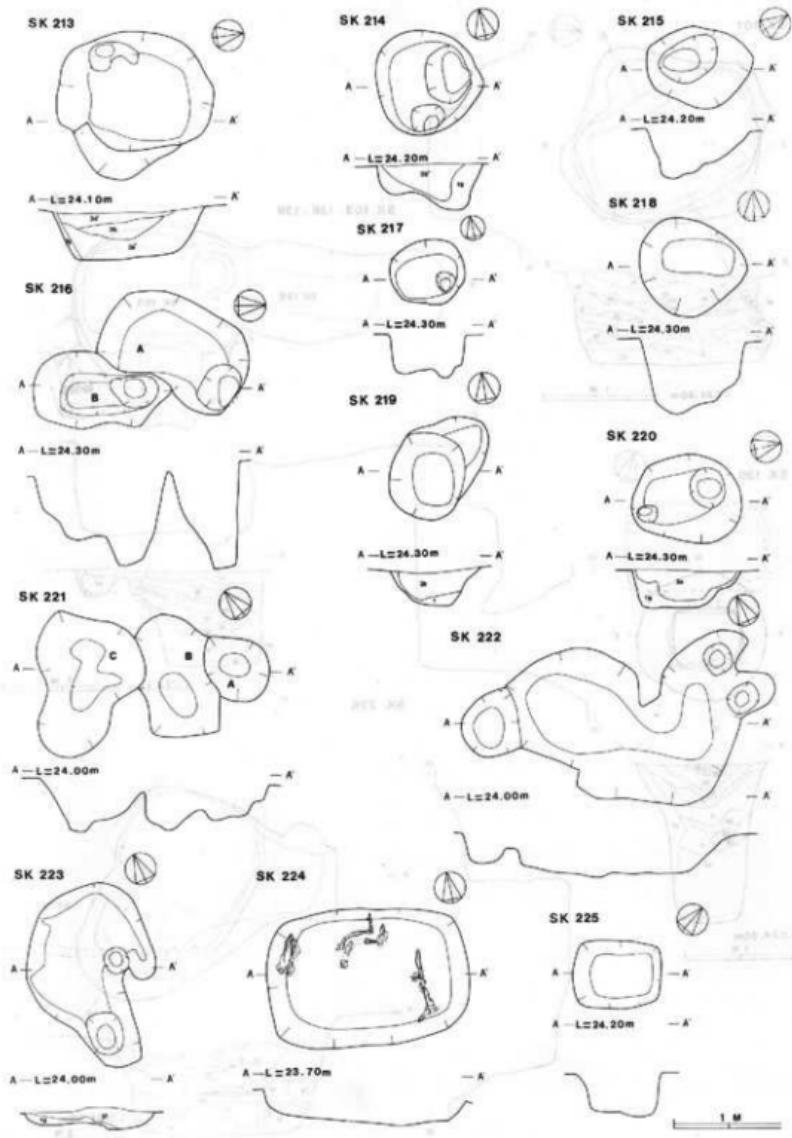
第180圖 土 壤 実 測 圖



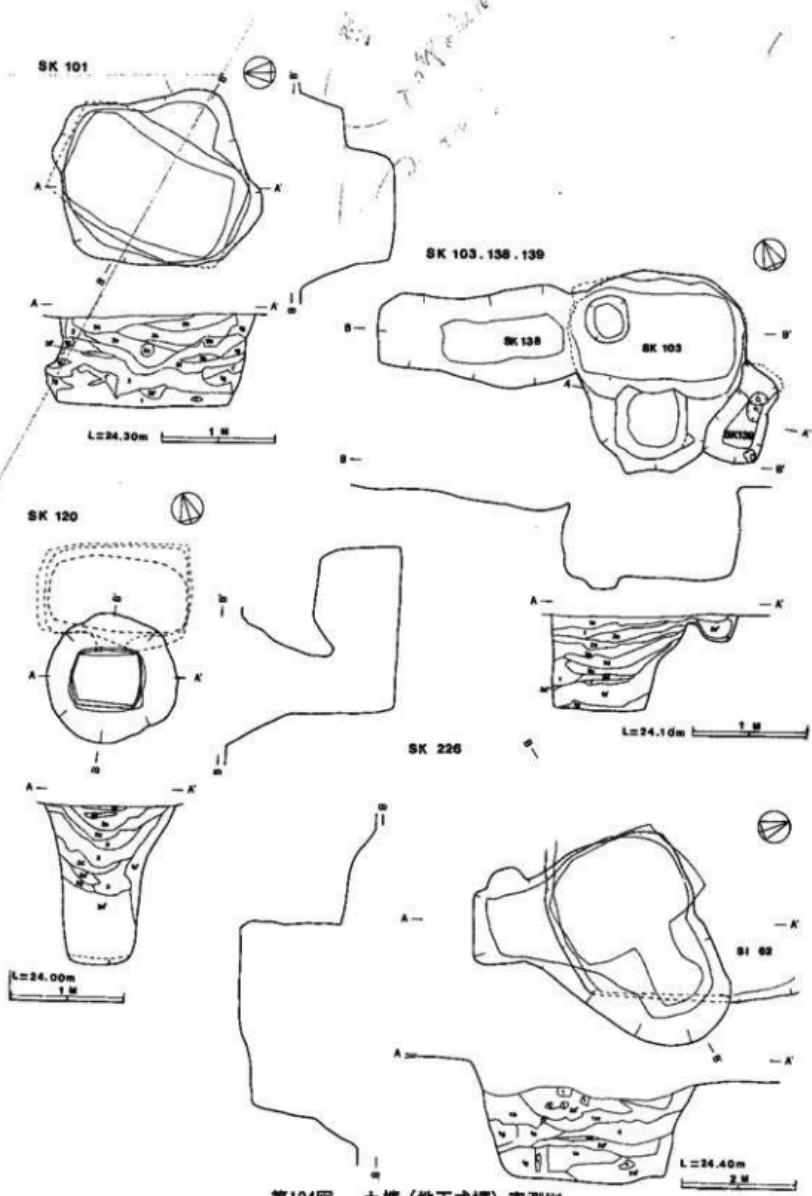
第181図 土 壤 実 測 図



第182図 土 壤 実 測 図



第183図 土 壤 実 測 図



第184図 土壌(地下式壙)実測図

第101号地下式壙（第184図）

本壙はD 8 i 9に確認され、第102号土壙の2m東側に位置する。主軸方向はN-58°-Wで、長軸3.7m・短軸3.5mの不整形の平面形を呈する。当初遺構確認面は暗褐色土色で、住居跡と考えられたが、その後の調査により、地下式壙であることが判明した。

東側の入口部と思われる底面は平坦で硬く、深さは遺構確認面より0.8mほどである。壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。

地下室は入口部より更に0.87mほど掘られ、底面は平坦で長軸3m・短軸1.6mの長方形を呈する。深さは遺構確認面より1.67mを測る。地下室内の壁は北東壁と南東壁の一部がオーバーハング状に掘られ、北西壁・南壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。

覆土は暗褐色土・黒褐色土・褐色土の層からなり、暗褐色土は更に5層、黒褐色土は4層、褐色土は3層に細分される。下層にはロームが多量検出され天井部が崩れ落ちたものと考えられる。

出土遺物は覆土上局部から砾石（第213図34・35）・灯明皿底部（第186図1）が出土している。その他には須恵器小片・土師器片・自然石が出土している。

第103号地下式壙（第184図）

本壙はC 8 i 6・C 8 j 6を中心に確認され、第138号土壙と北西側で重複し、第139号土壙と南東側が接している。主軸方向はN-27.5°-Eで、長軸3.5m・短軸3mの不整形の平面形を呈する。

南側の入口部と思われる底面は隅丸方形を呈し、南西側から北東側にごくゆるやかに傾斜し、硬い。入口部の壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。

地下室底面は入口部底面より0.8mほど低く、平坦で硬い。長軸2.9m・短軸1.5mの隅丸長方形を呈する。深さは遺構確認面より1.6mを測る。地下室の底面の北西側に長径42cm・短径38cm・深さ23.5cmの楕円形に皿状に掘られている。地下室の壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがるが、北西壁はオーバーハング状に掘られている。遺構確認面より1.2mの深さの北・東・西壁には横位の小穴を多数有する。

覆土は暗褐色土・褐色土・黒褐色土・黒色土層からなり、暗褐色土は更に5層、褐色土は7層、黒褐色土は4層に細分される。下層にはロームが多量検出され、天井部が崩れ落ちたと考えられる。

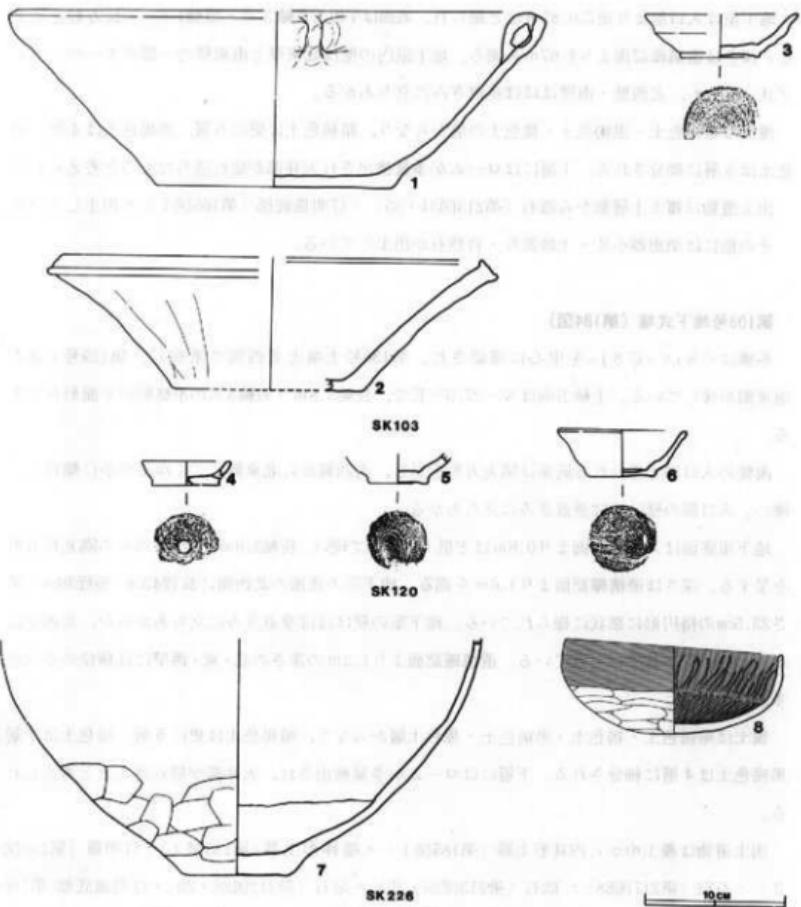
出土遺物は覆土中から内耳形土器（第185図1）・擂体形土器（第185図2）・灯明皿（第185図3）・石臼（第217図58）・砾石（第213図36・37）・敲石（第212図28・29）・灯明皿底部（第186図4）・弥生土器底部片（第186図3）・縄文土器口縁部（第186図2）が出土している。その他には綠釉陶器細片・自然石等が出土している。

第120号地下式壙（第184図）

〔図184〕 第120号地下式壙

本壙はC 8 j₇を中心確認され、第54号住居跡の南側を掘り込んでいる。規模は遺構確認面で直径2.3mの円形を呈する。当初井戸状遺構として調査したが、遺構確認面より1.7mの深さの所で北壁に横穴を検出し、地下式壙であることが判明した。

入口部と思われる底面は平坦で硬く、長軸1.2m・短軸0.8mの長方形の平面形を呈する。壁は一旦垂直に立ちあがり、その後外反する。入口部の覆土は黒褐色土・暗褐色土・褐色土・粘土層



第185図 土壙（地下式壙）出土遺物実測図

からなり、更に黒褐色土は7層、暗褐色土は2層に細分される。地下室入口は縦1.1m・横0.5mの長方形である。地下室底面は平坦で硬くしまり、長軸2.3m・短軸1.6mの隅丸長方形の平面形を呈する。遺構確認面より2.8mの深さを測る。地下室内の西・北壁はオーバーハング状に掘られ、東壁は垂直に立ちあがる。天井部は崩落せず残り、入口部から上方に掘り込まれている。天井部の南北断面は内凹している。天井部の高さは底面より1.5mほどである。地下室には黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積し、地下室底面は粘土層である。

出土遺物は地下室覆土中底面付近から灯明皿（第185図5・6）・砾石（第213図38）・覆土上層部から弥生土器底部片（第186図5）・土師器片が出土している。

第226号地下式壙（第184図）

本壙はE 9a6・E 9a7を中心に確認され、土壙の下から検出された第62号住居跡の南東部を掘り込んでいる。主軸方向はN-79° Eで、長軸4m・短軸2.6mの不整形の平面形を呈する。入口部の底面は隅丸方形を呈し、ほぼ平坦で硬い。入口部の壁は一旦ほぼ垂直ぎみに立ちあがり、その後外傾する。入口部の深さは遺構確認面より1.85mほどである。地下室の底面はほぼ平坦で硬く、長軸2.5m・短軸1.85mの長方形を呈し、遺構確認面より1.85mを測る。



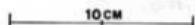
SK 101



SK 103



SK 120



第186図 土壙（地下式壙）出土遺物拓影図

覆土は黒色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土からなり、暗褐色土は2層、褐色土は6層に細分され、下層にロームが多量検出され、天井部が崩れ落ちたものと考えられる。

出土遺物は覆土上層から土師器の壺形土器の胴部片および底部（第185図7）・土師器の赤彩された壺形土器（第185図8）が出土している。

その他には土師器片・内耳形土器片・自然石等が出土している。

4 土 堆（第187図）

本土壘はD 9・E 9区を中心に確認され、調査区の南側に位置する。形状は北東側からL字状を呈し、さらに樹形状になり、続いて南西側にL字状を形づくる。北東側のL字状部は東西の長さ約10m・下幅約8m・上幅1.3mである。樹形部の東西の長さ4m・下幅6m・上幅1.8m、南北の長さ8m・下幅4m・上幅1.8mである。南西部のL字状部は調査区外に続く。土壘高は北東側のL字状部で1.5m・樹形部では1mを測る。

トレンチ発掘の結果、土壘の盛土は柔らかでしまりがなく、東側の土を盛りあげたものと思われる。Aトレンチ部では土壘東側は土壘西側と比べると約1m、土壘上部と比べると1.1~1.3mほど低いレベルである。また土壘の東側は、遺構確認面より表土上面までの厚さは20~40cmほどである。Bトレンチ部では土壘東側は土壘西側と比べると0.8m・土壘上部と比べると1.6mほど低いレベルである。しかも土壘の東側は遺構確認面から表土上面までの厚さは20~50cmである。以上のことから、土壘の東側は土壘を構築するため土をとられて窪地になっていると思われる。Aトレンチ部は旧表土上に暗褐色土・黒褐色土が盛られ、表土下15cmに浅黄色の粘土が長さ4m・厚さ15cmほど貼られている。その貼られている粘土は樹形状土壘の東側に隣接する井戸状遺構の粘土と思われる。Bトレンチ部は旧表土上に黒褐色土・褐色土・暗褐色土等が盛土されている。Eトレンチ部は旧表土上に微妙な違いのある暗褐色土・褐色土が盛土されている。

出土遺物（第189図）1~4はBトレンチの盛土中より土師器・陶器が少量出土している。

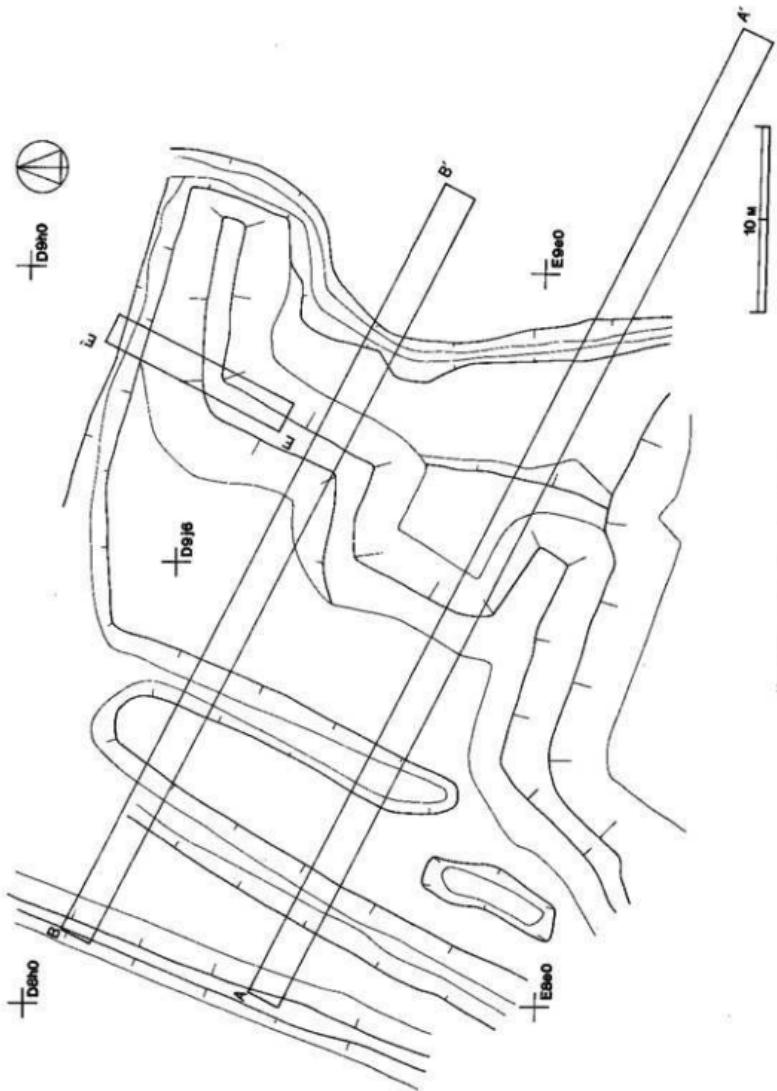
1は土師器の壺形土器で、現高23.5cm・底径6.7cm・ほぼ完形であるが口縁部は欠損している。口縁部は頸部より鋭く「く」の字に外傾する。胴部はやや扁平な球形を呈し、最大径は胴部下位にある。底部は平底である。胴部外面は箇削り後箇磨き、内面は箇などで、底部は箇削りがみられる。色調は橙色を呈し、胎土は砂粒を含み、焼成はやや不良である。

2は口縁部が欠損している陶器である。胴部はやや扁平な球形を呈し、底部には糸切り痕がみられる。

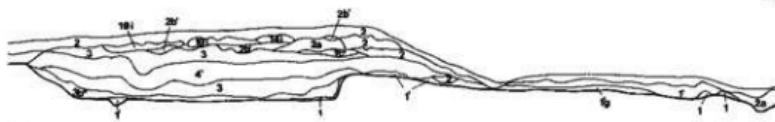
4は手捏ね土器で、現存部分ほどである。

（第189図）5~7はEトレンチ部の盛土中より出土した陶器・擂鉢である。

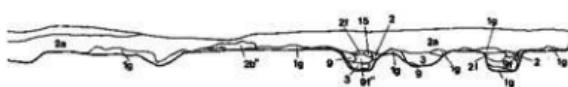
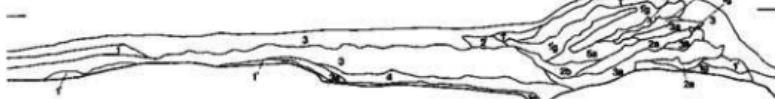
第187図 土壌実測図



$$A-L=25.70m$$

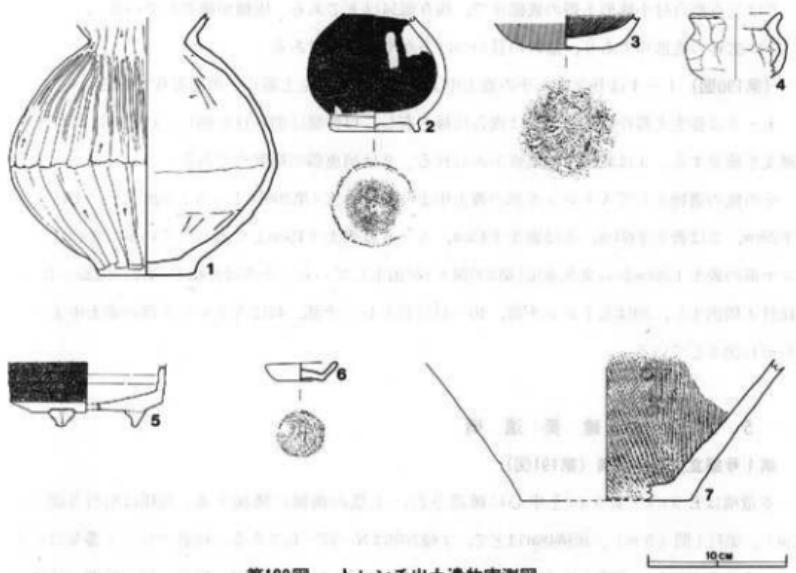


8-1-25 30m

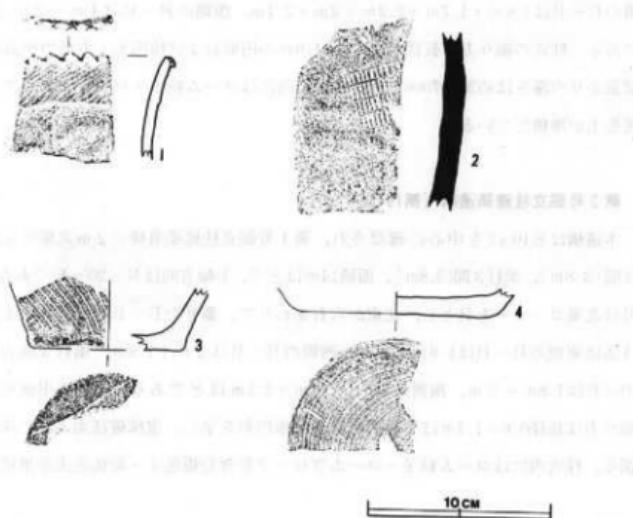


4 M

第188図 土壌断面実測図



第189図 トレンチ出土遺物実測図



第190図 B トレンチ出土遺物拓影図

5は三点高台付小鉢形土器の底部片で、現存部約1/3である。灰釉が施されている。

7は擂鉢の底部片であり、擂鉢の目のつけ方がやや粗雑である。

(第190図) 1～4はBトレンチの盛土中より出土した弥生土器片・須恵器片である。

1・3は弥生土器片である。1は複合口縁を有し、口唇部は刻み目を施し、口辺部には付加条縄文を施す。3は底部で木葉痕がみられる。2は須恵器の胴部片である。

その他の遺物としてAトレンチ部の覆土中より寛永通宝(第209図1～5)が出土し、1は表土下29cm、2は表土下60cm、3は表土下45cm、4・5は表土下15cmより出土している。またEトレンチ部の表土下20cmから文久永宝(第209図6)が出土している。そのほか砾石(第213図39～42)が総計4個出土し、39はEトレンチ部、40・41はBトレンチ部、42はAトレンチ部の盛土中よりそれぞれ出土している。

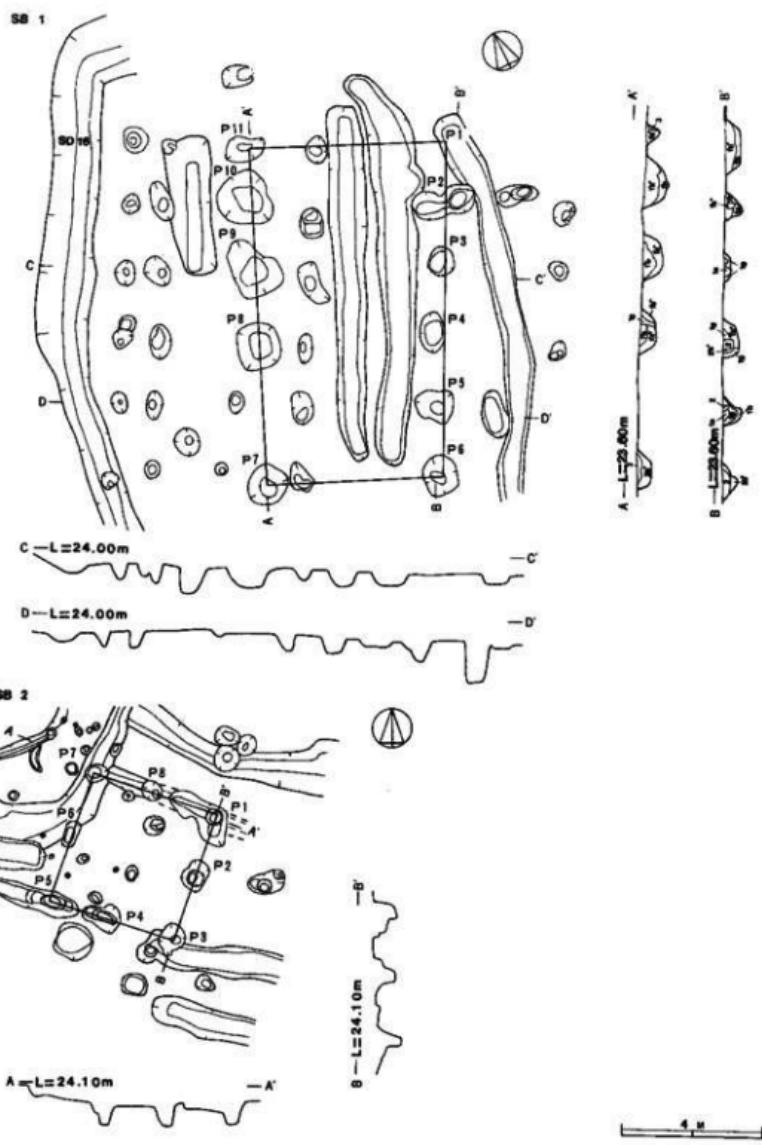
5 据立柱建築遺構

第1号据立柱建築遺構(第191図)

本遺構はE9c9・E9d9を中心に確認され、上屋の南側に隣接する。規模は桁行5間(9.5m)、梁行1間(5m)、面積48m²ほどで、主軸方向はN-27°Eである。柱痕のビット番号は北東コーナーをRとし、北東から右まわりで、番号をR₁～R₁₁まで仮称する。桁行5間の柱間寸法は東側のR₁～R₂は1.5m+1.7m+2.2m+2m+2.1m、西側のR₁～R₂は4m+2m+2m+1.5mほどである。柱穴の掘り方は長径が約0.8～1.6mの円形および橢円形・方形の平面形を呈し、遺構確認面よりの深さは約20～70cmを測る。柱穴内にはローム粒子・ロームブロックを含む褐色土・暗褐色土が堆積している。

第2号据立柱建築遺構(第191図)

本遺構はE10a1を中心に確認され、第1号据立柱建築遺構の2m北側に位置し、規模は桁行3間(3.8m)、梁行3間(3.8m)、面積14m²ほどで、主軸方向はN-20°Eである。柱痕のビット番号は北東コーナーをRとし、北東から右まわりで、番号をR₁～R₁₁まで仮称する。桁行3間の柱間寸法は東側のR₁～R₂は1.8m+2m、西側のR₁～R₂は2m+1.8m、梁行3間の柱間寸法は北側のR₁～R₂は1.8m+2m、南側のR₁～R₂は2m+2.1mほどである。方形の平面形を呈する。柱穴内にはローム粒子・ロームブロックを含む褐色土・暗褐色土が堆積している。



第191図 第1・2号柱立柱建築構造実測図

6 溝

第1号溝（第192図）

本溝はD12・E12区を中心に確認され、東部北側に位置する。第1号溝の始まりはE12e7であり、ほぼ8m北に進みE12d7で約13m東側へのび、E12d9ではば直角に北方に曲がり、第14号住居跡を掘り込んでいる。更にゆるやかに西に向かい、第6・8号住居跡を掘り込み、西方に向かい、第38号住居跡付近で北に曲がり6mほど北にのびる。確認された第1号溝の現長は約95mほど、上幅は50~150cmほどで、遺構確認面から深さは西側で26~30cm、東側で20cm、中央部で14~16cmほどである。底面のレベルは西側のA-A'で23.8m・中央D-D'で24.2m、東側G-G'で24.3mを測る。西側と東側の比高は60cmである。溝の始まりからだいにゆるやかな傾斜を示している。壁はゆるやかに立ちあがるが、C-C'は片葉研状を呈する。覆土は全体的に褐色土を主に堆積し、自然堆積の状態を示す。

出土遺物は覆土中より土師器片・瀬戸物片・擂鉢小片が出土している。

第2号溝（第193図）

本溝はF12区を中心に確認され、第3・5号溝とはば並行に並び、かつ北東から南北方向にのびる。北東側は第3号溝から分かれ、F12b8付近で第16号住居跡を掘り込み、E12c6付近で第21号土壙に掘り込まれ第5号溝と合流する。現長は約35mほど、上幅は40~100cmを測り、遺構確認面からの深さは30~40cmを測る。底面レベルは第5号溝と分岐点付近で24.2m、第3号溝合流点付近で23.9mを測り、南西側と北東側の比高は30cmであり、南西側からごくゆるやかに北東側に傾斜している。壁はゆるやかに立ちあがる。覆土は黒褐色土が主に堆積している。

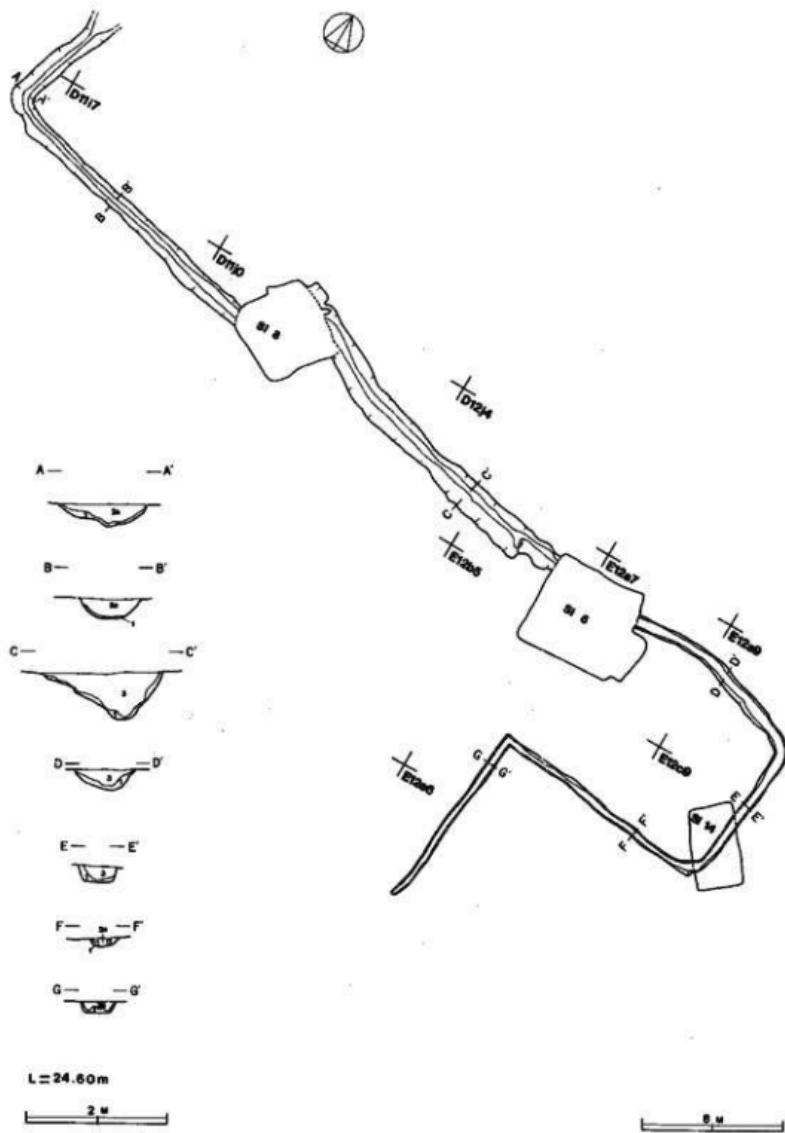
出土遺物は覆土中より繩文土器片（第201図2）・弥生土器片（第201図1）が出土している。

その他には土師器片・須恵器・弥生土器小片が出土している。

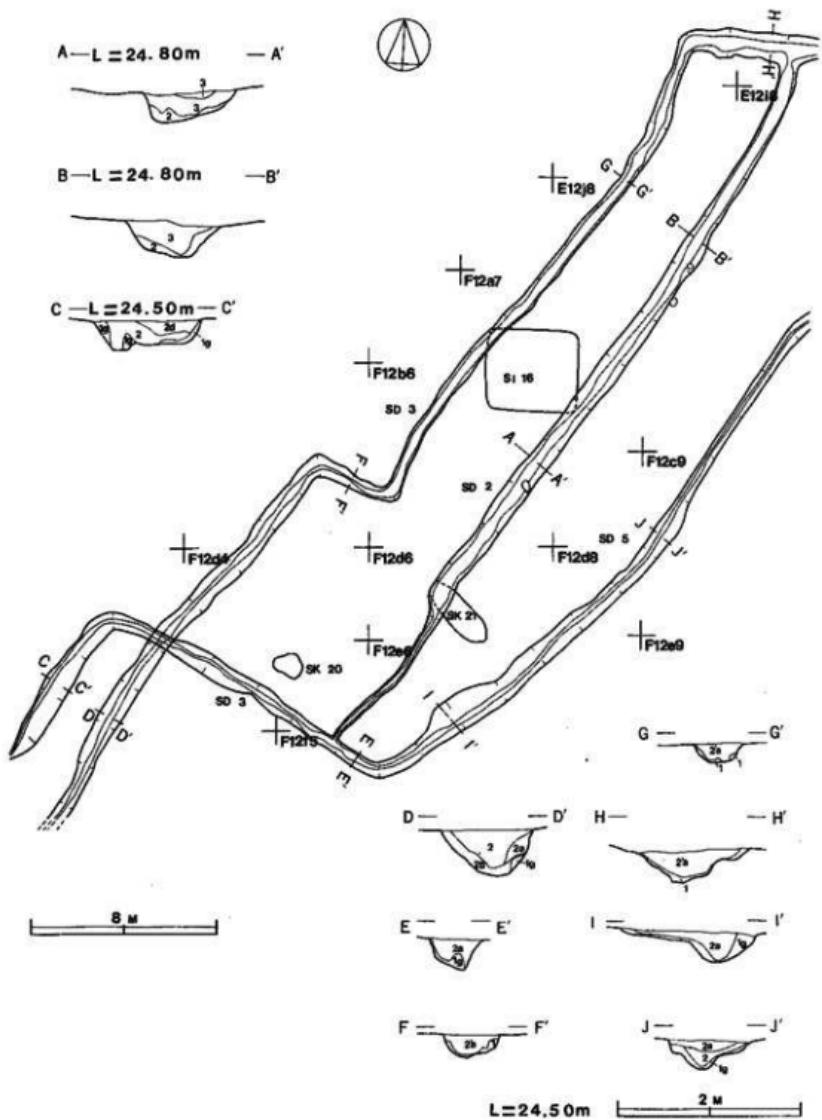
第3号溝（第193図）

本溝はF12区を中心に確認され、第2号溝と並行に並ぶが、F12a7付近の第16号住居跡を掘り込み、第19号住居跡付近で、L字状に曲折する。更にF12d3付近で第5号溝を横切り、第2号溝と合流する。現長は約50m、上幅は50~90cmほどで、遺構確認面からの深さは20~50cmほどである。底面レベルはD-D'で23.85m、G-G'で24.18mほどである。北東側と南西側の比高は33cmであり、北東側から南西側にゆるやかに傾斜している。壁はゆるやかに立ちあがる。覆土は暗褐色土が主であり、自然堆積の状態を示している。

出土遺物は覆土中より土師器片・瀬戸物小片・擂鉢小片が出土している。



第192図 第1号溝実測図



第193図 第2・3・5号溝実測図

第4号溝（第194図）

本溝はF12区を中心に確認され、第5号溝の南東側、調査区南東端縁辺部に位置し、北東から南西方向にのびる。現長は約25m、上幅は200~250cm、深さは24~44cmほどである。第2・3・5号溝の幅と比べると広い。南西側のレベルは23.9m、北東側のレベルは23.85mで、ほぼ平坦である。壁はごくゆるやかに立ちあがる。覆土は自然堆積の状態を示し褐色土が主に堆積している。

出土遺物は覆土中より繩文土器片（第201図3・4）、土師器・内耳土器片が出土している。

第5号溝（第193図）

本溝はF12区を中心に確認され、溝の始まりはF12 f4で、北東に7mほど向かい、南東に曲折し、その地点から2m南東に向き、第3号溝に横切られ、更に約11m南東に向かう。F12 d8付近で更に北東に曲折し、約28m向かう。現長約50m・上幅50~150cm、遺物確認面よりの深さは35~45cmほどである。底面レベルは第20号土壙付近で24.1m、北東側で23.9m、比高は20cmでごくゆるやかに傾斜している。壁はゆるやかに立ちあがり、覆土は暗褐色土・褐色土が堆積している。

出土遺物は覆土中より土師器片が少量出土している。

第6号溝（第195図）

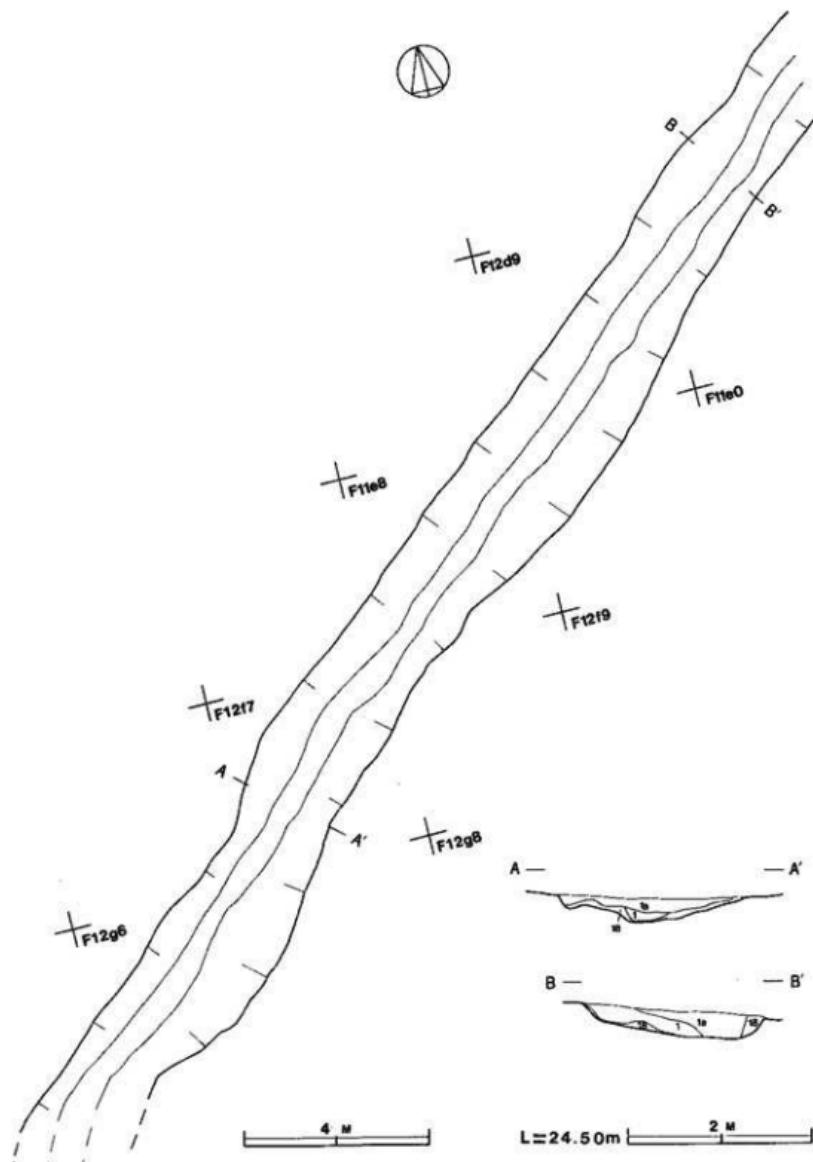
本溝はF12区を中心に確認され、調査区南端縁辺部に位置する。溝の始まりはF11 e9であり、ほぼ北西に約29m向かい、そこから更にはば西に20m向かい、2条に分かれれる。1条は西進し、調査区外へとのびる。1条は6mほど北上し、更に曲折して西に向かう。現長約65mほどで、上幅150~300cmを測り、遺構確認面よりの深さはA-A'で30cm、C-C'で160cmほどである。底面レベルはC-C'で22.6m、A-A'で23.65mで比高は100cmでやや急に傾斜している。C-C'付近の壁は片葉研状である。B-B'付近ではU字状である。覆土は暗褐色土が主に堆積している。

出土遺物は覆土上層より器台形土器（第200図2）が出土した。そのほかでは土師器片・内耳形土器小片が出土している。

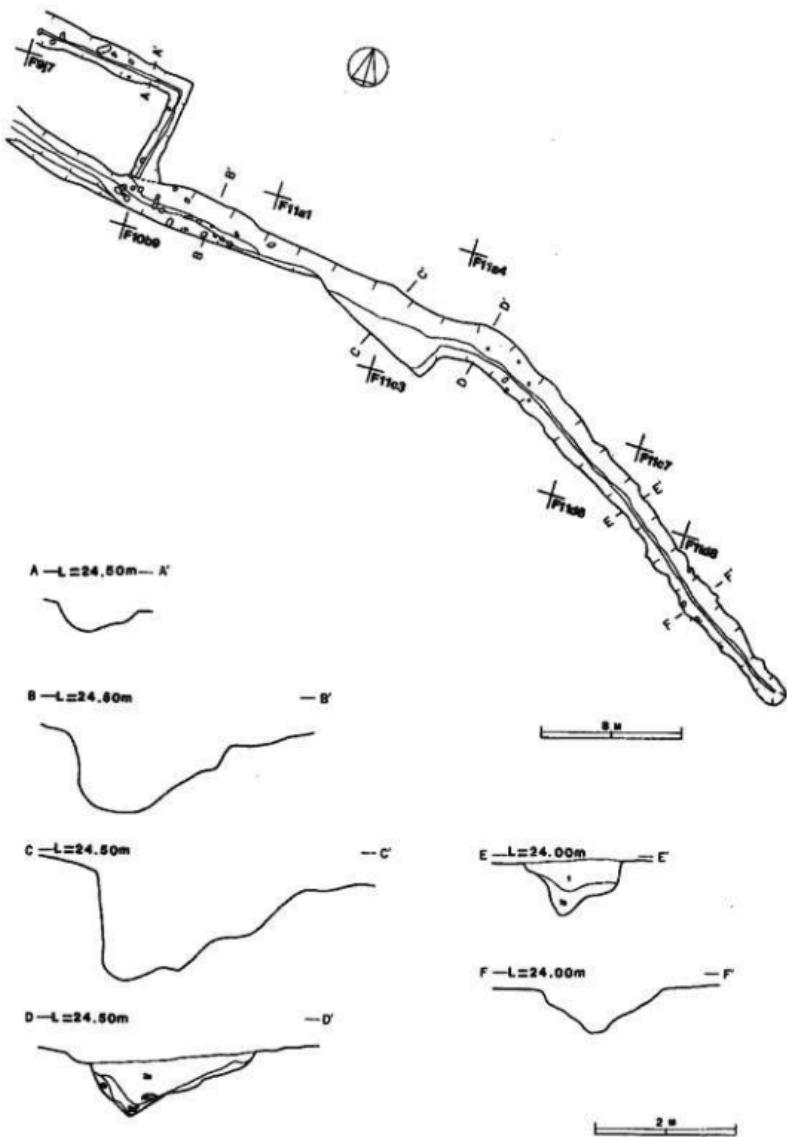
第7号溝（第196図）

本溝はE8区を中心に確認され、調査区西部南側に位置する。溝の始まりはE8 c1で、1mほど北東に向き、その地点から更に約9mほど南東に向かう。現長は10mほど、上幅は100~150cmほどで、遺構確認面より深さ約15cmを測る。底面レベルはA-A'で24m、第41号土壙付近で24mと平坦である。底面にピットが多数存在する。壁はゆるやかに立ちあがり、覆土は暗褐色土・褐色土が自然堆積の状態を示している。

出土遺物は覆土中より須恵器小片・瀬戸物小片が少量出土している。



第194図 第4号溝実測図



第195図 第6号測定図

第8号溝（第197図）

本溝はD 8区を中心に確認され、調査区西部を約20mほど東に向かい、第73号土壌付近で曲折し、約10m南に向かい調査区外へとのびる。

現長は約30m、上幅は80~100cmほどで、遺構確認面より深さ30~40cmを測る。底面レベルはA-A'で23.8m、D-D'で23.8mでレベル差はない。第8号溝と第72~74・80・86・87号土壌が重複している。溝の掘り方は薙研堀状で、覆土は暗褐色土が主に堆積している。

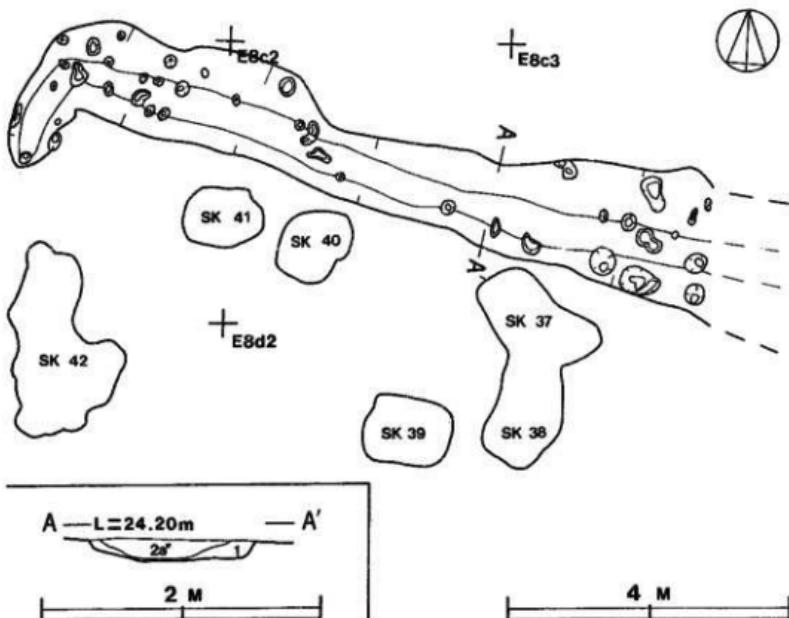
出土遺物は覆土中より縄文土器口縁部（第201図5）・土師器小片が少量出土している。

第9号溝（第198図）

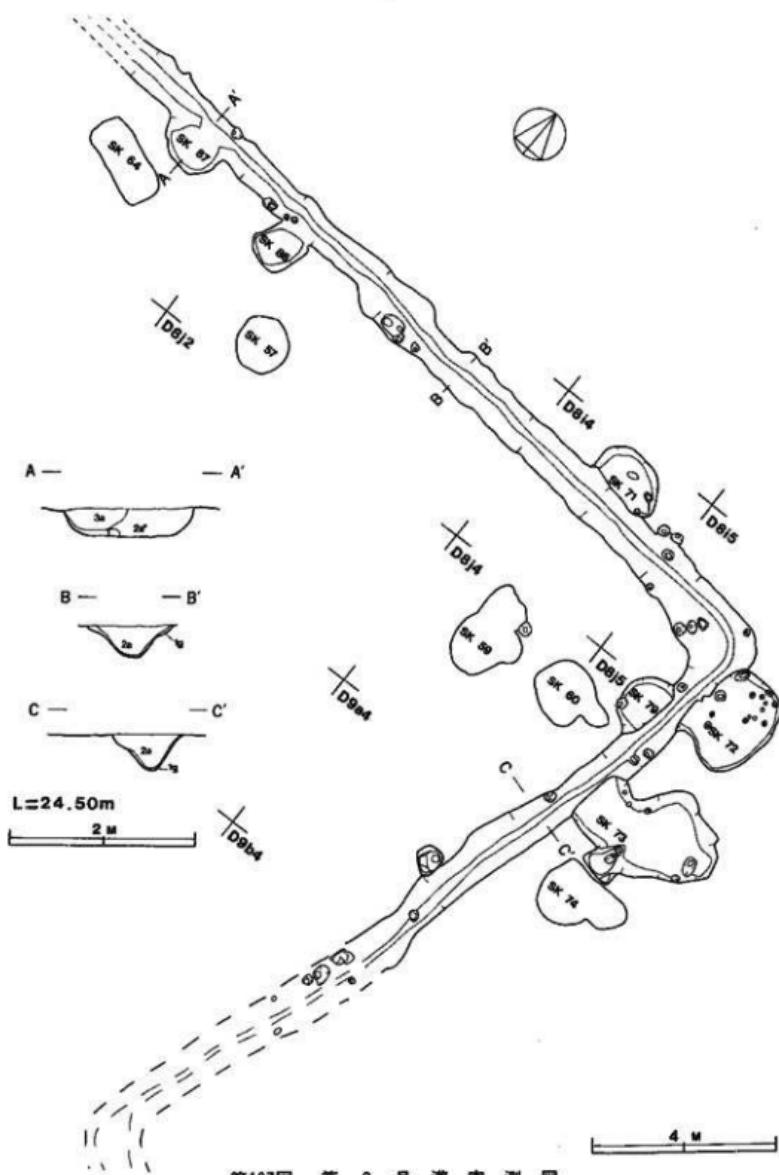
本溝はD 9・E 9区に確認され、土壁の西側約16mほどに位置する。溝はD 9 h3より始まり、第58号住居跡を掘り込み、南南西に向かい調査区外へのびる。

現長は25m、上幅は120~150cmほどで、遺構確認面より深さ60cmほどである。底面レベルはD-D'で23.4mである。断面はU字状を呈し、覆土は黒褐色土・暗褐色土が堆積している。

出土遺物は覆土中より土師器片・須恵器片・自然石が少量出土している。



第196図 第7号溝実測図



第10号溝（第198図）

本溝はD 8・D 9区を中心に確認され、調査区西部をほぼ西向きにのびる。溝はD 9-hzより始まり、D 8-g6に位置する第64号住居跡を掘り込み西側に向かい、調査区外にのびる。

現長は45m、上幅は50~120cmほどで、遺構確認面より深さ20~30cmほどである。底面レベルは西側のA-A'で23.75m、C-C'で23.9mで、西側に非常にゆるやかに傾斜している。

出土遺物は覆土中より第64号住居跡の東側4mに弥生土器が出土している。

その他の遺物は土師器片・内耳形土器片が出土している。

第11号溝（第198図）

本溝はD 8区を中心に確認され、第10号溝と並行に並び、ほぼ西向きにのびる。溝はD 9-g3の第57号住居跡を擾乱して始まり、D 8-e5に位置する第64号住居跡を掘り込んで西に向かい、調査区外にのびる。

現長は47m、上幅は100~300cmほどで、D 8-e5付近は幅約7mと広くなっている。遺構確認面の深さは28~40cmである。底面レベルはA-A'で23.4m、C-C'で23.75mで、比高は35cmほどで西側に傾斜している。底面は第225号土壤やその他の土壤に擾乱を受けて凹凸が著しい。壁はごくゆるやかに立ちあがる。覆土は黒褐色土が主に堆積し、自然堆積の状態を示している。

出土遺物は覆土中より黄瀬戸の小型皿の底部片と思われるもの（第201図6）が出土した。底径は4cmほどで、糸切り痕が窺える。その他に土師器片・内耳形土器片が出土している。

第12号溝（第198図）

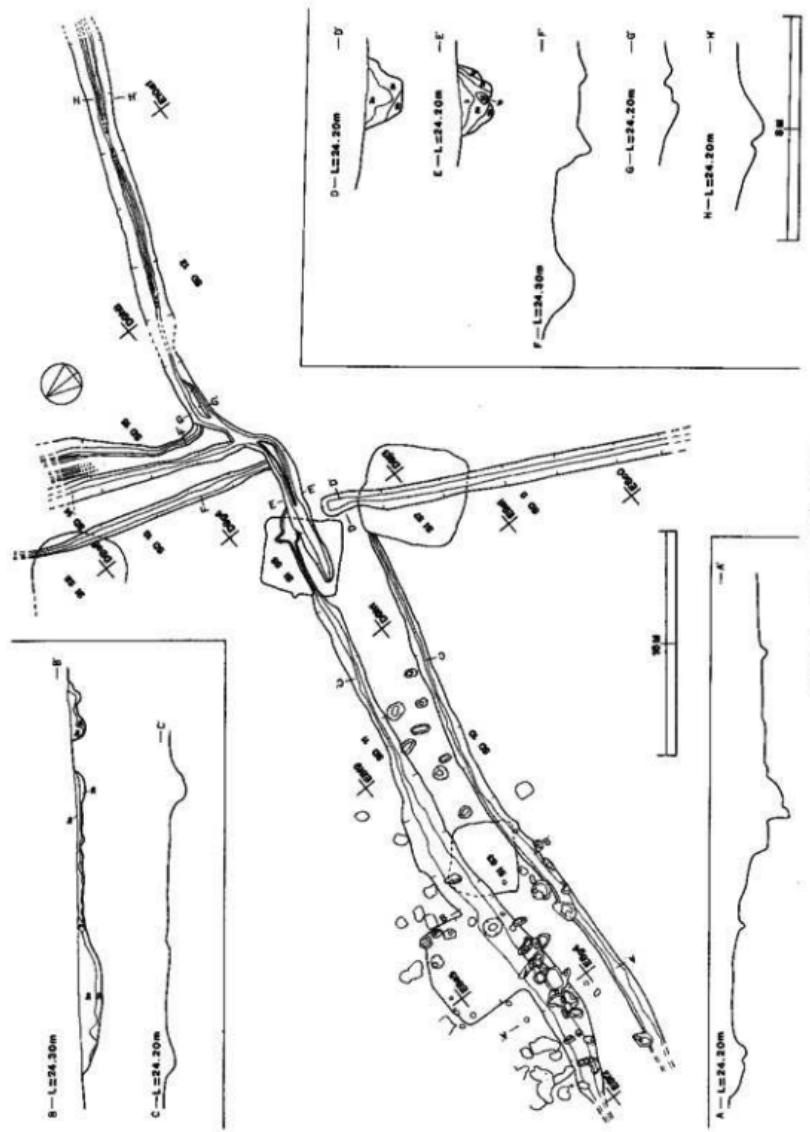
本溝はD 9区に確認され、土塁北側部に位置する。溝はD 8-g6に位置する第57号住居跡の床面から始まり東へ向かい、D 9-h5付近で第13・14・15号溝と交わり、更に東南東に向かう。

現長は約45m、上幅は130~200cmほどで、深さは遺構確認面より30cmほどである。底面レベルはE-E'で23.0m、H-H'で23.24m、比高は24cmほどである。溝は土塁西側より東側に傾斜している。底面は土塁の北側でW字状を呈し、壁はゆるやかに立ちあがる。

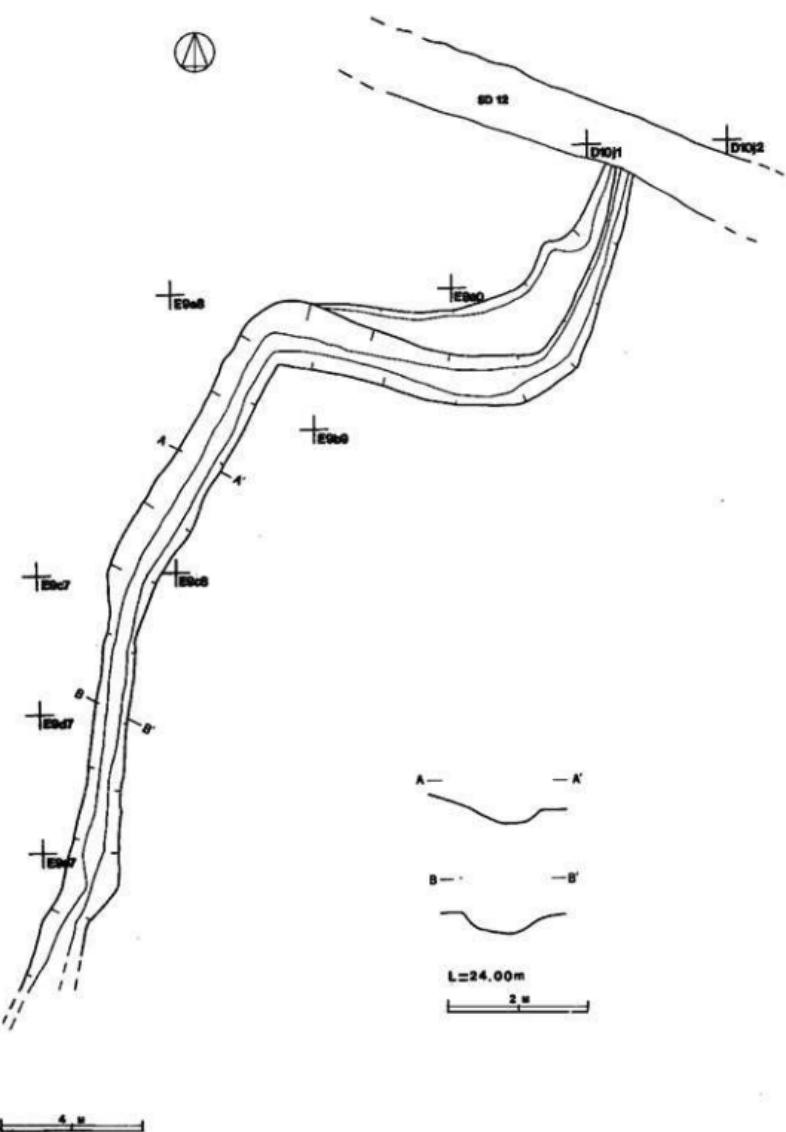
第13号溝（第198図）

本溝はD 9区に確認され、D 9-h5付近で第12号溝と直交し、北北東向きである。第59号住居跡の東側床面を掘り込んでいる。

現長約18m、上幅は60~100cmほどで、遺構確認面よりの深さは約50cmである。底面レベルはF-F'で23.7mを測り、それほど比高差はない。壁はゆるやかに立ちあがり、覆土は暗褐色土が主に堆積している。



第196圖 第9~15号溝測圖



第199図 第16号溝実測図

第14号溝（第198図）

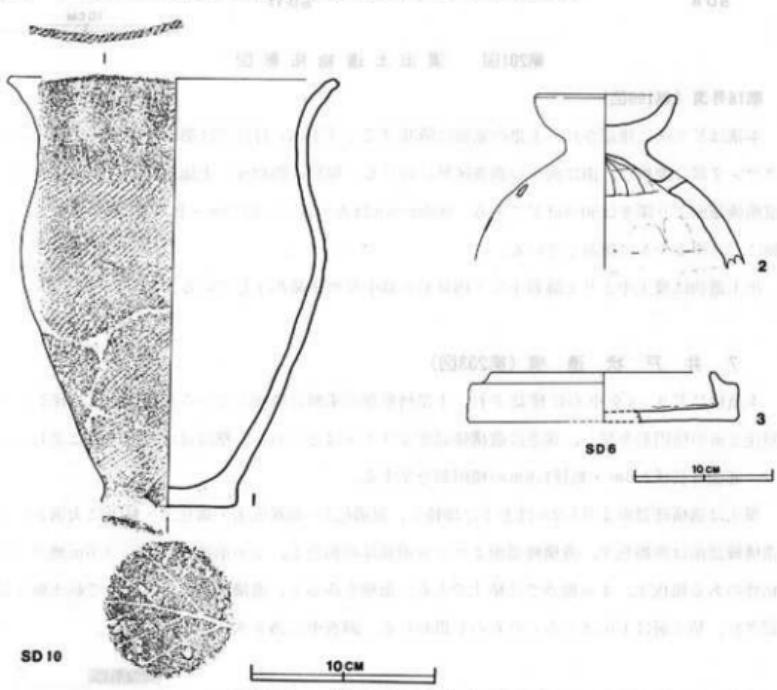
本溝はD 9区に確認され、第13号溝とはほぼ並行に位置している。D 9 hs付近では第12号溝と直交し、北北東向きである。

現長は約13m、上幅は80~150cmで、遺構確認面よりの深さは40cmほどである。底面レベルはF-F'で23.4mを測り、それほど比高差はない。掘り方はU字状を呈す。

第15号溝（第198図）

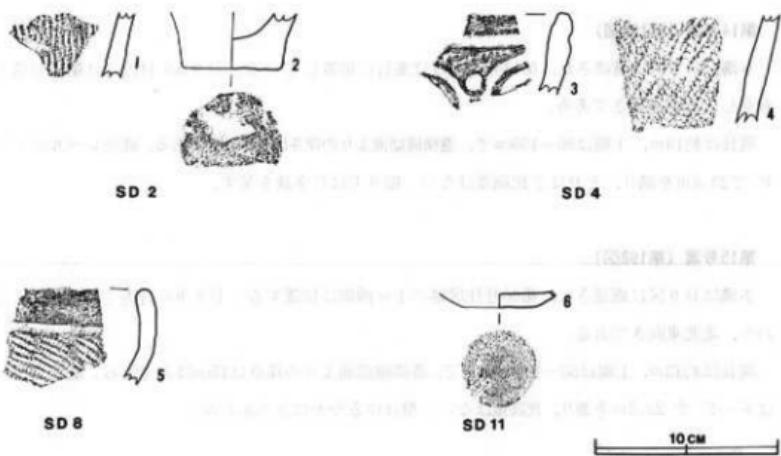
本溝はD 9区に確認され、第60号住居跡の1m西側に位置する。D 9 hs付近で第12号溝と交わり、北北東向きである。

現長は約13m、上幅は50~100cmほどで、遺構確認面よりの深さは15cmほどである。底面レベルはF-F'で23.5mを測り、比高差はない。壁はゆるやかに立ちあがる。



第200図 溝出土遺物実測図 (14号・15号溝) 考古出土物実測図 (14号・15号溝)

（出典：『奈良県立橿原考古学研究所叢書』第10集「奈良の歴史」）



第201図 溝出土遺物拓影図

第16号溝（第199図）

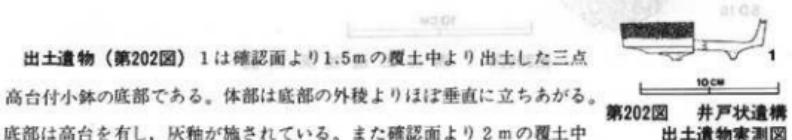
本溝はE 9区に確認され、土壌の東側に隣接する。F 10 a1付近では第65号住居跡を掘り込み、クランク状に曲折し、南に向かい調査区外にのびる。現長は約32m、上幅は100~150cmほどで、遺構確認面より深さは30cmほどである。底面レベルはA-A'で23.2m・B-B'で23.4mで、南側にごくゆるやかに傾斜している。

出土遺物は覆土中より土師器小片・内耳形土器小片が少量出土している。

7 井戸状遺構（第203図）

本遺構はE 9 c6を中心確認され、土壌樹形部の東側に隣接している。平面形は長径3.6m・短径3mの楕円形を呈し、深さは遺構確認面より4mほどである。壁はほぼ垂直ぎみに立ちあがる。底面は長径2.6m・短径1.6mの楕円形を呈する。

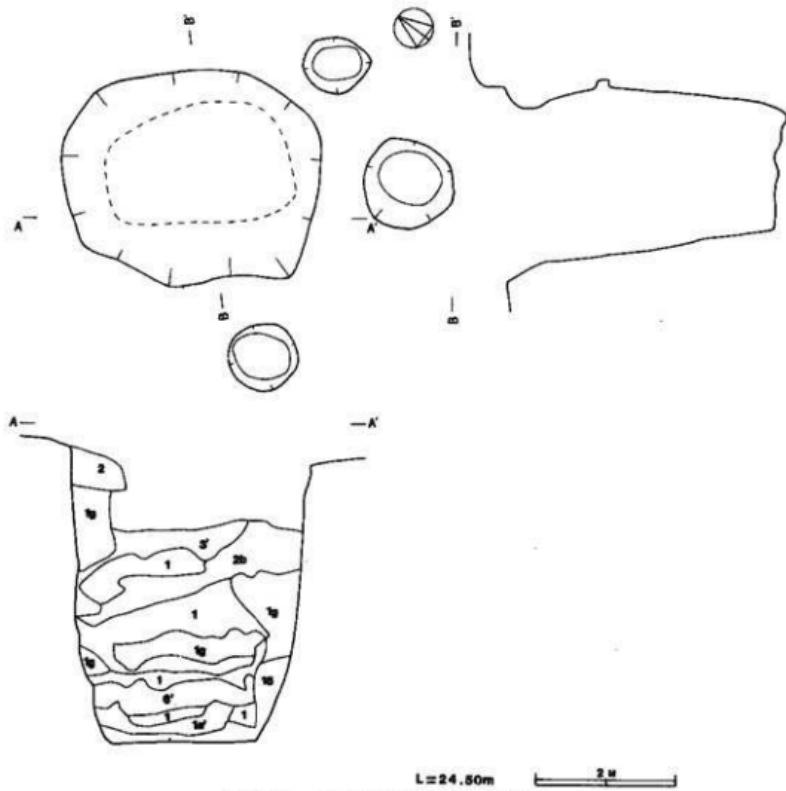
覆土は遺構確認面より1.2mほど下に堆積し、黒褐色土・暗褐色土・褐色土・粘土に大別される。遺構確認面は黒褐色土、遺構確認面より2m前後は暗褐色土、3m前後は褐色土。3.6m地点では粘性のある褐色土、4m地点では粘土である。南壁をみると、遺構確認面より3mで粘土層が確認され、粘土層は1mほどあったものと思われる。調査中に湧き水は全くなかった。



出土遺物（第202図）1は確認面より1.5mの覆土中より出土した三点

高台付小鉢の底部である。体部は底部の外縁よりほぼ垂直に立ちあがる。

第202図 井戸状遺構
出土遺物実測図



第203図 井戸状造構実測図

より砾石（第213図43）が出土している。

その他の遺物としては鉢形土器小片・内耳形土器小片が出土している。

8. 土製品・石製品

土製品（第205・206・207図）

図番号	種	原	出土地	長	幅	高	色	病	土	焼成	参考	図番号	種	類	出土地	長	幅	高	色	病	土	焼成	参考
1	便所土盤	S 13	-	-	-	にじみ 有	砂	粒	良	第206番 30	便所土盤	S 117	2.1	2.2	9.0	明	赤	砂	粒	良	完形		
2	便所土盤	S 17	-	-	-	にじみ 有	砂	粒	良	# 31	便所土盤	S 117	2.0	2.0	8.0	にじみ 有	砂	粒	良	完形			
3	便所土盤	S 141	-	4.4	-	にじみ 有	砂	粒	良	# 32	便所土盤	S 118	2.2	2.2	10.0	暗	砂	粒	良	完形			
4	土製円板	S 13	[厚さ 0.6]	(3.6)	-	信	砂	粒	良	# 33	便所土盤	S 118	2.9	2.7	17.0	灰	灰	砂	粒	骨溝	完形		
5	土製円板	S 19	[厚さ 1.6]	(5.0)	-	信	砂	粒	良	# 34	便所土盤	S 121	3.0	3.2	26.5	黑	砂	粒	良	完形			
6	便所車	S 120	[厚さ 2.0]	(5.3)	-	信	砂	粒	良	# 35	便所土盤	S 122	2.7	3.1	24.5	にじみ 有	砂	粒	良	完形			
7	便所車	S 123	[厚さ 2.0]	4.6	-	にじみ 有	砂	粒	良	# 36	便所土盤	S 126	2.9	3.1	26.5	黑	砂	粒	良	完形			
8	便所車	S 131	[厚さ 2.0]	5.3	-	信	砂	粒	良	# 37	便所土盤	S 126	3.2	3.1	27.5	明赤褐	砂	粒	良	完形			
9	便所車	S 136	[厚さ 3.5]	3.6	3.6	明赤褐	砂	粒	良	# 38	便所土盤	S 127	3.2	3.0	25.5	明赤褐	砂	粒	良	完形			
10	便所車	S 149	[厚さ 1.9]	4.9	4.9	褐	砂	粒	良	# 39	便所土盤	S 127	3.1	3.7	38.0	明赤褐	砂	粒	良	完形			
11	便所車	S 151	[厚さ 2.0]	4.4	-	にじみ 有	砂	粒	良	# 40	便所土盤	S 127	3.1	3.3	33.0	赤	砂	粒	良	完形			
12	便所車	S 142	[厚さ 1.4]	5.1	-	信	砂	粒	良	# 41	便所土盤	S 129	3.1	3.3	34.5	にじみ 有	砂	粒	良	完形			
13	便所車	S 159	[厚さ 2.6]	6.2	-	にじみ 有	砂	粒	良	# 42	便所土盤	S 127	3.1	3.6	35.0	暗	砂	粒	良	完形			
14	便所車	S 158	[厚さ 1.7]	4.7	27.0	にじみ 有	砂	粒	黄	第207番 43	便所土盤	S 131	3.1	3.4	32.5	にじみ 有	砂	粒	良	完形			
15	便所車	S 162	[厚さ 1.5]	5.6	42.5	灰	砂	粒	良	# 44	便所土盤	S 131	3.2	3.2	28.0	にじみ 有	砂	粒	普通	完形			
16	便所土盤	S 13	2.5	3.0	20.0	信	砂	粒	普通	# 45	便所土盤	S 131	-	-	-	明赤褐	スクリア パラス	砂	粒	良	完形		
17	便所土盤	S 17	1.4	1.5	3.0	にじみ 有	砂	粒	良好	# 46	便所土盤	S 131	3.0	3.4	30.5	にじみ 有	砂	粒	良	完形			
18	便所土盤	S 18	3.3	3.8	38.5	にじみ 有	砂	粒	良好	# 47	便所土盤	S 132	3.1	3.5	33.5	灰青褐	砂	粒	普通	完形			
19	便所土盤	S 113	4.1	3.7	52.5	にじみ 有	砂	粒	良	# 48	便所土盤	S 137	3.5	3.9	35.5	灰	砂	粒	良	完形			
20	便所土盤	S 115	3.2	3.3	27.5	黑	砂	粒	普通	# 49	便所土盤	S 141	3.3	3.7	38.0	にじみ 有	砂	粒	良	完形			
21	便所上塗	S 117	1.9	2.1	7.5	信	砂	粒	良	# 50	便所土盤	S 141	3.3	3.8	40.5	にじみ 有	砂	粒	良	完形			
22	便所上塗	S 117	2.2	2.1	9.0	信	砂	粒	良	# 51	便所土盤	S 141	3.5	4.3	54.5	にじみ 有	砂	粒	良	完形			
23	便所上塗	S 117	2.2	2.1	8.0	信	砂	粒	良	# 52	便所土盤	S 141	4.0	3.7	51.5	にじみ 有	砂	粒	普通	完形			
24	便所土盤	S 117	2.3	2.1	9.0	にじみ 有	砂	粒	良	# 53	便所土盤	S 141	3.0	2.8	19.5	にじみ 有	砂	粒	普通	完形			
25	便所土盤	S 117	2.1	2.0	8.5	にじみ 有	砂	粒	良	# 54	便所土盤	S 141	2.9	3.6	30.5	にじみ 有	砂	粒	普通	完形			
26	便所土盤	S 117	2.0	2.0	6.5	信	砂	粒	普通	# 55	便所土盤	S 141	2.8	3.1	20.0	にじみ 有	砂	粒	良	完形			
27	便所土盤	S 117	2.0	2.1	8.5	信	砂	粒	良	# 56	便所土盤	S 141	2.4	3.1	22.5	赤	砂	粒	普通	完形			
28	便所土盤	S 117	2.1	2.2	8.5	明赤褐	砂	粒	良	# 57	便所土盤	S 141	2.8	2.9	19.0	黑	砂	粒	良	不規			
29	便所土盤	S 117	2.1	(2.0)	7.0	灰	砂	粒	有	# 58	便所土盤	S 163	2.9	2.7	19.5	黑	砂	粒	良	完形			

図番号	種類	出土地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	色調	構造	上地成	備考	図番号	種類	出土地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	色調	施土	地成	備考
第207回 59	-	S 117	3.8	2.3	16.5	褐色	砂粒	粘土	少々 定形	第207回 62	土製品	S 162	5.7	2.8	42.5	黒	陶	砂	瓦
# 60	丸貝	S 131	2.9	-	3.5	褐色	砂粒	無	定形	# 63	土製品	S 163	-	-	-	褐色	砂	無	瓦
# 61	土製品	S 143	-	-	-	黒褐色	砂粒	少々 定形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

石製品（第208回）

図番号	種類	出土地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石	材	備考	図番号	種類	出土地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石	材	備考
第208回 1	青土	S 13	0.8	1.9	1.8	褐色	無	定形	第208回 4	石製品	S 161	1.2	4.0	19.5	褐色	口徑2.2cm	-
# 2	荷輪車	S 12	1.6	4.0	33.0	滑石	无	砂	# 5	石製品	S 121	0.6	-	-	滑石	1孔を有する	-
# 3	荷輪車	S 17	1.4	4.0	-	滑石	無	砂	# 6	石製品	S 100	0.4	4.3	11.5	滑石	穴形 2孔を有する	-

石器（第210~217回）

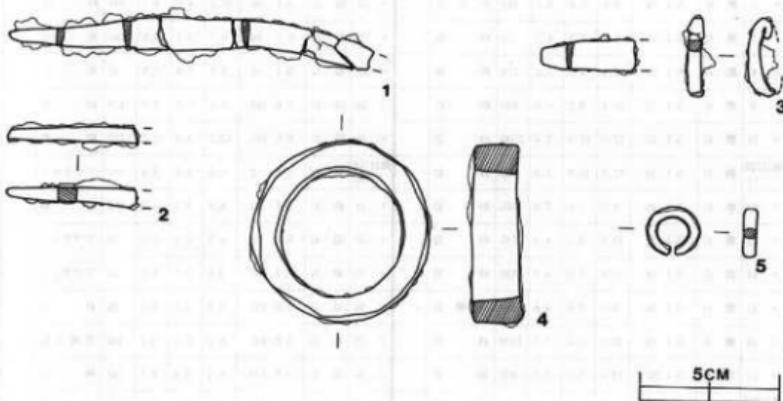
図番号	種類	出土地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石	材	備考	図番号	種類	出土地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石	材	備考
第210回 1	磨石	S 1 2	8.5	6.7	4.7	600	砂	石	第210回 20	磨石	S 1 38	10.6	6.5	6.3	735	チャーリー	-
# 2	磨石	S 1 10	9.4	4.5	3.4	665	砂	石	# 21	磨石	S 1 39	9.7	6.2	1.2	200	砂	岩
# 3	磨石	S 1 13	10.2	8.2	2.0	290	砂	石	# 22	磨石	S 1 51	4.8	2.6	3.7	50	砂	骨
# 4	磨石	S 1 15	27.1	8.0	11.7	665	砂	石	# 23	磨石	S 1 54	7.8	3.6	1.7	70	砂	岩
# 5	磨石	S 1 25	10.5	9.6	3.7	545	砂	岩	# 24	磨石	S 1 54	6.1	6.2	4.3	240	塊状	石
# 6	磨石	S 1 31	7.4	6.2	3.7	240	安山岩	-	# 25	磨石	S 1 58	10.5	4.8	4.1	300	砂	岩
# 7	磨石	S 1 31	5.7	6.3	1.3	53	砂	岩	# 26	磨石	S 1 54	8.2	4.7	3.9	195	砂	岩
# 8	磨石	S 1 33	7.3	4.7	3.2	110	砂	岩	# 27	磨石	S 1 62	5.7	3.8	0.9	40	砂	岩
# 9	磨石	S 1 31	10.4	9.2	6.0	630	砂	岩	# 28	磨石	S K 103	8.6	5.0	2.6	170	砂	岩
# 10	磨石	S 1 32	12.0	11.9	5.4	1200	砂	岩	# 29	磨石	S K 103	12.3	3.6	2.2	110	砂	岩
第211回 11	磨石	S 1 38	17.5	10.3	2.4	790	砂	岩	第213回 30	磨石	S 1 2	6.5	3.1	3.3	100	アフライ	-
# 12	磨石	S 1 45	9.5	7.0	7.0	530	砂	岩	# 31	磨石	S 1 52	8.8	9.5	5.0	450	砂	岩
# 13	磨石	S 1 51	10.0	6.1	4.9	295	砂	岩	# 32	磨石	S 1 62	6.3	2.6	1.6	35	アフライ	-
# 14	磨石	S 1 58	10.6	7.0	4.5	530	砂	岩	# 33	磨石	S 1 62	5.4	3.7	1.1	30	アフライ	-
# 15	磨石	S 1 58	8.0	5.0	4.6	250	鐵	岩	# 34	磨石	S K 101	4.2	2.5	2.6	30	砂	岩
# 16	磨石	S 1 59	15.0	9.6	7.7	1100	砂	岩	# 35	磨石	S K 101	6.2	6.0	3.2	160	赤母片岩	-
# 17	磨石	S 1 62	14.0	5.0	8.5	835	砂	岩	# 36	磨石	S K 103	6.4	4.9	4.1	245	砂	岩
第212回 18	磨石	S 1 17	9.4	2.9	2.1	75	砂	岩	# 37	磨石	S K 103	14.5	7.6	7.1	350	砂	岩
# 19	磨石	S 1 12	9.1	2.8	1.1	53	綠泥片岩	-	# 38	磨石	S K 120	9.7	3.3	2.1	70	砂	岩

図番号	種類	出土地	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	石	材	備考	図番号	種類	出土地	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	石	材	備考
第21308 39	砾石	Eトレンチ	7.5	6.3	2.5	165	砂	岩		第21508 50	砾石	S I 27	8.3	5.7	5.2	30	軽	石	
* 40	砾石	Bトレンチ	11.1	2.7	1.9	50	アブライト		* 51	砾石	S I 27	11.4	8.4	6.5	70	軽	石		
* 41	砾石	Bトレンチ	7.1	3.5	1.7	50	アブライト		* 52	碧石	S I 45	7.2	5.8	4.9	225	砂	岩		
* 42	砾石	Aトレンチ	13.0	4.5	3.0	250	アブライト		第21608 53	石核	S I 13	7.9	10.0	2.0	140	滑	石		
* 43	砾石	井戸状	10.5	3.7	3.8	285	アブライト		* 54	石核	S I 10	5.6	4.1	2.0	45	チャート			
第21408 44	石核	S I 33	2.7	1.4	0.4	1.4	チャート		* 55	石核	S I 54	9.1	5.0	3.7	115	石	灰		
* 45	石器	S I 51	5.0	2.5	2.6	15	貝	岩	* 56	石核	S I 62	6.0	4.7	2.5	70	灰	灰		
* 46	磨石片	S I 52	4.6	5.8	4.2	115	麻	灰	* 57	石核	S I 62	5.6	4.1	2.0	70	チャート			
* 47	石核	S I 58	2.7	2.3	0.6	4.7	灰	灰	第21708 58	石臼	S K 103	14.5	18.2	11.9	210	砂	岩		
* 48	尖頭器	S I 60	8.1	1.9	0.8	10	チャート		* 59	石製品	S I 31	10.0	2.6	1.1	51.5	砂	岩		
第21508 49	砾石	S I 27	5.6	5.5	3.0	15	軽	石											

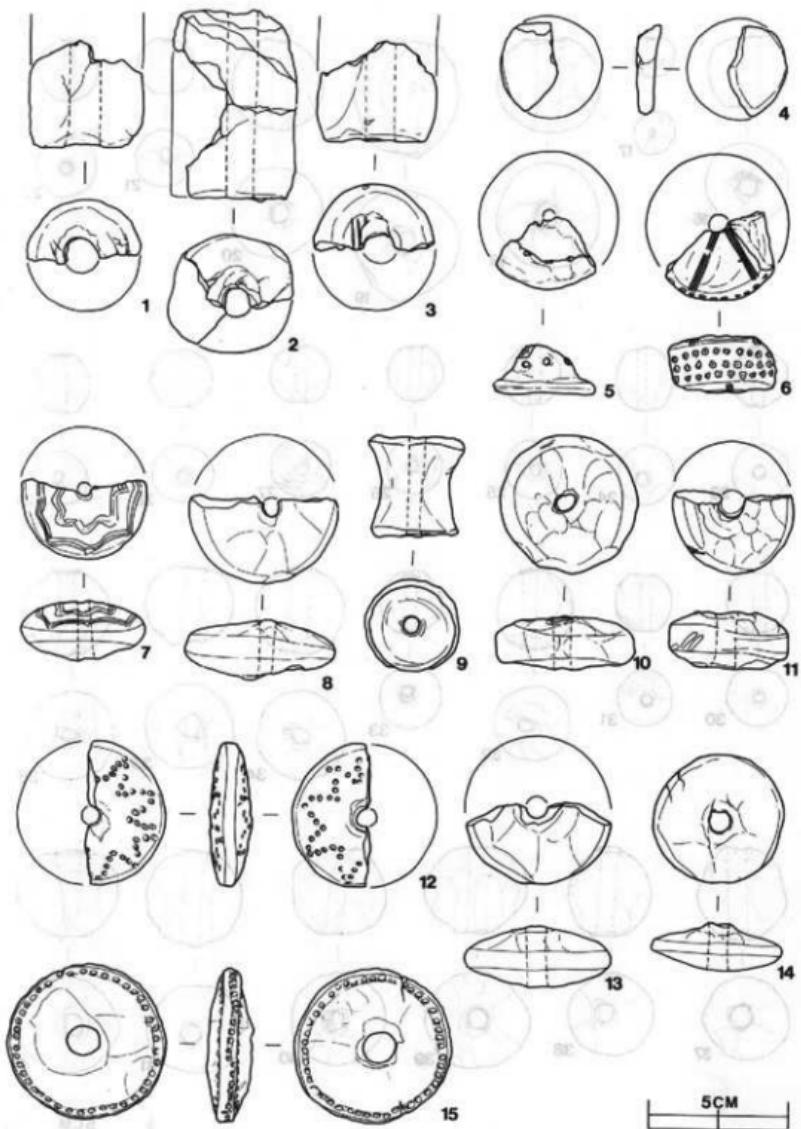
9 鉄製品・銅製品（第204図）

(昭15-16年) 開日

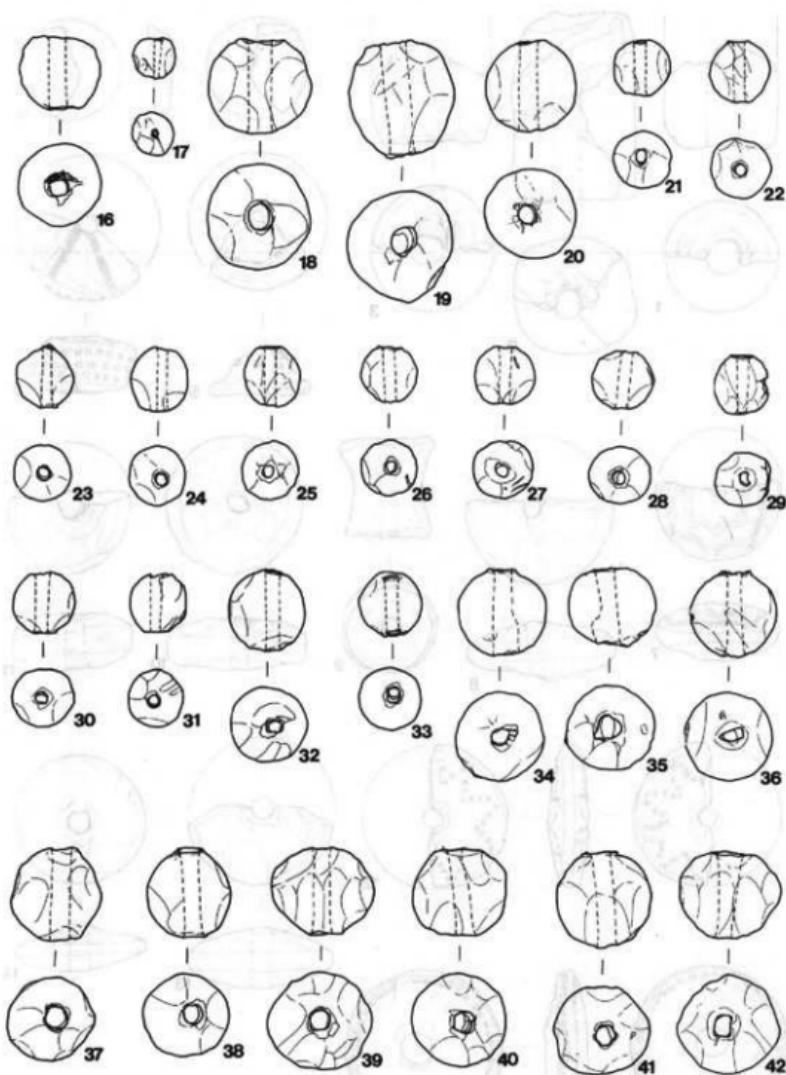
1は刃部と茎で現長17cmを測り、全体が鏽びている。2は針らしく、現長4.7cmを測り鏽びている。1・2は第5号住居跡から出土している。3は刀子の茎と鞘口と考えられる。4は覆土中より出土した輪で、外径6.4cm・内径4.4cm・幅1.7cm・重さ159gである。後世の混入物であろう。5は銅製の環状金具で覆土中から出土している。外径1.9cm・内径1.1cm・幅0.5cm・重さ4.5gである。接合部には0.2cmほどのすき間がある。緑色に鏽びている。



第204図 鉄製品・銅製品

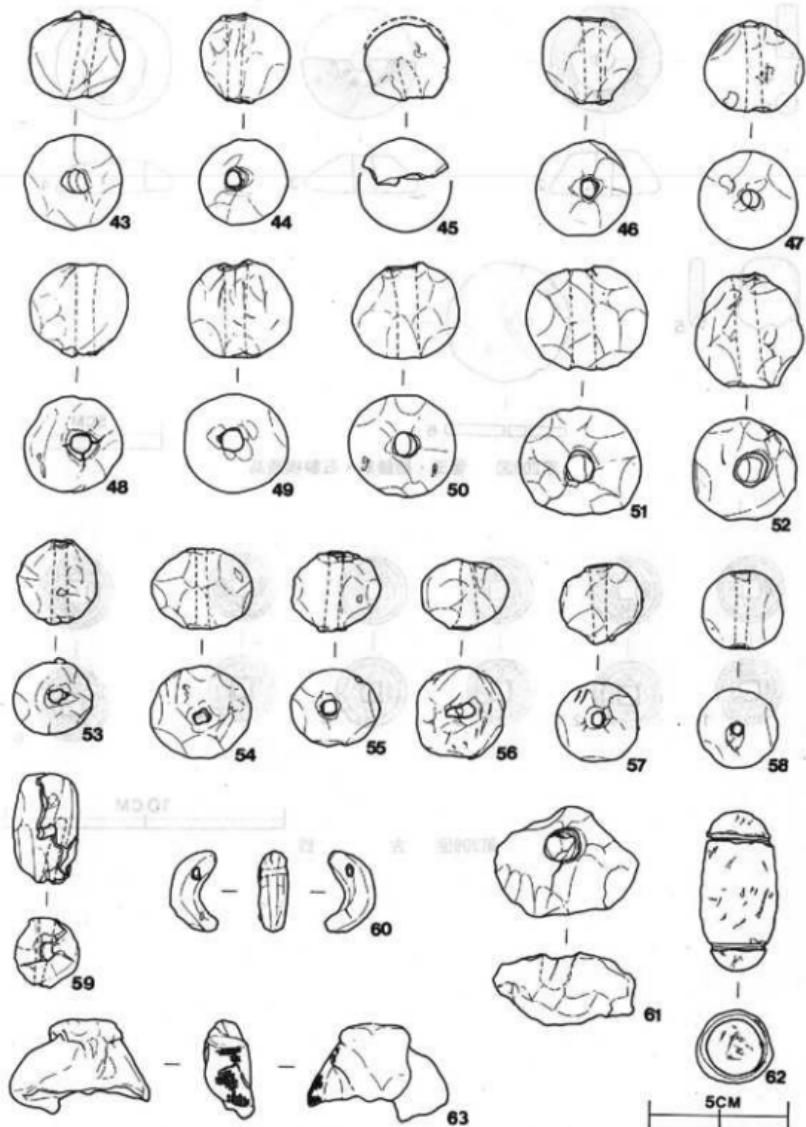


第205図 管状土錐・紡錘車

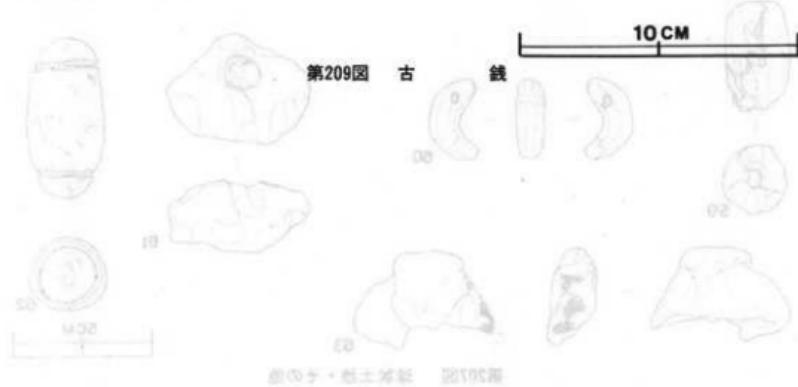
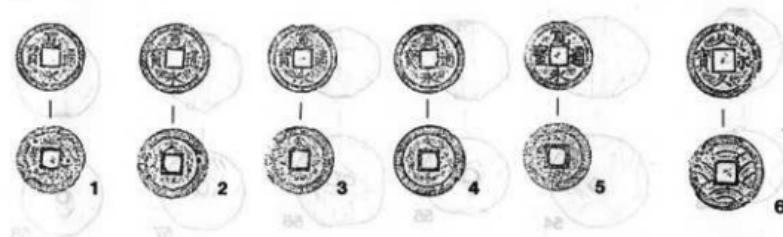
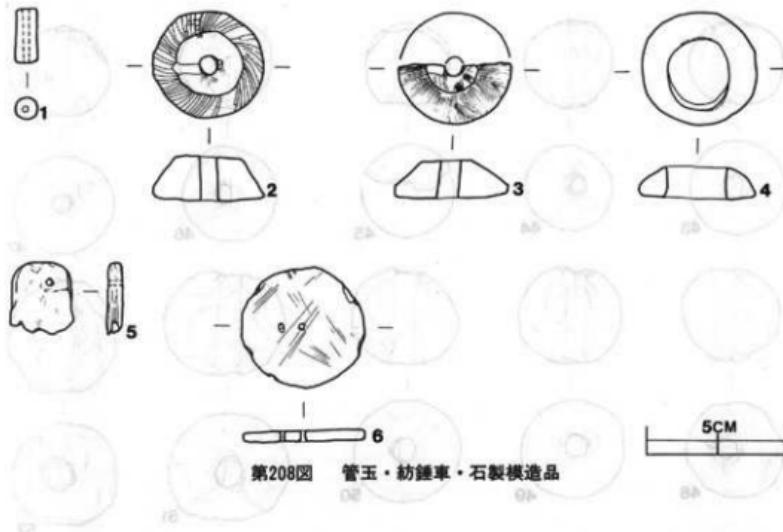


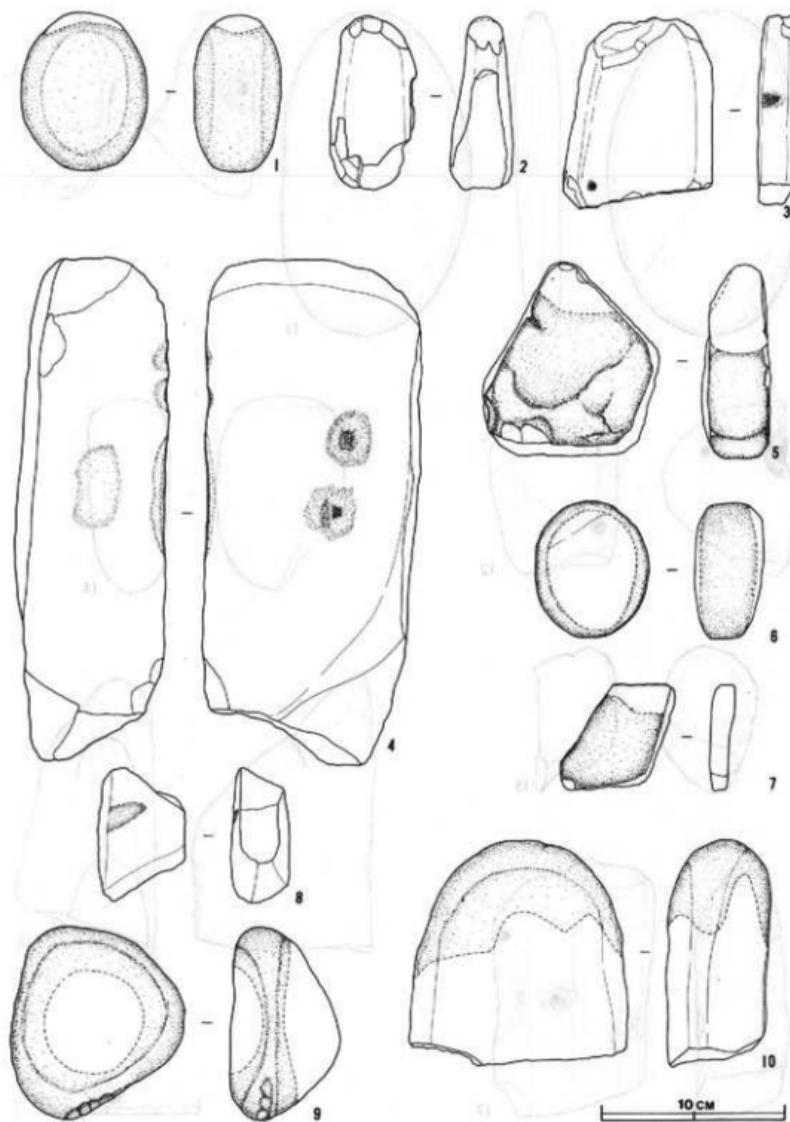
第206図 球状土錠

5CM

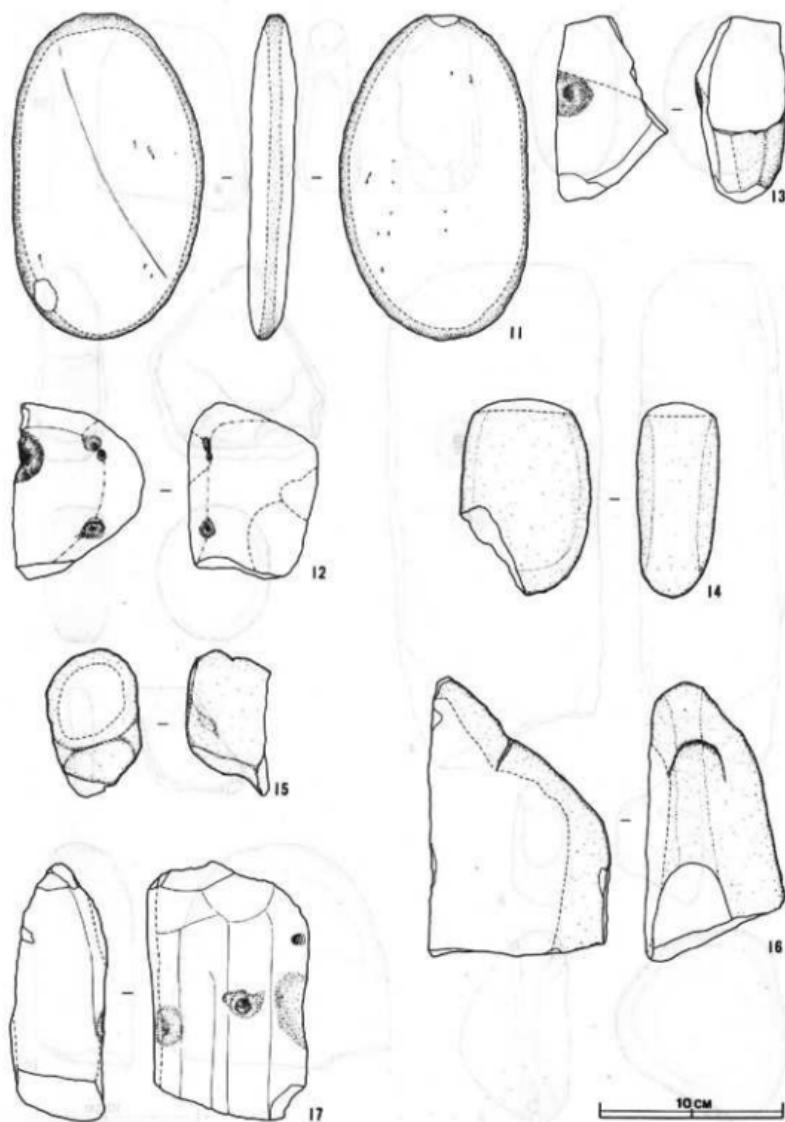


第207図 球状土錠・その他

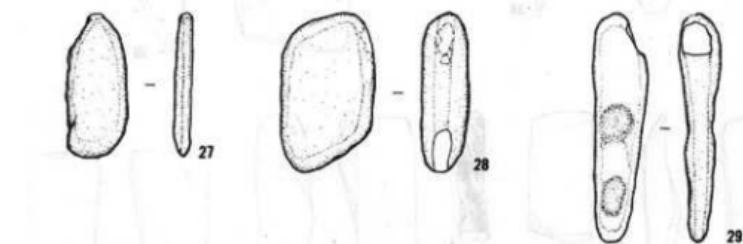
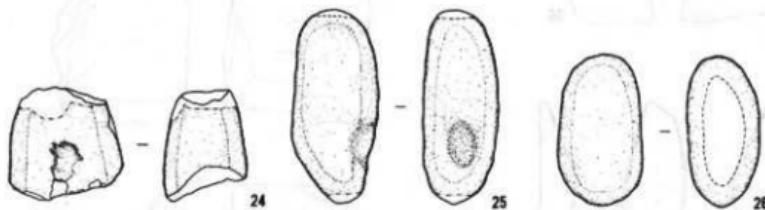
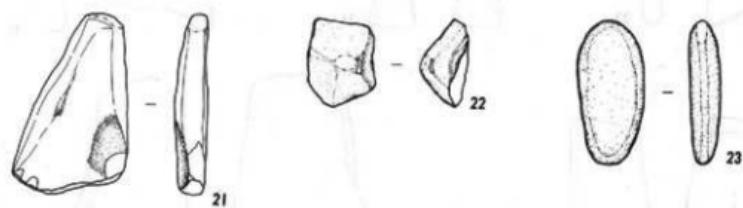
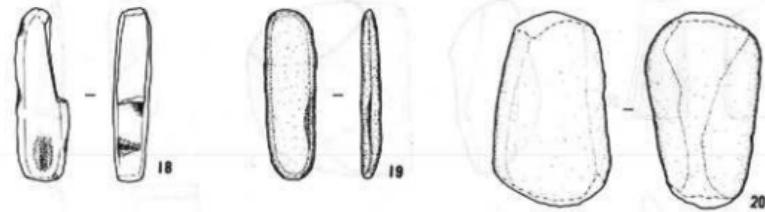




第210圖 磨圓石

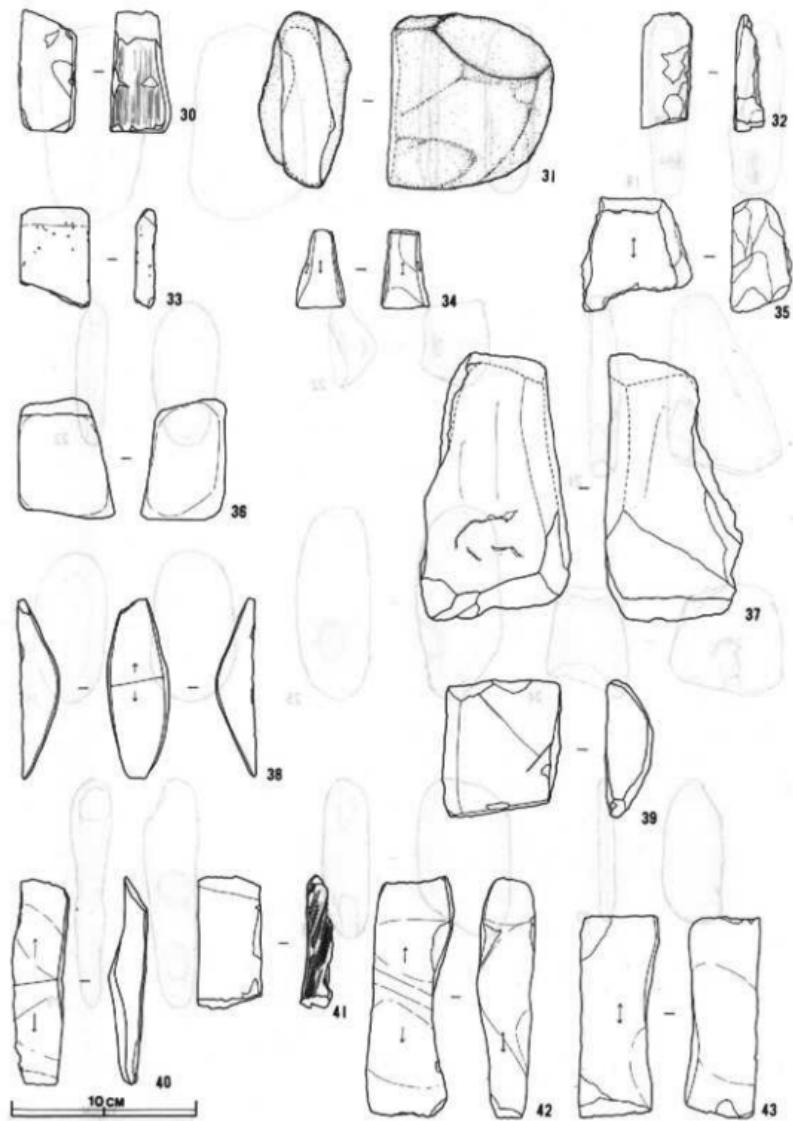


第211図 磨石

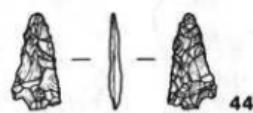


10 CM

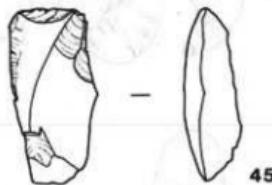
第212圖 故 石



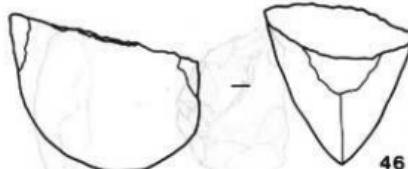
第213図 磚・圓筒形石



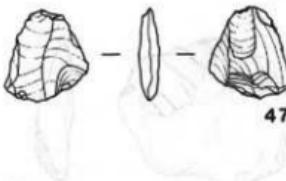
44



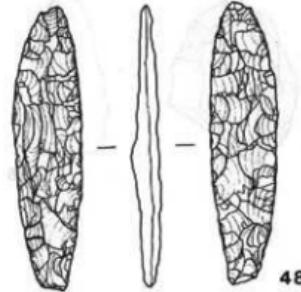
45



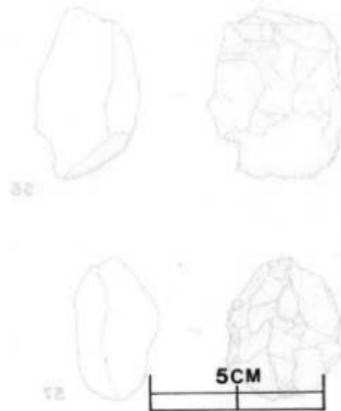
46



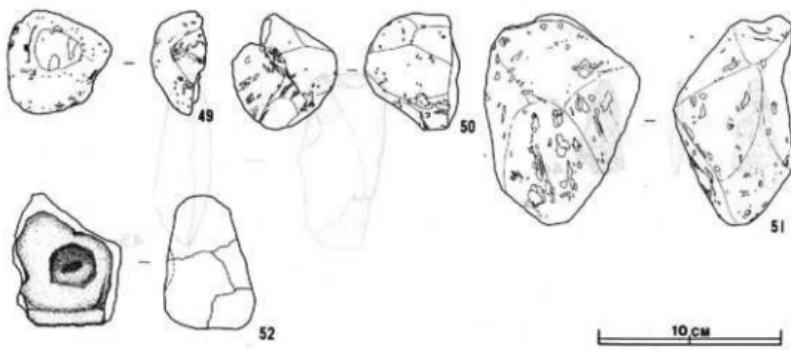
47



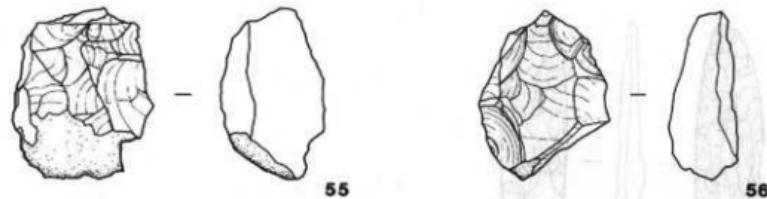
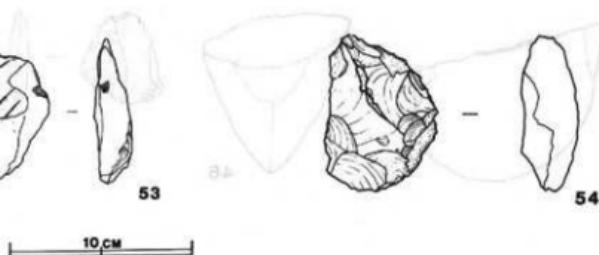
48



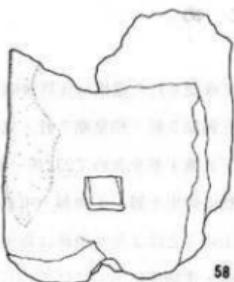
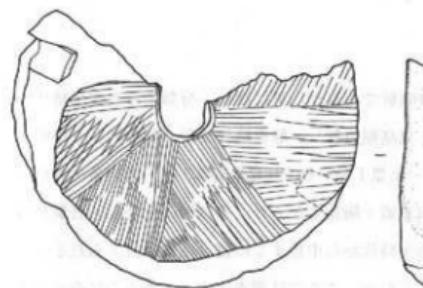
第214図 石 器



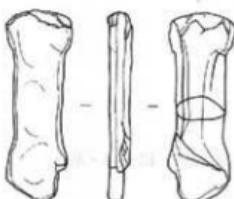
第215図 軽石・凹石



第216図 石核



58



59

10-24

10 cm

第217図 石臼・その他の

第3節 まとめ

屋代A遺跡において確認された遺構は住居跡64軒であるが、更に詳しく分類すると弥生時代28軒・古墳時代26軒（五領期5軒・和泉期7軒・鬼高期14軒）・歴史時代9軒（国分期）・不明1軒である。土壙は地下式壙4基を含めて232基・土塁1基・掘立柱建築遺構2棟・溝16条・井戸状遺構1基である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・陶器等があり、その他に土製品・石製品等が出土している。以上のことにより本遺跡は弥生時代から中世までの複合遺跡と考えられる。

調査の概要と各遺構・遺物等については前述したが、ここでは調査によって明らかになった事実と問題点について遺構ごとにまとめたい。

1 住居跡について

(1) 弥生時代

弥生時代の住居跡は第4・9・10・13・16・18・21・23・25・30~36・38・42~44・49・51・53・54・58・59・62・64号住居跡で、28軒である。

住居跡群は八代台地の平坦な地を主な生活の営み場所としている。住居跡の構成をみると、中央より東側に第4・9・10・13・16・18・21・23・25・30~36・38・42~44号住居跡が存在し、20軒である。中央より西側には第49・51・53・54・58・59・62・64号住居跡が存在し、8軒である。

住居跡を規模別にみると、大型の住居跡（長軸9.17~10.43m）は東側に第31号住居跡1軒、西側に第49・54号住居跡2軒が確認され、合計3軒である。やや大型の住居跡（長軸7.23~8.3m）は第9・42・58・59号住居跡4軒、中型の住居跡（長軸4.3~6.8m）は第10・13・16・18・21・23・30・32・33・35・36・38・44・51・53・62・64号住居跡17軒、小型の住居跡（長軸3.57~3.85m）は第4・25・34・43号住居跡4軒である。中規模の住居跡が過半数を超えていていることは、本遺跡における弥生住居跡の標準的な規模であったと考えられる。小型の住居跡はやや大型の住居跡と同じ数である。

東側に位置する大型の第31号住居跡と西側に位置する大型の第49号住居跡は、規模・貯蔵穴を付設していること・主軸方向を北西に示すことなどの類似性がみられる。大型住居は佐倉市江原台遺跡に報告がある（註1）。更に大型で貯蔵穴を付設していることから、それぞれ東側・西側の中心的役割を果たしていたのではないかと思われる。それを裏付けるように東側の大型の住居跡の周囲には中型の隅丸長方形や楕円形あるいは小型の住居跡が存在している。

主軸方向からみると、角度は多少違うが北西を示しているのは、第9・10・13・16・18・21・23・25・30~33・36・42~44・49・51・53・54・58・59・62・64号住居跡であり、N-39°~64°

Wに集中している。主軸方向が北東を示しているのは第4・38号住居跡のわずか2軒のみである。また第34号住居跡は円形のため主軸方向をN-0°とした。

が跡をみると、炉はいわゆる地床炉である。炉を有しない住居跡は第16・32・42号住居跡であり、第42号住居跡は第41号住居跡に掘り込まれ、攪乱を受けたものと思われる。炉を3基有する住居跡は大型の第49号住居跡1軒で、大型ゆえに暖房や採光のため3基有するものと思われ、しかも3基とも平面形や大きさが違っている。炉を2基有する住居跡は第25・30・31・33・35・51号住居跡6軒であり、第31号住居跡は大型。第25号住居跡は小型である。炉を1基有する住居跡は17軒である。炉跡の平面形は楕円形25基、円形7基である。位置は住居跡中央10基、中央より北側4基、中央より北西側4基、中央より西側4基である。北側・西側・北西側に寄っているのは、採光などと関係があるものと思われる。また炉を2基有する住居跡の中には、南東・東・南西に位置する炉跡もある。

住居跡を平面形状からみると隅丸長方形は20軒で多く、楕円形は第23・33・35・36・62号住居跡5軒、円形は第34・38号住居跡2軒、隅丸方形は第58号住居跡1軒である。

住居跡を構造からみると壁高はさまざまであり、第30号住居跡は5~10cm、第25号住居跡は10~27cmで低く、第31号住居跡は60~70cmを割り、本遺跡では一番高い壁高である。柱穴は第4・9・34・35・53・54・62号住居跡を除いて4個である。大型の第31・42・49・59号住居跡は、柱穴が楕円形の平面形を呈し、長径50~115cmで大きく、深さも47~80cmと深く、壁もしっかりしている。住居の大きさと関係するのであろうか。中型の第38・51・58号住居跡の柱穴もしっかりしている。第4号住居跡は柱穴が6個である。第34・35号住居跡は円形であり、主柱穴は明瞭に検出できず、隅丸長方形や楕円形の住居跡の柱穴と違い小ピットが多数検出された。

住居が火災にあったと考えられる住居跡は第44・54・58号住居跡であり、焼土や炭化物が検出された。第54号住居跡は北コーナー部に且、且のほぼ同程度の柱穴が存在することから判断して、火災により柱が建て替えられた可能性があると思われる。

出土遺物をみると、量に相違があるが全住居跡から弥生土器片を出土し、完形品も少量ではあるが出土している。弥生後期の長岡系土器や印彌、手賀沼系土器や南関東系土器に比定されると思われる。主なものとしては慶形土器、並形土器、鉢形土器、手捏ね土器である。遺物出土量は第9・13・23・31・38・42・49・51・62号住居跡が多量であり、第4・10・16・18・25・30・32~34・36・39・44・53・58・64号住居跡が少量である。

いわゆる長岡式土器の一般的特徴は複合口縁を有し、口辺部に繩文を施し、口辺下端には刻み目を有する。頸部には横擣で山形文、横線・波状文等を配し、胴部には斜行繩文を施す。底部には木葉痕がみえる。あるいは器面全体に斜行繩文を施してあるものなどである。

本遺跡出土土器の口縁部や頸部には上記のような特徴を持った土器片が検出されている。しか

それを以て長岡式土器とは断定し難く、おそらく長岡系土器でしかも時間的に経過をしていると思われる。それは長岡式土器の文様よりも複雑で、変化に富み、すなわち十王台式土器の特徴である櫛描の縦区画をした後に、区画内に横線・波状文・山形文・格子文を充填していることからもわかる。口縁部や頸部だけをみると十王台式土器と判断できるが、胴部では十王台式土器の特徴である付加条の羽状繩文の文様が施されていない。本遺跡で検出された胴部片の大部分は、付加条繩文や捺糸文である。第13・18・21・23号住居跡出土遺物は長岡系土器に比定されるのではないかと思われる。

次に印旛・手賀沼系土器の特徴は、複合口縁があり、胴部には繩文を施し、頸部には無文あるいは櫛描文を配している（註2）。第31・49号住居跡出土の壺形土器はその特徴を有し、かつ器形も類似している。

更に、明らかに南関東系の土器が第44号住居跡と第49号住居跡に出土している。第44号住居跡の壺形土器と第49号住居跡の壺形土器は、南関東系土器と思われる。

また土塁の下に検出された第62号住居跡出土遺物は前述した通りである。これら4個の壺形土器と2個の壺形土器は私見でみる限り、長岡系土器や印旛・手賀沼系土器や南関東系の土器にも見当たらず、屋代A遺跡独特の土器ではなかろうか。仮にこれらの土器を以て屋代式土器と仮称するにしよう。そうすると、屋代式土器はどこに比定されるのであろうか。考えられることは、本遺跡が弥生時代後期であることは事実である。それはまず長岡系土器があり、次に屋代式土器が比定され、印旛・手賀沼系土器と並列に並ぶものと思われる。また県内においては十王台式土器の直前に比定されると思われる。

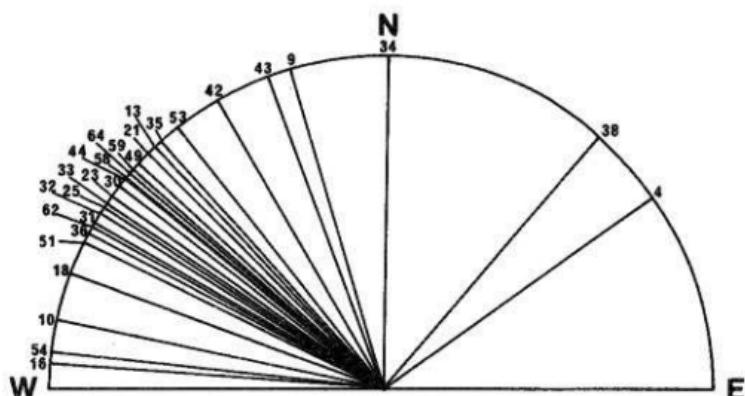
本遺跡において印旛・手賀沼系土器や南関東系土器が出土するのは、利根川をはさんで印旛・手賀沼付近とわずか10~15kmの距離にあり、また南関東に属する千葉県にも近く、交流があったり、影響を受けたりしたのであろう。

(2) 古墳時代（五領期）

古墳時代（五領期）の住居跡は中央より東側に第24・41号住居跡、中央に第45号住居跡、南側に第52・56号住居跡の5軒である。規模で分けると、まず第41号住居跡（長軸7.8m）は比較的大型である。次に第52号住居跡（長軸6.8m）が大きく、第24・45・56号住居跡（長軸4.1~4.6m）は小型である。

位置はそれぞれ散在している。主軸方向でみると、北西を指すのは第41・45・52・56号住居跡の4軒である。また北東に主軸を指すのは第24号住居跡1軒である。

炉跡をみると炉はいわゆる地床炉である。炉を有さない住居跡は第24号住居跡であり、主軸方向も他の4軒の住居跡と違っている。第24号住居跡を除いた炉の位置は、中央より北側2軒・西側



第218図 弥生時代住居跡主軸方向表

1件・北西側1件である。

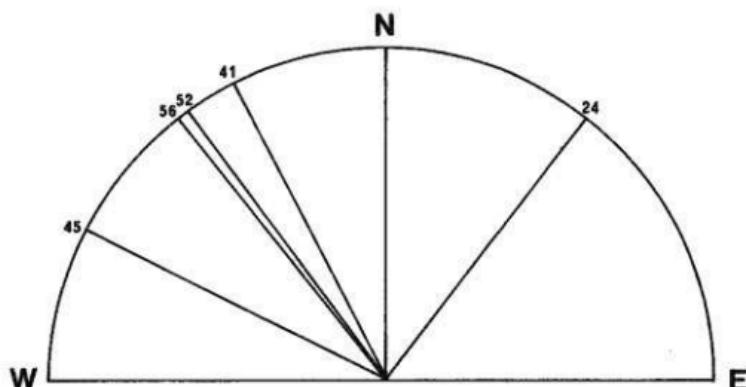
平面形状は隅丸方形は第45・52・56号住居跡3軒であり、隅丸長方形は第24・41号住居跡2軒である。第52・56号住居跡は壁溝を有する。五領期の住居跡は壁溝を有するものと壁溝を有さないものとがある。

火災にあっている住居跡は第56号住居跡が1軒であり、焼土が壁付近より多量に検出されている。

出土遺物をみると全住居跡より遺物が出土し、古墳時代の五領期に比定されるものである。主なものとして土師器の斐形土器・泰形土器・壺形土器・器台形土器・炉器台形土器（仮称）・裝飾器台が出土している。第52号住居跡からは多量出土し、その他は少量である。また土器をみると五領期の特徴である複合口縁や頸部が鋭く外反する土器が出土している。なかでも第52号住居跡出土の炉器台形土器（仮称）3個（註3）は類例が余り多くない。本遺跡では第32号住居跡で3個出土しているが、その内の1個は明らかに整形に相違がある。第41号住居跡からは2個出土している。炉器台形土器は3個を以て使用され、煤が口縁部に付着していることから何か特別なことに使用されたと考えられる。類例を求めるに千葉県木更津市田川遺跡群（註4）・茨城県志筑遺跡（註5）がある。またこのての土器は炉器台形土器・器台形土器・支脚式土器（註6）とあり、まだ名称は定まっていない。第24・45号住居跡は炉跡がないので炉器台形土器の出土はない。

第45号住居跡からは裝飾器台形土器が覆土中から出土している。他に類例を求めるに器形は千葉県阿玉台北遺跡A地点042号址より出土した土器（註7）・千葉県柏市戸張遺跡（註8）などがある。熊野正也氏の言うⅢ類に入る。

ところで、茨城県においては弥生時代から古墳時代にかけて、つまり「十王台土器をもって弥生時代は終りを告げ、全国的な規模で齊一性を示し始める土師式土器すなわち南関東の五領式土器にとって代わられる」(註9)という見方がある。本遺跡においては十王台式土器が確認されず、長岡系土器から星代式土器と印籠・手賀沼系土器そして南関東系の土器を経て、その後時間的経過があり、土師器の五領期に推移するものと思われる。



第219図 古墳時代（五領期）住居跡主軸方向表

(3) 古墳時代（和泉期）

住居跡は中央より東側の第1・2・6・11・14・27号住居跡6軒と西側の第60号住居跡1軒である。規模で分けるとまず第2号住居跡（長軸8m）が大型である。次に第6・11・27・60号住居跡（長軸5.6~5.85m）があり、第1・14号住居跡（長軸3.86~4.6m）が小型の住居跡である。

位置は東側の北東縁辺部に5軒が集中している。西側には第60号住居跡1軒のみである。主軸方向でみると北を指すのは第2号住居跡、ほぼ北を指すのは第1号住居跡、北西を指すのは第14・27号住居跡、北東を指すのは第11号住居跡、ほぼ東を指すのは第6・60号住居跡である。

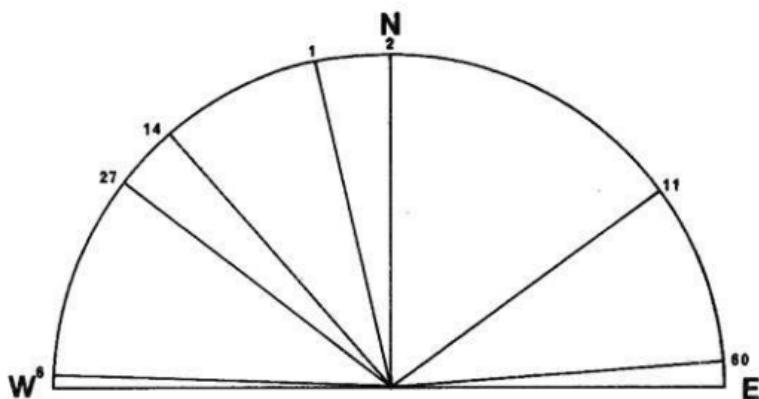
炉跡をみると炉はいわゆる地床炉である。炉跡は北側3基・中央3基・北西1基である。第6号住居跡は北側・中央・東側と3か所に炉跡を有している。

平面形状は方形が第2・6・60号住居跡3軒、長方形が第11・14号住居跡2軒、隅丸長方形が第1・27号住居跡2軒である。壁溝を有する住居跡は第2・6・60号住居跡である。

火災にあっている住居跡は第2・6・11・16・60号住居跡5軒である。焼土や炭化物が壁付近から多量検出された。

遺物をみると全住居跡から遺物が出土し、古墳時代の和泉期に比定される。主なものとして壺

形土器・甕形土器・瓶形土器・壺形土器・鉢形土器・堆形土器・高环形土器・坏形土器である。第1号住居跡に瓶形土器2個が床面から出土している。第2・60号住居跡出土土器は和泉期の末期の上器と言えるのではないだろうか。



第220図 古墳時代（和泉期）住居跡主軸方向表

(4) 古墳時代（鬼高期）

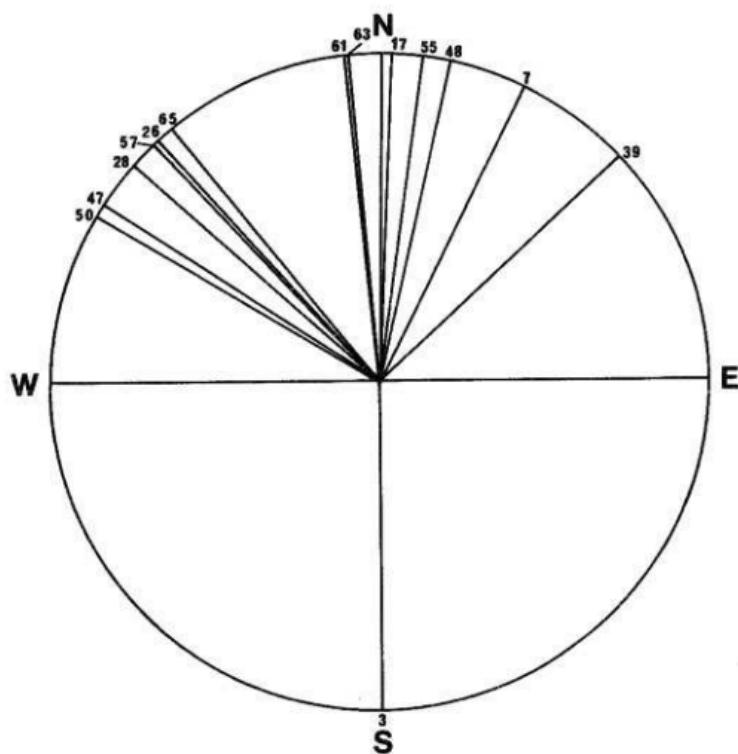
古墳時代（鬼高期）の住居跡は中央より東側に第3・7・17・26・28・39号住居跡6軒、中央付近に第61・65号住居跡2軒、西側に第47・48・50・55・57・63号住居跡6軒が検出された。規模で分けると第7号住居跡（長軸7m）が大型で、第39号住居跡（長軸3.6m）は小型である。その他の住居跡（長軸4~6m）は12軒である。本遺跡では弥生時代の住居跡に次いで多い軒数である。位置は調査区内に散在している。

主軸方向でみると北西を指すのは第26・28・47・50・57・65号住居跡、北を指すのは第17・48・55・61・63号住居跡、北東を指すのは第7・39号住居跡、南を指すのは第3号住居跡である。北西と北を指す住居跡は11軒になり、多数である。第3号住居跡は南側にカマドを構築している。また第28号住居跡は鬼高期の第26号住居跡に掘り込まれていて、第26号住居跡より古く、かつカマドを2基有している。第39号住居跡は円形の掘り込みのあるカマドを北東壁近くに有し、第61号住居跡は大型のカマドを有し、壁を余り掘り込んでいない。

平面形状は方形が10軒で多く、隅丸方形は第17・39・48・63号住居跡の4軒である。壁溝は第39号住居跡は確認できず、第65号住居跡は土壁を構築するため、擾乱を受けて確認できない。その他の住居跡は壁溝を有する。柱穴は第26・39・65号住居跡を除いていずれも対角線上に主柱穴が4個位置する。

貯藏穴は第3・7・28・47・61号住居跡に設けられ、カマドの右側に位置するのは第3・28号住居跡、カマドに正対して位置するのは第7・61号住居跡である。

遺物をみると14軒の全住居跡から出土し、古墳時代（鬼高期）に比定される。主なものとしては變形土器、壺形土器、瓶形土器、塊形土器、鉢形土器、坏形土器である。カマドと密接な関係のある瓶形土器は第47・48・55・63号住居跡から出土しているが、4軒では少ないとと思われる。本遺跡出土の變形土器や坏形土器は鬼高期の土器の特徴を有する。變形土器は頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、やや長胴で、胴部外面は粗雑な鉈磨きを施している。坏形土器は外縁を有し、鉈削りがなされている。また赤彩された塊形土器や坏形土器が出土し、第39号住居跡からは赤彩された塊形土器や坏形土器が多数検出された。一方、第28・63号住居跡から出土した坏形土器は内黒土器で硬く焼かれ、稜を有している。この手法は須恵器を真似たものであろうと思われる。



第221図 古墳時代（鬼高期）住居跡主軸方向表

(5) 歴史時代(国分期)

住居跡は中央より東側に第5・8・12・15・19・20・22・29・37号住居跡の9軒が散在している。

規模は第8号住居跡(長軸4.9m)は国分期の住居跡としては大きく、第19号住居跡(長軸2.87m)は小さい。その他の住居跡は長軸3~4mを測り、カマドを有する鬼高窓の住居跡と比べると一般的に小さい住居跡である。

主軸方向をみると北東を指すのは第8・12・22号住居跡、北を指すのは第5・15・37号住居跡、ほぼ東を指すのは第20・29号住居跡、南東を指すのは第19号住居跡である。国分期の住居跡は弥生時代や鬼高窓の住居跡と主軸方向に相違がみられる。

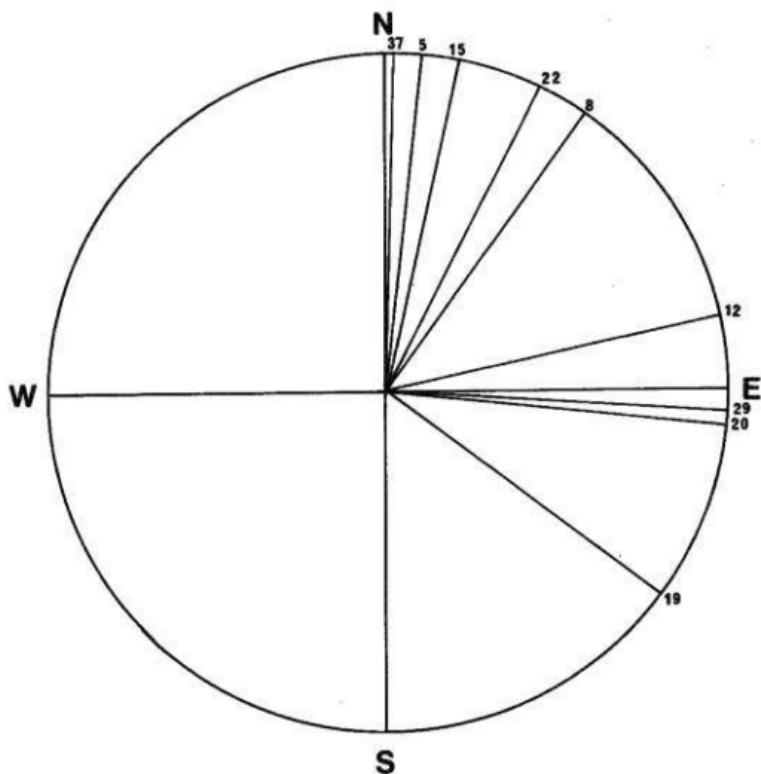
平面形状は隅丸方形が5軒、隅丸長方形は2軒、長方形は2軒である。壁溝は第8・12・15・19・30号住居跡にみられる。主柱穴も鬼高窓のものと比べると小さい。

貯蔵穴は第20・22・29・37号住居跡が有しているが、カマドから少し離れた場所に位置している。

火災にあっている住居跡は第8・12・19・20号住居跡で、焼土や炭化物が床面や壁付近に検出された。

遺物をみると全住居跡から少量出土し、歴史時代(国分期)に比定される。主なものとしては夔形土器・小型夔形土器・瓶形土器・壺形土器・高台付壺形土器・高台付皿形土器である。

また本遺跡においても国分期の第5号住居跡から須恵器の夔形土器が出土している。当地方で製作されたものと思われ、作りは粗雑である。第37号住居跡から出土した夔形土器は土師器であるが硬く焼かれ、しかも叩き目が外面に施されている。須恵器の叩きを真似て器面を堅敏にしたものであろう。いかに当時の人々が須恵器に憧れていたか窺い知ることができる。また土師器や須恵器の墨書き土器があり、主に壺形土器・皿形土器に多く見られる。墨書き土器は第5・12・15号住居跡から出土している。第5号住居跡から出土した須恵器の夔形土器には信太郡都朝□□□五位□、行をかえて□と書かれている。信太郡とあり信太郡に朝の地名を探すと朝夷郷があり、信太郡朝夷郷であると思われる。五位とあるのは官位であると思う。参考までに信太郡の人で五位になった人を統日本紀でみると、延暦5年(786年)10月の条に「常陸ノ國信太ノ郡ノ大領外正六位上物部ノ志太ノ連大成私物ヲ以テ百姓ノ急ヲ周ネクス外從五位下ヲ授ク」、延暦9年(790年)10月の条に「常陸ノ國信太郡ノ大領外從五位下物部ノ志太ノ連大成ニ外從五位上……授ク」(原漢文)とある。その他の墨書き土器は第12号住居跡から出土した壺形土器片の体部に墨書きがあるが判読できない。第15号住居跡から出土した墨書き土器の墨書きは山と判読できる。



第222図 歴史時代（国分期）住居跡主軸方向表

2 土壙について

本遺跡は土壙232基が確認され、大部分の土壙は西側に位置している。土壙232基の中には地下式壙が4基（第101・103・120・226号）検出された。半田堅三氏（註10）の言う分類によれば、第120号土壙は無段つまり「竪坑底と主室床面との間に段差のないもの」（註11）、第101・103・226号は段が明瞭でないが、有段I類で「竪坑底と主室床面の間に段差があり、その途中に階段等の施設を持たないもの」（註12）である。地下式壙は中世の城である屋代城跡に隣接し、城との関係からも中世のものと考えられる。性格は土壙墓か貯蔵庫か明確にできなかった。竜ヶ崎市外八代遺跡に検出された地下式壙は城の本郭外に位置し、類似している。更に類例を求めるとな、県内には上記の他に鹿島町神野遺跡・角内遺跡・守谷町北今城遺跡がみられ、更に今後、地下式壙が発掘され、類例が増え、地下式壙の性格が明らかになることを期待したい。

地下式壙からの出土遺物は覆土中から縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・内耳形土器などの小片・灯明皿・砥石・石臼等が出土している。

また、粘土を一面に貼った楕円形の土壙（第142・143号）が2基のみ検出された。

土壙の平面形は円形・楕円形・不整円形・不整楕円形・隅丸方形・隅丸長方形などさまざまである。土壙の性格・時期などは明確でないが、西側に第8号溝が存在し、溝に掘られている第72・80号土壙、溝を掘り込んでいる第74号土壙があり、溝と土壙の時間差は余りないように思われる。土壙も中世にあてはまるのであろうか。また土壙が重複していることから中世以降の土壙もあると思われ、事実第45号土壙からは近世と思われる人骨、第224号土壙からは獣骨が検出された。出土遺物はすべて覆土中から縄文土器・弥生土器・土師器・内耳形土器等の小片が出土している。

3 土壙・掘立柱建築遺構について

土壙が一基遺跡のはば中央部南側に検出された。盛土表土下の深い所では60cm、浅い所でも15cmまたは表土下29cmの粘土貼りの下層に寛永通宝や文久永宝が出土している。これらの寛永通宝や文久永宝は土壙構築期に混入したものと思われる。また盛土にはしまりがなく、柔らかい。つまり土壙が構築されたのは、江戸時代末期以降と考えられる。以上のことにより本土畠は中世の屋代城とかかわりはないものと思われ、土壙の東側に位置した家屋の西風よけではないかと思われる。

土壙東側に隣接する井戸状遺構は土壙に粘土を貼るために掘られたものと思われ、湧き水は全くなく、井戸として掘られたものではないと思われる。

また土壙の東側に位置する掘立柱建築遺構2棟は、土師器小片や内耳形土器の小片を出土したが、時期決定の資料になり得ず、2棟とも時期は不明である。

4 溝について

本遺跡で溝は16条検出された。位置関係をみると第1号溝は中央より東側、第2～5号溝は南東側、第6号溝は南側、第7・8号溝は南西側、第9～16号溝は西側の中央に位置する。

方向で大別すると東西方向は第1・6～8・10～12号溝、南北方向は第9・13～16号溝、南西から北東方向は第2～5号溝である。また明らかに傾斜のわかるのは第1～3・5・6・9～12・16号溝である。幅が比較的広いのは第4・6・12号溝である。

出土遺物からみると各溝の覆土中から土師器が出土し、他に縄文土器・弥生土器・須恵器・内耳形土器・擂鉢形土器・陶器等の破片が少量出土しているが、これらの破片が各溝と密接につながっているとは考えられず、各溝の時期を明確にすることは困難である。また性格も明確でなく、

根切り溝あるいは排水路等に使用されたものと思われる。しかし、第2・3・9・10・11・13号溝は弥生時代の住居跡を掘り込んでいるので弥生時代以降、第11・12・16号溝は古墳時代（鬼高期）の住居跡を掘り込み、第1号溝は歴史時代（国分期）の住居跡を掘り込んでいるので、古墳時代（和泉・鬼高期）以降であると考えられる。また土壘の北側の第12号溝は土壘の下に検出されたが、古墳時代以降であり、土壘構築前に溝が掘られたか、土壘と同時に掘られたのかは明確にすることはできなかった。第9号溝は土壘の西側に位置するが、土壘との関係は明確にすることはできなかった。第10・11号溝は西向きであり、溝は狭く、かつ浅く、現時点では屋代城と結びつけるのは難しく思われるが、黄瀬戸の小型皿や内耳形土器が覆土中からではあるが出土し、屋代城と何らかの結びつきがあるとも思えるが、断定はできない。屋代B遺跡の調査が実施されれば、もっと明らかになると考えられる。

5 土製品・石製品・石器について

土製品は管状土錘・球状土錘・紡錘車・勾玉等で住居跡から出土している。紡錘車には沈線や刺突文で星型状模様が配されたものもある。また糸巻状の紡錘車も出土している。勾玉は弥生時代の住居跡の覆土中から出土している。球状土錘は多くの住居跡から出土し、第17号住居跡は11個出土している。

石製品は管玉・紡錘車・石製模造品で住居跡から出土している。石製模造品は鏡や剣を模倣して作られ、祭祀関係に使用されたものと考えられる。紡錘車は古墳時代の住居跡から出土している。

石器は尖頭器・石鎌・磨石・敲石・凹石・軽石・砥石・石臼で、住居跡・土壘・地下式壙から出土している。磨石・敲石は住居跡から多く出土し、弥生時代以降も石器は使用されていたものと考えられる。また砥石は地下式壙・土壘・井戸状遺構から多数出土しているが、中世以降のものであろう。石鎌や尖頭器は覆土中から出土し、出土量は少なく数点である。

引用文献

- 註1 千葉県文化財センター『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書I』千葉県教育委員会 昭和52年
註2 磯木 勝・深沢克友『考古学から見た房総文化・3 弥生時代』 研究紀要 3 千葉県文化財センター 昭和53年
註3 日本考古学研究所 植沼修平氏の御教示による。
註4 田川遺跡発掘調査会『田川遺跡群 千葉県木更津市田川遺跡群発掘調査報告書』 昭和55年
註5 茨城県教育財団『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書I』 昭和55年
註6 福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 第7集』 昭和53年
註7 熊野正也『特殊土器・台形土器について(1)』『史館』第3号
註8 熊野正也『特殊土器・台形土器について(2)』『史館』第8号
註9 大塚初重『弥生時代から土師器へ』『古代の地方史5 古墳編』
註10・11・12 半田堅三『本邦地下式壙の類学的研究』『伊知波良』 1979年

参考文献

- 茨城県史編集委員会『茨城県資料・考古資料編・古墳時代』 昭和49年
茨城県史編集委員会『茨城県資料・古代編』 昭和43年
佐原 真編『弥生土器・須恵器』日本原始美術大系2 講談社 1978年
小林 行雄・杉原 荘介編『弥生式土器集成』東京堂出版 昭和43年
井上 義安編『茨城県弥生土器集成I』茨城県弥生土器集成グループ 昭和44年
三森 俊彦・坂田 正一他『市原市大甕遺跡』千葉県開発公社 昭和49年
村田 健二編『千天』大洗地区遺跡発掘調査会 昭和55年
井上 義安他『茨城県大洗町長峰遺跡』大洗町文化財調査報告書 第4集 大洗町教育委員会
昭和48年
佐藤 次男・井上 義安・宮田 裕『弥生式土器一関東・東関東1』『考古学ジャーナル』
146号 昭和53年
佐藤 次男『弥生式土器一関東・東関東2』『考古学ジャーナル』 147号 昭和53年
伊藤 重敏『茨城における弥生文化終末についての試論』『茨城考古学』第2号 昭和44年
茨城県教育財団『松葉遺跡 茨城県教育財团文化財調査報告書』 昭和53年
茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書2 外八代遺跡』 昭和54年
茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3 沖餅遺跡』 昭和54年
茨城県教育財団『鹿島線関係遺跡発掘調査報告書』 昭和55年
千葉県文化財センター『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書II』 千葉県教育委員会 昭和55年
海老沢 稔『茨城県南部における長岡式・長岡式以後の展開と問題点(上)』『婆良岐考古』

第2号 婆良岐考古同人会 昭和55年

海老沢 稔「茨城県南部における長岡式・長岡式以後の展開と問題点（下）」『婆良岐考古』

第3号 婆良岐考古同人会 昭和56年

杉原 荘介・大塚 初重編『土師式土器集成図録・本編1』東京堂出版 昭和46年

杉原 荘介・大塚 初重編『土師式土器集成図録・本編2』東京堂出版 昭和47年

杉原 荘介・大塚 初重編『土師式土器集成図録・本編4』東京堂出版 昭和48年

鹿島教育委員会『角内遺跡 地下式壙』鹿島町の文化財第16集 鹿島町 昭和56年

中村 浩『須恵器』ニュー・サイエンス社 昭和55年

塙 泉嶺『桶敷郡郷土史』宗教新聞社 大正15年

宮本 茶村『閖城縛史』常陸誌料 博文館蔵版